

大東文化

学院の



大東文化大学
百年史編纂委員会 編

DAITO BUNKA UNIVERSITY

100th Anniversary



SINCE

1923

DAITO
BUNKA

真ん中に
文化がある。

大東文化

学院の



大東文化大学
百年史編纂委員会
編

序

二〇二三（令和五）年九月二〇日、大東文化大学はその前身である大東文化学院（以下、学院）創設から一〇〇年の記念すべき日を迎える。本書は、一〇〇年前、すなわち一九二三（大正一二）年前後の学院草創期にその基礎作りを寄与した人びとのなかから十数名を厳選し、紹介するものである。大東文化大学は、よく創設者のいない大学と紹介されるし、そのように自己認識もされてきた。しかし、まったく何もないところから生まれてきたわけではもちろんなく、学院誕生までには数多くの人びとの努力があったし、誕生後、学校運営が軌道に乗るまでの間、いくつもの困難を乗り越えてきた。

学院草創期にさまざまな側面から尽力した人びとの業績を紹介し、あらためて当時の学院が目指したものをしっかりと踏まえておきたいというのが本書を編んだ主たる理由である。また現在、創立から一〇〇年の歴史を実証的に描く『大東文化大学百年史』全三巻（以下、『百年史』）を準備中であるが、紙幅の制約もあり、個々の人物を詳細に描くことはむづかしい。歴史的事実の検証を主眼とした『百年史』を補完するものとして、生身の人間をおもな対象とした本書によって、より一層『百年史』に興味をもっていただければ、編者一同望外の喜びである。

また本書は、大学における自校史教育の一翼を担うテキスト、ないしは副読本としても位置付けられている。昨今、私立大学の建学の理念・精神が実際の学士課程教育にどのように反映されているかの確に示し、学内的にも社会的にも理解をえる必要が高まってきている。どのような時代背景や社会環境のもとで建学の理念や精神が語られ、それらがどのような人びとによって引き継がれ、発展させられてきたのかを知ることが、同時代的要請に応えるためにも重要なのである。

とはいえ、現代に生きる私たちが一〇〇年前の空気を実感することは大変むづかしいことだと思ふ。歴史を学ぶ際、事実を知ることが重要であるが、それだけではなかなか実感をえることはできない。しかし、そこに人びとの生き生きとした描写がくわわることではいささかなりとも事情は変わってくるのではなからうか。大学の歴史を知る際にも、そこにかかわった人物たちの躍動を感じることがきわめて大切であろう。本書がその一助となれば幸いである。

本書で取り上げる「大東文化学院の人びと」の具体的な様子を見ていく前に、彼らがおおむねどんな時代を生きていたのかを、非常に簡単ではあるが一瞥しておくことにしたい。

まず登場する人びとのほとんどが、幕末あるいは明治初期から中期にかけて生まれ、幼少期に漢学の素養を身に付けているというところは押さえておきたい。学院が帝国議会の「漢学振興二関スル建議案」の決議によって創設されたことは、本書のなかでもたびたび触れられているが、決議にいたるまでの運動をおこなった背景を考えると、自分たちが小さいころに身に付けた学問の方法なり成果なりを肯定的にとらえていることが共通している。これまでの本学の歴史が語られるなかでは、行きすぎ

た西洋化を批判するという側面が、「漢学振興」という運動の目標として強調されすぎたきらいがあるが、「漢学振興」の運動を担った人びとの主体的動機にはもっと注目しておいて良いだろう。

もちろん、「漢学振興」には行きすぎた西洋化を批判するという側面が確かにあった。現代の日本でも感じられているような格差の拡大、資本主義の行き詰まり、過激思想の流行などの問題がもたらされた原因のひとつを、行きすぎた西洋化に求めようとしたことはまちがいない。

この時期にそうした運動が展開していき、一定程度の力をもったのは、足かけ五年間にわたって戦われた第一次世界大戦（一九一四―一八年、当時の言い方でいえば、「欧州大戦」）の影響があったことも重要である。政治、経済、文化など、あらゆる側面でこの大戦が世界に与えた影響は大きかった。世界的な文脈では「西洋の没落」（オスヴァルト・シュペンゲラー）であり、地中海・大西洋を中心とした地域に代わってアジア・太平洋地域の重要性が増してくるという事象で整理することもできよう。

その一方で「漢学振興」をとなえた人びとが、西洋文明の成果を全否定していたかという点も必ずしもそうではなかったことにも注意したい。明治維新以来、官民一体となって追い求めた文明の成果自体は肯定的に考えられていたこともまた事実であり、その意味で「漢学振興」運動は復古主義ではなかった。大正末、昭和初期における日本では現代のわたしたちが享受しているあらゆる文明の成果のほとんどがすでに出現しており、後戻りできる地点をすでに遠くすぎていたからである。そうした社会経済的背景も理解しておく必要がある。

さて、本書の前提となる歴史的な背景の概略はこのくらいにして、本書の内容について述べておき

たい。

まず本書全体はⅢ部構成となっており、第Ⅰ部では学院草創期、建学に尽力した政治家などを取り上げた。具体的には、初代学院総長を務めた平沼騏一郎、学院の母体である大東文化協会初代会頭の大木遠吉、「漢学振興」を運動として牽引した木下成太郎、当時の有力な政党政治家であり、「漢学振興」運動を支えた小川平吉、そして学院の教学面での指導的地位にあった井上哲次郎である。井上のみ政治家ではないが、日本の哲学界の大物であり、学院の教育方針に大きな影響を与えた人物として第Ⅰ部で取り上げることとした。また第Ⅰ部末のコラムでは、学院の評議員であった洪沢栄一にも言及している。

第Ⅱ部では、学院で活躍した漢学者を主として取り上げた。具体的には『大漢和辞典』編纂の功でその名前を後世に残している諸橋轍次、「官学派」教員とそのひとりである前川三郎、逆にその「官学派」と対立した「私学派」教員の面々である。また漢学者以外の研究者として学院とかわりをもった人物として、経済学者であり、平沼騏一郎の実兄である平沼淑郎と「二・二六事件」の「首謀者」として処刑された北一輝の実弟である哲学者の北吟吉を取り上げた。第Ⅱ部末のコラムでは、鶴澤總明と土屋久泰のふたりを複数回総長・学長を務めた人物としてまとめて紹介している。

第Ⅲ部は、学院で教育学を講じた吉田熊次、小松武治のふたりをまず紹介している。学院は「漢学振興」の名のもとに漢学の専門研究者を養成するほか、漢文教員の養成もおこなったし、実際に教員を目指した学生も多くつどった。そうした観点から吉田と小松を取り上げることとした。また一九三

○年代に入ると学院に求められる教育の内容も徐々に変化していく。そのひとつが中国大陸への関心の高まりに込めることであった。第一二章で取り上げた内堀維文と法本義弘は、その経歴から中国事情の精通者として見られ、学院での中国事情の紹介や「現代に於ける活きたる支那語」の教育などに尽力した。また中国大陸への見学旅行なども実行した。最後に取り上げたのが、学院での運動・体育・健康面での指導にあたった中山博道と鈴木篤三郎である。学院の教育課程の主要な部分はもちろん漢学教育にあつたが、彼らによる剣道や弓道、柔道の指導、各種運動などを通じて学生たちに与えた影響は決して小さくはなかつたのである。第Ⅲ部末コラムでは資料的な制約が厳しいなかで大東文化学院に学んだ人びとの紹介も試みている。

以上が本書の概要であるが、特徴をいくつか指摘しておきたい。まず、『百年史』編纂の過程で発見・発掘された新しい資史料をできるだけ取り入れていくことである。大東文化大学に歴史資料館（アーカイブス）が設置されて以降、さまざまな資史料が寄贈されたり、蒐集されたりしてきたのであるが、その積み重ねがあつてこそその成果であることは強調しておきたい。資料蒐集にあつてご協力くださった皆さまに心より御礼申し上げる次第である。またそれら原資料のデジタル化による公開も順次進めていく予定である。

第二の特徴は、おそらく学院草創期のもろもろの人物に焦点を当てた先行の出版物がほぼ皆無の状態にある現状にあつて、はじめて「大東文化学院の人びと」がまとめてクローズアップされたことそのものにある。若干手前味噌ではあるが、このことは特筆すべきであると考えている。もちろん本来

取り上げるべき人物がまだまだ多くいることは十分承知のうえであるが、本書が今後の研究の第一歩となれば幸甚である。広く江湖に質し、読者諸賢の叱正をお待ちする次第である。

最後に本書は、文部科学省の平成三〇年度私立大学研究ブランディング事業（漢学・書道の学際的研究拠点の形成による『東洋人の「道」』研究教育の推進）による補助金をえて刊行されたことを記しておく。

目次

序

第1部 漢学振興運動から学院創設へ

第1章 大東文化学院初代総長・第三代会頭 平沼騏一郎

- 1 平沼の思想形成と司法省における台頭 18
- 2 「皇学」思想による高等教育機関の立ち上げ 22
- 3 大東文化学院「学科課程」の決定過程 29
- 4 平沼と大東文化学院 32

第2章 大東文化協会の初代会頭 大木遠吉

- 1 国学・漢学との出会い 38
- 2 「国体」と「立憲的君主政治」 42
- 3 大東文化協会・大東文化学院とのかかわり 50

第3章 大東文化学院創設の立役者・大東文化協会副会頭 木下成太郎……………63

- 1 「木下伝」と高等教育振興への寄与 64
- 2 大東文化協会の創設 66
- 3 大東文化学院の創設と木下の果たした役割 71
- 4 木下と高等教育機関 76

第4章 大東文化協会初代副会頭・第四代会頭 小川平吉……………83

- 1 中国文化への関心と法律家・政治家としての生涯 84
- 2 小川平吉と大東文化協会の創設 89
- 3 大東文化学院同盟休校と小川平吉 92

第5章 第二代総長 井上哲次郎……………101

- 1 東西哲学界の巨星 102
- 2 大東文化学院第二代総長への就任 105
- 3 大東文化学院改革案 107
- 4 メディアの風説 115
- 5 大東文化学院における学問観の揺れ 117

コラム① 大東文化協会評議員として漢学振興に尽力 渋沢栄一 122

第II部 大東文化学院の学者・研究者

第6章 『大漢和辞典』編纂事業と大東生の漢学力 諸橋轍次と「大東漢学」……………131

- 1 諸橋轍次と大東文化学院 131
- 2 『大漢和辞典』編纂の開始と大東生の「漢学力」 137
- 3 大東生たちの知と粹を結集 141

第7章 碩学たちによる最高峰の漢学教育 「官学派」教員と前川三郎……………153

- 1 「官学派」教員の招聘 153
- 2 高等教育機関における前川三郎 156
- 3 大東文化学院教授就任の経緯 157
- 4 「官学派」教員たちの「初年度」 161
- 5 教員構成の変更 165
- 6 前川三郎の大東文化学院退職 172

第8章 「私塾型」近代高等教育機関を目指して 「私学派」教員たちの学問観……………177

- 1 「私学派」の人びと 177
- 2 「私学派」教員と漢学者養成構想 186
- 3 大東文化学院の学科目変更 189

- 4 大東文化学院の学則変更 195
 5 大東文化学院と無窮会 197

第9章 弟・騏一郎とともに大東文化学院に貢献 平沼淑郎……………203

- 1 『明治日報』記者から教育界へ 204
 2 大阪高商から早稲田へ 212
 3 淑郎の社会および学会活動と大東文化学院での講義 217
 4 経済史研究者としての淑郎とその晩年 222

第10章 開学期に哲学・論理学・心理学を講じた北一輝の実弟 北吟吉……………227

- 1 佐渡の知的風土と北兄弟 228
 2 中学英語教師を経て早大文学科講師に 231
 3 四年間の欧米留学から帰り大東文化学院教授に 234
 4 大東文化協会・学院教授辞任後は新しい美術学校の経営に乗り出す 242
 5 多摩帝国美術学校設立後は衆議院議員に当選 248
 コラム② 大東文化学院を支えた二人の名誉総長・名誉学長 鵜澤總明と土屋久泰 254

第Ⅲ部 大東文化学院の教育

第11章 大東文化学院で「教育学」を担当 吉田熊次 小松武治……………263

- 1 教育者・吉田熊次の生涯について 264
- 2 教育者・小松武治の生涯について 273

第12章 学院での中国事情の紹介者 内堀維文 法本義弘……………287

- 1 大東文化学院の「大陸」志向 288
- 2 学院生らの大陸雄飛の動き 296

第13章 学院生らの心身鍛練を指導・支援 中山博道 鈴木篤三郎……………305

- 1 学院生らの運動競技のはじまり 306
 - 2 学院生らの心身鍛練の継続と変化 312
- コラム③ 漢学の専門家集団 大東文化学院高等科一期生の人びと 324

人名索引 i

【凡例】

*年号はとくに注意が必要な箇所を除き、西暦で統一した。

*人名表記は原則、新字体としたが、慣用にしたがい旧字体で表記している場合もある。また敬称は省略した。

*引用文中の表記は原則、原典にしたがったが、読者の利便を考慮して一部新字体にし、句読点などを補った部分がある。

*本文・引用文ともに、読みにくい漢字にはルビを付した。

*引用文中の中略箇所は「……」とした。

*引用文・参考文献の出典は、本文中では略記し、詳細は各章末の参考文献一覧にまとめた。

第I部

漢学振興運動から学院創設へ



一八六七年、現在の岡山県に生まれる。大東文化学院の初代総長に就任したのは、第三五代内閣総理大臣をつとめた平沼騏一郎であった。総長を辞したのちに、あらためて大東文化協会第三代会頭もつとめている。平沼の総長在任期間は一年半ほど、会頭在任期間は三か月ほどであったが、大東文化学院草創期における平沼の果たした役割と存在意義は極めて重要であった。とくに特殊ともいえる学院の学科課程制定における平沼の功績は大きいものであった。一九五二年没。

第1章

平沼騏一郎

大東文化学院初代総長・第二代会頭

1 平沼の思想形成と司法省における台頭

東京大学首席卒業から司法省入省、首相就任へ

平沼騏一郎は、幕末となる一八六七年九月、美作国津山（現・岡山県津山市）の下級藩士・平沼晋の次男として生まれた。早稲田大学学長をつとめた経済史学者で法学博士の平沼淑郎は実兄である。

明治維新を経て、一八七二年に家族とともに上京した平沼は、津山藩出身の宇田川興斎や箕作秋坪について漢学、英学、算術を学んだ。その後、七八年東京大学予備門に入学、八三年東京大学法学部へ入学し、八八年帝国大学法科大学を首席で卒業した。経済的困窮を理由に司法省貸費生として進学していたため卒業と同時に司法省へ入省し、参事官試補となり民事局に勤務することとなり、以後は各地の裁判所において判事試補、東京控訴院において検事をつとめ、その功績により法学博士の称号を与えられた。

一九一二年に検事総長に補せられて以後、約一〇年にわたってシーメンス事件や大浦内相事件、八幡製鉄所事件などを取り扱った。二三年に第二次山本権兵衛内閣の司法大臣に就任、翌年一月に貴族院議員に勅撰されたが、同年二月に枢密顧問官に任じられ、三六年には枢密院議長に就任した。この間、二六年一〇月に男爵を授けられた。三九年一月に近衛文麿内閣が総辞職すると即時に首相となった平沼がその後継内閣を組織したが、世界情勢の悪化にともなう国際環境の緊張や国内対立勢力の調停等に苦慮し、わずか八か月で総辞職した。四〇年一二月に第二次近衛内閣の内務大臣に就任、引き

続き第三次近衛内閣では國務大臣として留任した。平沼は官僚として総じて法曹界を中心に活動の範囲を広げ、枢密院のなかにあつて影響力のある存在と目された人物であつた。敗戦後には東京裁判においてA級戦犯で訴追され終身禁錮の判決を受けたが、五二年に病氣により仮釈放となり、同年八月二二日死去した。

教育界との関わり

こうした政治家としての生涯のほか、平沼の思想的な側面をあらわす活動も数多くある。たとえば、一九一五年に無窮会を創立し、二四年には第二代修養団団長を引き受け、二六年に右翼系政治団体である国本社を改組して社長（会長）に就任するなど、東洋道徳學術の振興、日本国粹主義を称揚するとともに、国民精神作興を目指した活動にも積極的であつた。また、東洋文化学会第二代会長をつとめるとともに東洋文化研究所を創設し初代所長に就任しており、大東文化学院初代総長をつとめた同時期にあたる、二三年から三三年まで日本大学総長をつとめるなど、教育、ことに高等教育機関への参与へも積極的であり、強い関心を抱いていた。なお、平沼が関与した時期の国本社は大学人を多く擁しており、兄である淑郎、井上哲次郎、鶴澤總明のほか、中央大学学長となる原嘉道や、法政大学学長となる松室至などが属していた。また、日本大学内に国本社支部が設置されたことから、国本社は高等教育機関に対する影響力、組織力を持つていたといえる。

平沼の思想形成

こうした平沼の経歴を確認したうえで、思想形成という側面から注目しておくべき点は、若年の頃より漢学に触れ、旧来型の漢学志向の教育のなかで教養を身につけつつ、洋学教育の大家であった箕作秋坪に教えを受け、東京大学へ進学したということである。とくに、三叉学舎において箕作から教えを受け、存分に漢学を学んだ時期に平沼の人生観、政治哲学の基礎は培われたとみてよいだろう。くわえて、ごく幼少期には主として祖母に養育されたが、その祖母より唐詩選の詩吟を子守歌代わりに聞きながら育ったという。

言うまでもなく、旧来の日本では漢学教育は知識人にとって必須かつ一般的な教養であったが、平沼はちょうど明治期における近代的学校教育制度が確立される時代に青年期を迎えている。すなわち、東京大学予備門および東京大学法学部への入学である。平沼の在学中に前者は高等学校へ、後者は帝国大学法科大学へとその名称を変更するとともに役割も新たにした。こうした試行錯誤ながらも日本の学問の府が構築されていった時期に高等教育を受けた平沼は、「新しい」学問であった法学の分野において首席卒業を果たすこととなった。ただし、東京大学予備門以前には同郷出身の著名な蘭学者であった箕作秋坪に師事しており、英語を学ぶ機会を持ち語学力と西洋的知識を身につけていくと同時に、漢学にも精通していた箕作より教育を受けたことこそが、平沼の政治観や人生観を構築するうえで多大な影響を与えることとなったと考えられる。

平沼といえば、何度も首相候補となったにもかかわらず、元老西園寺公望から右翼的思想の持ち主

として疎まれたために拒まれ、ジャーナリズムからはファッション的存在と評価を受けた。ただし、少なくとも大正初期までの平沼は一般的には中立的な政治家と見られていた。後述するように、平沼が国家主義的活動を積極的に行うことが対外的に顕著になっていくのは、一九二〇年代以降である。一方、敗戦後八〇歳をすぎてA級戦犯として戦争責任を問われたまま生涯を終えることになったため、不運につきまとわれた司法畑出身の政治家、という評価がなされてきたことも指摘される。同時代において革新的政治家であった一方で、現代から見ると保守的思想をも持ち合わせていたということは、平沼の思想や人間性にあらためて究明すべき点が多いことをあらわしており、その思想や価値観は、大東文化学院の教育理念の建設に深く関わることとなった。

実際、こうした旧来型から近代型への過渡期の教育を受けた平沼の抱いた中心思想の一つには、日本古来の伝統的文化や学問観を優れたものとして重きを置く、日本精神主義、国粹主義的な思想があった。平沼の活動内容の時期をたどってみても、一九二〇年代になってとくに顕著にあらわれるようになったことは明らかである。ロシア革命など外来思想問題が社会で取り沙汰されるようになってきたことから明らかな影響を受けていたと指摘できる。この時期の国本社主宰や修養団の活動などに代表されるように、官僚や政治家、学者たちを含む民間も含めて国家主義者たちとの交流をより深めていくことにも繋がったわけである。一九二一年には雑誌『国本』が発刊されており、同誌の同人には平沼のほか、井上哲次郎ら東京帝国大学教授たちや複数の弁護士の名も多く連ねられていることから、当時の知識人たちとの交流の広がりや指摘できる。さらに平沼は東洋の道徳学術の究明・

振興を目的とした無窮会を創設しているが、無窮会活動は平沼の復古的思想を反映したものの一つであり、漢学の素養だけでなく洋学を含めた幅広い教養を持つ各界の錚々たる同志たちが名を連ねた。なお、無窮会の発足後間もなくして、所属していた知識人たちのなかでも平沼の学事顧問格であった、早稲田大学教授の牧野謙次郎を中心として漢学復興運動が起こされている。この運動のちに東洋文化振興提唱へとつながっていき大東文化協会の設立を促し、衆議院に「漢学振興二関スル建議案」が三度にわたって提出された。この提案がようやく認められるに至って、国庫補助を受けて大東文化学院が開設されることとなったのである。

2 「皇学」思想による高等教育機関の立ち上げ

学院綱領並学則編制委員会・学科課程制定委員会

平沼は、学院開設以前の学院綱領並学則編制委員会の委員となり学院方針の決定に携わるとともに、後述するように、学科課程制定委員会委員長として学科編成の任を負っていた。一九二三年九月の大東文化学院創設時には初代総長に就任し、二五年一月までその職にあつた。また総長職を辞した後に、ごく短期間ではあるが、二六年より第三代大東文化協会会頭もつとめている。

大東文化学院は、「漢学振興二関スル建議」に基づき一九二三年二月に設立された大東文化協会によって、その教育思想を具体化するために同年九月に文部省の設置認可を受け、翌年より私立専門学

校として開校した。なお、設立認可を受けると同時に大東文化協会は財団法人となり、初代会頭には大木遠吉（第2章参照）が着任した。

財団法人大東文化協会の「寄付行為」中に示された目的には、「我皇道ニ遵ヒ及国体ニ醇化セル儒教ニ抛リ国民道義ノ扶植ヲ図ルコト」（第二章第二條一項）とあり、またさらに「本邦現時ノ情勢ニ鑑ミ儒教ノ振興ヲ図リ及ビ東洋文化ヲ中心トスル大東文化学院ヲ設立維持スルコト」（第二章第二條二項）として、大東文化学院の設置を最大の目的の一つと定めていた。また、大東文化学院は、国庫補助による学費無料および給費制度を掲げたことや、学則において「本邦固有ノ皇道及国体ニ醇化セル儒教ヲ主旨トシテ東洋文化ニ関スル教育ヲ施スコトヲ以テ目的トス」（「大東文化学院学則」第一章総則第一條）とし、皇道及国体に醇化した儒教、東洋文化について教育を行うことを第一の目的に謳っていることから、当時の私立専門学校のなかでもかなり特殊な性格を持つて設立された高等教育機関であった。

初代総長

大東文化学院草創期に教授であった松本洪は、のちに『平沼驥一郎先生逸話集』において「平沼先生と東洋文化」と題し、次のように述懐している。いわく、「学院総長には平沼博士の外には適任者は無いといふことになり、一同から熱望されて先生が初代総長となられた。其の時の条件は、自分の独裁を認め、一切掣肘しない事といふのであった。そこで先生は東洋文化学会を率いて、準備に取りかかった。先生は学校には書物が無くてはならぬ。第一に書物の買入れにかかれ、それにはまだ補助

金を受取つては居ないが、金は何とか用意しようといはれた」とある。平沼は学院の創設に際し私費を投じ、まずは貴重な漢籍をはじめとした書籍類を買い集めるよう指示を出したということである。

この松本の証言にもとづけば、漢書は川合孝太郎、和書は佐藤仁之助が書籍の選択を行い、神田や浅草、本郷などの書店からあるだけ購入していった。その直後に関東大震災が起り、購入先であった書店は軒並み被災し在庫の本も焼失してしまったため、大東文化学院が開校時に図書類に不自由なかつたのは、平沼の英断による事前の購入指示があつたおかげであつた。

平沼の始業式訓示

平沼は、一九二四年一月一日に行われた第一回始業式における訓辞において、この創立理念を具體的に次のように説明している（平沼、一九二五）。

すなわち、「我国は古来の国史の成跡に徴し道徳彝倫に基きて智識事業に及ぼし国体の精華を發揮するを以て教育の根本方針」としており、「教育勅語の御趣旨を以て急務」であることから、大東文化学院の創設は道徳、国体強化を目的としたものである。その設立方針に基づき、「二千年來皇道を輔翼し我國体に醇化せる儒学を振興し普及するを以て眼目とし、学則に於ては特に皇学の一科を設けて其の標的を明にせり」と、その設立および教育目的を述べている。このことから、大東文化学院の教育は、何よりもまず「皇道及国体に醇化した儒学」が主であるとしており、さらに平沼は続けて、広く智識を得ることは必要であるが、「諸学科を講習するに当りては、常に本学院究極の目的

に背馳せざることに留意」するように述べていることから、大東文化学院は「漢学振興」にあたって「究極の目的」とする、「皇道」「儒学」の思想を追求することのみを念頭に置く教育を目指していたのであった。

このように大東文化学院における「皇学」「儒学」の醇化普及を「究極の目的」と位置づけた平沼は、それらを担当する教授陣を「孰れも各学派の泰斗にして当代の碩学大儒なれば、諸子は研鑽の功を積み他日其の蘊奥を究むるの階梯を成すに於て万遺憾なかるべし」と賞賛し、錚々たる教授陣による最高の漢学教育機関であることを示唆した。平沼がこのように称した大東文化学院草創期の教授陣は、確かに多くの著名な学者が名を連ねていた。たとえば、のちに第二代総長となる井上哲次郎が哲学を担当したことをはじめ、法学の鶴澤總明、山岡萬之助、漢学の松平康國、牧野謙次郎、内田周平のほか、哲学者北畠吉も論理・心理学を講じている。また、兄の淑郎も開設時から大東文化学院の経済学教授として教鞭をとった。こうした官学私学の出身を問わず、その道での第一人者であった学者たちがこぞって教授陣として名を連ねることが実現したのは、平沼の国体思想にもとづく広い人脈に寄るところも大きかったと考えられる。

大東文化学院が理念上に「皇学」「儒学」を掲げていた一方で、平沼自身の思想的傾向もまた国体すなわち皇室皇道主義であったことは周知のとおりである。その意味では大東文化学院は平沼の思想を直接的に体現したものであった。平沼は、国本社における活動をはじめとして自由思想の蔓延を阻止することが自身の使命であるかのように国体主義を貫いていた。そしてそのために天皇制国家機構

の確立に奔走し、日本社会の安定と発展は皇道にもとづいた儒学思想の醇化によるとの信念を持っていた。平沼の抱いた理想と大東文化学院の創設理念とは一致するのである。

平沼と「皇学」観

では、平沼の考える「皇学」とは具体的にどのようなものであったか。「儒学」と「皇道」との関係性をどのように考え、教育活動に繋げようとしていたのであろうか。

平沼にとって儒教とは、歴史的な経緯から見ても皇道の輔翼であり「教育の最も重要な部分となっている」(平沼駉一郎回顧録編纂委員会編、一九五五、一一〇頁)ものであった。正しく儒学の精神を理解することが日本の退廃を防ぐ手段であると信じており、教育全般において「綱常彝倫は東洋を基礎にせねばならぬ。神典国典で皇道を尊み国体を弁せねばならぬ」として、西洋を真似ては教育の徹底は図れないとしている。すなわち、平沼は少なくとも教育思想の面からは、近代的な教育よりも旧来の日本における儒学思想にもとづく教育が優れていたと考えていた。この時期、大正期における日本社会全体における良風美俗の「破壊」、固有の文化の「没却」は、西洋ことにフランスからの物質的文明輸入によるものであると指摘し、思想的に皇道が軽んぜられ、漢学が軽視され、儒教思想が理解されないままに教育が行われていることが弊害となつていっていると信じていたのである。

平沼の「皇道」に対する確固たる思念と「儒学」振興思想とは切り離せない関係にあったが、平沼の考える「儒教」は正確に言えば中国における「儒教」ともまた異なるものであった。日本は「万世

一系の皇室を戴ける立憲君主国」であり、「支那」は「易姓革命の国」であるとして、易姓による両国の違いを説明している。そのうえで、漢学者らによって儒学振興を主目的として設立された東洋文学化学会が刊行した雑誌『東洋文化』に掲載された平沼の論説には、「儒教」への関心が次のように示されている（平沼、一九二四a、一一頁）。

「儒教の渡来するに及びて、其の教義は我惟神の道と結合し、其の文字は我言靈の教へと調和して、漸次に日本化し、礼楽刑政文学美術其の他日用百般の技芸、皆我用たるに至り、国際及び個人の交際も年を遂うて親密を加へ、……日本に入りて直に日本語となり、之を文字に現はす時は、二者全然相同じく、今や日本固有の大和言葉は三分に過ぎず……其の源相同じきを以て漢語即支那語を除外しては日本文は成立せずと謂ふも不可なき状態なり」

日本に儒教が渡来して以降、国内文化に及ぼす儒教の影響は甚だしく、言語ですら大和言葉は三分ほど残されている程度であるとし、日本の国家社会の組織および機能の基礎は醇化された儒教主義によって形成されてきたため、「支那」との関係性は否定できるものではない。むしろその内容を仔細に見れば、「言語文章飲食衣服皆支那と離るべからざる関係を生ずる」として、中国との交流のうえでこそ儒教は成立しうるものであると平沼は続ける。日本では「仏教」や「耶蘇教」の渡来によって「儒教」は蚕食かくそくされてはいるが、やはり「儒教は猶傲然たる国教たるの観あり」、「儒教の教義は依然として赫奕かくやくたる光彩を放ちつつあり」と、中国との関係を前提とした儒教の必要性可能性を評価した。

そもそも大東文化学院は「漢学振興」の必要性からの創設であり、当初の設立議論には「皇道」「皇

学」の文字は必ずしも見られず、「儒教」「儒学」の必要性を論点としていた。儒教理念にもとづく教育、漢学的素養を再度見直すところこそが日本社会が必要としている教養であるとする考えから出発した学院創設案は、平沼の「儒学」を根底とした「皇道」主義思想と一致した創設理念となっていく。大東文化学院創設時の教育理念が、直接的か間接的かはともかくとして、平沼の「皇道」「儒学」思想の影響を受けたものと考えるのは自然であろう。

つまり、草創期における学院内での平沼騏一郎の存在感、発言力は歴然としたものであった。紛擾後に平沼は第三代大東文化協会会頭に就任し、一時的にせよ復帰を果たしており、また同じく紛擾後の学院再建時の総長として国本社 of 盟友でもあった鶴澤總明が着任していることから、戦前期を通して学院内には平沼の影響力が歴然として続いていたと考えることができる。実際にはわずか一年の総長在任期間ではあったが、「平沼先生の教育方針」を尊重する声はその後も長く聞かれ、大東文化学院の教育の基盤となったのであった。

なお、その後の日本に急速に進行していったファシズム思想を考えると、平沼の「皇道」観もその先駆けのものとしてとらえられるかもしれない。なかでも国本社の思想や活動は復古主義、日本精神主義、国粹主義が貫かれていることから、満洲事変以降の愛国精神を高調した思想的啓蒙運動団体であると指摘されてきた。しかし、国本社に見られるファシズム論と平沼の思想とは必ずしも一致するものではなかった。平沼にとつての「皇道」はそういった政治思想的政策の手段というよりも、むしろ「宗教的な崇拜の対象」であった。平沼の天皇に対する崇拜、揺るぎない国体観念はその後戦

中戦後を通して変わることなく、結果的にA級戦犯として逮捕、無期懲役を科せられて生涯を閉じることとなったのである。

3 大東文化学院「学科課程」の決定過程

学科課程制定委員会委員長

平沼が大東文化学院開設以前における学院綱領並学則編制委員会の委員となり学院方針の決定に携わるとともに、学科課程制定委員会委員長として学科編成の任も負ったことは既述の通りである。そもそも大東文化学院は、東京帝国大学、京都帝国大学、早稲田大学を中心とした私学関係者の三者がそれぞれの意見を出し合って創ったという経緯があった。なお、私立大学側は早稲田大学を中心としていたが、ほかに明治大学、日本大学、東洋協会大学（現・拓殖大学）等の関係者も含んでいた。

しかし、三者による学科構成議論は紛糾し、まとまらなくなり、新たに学科課程制定委員会を設けて学科編成を検討させることとなり、平沼がその委員長に指名された。この経緯は大東文化学院創設の特殊性の一端を如実にあらわすものであり、また平沼の果たした役割の一端を語るものでもある。

学院の設立母体である大東文化協会は、その重大事業の一つとして漢学の専門者養成機関である大東文化学院設立を掲げており、その設立準備に及んで「学院創設委員会」を設け、「学科課程の制定を以て重要となし、とくに東西両大学並に私学の代表者を招きて、慎重審議を重ねしめ」ようとした。

すなわち、東京帝国大学、京都帝国大学、私立大学の三つの代表者らの話し合いによって新たに設立する大東文化学院の学科課程を決定しようとしたのである。しかし、東京帝国大学は「学者は各其の専門を異にすと雖も、現代流行の學術思想に通曉する所なるべからず」として、週三五時間のうち漢書の購読を一二時間として一六〇一七時間は歴史法制倫理哲学等を講義することを主張し、京都帝国大学はそれでは既成の学校とほとんど同様であり新たに大東文化学院を設立する意味をなさないと主張しつつも「皇典の如きは、固より尊重すべきも、漢学力已に十分ならば、皇典は自然に會得するを得べし」として「皇典」に関するものは多く設ける必要はないと主張した。それらに対し、私立大学側は、漢学研鑽の必要性に関しては大東大と同意見としつつもさらに「皇学を重じ、西洋科学をも多少参考するの必要ある」ことを主張した。

このように三者の意見が大きく食い違い、異なったことよって平行線を辿ったままなかなか学科課程の決定までに至ることができなかった「学院創設委員会」は、すでに総長就任が決定していた平沼騏一郎を委員長とする「学科課程制定委員会」をさらに設置し、三者の意見を比較検討して学科課程表の作成に当らせることにした。言い換えれば、帝国大学出身であり、かつ、国本社や無窮会、東洋化学会等を通して在野とも親交があった平沼の名のもとに均衡を保とうとしたということでもあった。そのため、そのなかにはそもそも学問思想的には異なる主義が内在しており、争いの火種が胚胎していたのである。こうして制定された学科課程であるが、この学科編成をめぐるのは後に学院紛擾という形で、再度議論が再燃することとなる（第5章、第8章を参照）。

師弟の道

なお、管見の限り、平沼は学院紛擾に關して最後まで何か自身の意見を発言することはなかつた。ただし、紛擾が起こる以前の一九二四年八月に出された雑誌『東洋文化』第七号中で次のように述べていたことを付記しておきたい（平沼、一九二四b）。

「殊に学生の如きは師を視ること路人の如く、学校を以て智識の市場となし、少しく意に満たざる所あれば黨を結びて我意を主張し、往々紛擾を醸す者あり、其の亡状言語に絶すと謂ふべし。論語に有子の曰く、其の人と為りや孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し、上を犯すことを好まずして乱を作すことを好む者は未だ之れ有らず、君子は本を務む、本立ちて道生ず、孝弟は其れ仁の本たる歟」と。

このように述べた平沼は、この翌年に早くも学院で紛擾が起こり、学生らが同盟休校を図るような事態に陥ることになると予測していたかどうかはわからないが、師弟の關係性、学ぶ者の姿勢、その根底には儒教的精神が必ずなければならぬとした上記の發言は、平沼の描いていた学校ことに学問への姿勢がどのようにあるべきかといった思想を端的に示しているものである。

その後、総長を辞し井上哲次郎へ総長職を託した平沼は、少なくとも協会と学院との間にすでに深刻な軋轢が生じていたことは承知していたようである。前掲の松本洪による「平沼先生と東洋文化」によれば、「政府年々の補助金を協会の事業にも使用すると頑張る協会側と、此の補助金は学院経営の為に下付されたものであるから、学院経営を困難にすることはいけないと主張する学院側とが正面

衝突し、深刻な争となった。先生は学院総長として、之を取り裁くことは両側協会理事として平和に処理したいと考えられ総長を辞して後を井上哲次郎博士に託した」（平沼騏一郎先生逸話集刊行会編、一九五八）とあることから、その後起こる学院紛擾を平沼は予想していたかもしれない。

4 平沼と大東文化学院

理想の教育機関

平沼にとって大東文化学院の創設と総長就任は、自身の理想を体現することであった。帝国大学法科大学を司法省貸費生として卒業したことにより司法省入省を余儀なくされ、また平沼自身が優秀な成績をあげたとはいえ入省当初の日本社会のなかでは天皇制官僚機構での司法省の地位は必ずしも有力ではなかった。そのようななかで、大正期の司法部自体の政治的台頭という時代の後押しを受けつつ順調に司法畑で勢力を伸ばしていった平沼は、ついに政治のトップにまで上りつめ、同時に国本社をはじめとした右翼団体の結成に関わることとなった。その一方で、つねに皇室主義を貫き、儒学思想を政治的政策を超えて抱いていた平沼は、結果として皇道主義、国体主義思想に基づく「皇学」「儒学」を基本教育理念に掲げた大東文化学院の創設に携わることとなる。この儒学思想に基づく高等教育機関の創設はもちろん平沼の政治的生涯とまったく無縁なわけではなく、大東文化学院創設メンバーには国本社役員と重複している者もあり、民間右翼とのつながりも認められる。しかし、平沼が大東

文化協会および大東文化学院に対して期待したものは、自身の政治的基盤の強固というよりは、むしろ幼年期より培ってきた皇道観、儒学思想の実現であった。創設後ほどなく総長職を離れその後大東文化協会会頭となるも、いずれもごく短期の就任期間ではあったが、平沼にとっての大東文化学院は自身の理想教育を反映したそのものであったし、大東文化学院にとって平沼の思想はそのまま教育基盤の一つであった。

したがって、大東文化学院創設における平沼の皇道主義に基づく儒学教育の理念は、政治的政策思想と全く無縁ではないにせよ、そこから切り離して見るべきものである。正しく儒学を理解することこそが日本の将来および日本人の育成にとって必要であると信じていた平沼にとって、それを皇道と結びつけていくことはごく自然なことであった。それが大正期の復古主義や漢学振興運動と結びつき、大東文化協会および大東文化学院の創設へと繋がっていく。やや極端な儒学思想と「皇学」を掲げた理念は皇国史観と近代教育のもとで創設直後に混乱を招くことになるが、それでもなお平沼の思想は学院内に生きたと見てよいだろう。

伊勢神宮参宮

平沼が実現しようとした理想の教育は、伊勢神宮参宮が実施されたことにも現れている。伊勢神宮への参宮は平沼が提唱し始まったとされ、創設年から戦禍が激しくなり中断せざるを得なくなつた一九四三年まで、一五年以上にわたって毎年実施されたものである。総長として平沼は九段校舎正門に

において学院生らの出発を見送り、帰京時にも正門において出迎えたという。学院生たちが総じて思い出を振り返る際には伊勢神宮参宮を挙げることは多くあり、彼らの精神に及ぼした影響は極めて大きかった。伊勢神宮参宮を含み、大東文化学院において行われた漢学中心の特殊な教育課程が、大正期高等教育機関におけるカリキュラムの全体像のなかでどう位置づくのかを明らかにするために、さらに日本大学などの私立大学のカリキュラムおよび國學院や皇學館といった「国学」「神道」教育との比較が必要となってくると考えられる。また、ほかの大学における国本社活動に対する平沼の影響をさらに追求することも、平沼の思想を考察するうえで必要になってくるだろう。

参考文献

- 平沼騏一郎回顧録編纂委員会編（一九五五）『平沼騏一郎回顧録』学陽書房
- 平沼騏一郎先生逸話集刊行会編（一九五八）『平沼騏一郎先生逸話集』共同印刷製本
- 平沼騏一郎（一九二五）「大東文化学院第一回始業式訓示」（大東文化学院同学会『同学』第一号、大正一四年一〇月八日）
- 平沼騏一郎（一九二四a）「日支文化同盟の急務」（『東洋文化』創刊号、一九二四年一月）
- 平沼騏一郎（一九二四b）「師弟の道」（『東洋文化』第七号、一九二四年八月）
- 伊藤隆（一九六九）『昭和初期政治史研究』東京大学出版会
- クリストファー・W・A・スビルマン（二〇〇四）「平沼騏一郎の政治思想と国本社―皇室観を中心として―」（伊藤之雄・川田稔編『二〇世紀日本の天皇と君主制 国際比較の視点から 一八六七―一九四七』

吉川弘文館
萩原淳(二〇二二)『平沼驥一郎』中公新書

第2章

大東文化協会の初代会頭

大木遠吉



一八七一年、東京に生まれる。父は初代文部卿の大木喬任。従叔父に大隈重信がいる。幼少期から病弱であったため学校教育は受けず、主に膨大な量の読書を通じて知識を磨いた。一八九九年、父の死去により伯爵を継承。一九〇八年に貴族院議員となつて政界へ入り、二〇〇二二年に司法大臣、二二〇二三年に鉄道大臣を務めた。この間、伯爵議員と子爵議員の協調体制の構築、政友会と政友本党の政本合同に尽力している。また、日本工業大学顧問、大東文化協会初代会頭、帝国公道会初代副会長・第二代会長、大日本国粹会総裁、帝国農会会長など多くの民間団体の役員にも就いた。一九二六年没。

1 国学・漢学との出会い

政界・教育界・民間団体への関与

大木遠吉(号・天籟)は、一八七二(明治四)年八月、大木喬任(一八三二〜一八九九)の三男として東京に生まれた。遠吉は父・喬任を「漢学者」(大木、一九一四)と表現している。喬任は佐賀藩士で、藩校・弘道館に学んだ後、藩政改革を推進した。維新後は明治新政府に出仕し、江戸を東京と改称して首都とする東京奠都を江藤新平(一八三四〜一八七四)らと建言。一八六八年、天皇の東京行幸に随行し、参与と兼任で東京府知事となる。七一年には初代文部卿に就任して、日本最初の近代的学校制度を定めた教育法令である学制を制定した。このほかにも、民部卿、教部卿、司法卿、元老院議長、枢密院議長などの要職を歴任し、戸籍法制定や民法典編纂にも関与した。文部卿を二度務め、第一次松方正義(一八三五〜一九二四)内閣でも文部大臣となるなど、教育行政にかかわりが深かったといえる。また八四年には、華族令施行により伯爵に叙せられた。こうした功績から明治の六大教育家に数えられ、幕末から明治期に活躍した郷土の偉人として「佐賀の七賢人」にも選ばれている。なお、同じく「佐賀の七賢人」の一人で、早稲田大学を創設し首相も務めた大隈重信(一八三八〜一九二二)は、喬任にとって母方の従兄弟にあたる。

遠吉は幼い頃から身体が弱かったため学習院を中退したとされ、本人も一度か二度見学に行ったたと述懐しており、いわゆる学校教育は受けていない。兄が若くして亡くなったことから嗣子となり、

一八九九年二月、父の死去に伴って二八歳で爵位を受け継いだ。以後、大隈が遠吉の後見役を果たしたといわれている。

一九〇七年には貴族院伯爵議員となるべく補欠選挙に出馬したが互選に落選すると、子爵議員の選出母体・尚友会、およびその院内会派であり貴族院で最大の勢力を誇った研究会に対抗するため、伯爵議員の選出母体・伯爵同志会を結成した。〇八年の補欠選挙では当選し、院内会派・扶桑会を結成したが、一年の第四回伯爵議員選挙で落選。一八（大正七）年の第五回選挙、二五年の第六回選挙で再び当選し、二六年まで議員を務めた。なお一九年には、男爵議員や官僚系勅選議員などに対抗して貴族院の主導権を掌握すべく、すべての伯爵議員が研究会に所属する、伯爵議員・子爵議員の協調体制を構築した。また、一九一〇年頃から立憲政友会と交流を活発化させたといわれており、二〇年から二二年まで原敬（一八五六～一九二二）内閣と高橋是清（一八五四～一九三六）内閣の司法大臣、政友会が閣外協力で与党となった加藤友三郎（一八六一～一九二二）内閣でも二二年から二三年まで鉄道大臣に就いている。その後、政友会と政友本党が分裂した際には政本合同に尽力した。

政治家として知られる遠吉だが、一九一六年に日本工業大学の顧問となり、二三年には大東文化協会（以下、協会）の初代会頭に就任して大東文化学院（以下、学院）の開校につなげるなど、教育事業にも携わった。また、一四年に帝国農公会初代副会長、のちに第二代会長、一九年に大日本国粋会総裁、二三年に帝国農公会会長に就くなど、民間団体の役員も多く務めている。そして一九二六年二月、療養先の別府温泉から帰京する途中で体調を崩し、京都の宿で死去した。

「進歩的忠君愛国主義者」

遠吉は政治家として演説がうまかったといわれ、揮毫も得意とした。そのほかにも弓術、乗馬、水泳、船、釣り、自転車に長け、詩、篆刻、囲碁、謡曲も巧みな多芸多能な人で、酒豪でもあった。また、喬任・遠吉とも金銭に関しては無頓着気味であったといわれる。とくに遠吉は、伯爵同志会結成と政友会支援のための政治資金、あるいは知人だった伯爵の保証人となって負った借金などが原因で、自邸を売り払ったことがある。

遠吉は亡くなるまで協会の初代会頭を務めた。それは推されて就いたものであると、彼自身が学院の開院式で述べている。推された理由は、多趣味かつ議員であったため顔が広かったであろうこと、伯爵議員や大臣というステータスを買われたこと、できようができまいが頼まれれば何でも引き受ける人といわれたほど情に厚かったことなど、さまざまな要因が考えられる。

しかし、こうした要素を持つ人物はほかにもいたであろう。また、お飾りであることを期待されての人選かといえは、必ずしもそうではないように思われる。遠吉は何事にも毅然とした態度で臨み、睨みをきかせてべらんめえ調の歯切れのいい啖呵を切り、思ったことは遠慮なくいい、気に入らなければ誰とも衝突する、意志の強い人物と評されていた。それにもかかわらず協会会頭への就任を乞われたのは、「漢籍の素養は今の貴公子中恐らく第一番」(鶴崎、一九一五)かつ「進歩的忠君愛国主義者」(伊藤、一九二六)と見られていたことにも要因があるのではないだろうか。

読書を通じて身に付けた国学・漢学

まず、遠吉の「素養」とは何か、これを本人の述懐をもとに見ていく（大木、一九一四）。なお、彼が自分の考えなどを雑誌に寄稿したり本にまとめ始めるのは、一九一〇年代前半からである。

遠吉は、学校教育に代わり、自宅に出入りする書生に算数・理化学を学び、旧佐賀藩の学者に中国の歴史を描いた『春秋左氏伝』を学んだ。当初はいわば家庭教師による教育を受けたということである。そして、『春秋左氏伝』を体系的に学んだことをきっかけとして、父・喬任の膨大な蔵書を中心に読書を通じて知識を蓄えていった。なかでも、司馬光（二〇一九～一〇八六）編纂の『資治通鑑』、そして朱熹（一一三〇～一一〇〇）などがそれを再編した『資治通鑑綱目』をすべて通読したことで、歴史に強い興味を抱くようになった。

ただし、これらはあくまで中国の歴史書であり、国が異なればその歴史や特質も異なってしまうべきと考えるようになった。そこで日本の歴史を知りたいと思った遠吉は、神武天皇から一〇〇代の治世を扱った『大日本史』などを読んだ結果、日本史の淵源は『古事記』にあるという見解を持つに至る。『古事記』は、神代における天地開闢から推古天皇（五五四～六二八）の時代に至るまでの出来事が神話や伝説を含めて紀伝体で綴られた、日本最古の歴史書とされる。遠吉は、中国の歴史書の模倣ではなく、ありのままの日本の歴史がここに記述されていると捉えた。そして、学者ではない自分はその内容の真意を理解するには、江戸時代の国学者・本居宣長（一七三〇～一八〇一）の『古事記伝』よりも、その弟子・平田篤胤（一七七六～一八四三）の『古史徴』による注釈を参考にするのが適当だ

と考へた。遠吉は、国学、とくに平田国学の考へ方を通して日本の成り立ちを学んだということになる。

また、国学ほどではないものの、四書五経や浅見綱齋（一六五二―一七二二）の『靖献遺言』も印象に残つたという。浅見は、上下の人間関係を厳しく教へて大義名分を重んじた江戸時代の朱子学者・山崎闇斎（一六一九―一六八二）の門弟のなかでも、朱子学理解は傑出した存在といわれており、その著作『靖献遺言』は、大義のために命を捨てた中国史上の人物を描いてはいるが、日本の皇統一系の君主制を賛美し、幕府ではなく皇室が日本の正統な支配者であることを暗示して、その後の尊皇論に多大な影響を与へた。遠吉は、ここに名分と節義を重んじた理想的な人物の行動が描かれていると捉へた。近世日本の儒教・朱子学は、中国で誕生したオリジナルの儒教・朱子学とは異なる、いわば日本化されたものではあるが、中国由来の学問であることから漢学のひとつと位置付けられている。

このように遠吉は、神代からの歴史に日本の特有性を探る国学と、中国の古典に基づき上下関係や徳義などを重んじる漢学とを素養として培っており、とくに漢学の知識に秀でていと評されたのである。

2 「国体」と「立憲的君主政治」

比類なき国家日本 ― 「国体」

また、先述の通り遠吉は「皇室中心主義者であり、忠君思想の把持者であつたが、其れは時代に逆

行する偽君、偽愛国ではなく、時勢の進歩に伴ひ、世界の大勢に目覚めし、理智と聡明に裏付けられた進歩的忠君愛国主義者」ともいわれた。以下では、国学・漢学という素養を踏まえながら、世界の大勢を理解する「忠君愛国主義者」とされた彼の基本的な考え方を見ていきたい。

遠吉は、日本は世界に比類のない特有性・優位性を持つ卓越した国家だと考えていた（大木、一九一二）。その理由として、日本の「国体」と「立憲的君主政治」の存在を挙げている。

国家の構成員は、天皇およびその血筋をひく皇統、そして臣民（明治憲法下における国民）であり、皇統を頂点とし、その下に臣民がいる。これが彼の考える国家構造である。

ただし皇統と臣民は上下関係にあるものの、調整不可能な利害対立は生じない、和氣藹々とした家族のような結びつきを持つと考えている。君臣関係を親子や家族にたとえることは目新しいものではない。遠吉が読んだという漢学のテキストである『論語』『孟子』でも語られており、平田国学も父母への孝行を天皇への忠誠と結びつけている（米原、二〇〇七）。明治時代以降も、上下の人間関係を家族と捉える見方は継続し、たとえば鐘淵紡績の経営者・武藤山治（一八六七～一九三四）は、経営者と従業員を擬似的な家族と見るような、いわゆる経営家族主義を掲げた。

そのうえで遠吉は、上に立つ皇統は神代から万世一系で国家を統治しており、これが日本の国家体制、すなわち「国体」だと考えた。そして、この「国体」は国家の神髄として永劫不変であり、主権は統治者である皇統が有すると唱えている。神代とは、天皇の祖先とされる天照大御神の神勅を受けたあまてらすおほみかみににぎのみこと、葦原中国を統治するために高天原から地上に降りた時代、つまり天孫降臨がおきた

時代を指す。遠吉は、この天孫降臨が建国、すなわち日本という国家の誕生にあたると理解した。他国にはない、神代から続く「国体」の存在、これが、日本は特異性と優位性を持つ比類なき国家だと考える第一の理由である。

「国体」論と国学・漢学

一方、臣民については、この「国体」を正しく理解して国家の一員であることを自覚し、職業に精進することで社会的責任を果たして国家に貢献することが当然の義務だとしている。これに似た発想は漢学のひとつである近世日本の朱子学に見られ、人の内面が道徳的に完成されてこそ社会への貢献も完璧になるという考え方を、遠吉は読み替えたといえる。ただし朱子学は近世から近代に至るまでに少なくとも知識人の間では基礎教養化されていき、その内容は共有されていたといわれている（土田、二〇一四）。つまり遠吉のなかには、あえて意識しなくともこうした発想が底流していたのである。「漢学者」の父を持つていけば、なおさらであろう。また、遠吉が親しんだ平田篤胤も、師・本居宣長が社会のすべての現象を「神の御所為」と捉えて現実をありのままに受容する人間の姿を描いたのに対し、人間は社会の事象に対して相応の責任を負担する存在だと説いている（米原、二〇〇七）。

そして、いわゆる一君万民的に皇統を重んじる思考も、近世日本の朱子学に存在していた。最初に日本を統一し、二代以上続いたのは皇室である。その皇室が地方政権になっても存続したことは、皇室こそが正統という証である。また、三種の神器は徳の象徴であり、それを伝える天皇は徳を伝える

存在ともいえる。つまり、正統である皇室が、政権を担う道義性、すなわち道統をも請け負ったことになる。万世一系であり、正統と道統の両者をあわせ持つというこの考え方は、必然的に、万人が忠誠を尽くす対象は天皇・皇統という思考に帰結する。これがおおまかな朱子学の皇統論である（土田、二〇一四）。

また、「国体」論を思想体系に仕上げた学問のひとつに、国学がある。国学者のなかで最初に「国体」の語を用いたのは平田篤胤とされる。平田は、西洋に対抗しうる日本の国家意識のありようを示そうとした。まず、日本の国生みにおいて天地創造がおこなわれたと捉え、世界を作り出した「よろずの国の本つ御柱」として日本を位置付けた。ここに日本の優位性・独自性を見るのである。また平田国学は、儒教道徳と接合する部分はあるものの、高い徳を持つ者が統治者になるという儒教の有徳者支配の原理を明確に否定した。そのうえで、天照大御神が君臣の関係を定めたことから、その子孫による現世支配は正当であると力説し、皇統に対する忠誠心の必要性を強調した（米原、二〇〇七）。

ただし、近代になって万世一系の皇統を「国体」の中心に据える論理だけが支配的であったかといえ、そうともいえない。少なくとも明治初期は「国体」とは何か議論される対象であり、福沢諭吉（一八三五―一九〇一）、西周（一八二九―一八九七）、加藤弘之（一八三六―一九一六）などの言論人は、国学などが唱えた「国体」論を批判した時期もある。ただしその多くは後年、皇統の統治を「国体」と捉える内容に変化していく傾向にあった。そして一八八〇年代後半になると、神懸かり的な自国至上主義や排外主義とは一線を画すものとはいえ、日本の独自性を探求する国粹保存主義、国民主義などが

盛り上がりを見せていった。

このような時期を経た時代に生き、国学・漢学の素養のあった遠吉にとって、世界に対峙する日本のイデオロギーを、神代から続く皇統による統治という「国体」に見出すのは自然なことだっただろう。彼はつねに国際情勢を視野に入れており、「今日は列強競争、虎視眈々の世……ウツかりして居ると、赤髯緑眼の徒に征服されて、此光荣ある国家は亡びて了ふ」（大木、一九一二）という危機感を抱き続けていたからである。

比類なき国家日本 — 「立憲的君主政治」

しかし、一君万民的な指向とはいえ、遠吉は天皇親政を理想とはしていない。あくまでも、日本の「国体」は天皇主権ではあるが「立憲的君主政治」に基づいていると主張し、この政治体制も神代から続くものだとした。神代について正確に叙述していると遠吉が見なした『古事記』にも、同様の伝承が記されている。天照大御神が御子に葦原中国を統治させようとしたが、そこには荒ぶる国つ神たちがおり、実現できない。そこでこれに対処するため、八百万の神々を召集し合議をおこなった、というものである。このように、西洋諸国の代議制に先鞭をつけ、広く会議をおこして万機公論に決すという「立憲的君主政治」を神代から採用していることが、日本は他に類を見ない特異性と優位性を持つ国家だと考えた第二の理由である。

遠吉が天皇親政ではなく「立憲的君主政治」を唱えた理由は、神代からそうだからということ以外

にも挙げることができる。ひとつは、国家には「国体」だけでなく「政体」も必要だと考えていたから。もうひとつは、一九一〇年代から二〇年代の大正デモクラシーの影響である。

彼は、「国体」は永劫不変の国家体制であるのに対し、「政体」は時勢や世界情勢に応じて変化する政治制度だと捉えた。ただし両者は深く結びついており、「政体」のあり方が「国体」と国家の存亡にかかわると理解している。遠吉は、日本の「国体」に最適な「政体」は、臣民から選出され世論を代表する政党政治、そして元老ではなく臣民の意見を反映させる政党内閣制だと考えていた。かといって、政党は国家や臣民よりも政治的基盤のある地方の利害を優先しがちだとして、全幅の信頼を置いていたわけではなかった。

そのため、彼は衆議院・貴族院の二院主義を唱えた。貴族院は、衆議院と政府の間に立って調和と監督をはかり、偏りなく世論を把握するために衆議院と親交を結び、政府に対しては超然とした態度をとって、国家のために活動する組織と位置付けた。ただし、華族という地位に甘んじて何もしない貴族院議員がいるという問題も指摘している。遠吉は、富だけでなく栄誉名譽も顕示することができる華族制度は必要だと説く。しかし、資質が問われるような議員の行動については、自らも華族の一員であり貴族院議員であるからこそ、自戒の意味も込めて強く非難した。

そのうえで、政府・貴族院・衆議院という「政体」は、憲法にのっとり、世論を重んじて国家に尽くす必要があると説く。大日本帝国憲法は、禪譲放伐をしりぞける天皇主権の「国体」論を有している。しかし、主権は天皇にあつても、立法権は帝国議会と分有、予算決議権は帝国議会に属し、司法

権は独立しており、行政権も内閣の輔弼を受けた。遠吉は、天皇は万能とは限らないからこそ、憲法にはそれを輔弼する内閣の規定があると考えた。天皇の存在を重視するがゆえに憲法と「政体」もまた重要なのである。

「立憲的君主政治」と大正デモクラシー

こうした、国家における天皇の位置付けについては、天皇機関説論争に代表されるように、とくに学者間で大正デモクラシー期に議論が活発化した。

一九一〇年代から二〇年代にかけて、日本の社会経済は大きく変化した。明治時代から西洋に倣った資本主義路線を採用していた日本は、一九一四年に勃発した第一次世界大戦で勝利することになる連合国側についたことをきっかけに急激な経済成長を遂げ、国際的地位も上昇していった。しかし、終戦後の二〇年代には、反動恐慌の発生にともない、労働争議や小作争議といった社会問題が目立つようになった。これらを解決しようとする風潮はメディアを通じて世論形成につながり、やがて団結権・ストライキ権、男女平等、言論・集会・結社の自由などを求める政治・社会・文化各方面における運動や思潮、すなわち大正デモクラシーに展開していった。

当時、政治面において普選運動などとともに進展したのが、主権の所在とその運用をめぐる議論である。いくつかの意見対立の例を挙げれば、第一は天皇主権論と天皇機関説との対立、第二は国体論と国体否定論との対立、第三は正統学派と自由主義学派との対立がある。いずれも、前者の立場に穂

積八束（一八六〇～一九二二）や上杉慎吉（二八七八～一九二九）など、後者に一本喜徳郎（二八六七～一九四四）や美濃部達吉（一八七三～一九四八）らがいた。

この構図のなかに遠吉を位置付けるとすれば、第一に關しては天皇機関説、第二は国体論、第三は自由主義學派と考えられる。彼は、穂積や上杉の學説に強く反発した（大木、一九二三）。その一方で、国家は法人であり、あらゆる国家において主権はこの法人たる国家にあるとして、議會、特に公選議會の權威を重視する立場をとった美濃部には共感を示していた。ただし、第二の点に關しては考え方を異にしている。美濃部は、「国体」と「政体」とを区別せず、「政体」が變化したとしても国家の存立を害することはないと唱えていた。「国体」と「政体」を明確に區別し、「政体」のあり方が「国体」と国家の存亡を左右すると考えていた遠吉は、おそらく首肯できなかったはずである。他方、法學者・神道思想家として知られた寛克彦（一八七二～一九六二）が唱える、『古事記』を聖典とした學説は肯定的に捉えていた。ただし、宗教的な要素を含む寛の學説そのものというより、あくまで「立憲的君主政治」は神代からおこなわれていたという遠吉の認識と概ね一致している部分についてである。こうした大正デモクラシー期の議論を介し、遠吉は自らの「国体」「立憲的君主政治」に対する考えを深めていった。とはいえ、自分は憲法學者でも何でもないと彼自身が語っているように、その主張は憲法學的な解釈に拠っているというよりも、神代から続くものという考えに一番の根拠を置いている。日本では神代から立憲君主制のような統治がおこなわれていたという発想は、遠吉の父・喬任や従叔父の大隈、あるいは國學者の横山由清（一八二六～一八七九）なども持っており、明治初期に近

代国家のあり方を構想した人びとの間では相応に広まっていたといわれている（重松、二〇一二）。そのため、遠吉の「国体」「立憲的君主政治」理解は、国学と漢学という素養もあいまって、彼にあってはいわば信念になっていたといえよう。

このような「国体」論を唱えたせいも、遠吉は国粹主義者と紹介されることがある。しかしおそらく、一九三〇年代に強まっていくような、他国に侵略的・強圧的な発想を持つそれではない。たとえば彼は、「支那は支那である。日本は日本である。……日本の国体を以て支那に臨むといふ事は、出来る事でもなし、又、強ゆべき事では断じてない」（大木、一九一二）と述べている。これは彼の歴史観からきているといえる。既述の通り、彼は各国の歴史は異なっているべきと考えていた。したがって、日本の歴史的過程から生まれた「国体」も、異なる過程を歩んできた他国にはなじまないと思慮した。日本の「国体」は世界に比類のないものであっても、普遍的・絶対的なものではなく相対的なものだという理解である。

3 大東文化協会・大東文化学院とのかかわり

東洋文化学会の設立

これまで見てきたように、遠吉は、国学と漢学の素養を基盤とし、一系性・永続性を有する皇統を戴く永劫不変の「国体」、そして皇統の主権だけでなく世論も重視する「立憲的君主政治」、これらが

神代から続く日本こそ、世界に類を見ない特有性・優位性を持つ卓越した国家だと考えていた。そして、憲法、および世界情勢に応じた政治を実行すべき「政体」も、「国体」と国家を左右する要素として重要視していた。この、「進歩的忠君愛国主義者」といわれた遠吉は、協会や学院とどのようなかわりを持ったのか。

既述の通り、大戦後、西洋に倣った社会経済の発展過程で生じた矛盾が露わになるなかで、西洋とは異なる東洋の固有性を再評価しようとする動きも見られるようになった。そのひとつの現れが、一九二一年三月、衆議院議員の木下成太郎（一八六五～一九四二）などによって第四回帝國議會衆議院本会議に提出された、「漢学振興二閣スル建議案」である。これと並行するように、同年四月、牧野謙次郎（一八六三～一九三七）をはじめ早稲田大学の関係者など主に学者たちが、漢学振興会を創設する必要性を提言した。そして五月には、東洋文化学会（以下、学会）と改称したうえで、大隈重信を初代会長として組織した（尾花、二〇〇五）。ここには牧野のほかにも、前川三郎（一八八〇～一九五八）、川田瑞穂（一八七九～一九五二）、内田周平（一八五四～一九四四）など、のちに学院の教員となった人物が参加していた（第Ⅱ部参照）。

学会の活動として掲げられたのは、東洋文化の淵源は中国にあるため、その中核をなす学問である儒教、つまり漢学の振興をはかり、いずれは東西文化の融合も視野に入れることだった。あわせて、日本の「国体」と国民性は国典国史によって深まるものであるとして、学校教育課程において西洋的学術に偏ることなく漢学と国学の必修化を求めていくことが挙げられている。そのうえで、喫緊の課

題として、漢学を専攻する人材の養成、そしてこの養成と漢学研究のための機関である東洋文化研究所の設立が提示された。会長の大隈はこのような計画に興味を抱き、政界・財界・学界などに声をかけたとされる。

しかし計画が進展しなかったことから、ひとまず研究所の設立に向けた資金調達のため議会に対する働きかけが強められたが、反動恐慌による不況で設立にまではなかなか至らなかった。

漢学・東洋文化振興に関する協議会の設立

一方、一九二二年二月に漢学振興の「第二次建議案」を提出した木下などが、今度は、貴衆両院議員の協力を仰ぐことで漢学推進のための民間団体を設立しようとする動きを見せる。

そして同年四月、両院議員の有志が集まり、漢学と東洋文化振興に関する第一回協議会（以下、協議会）が開催された。遠吉は体調不良で欠席したとされるものの、参加者のなかにはのちに協会の初代会頭となる二人、すなわち江木千之（二八五三～一九三二）・小川平吉（一八七〇～一九四二）もいた。江木は文部省・内務省の官僚経験者で、複数の県の知事を務め、貴族院勅選議員・文部大臣にも就いた政治家である。小川は衆議院議員で、司法大臣や鉄道大臣などを歴任した政治家として知られている（第4章参照）。

また五月には、両院議員数名によって、漢学振興の必要性を中学校の校長たちに説くための中学校長招待茶話会が開催された。中等教育において、西洋由来の知識や技術だけでなく漢学によって人倫

道徳も涵養すべきと考えたからであつた。遠吉はこの会の主人役として開会の辞を述べている。

七月には第二回協議会が開催され、以後、遠吉は座長を務めた。協議会では、日本は東西両文化を吸収し融合をはかつて世界の文運の興隆をはかるべきであるのに、東洋文化に関しては閑却されていること、「国体」のあり方に鑑みれば、日本固有のものとなりつつある漢学と東洋文化の振興のため、研究教育機関とその母体を作る必要があることなどが議論された。討議の結果、漢学研究所を設立することとし、遠吉は規約や資金募集の方法などを決定する実行委員の人選を任された。

大東文化協会・大東文化学院の設立

協議会は一二月にも第三回、四回、五回が開かれ、最終的に研究所の母体として大東文化協会が設けられることが決まった。そして協議会の両院議員と学会の学者たちが結集し、一九二三年二月に協会が創設され、遠吉は初代会頭に推されて就任した。

当時の遠吉は鉄道大臣で、その前に司法大臣を務めていたときから、漢学に関する研究教育機関の設立に政府の助成が必要だと首唱していた一人として認識されていたという。また先述のように、彼は国学・漢学の素養を持ち、「国体」に関する知見が深かったといえる。したがって、「国体」を視野に入れ漢学振興を目指す協会の会頭として適任と見なされたのだろう。

協会の規約第一条には「本会ハ東亜固有ノ文化ヲ振興スルヲ以テ目的トス」と定められており、その要項として「我が皇道ニ遵ヒ国体ニ醇化セル儒教ニ拠リ国民道義ノ扶植ヲ図ルコト」、「本邦現時ノ

情勢ニ鑑ミ儒教ノ振興ヲ図リ及ビ東洋文化ヲ中心トスル大東文化学院ヲ設立維持スルコト」などが掲げられた（大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会、一九七三）。こうして、教育研究機関としての学院の設立が明示されたのである。

遠吉はこのような協会の活動趣旨を説明するため、山口県萩明倫館で講演会を開くなど奔走している。そして一九二三年九月に学院の設置認可が下されるまでの間、学院開設の準備として学院綱領並学則編制委員会を立ち上げて委員長となり、東京帝国大学・京都帝国大学・私学の三者から意見を聞き取って学則の制定にもあたった。

関与した理由 — 大隈と喬任

では、遠吉自身はなぜ協会・学院の設立に関与しようと思ったのか。理由はいずれも推測ではあるが、第一に大隈の存在が考えられる。遠吉にとって大隈は、公人としては同郷の先達、私人としては後見役の従叔父であった。政治的スタンスを除けば二人は師弟のような関係であったとされ、遠吉は「小大隈」という世評を受けている。その大隈が初代会長に就き、政財界などに働きかけて活動を支援したのが学会である。しかも学会は当初、学校教育における漢学と国学の必修化を構想していた。どちらも遠吉にとっては造詣が深い学問である。そして彼が座長を務めた協議会は、漢学に関する研究教育機関を設立したいという方向性で学会と一致しており、両院議員が主たる構成員であった協議会に参加することは、学会活動に賛同するのと同意義を持ったのではないか。この協議会への関与が、結

果的に協会・学院の設立に結びついていったのである。

なお、協議会の開催当初からともに列席し、のちに協会の副会頭の一人ともなった江木に対し、遠吉は少なくとも一九一〇年代前半に名指しで批難していた時期があった（大木、一九一三）。江木のよくな官僚系勅選議員は、元老と結びついて政党政治を阻害する存在だと見なしていたからである。しかし、その後の伯爵議員の研究会への合流、政本合同への尽力という遠吉の行動から推測すると、彼にとつて重要な点で目的を共にしているのであれば協力し合うこともためらわない人物だったのかもしれない。

第二は、父・喬任への思いが考えられる。遠吉は自分の経歴を振り返った寄稿の中で、喬任を「漢学者」と表現している。また、文部卿に初めて就いたのは喬任であると繰り返し言及している。さらに、幼い頃から父の辛苦や任務に精励する姿を見てきたため、それを思い出すたび自分の怠惰を誠め気持を引き締めるとして、自省・自戒を促す存在だと述懐している。これらにあらわれた喬任への思いは、尊敬の念であろう。すなわち、漢学に長け近代日本の教育政策に大きく貢献した喬任に倣うように、遠吉自身も漢学に関する教育事業の一環といえる協議会に関与し、協会・学院の創設に携わろうとしたのである。

関与した理由 — 漢学に対する認識の変化

第三は、漢学に対する認識の変化が考えられる。遠吉はもともと、どちらかといえば漢学よりも国

学に関心を持っていたように思われる。一九一一年の時点では、「漢学は随分名教上に裨益した事も多いが、何しろ了簡が狭い、誠にケチな学問」（大木、一九二二）とさえいつていた。漢学者の中には、日本の起源を神代より五〇〇年ほど後の神武天皇の東征に始まると主張する者、また、神代の伝説は荒唐無稽だと唱える者がおり、それが世間に広まって誤解を生む要因となっているからという理由である。「国体」「立憲的君主政治」は神代から存在し、それが世界に比類のない日本の特有性・優位性の根拠だと考えていた遠吉にとって、こうした漢学者の主張と世間の誤解は受け入れがたかったのであろう。ただしこのとき、漢学は人のあるべき道を教示したという点で役に立った、と評価もしている。そして一九二〇年八月になると、次のように認識が大きく変化した。

漢学の伝来は日久しく外国の学問とは言ひながら……日本の国民性と合致すべき性質を帯びて居ると思ひます、夫故我邦の建国の始めから行はれて居る国民性と知らず識らず合致し今日迄永らくの間我邦で隆昌を極めたのであります……国民組織社会組織に交渉を有つ所の学術は仏教の哲学にあらずして儒教であります……日本の国体は万邦に冠絶して居るのは何人も認める所である、其万邦に冠絶するものは万世一系の皇室を戴いて居るからである……言ふ迄も無く我が国民性から出發したのでありますけれども、孔子の温情主義即ち儒教の力が興つて居ることと信じます。温情主義の觀念が発達して之れに依つて日本の文明が築き上げられたのであります……西洋思想の権利義務を超越したる温情主義に依つて此文明を造り上げたのは日本の外に無いのであります

……思想が混乱して居り統一を欠いて居るやうでは国家の爲め憂ふべきことであります……思想界の統一を計らんとするには漢学儒教の本領真骨頭を教育界に宣伝せねばならぬと考ふるのであります。(大木、一九二〇)

日本の「国体」が世界でもっとも優れている理由は、万世一系の皇統と、神代から続く国民性にある。ただし、この国民性に「合致」する性質を持つ「漢学儒教」の力があつたことも確かで、とくに儒教の始祖である孔子の「温情主義」が発達したことで文明を築くことができた。これは日本だけである。国家のために思想の統一をはかるには、この「漢学儒教」を「教育界」に広めなければならぬ、という主張である。孔子が説くオリジナルの「漢学儒教」の教え、いわば本家漢学の教えに「温情主義」があるというのはあくまで遠吉の考えだが、一九二〇年の時点で彼のなかで国学と漢学が結びついたのでといえる。

またここでは、西洋のように権利と義務で結びついた人間関係よりも、「温情主義」に基づく上下の関係に優位性を見出している。皇統と臣民の上下関係は家族のようなつながりを持つと遠吉が以前から考えていたことは、すでに述べた通りである。日本の「国体」には下位の者に対して思いやりある態度で接する考え方があるということだが、それは日本の国民性に「漢学儒教」の発想が加わることで形成された面があると考ええるようになったことがわかる。「国体」の維持と思想の形成に、「漢学儒教」が寄与してきたという理解である。そのため、この振興を唱える協会・学院の設立に関与して

いったと考えられる。

漢学に対する認識が変化した理由は定かではない。ただ、大戦前の一九一〇年代前半から、明治新政府の功績によつて産業、交通機関、国富など物質面で日本は豊かになったことは確かであるものの、自己のためだけでなく自発的に国家に貢献しようとするような精神面については後退しつつあるため、「精神的教育」が必要と説いていた（大木、一九二二）。したがつて、以前から人のあるべき道を説く学問だとは理解していた漢学が、この「精神的教育」にふさわしいと考えるようになっていったのだろう。

協会設立の演説と学院開院式の祝辞

一九二三年四月におこなわれた協会の設立趣意に関する演説からは、一〇年代前半からの変わらぬ「精神的教育」への思いと、二〇年代にかけて深まった「国体」と漢学の関係に対する理解をうかがうことができる。

明治維新以降、西洋諸国と遜色ない「物質文明」を築くべく西洋の文明を輸入してきたものの、「我国固有ノ文化文明」の発展については「杜撰」な面があつたことは否定できない。そしてそれが大戦後、「色々ナル悪思想其他」を生じさせてしまった、と前置きしたうえで、遠古は次のように語っている。

国体ノ淵源ヲ為シ、我国ノ社会組織ノ根本ヲ為ス所ノ人々ノ思想、觀念ノ根抵ハ之ヲ矢張教育ニ俟タナケレバナラヌ……三千年來培養シ來ツタ所ノ教育、而モ能ク国俗国風ニ醇化セル所ノ漢

学儒道ナル立派ナモノガアルノデアリマス……我国ニ於テ消化シ、醇化シ我国特有ノ教育ノ根本タルベキ学問トシテ茲ニ發達シタノデアアル、然ルニ斯ノ如キ貴重ナル学問アルニ拘ラズ、動モスレバ之ヲ閑却セントスルノ傾向ガアル……此麗シキ教育ノ根本モ或ハ消磨シ、或ハ滅亡ニ帰シハセヌカト云フコトモ亦憂慮ニ堪ヘナイ次第デアアルノデアリマス……將ニ奮起スベキ秋ニ逢フシタモノデアルト云フコトカラ当文化協會ガ茲ニ現ハレタ次第ナノデアリマス、而シテ將ニ第一着手トシテ……日ニ日ニ滅ビントスル所ノ漢学ノ素養アル所ノ人々ヲシテ層一層其道ヲ研鑽セシメ、子弟ヲモ教育シ……我が国民ノ思想ヲシテ健全ニ導クト云フコトガ必要デアルト云フ意味ニ於テ、其研究所ノ如キモノモ第一着手トシテ近日中ニ之ヲ實現セントスルノデアリマス（尾花、二〇〇五）

「悪思想其他」が生じるなか、日本の「国体」の根幹をなす「国民の思想」の涵養は教育に期待するしかない。その教育の根本となる学問として、日本社会に「醇化」した「漢学儒道」があると述べている。先ほどの一九二〇年の時点では、「国体」の維持と思想の形成に貢献したものととして「孔子の温情主義」という本家漢学の考え方があつた、という趣旨が記されていた。これが二三年になると、本家漢学への言及は後景に退き、あくまで日本における漢学は日本で「消化」「醇化」され發達した「我が国特有」の学問であることがより強調され、これが「国体」と「国民の思想」を健全なものへと導くと主張されている。日本の特有性・優位性の根拠となる「国体」、その支えとなる思想を培う教育・学問（漢学）は、「我国固有」の性質を持つものであるべきと考えるようになったといえる。

また、一九二三年二月の学院開院式の祝辞では、協会の設立経緯に言及した後、学院創設の意義について説明している。まず、維新以降、西洋の「物質文明」を受容し続けてきた弊害が大戦後に露わになってきたため、この弊害を取り除くには「東洋文化ノ神髓ヲ發揮シ特ニ国民道徳ノ振興ヲ計リ我國民性ニ揮化融合セル儒教ノ教旨ヲ主トセサルヘカラサル」と考えた有志たちによって漢学振興の機運が高まり、これが協会の設立に向けた動きの端緒となった。その延長上に、衆議院における「建議案」の提出、両院議員による協議会の開催が実現し、協会の設立に結びついていった。そして、協会の第一の事業として学院の創設が着手され、開校に至ったとしたうえで、以下のように語っている。

本院院ハ深ク時勢ノ趨向ニ鑑ミ大東文化ノ神髓ヲ發揮シ以テ久シク彼ノ泰西物質文明ノ余弊ニ惑溺セル社会ノ風潮ヲ掃蕩シ徒ニ外ニ馳セ内ヲ忘ルル学界ノ弊竇ヲ匡正シ更ニ進テ憂国熱誠ノ士ヲ養成セン事ヲ期スルモノナリ望ムラクハ諸子ハ能ク此精神ヲ体得シテ社会ノ中堅トナリ以テ国民ヲ指導スルノ責任アルヲ忘ルヘカラサルナリ（大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会、一九七三）

一九〇三年の専門学校令に基づく私立専門学校への進学者は一九一〇年代以降増加していき、一九一八年の大学令によって私立大学の設立も認可され、高等教育に対する需要は高まっていた。高等教育機関の入学者・卒業者は社会全体からすればまだ少数であり、彼らはいわば学歴エリートであった。

漢学を掲げる私立専門学校としてスタートした学院は、そうした学歴エリートを、社会の中核を担い国民を指導する責任を果たせる「憂国熱誠」の人材として輩出する役割を担うものと認識していたのである。

遠吉がおこなった協会設立に関する演説や開院式での祝辞は、その性質上、江木や初代総長の平沼騏一郎（一八六七～一九五二、第一章参照）などの挨拶・訓示と内容が似ており、文言のうえではあまり違いがないように思えるかもしれない。しかし遠吉の場合、国学と漢学の素養に基づき、少なくとも一九一〇年代前半から抱いてきた思いの結果が、協会・学院の創設であったのではないだろうか。

参考文献

- 伊藤正（一九二六）『大木遠吉伯』文録社
 鶴崎鷺城（一九一五）『奇物凡物』隆文図書
 大木遠吉（一九一三）『我が抱負』実業之世界社
 大木遠吉（一九一三）『国体擁護団の怪根を断て』（『実業之世界』第一〇巻第一二号、実業之世界社）
 大木遠吉（一九一四）『吾輩は如何なる書籍により吾輩の精神を鍛錬せしか』（『実業之世界』第一二巻第一号、実業之世界社）
 大木遠吉（一九二〇）『漢学と思想問題』（『斯文』第二編第四号、斯文会）
 尾花清編著（二〇〇五）『大東文化学院創立過程基本史料』大東文化大学人文科学研究所
 重松優（二〇一三）『佐賀偉人伝06 大木喬任』佐賀県立佐賀城本丸歴史館

大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会（一九七三）『大東文化大学五十年史』大東文化学園
土田健次郎（二〇一四）『江戸の朱子学』筑摩書房
米原謙（二〇〇七）『日本政治思想』ミネルヴァ書房



一八六五年、現在の兵庫県に生まれる。木下成太郎（むしたなりたろう）は、大東文化協会副会頭をつとめた人物である。北海道出身の政治家であった木下は、大東文化学院の実質的な設立者ともいわれている。なぜかというと、帝国議会衆議院会議における「漢学振興ニ関スル建議案」の委員長として説明責任を担っており、さらに大東文化協会理事となり、初期の学院について中核的な立場となって運営に携わったからである。その功績から、史上ただ一人「大東文化学院協会葬」が行われた。一九四二年没。

第3章

大東文化学院創設の立役者・大東文化協会副会頭

木下成太郎

1 「木下伝」と高等教育振興への寄与

北海の太閤

木下成太郎は、一八六五（慶応元）年八月に但馬国豊岡（現・兵庫県豊岡市）に生まれ、青年期に家族とともに北海道室蘭へ移り住んだ。父は豊岡藩家老をつとめた木下弥八郎守共であった。明治維新を経て木下家が北海道へ入植したのは、一八八二年頃のことであつたとされる。後年になって木下成太郎は周囲から「北海の太閤」と呼ばれたが、北海道から選出され意欲的に政治活動を行ったことと、自身の出自を木下藤吉郎に遡るとしていたことに起因する。一九三五年には、『北海の太閤 木下斗南』と題する木下の小伝も刊行されている（山下、一九三五）。「斗南」というのは木下の号である。ただし、木下についての幼少期から青年期までの経歴については、実はこれまであまり明らかにされてきていない。木下の死後にその伝記として編纂された橘編（一九六七）によれば、木下家は木下藤吉郎に連なる家系であると最初にはつきり記されている。さらに同書によれば、木下は故郷の豊岡で漢学を学んだ後、一三歳になる一八七八年に上京し、東京大学予備門へ入学したものの病気のために中退した、といった学歴が記されている。しかし、これらの点については事実として確認できないことも多い。たとえば、橘編（同上）には東京大学予備門中退の理由を「病気の為め大学予備門中途退学」と記されているが、帝国美術学校にある木下の履歴書には「明治十三年 東京第一中学校卒業。同年 大学予備門二入学。家事上ノ都合ニヨリ右中退」と、「家事上」の都合と記されている（『帝国美術学校設立認可申請書』

「設立者木下成太郎履歴書」中「学業」、一九三六年九月一九日。「東京大学予備門入学者一覧」にも東京大学予備門への木下の入学記録は確認できないため、そもそも入学していない可能性もあると考えられている。

このように、木下の青年期までの経歴の詳細は判然としていないものの、東京遊学を経て北海道へ戻って以降、道会選が行われる以前の時期は札幌で新聞や雑誌の刊行事業に携わっており、一九〇〇年より厚岸町あつけし会議員をつとめたことなどは関係資料も複数残っており、事実として確認できる。そして、〇七年八月に釧路区から出馬し、第三回北海道会選挙で初当選を果たした。以来、年齢として三〇代後半の頃より衆議院議員として活動するようになった。

木下の政治活動と高等教育機関への関わり

北海道では、一九〇一年から衆議院議員選挙法が北海道に施行され、政友会支部が設置された。木下は〇七年八月に行われた三回目の道会選で初当選を果たすこととなった。さらに、一二年五月の総選挙において政友会所属として出馬し当選を果たし、衆議院議員となった。道会予算案審議中には教育振興について西欧化に批判的な姿勢を見せており、一二年一二月には閩族打破を訴える護憲運動が起ったことに連動して原敬らが幹部の山本権兵衛に反意を示して政友会を一時脱党したが、すぐに復党した。その後は一九一五年三月、一七年四月の総選挙で二度ほど落選したものの、二〇年五月の総選挙では議席を回復した。その間、一七年一二月から党北海道支部幹事長を三年、二一年一二月か

ら同支部長を八年にわたってつとめた。この頃、北海道支部において小川平吉とも交流をもっていることが確認される。

一方、同時期以降に大東文化協会および大東文化学院の創設に主体的に携わっていくこととなった。木下が政治家としての理念として西欧化に批判的であったことは前述した通りで、日本社会の西欧化を阻止したいと考えていたため、大東文化協会の設立理念にも強く共感したことは想像に難くない。そのうえで、漢学者たちの抱いていた漢学教育への理想、すなわち旧学問観に戻り維新以前の古くからある漢学者養成機関を建学したいとする構想、それをそのまま自分の意として受け入れ奔走し、尽力することとなったのである。さらにその後、大東文化学院で出会ったと思われる北吟吉からの依頼を受けて、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）の設立にも関与し、二つの高等教育機関の設立運営に関わることとなった。

2 大東文化協会の創設

「漢学振興二関スル建議案」提出

木下は大東文化学院の創設者の一人として、帝国議会衆議院委員会へ設立案を提出し、創設段階においてもっとも中心的役割を担ったと評されてきた。木下成太郎をはじめとする複数の政治家が大東文化学院創設のきっかけとなる「漢学振興二関スル建議案」を帝国議会へ提出したのは、一九二

一年のことであった。

ただし、それ以前に「木下成太郎氏は先ず東洋学芸の振興策に関して建言」したとするのが『大東文化大学五十年史』の記述であり、それによれば原敬内閣下の一九一八年のことであった。同書のこの既述は、大東文化学院創立一〇周年の際に編纂された『創立十周年 大東文化協会 大東文化学院創立沿革』（以下、『創立沿革』）と題された記念誌に掲載された文章を転用したものである。そして、この『創立沿革』は、木下成太郎が編集した『大東文化協会 第一回報告（本会設立ノ趣意）』（以下、『設立ノ趣意』）と題する冊子を底本として創立までの流れを辿ったものとなっている。

『設立ノ趣意』

『設立ノ趣意』は、一九二三年五月頃に発行されたものと推察されるが、奥付がなく、詳細は不明である。同年二月に発足した大東文化協会がその活動を公にするため、同年四月に華族会館において記者会見を開いており、そこで大木遠吉が行った「本会設立趣意演説」と題する演説内容を書きおとしたものを巻頭へ掲載している。大木は政府の認可を受けて追加予算を得て協会の運営が行われるようになったこと、その目的は日本の国民性を鑑み、改めて漢学の素養のある人材養成の必要性について述べたものであった。同誌は続けて木下が新聞記者らに対して行った、大東文化協会設立経緯についての説明文を載せている。ここで木下は大東文化協会の設立経過について、そもそも始まりを「大正七年のことであります」と述べており、この発言を根拠として、現在まで漢学振興の動きが始ま

つたとされるようになったと考えられる。ここでの木下は、世界大戦が終結した頃よりヨーロッパ文明は行き詰まりを感じており、国民を導くため「時ノ政友会ノ總裁原敬君ニ何等カノ方法ト云フモノヲ講ジナケレバナルマイ」と建言したものであったと述べている。時を同じくして東西の漢学界の重鎮たちが国を憂い、学問観の見直しを訴えるようになっていたため、両方に関与していた大木伯を通じて、学問と政治とが一体となって「大正十年ニナリマシテ之ヲ具体化」していき、漢学振興の建議案というものになっていったとする。

一方、『大東文化大学五十年史』は、一九一八（大正七）年に行われた木下の「建言」を契機として、貴衆両院議員や学者、実業家の間に「東洋学芸の振興」の思想が広まっていったと書いている。その後の建議案提出までの経緯については資料的な制約から不明な点も多いが、少なくとも上記したように『大東文化大学五十年史』は木下が大東文化協会の実質的な創設者であり、運営面や実務的にも中心的な役割を果たしたと評価している。建議案の説明を実質的に木下が行っており、名だたる漢学者や大臣経験のある大物政治家たちも名を連ねたなか、その中心となっていた木下は委員長となり、衆議院会議における趣旨説明を行い、積極的に大東文化学院創設に携わっていたのである。このときの記録を詳細に見ていくと、正確には木下が委員長として趣旨説明を行ったのは一九二三年三月の第四六回帝国議会における建議案のときであった。一九二一年三月の第四四回帝国議会においては戸水寛人と佐々木安五郎が趣旨説明を行っており、翌年三月の第四五回帝国議会では山本悌二郎が趣旨説明を行っている。

大東文化協会役員への就任

さて、これ以後の木下は、一九四二年一月に亡くなるまで、およそ二〇年にわたり大東文化協会および学院の運営に精力的に携わった。一九二三年一〇月の開校に先んじて用意された神田校舎内に事務所を置いていた大東文化協会は、同年九月一日に発生した関東大震災によって、神田の事務所を焼失してしまった。そのため、協会事務所を改めて九段に用意された大東文化学院校舎内に置くこととなった。九段校舎は木造二階建てで、土地が四〇〇坪、建坪にして四五〇坪ほどの小さな校舎であったが、建物の一階入り口すぐに学院事務室と協会事務室とが向かい合わせにあり、協会事務室の奥には協会役員室と学院総長室という配置がなされた。この協会役員室には、複数人いた協会理事のなかでも木下だけが連日のように通った姿が確認されており、協会および学院運営に尽力する日々を送っていた。のちに、北吟吉が帝国美術学校の設立資金の相談のために訪れたのも、この協会役員室である（第10章参照）。そして、その功績によって死去した際には「大東文化学院協会葬」が行われることとなった。協会葬が実施されたのは史上で木下ただ一人であり、戦時下で戦況も悪化し徐々に物資も不足するなかであったが、当時としては盛大な葬儀が執り行われた記録が残されている。

木下による建議案説明

草創期における大東文化協会役員には政界の著名な面々が多く、また学院の教育には著名な漢学者が名を連ねた。なお、牧野謙次郎をはじめとした名だたる漢学者たちが所属した斯文会、漢学振興会、

東洋文化学会が漢学振興のために内部で検討していた案が昇華した結果、東洋文化学会内で「東洋文化研究所第一期計画私案」が構想され、それを受けて、帝国議会衆議院委員会会議へ提出提案し説明したものが、「漢学振興ニ関スル建議案」であった。帝国議会への建議案の提出の前提として、漢学者の運動こそが大東文化学院創設の基盤となつて結実したと言えることは改めて指摘しておく必要がある。とはいえ、三度にわたる帝国議会への建議案の提出を重ね、最終的に委員長となり説明責任を負つた木下の果たした役割は大きい。

一九二三年三月六日の第四六回帝国議会衆議院会議において、「漢学振興ニ関スル建議案」の趣旨説明のための委員会は、委員長を木下とし、委員は山本悌二郎、戸水寛人、吉良元夫、山田永俊、荒川五郎、佐久間啓荘、小橋藻三衛、有森新吉であった。木下は、「世界文明ニ対スル貢献ハ漢学ノ振興ニアリ」とする漢学振興の趣旨説明に加え、前年までの二回の衆議院会議において可決された本案について追加予算措置がないことを指摘し、改めて「固有ノ国民思想」涵養のため漢学振興を図るべく、政府へ一〇年間に一七五万円の補助を要望するとした。その結果、一五〇万円の下付が決められたのであった。

なお、大東文化協会はこの三度目の建議案説明の直前、一九二三年二月に発足している。発足にあたり、その推進団体を設けて「協議会」と称する会議を重ねており、第一回協議会は二年四月一日に実施された。この会合には、近衛文麿、犬養毅、榎本武憲、奥繁三郎などのほか、後に大東文化協会初代会頭となる大木遠吉や、同初代副会頭となる小川平吉と江木千之といった政界の錚々たる顔ぶ

れが揃っており、会議に出席した二人のなかには木下成太郎の名前もあった。以降、この有識者会議ともいえる協議会は第五回まで行われたが、第二回はもともと参加人数が多く、牧野のほか川合孝太郎、池田四郎次郎、内田修平などの、のちに大東文化学院において教授として活躍する漢学者たちも多数参加している。この第二回のみ詳細に記録されたものが残されているが、他の四回については議事録が残されていない。第三回以降は日時と場所と参加者名の記録のみが残されているが、漢学者と政治家とが合同で協議を進めていったことがわかる。木下について見てみると、欠席は第四回のみで、積極的な姿勢で参加していたことがわかる。この五回にわたる会議の結果、大東文化協会の発足が決せられ、大木が会頭に、小川と江木が副会頭に就任することが承諾された。

3 大東文化学院の創設と木下の果たした役割

大東文化協会における役割

では、大東文化協会および学院において、木下はどのような位置でどのような役割を果たしたのだろうか。

木下は基本的には大東文化協会理事として、長く協会および学院の運営に尽力したのち、一九三七年一月より協会副会頭に就任した。松平頼寿の第六代会頭就任とともに行われた人事で、木下と酒井忠正とが副会頭に選ばれ就任した。実は、第四代会頭であった小川平吉が三〇年三月に辞して以降、

会頭は長く不在であった。大東文化協会は二七年九月より山本悌二郎を副会頭としていたが、山本が死去した三七年二月一日に便宜的に第四代会頭として指名し、同年二月二十七日にあらためて松平を会頭とすることとしたのである。学院紛擾から、井上の筆禍事件、小川の五私鉄疑獄事件と混乱があった協会はしばらく人事的な発令を行わなかったのではないかと推察されるが、この間の経緯については不詳である。いずれにしても、七年ほど行われていなかった協会の会頭就任人事にともない、木下は副会頭として名実ともに会のトップとなっていた。

やや煩雑となるが、以下、大東文化協会に関係する木下の役職などについて列挙しておこう。

一九二一年に行われた「第四十四回帝国議会衆議院会議」では、「東洋文化学会職員」であることが、東洋文化学会発行の『東洋文化学会公報』（一九二一年八月）に記載されている。

翌年の「第四十五回帝国議会衆議院会議」が行われた頃は、「東洋文化学会 京都講演会」には「衆議院側参加者」、「漢学振興ニ関スル協議会」には「代議士」、「第二回漢学振興ニ関スル協議会」には「東洋文華研究会世話人」、「衆議院議員」、「東洋文化学会職員」、「常議員・常務員」と、同じく東洋文化学会発行『東洋文化学会公報』第二号（一九二二年九月）に記載されている。

一九二二年三月にあらためて「漢学振興ニ関スル建議案」を提出した際には、「木下成太郎君外十三名提出」と木下の名が代表者名として記されていたことが「第四十五回帝国議会衆議院議事速記録第二十三号」『官報』号外（一九二二年三月）によって確認できる。

なお、上記の「東洋文化学会」とは初代会長を大隈重信とし、大正から昭和初期にかけて漢学振興

運動を背景に活動した団体であり、一九二二年二月頃にその一部が分離して「大東文化協会」設立の動きを見せ、さらに四三年には平沼騏一郎が大正初期に設立した「無窮会」へ吸収合併されていくこととなるもので、大東文化学院とは関係の深い学術団体である。

その後、大東文化協会の設立が本格的になると、木下は「大東文化協会 役員」（木下成太郎編『大東文化協会第一回報告』一九二三年）となり、「漢学振興二関スル第三次建議」では「提出者筆頭」や「漢学振興二関スル建議案委員長」（第四十六回帝國議會衆議院議事速記録第三十六号）「官報」号外、一九二三年三月、「大東文化協会 理事」（大東文化協会設立申請）中「本財団設立当時・役員予定表」、
 「大東文化協会維持員」「大東文化協会理事・庶務部長」（大正十二年十一月 大東文化協会事務所変更願）「大東文化協会設立申請 進達願」などといった肩書となっている。設立当初に大東文化協会役員として幹事、理事あるいは庶務部長を歴任していた木下が、大東文化協会副会頭となるのは、設立から一五年ほど経た一九三七年一二月のことであった。

学院生との交流

なお、大東文化協会の創設時より理事を長くつとめたこともあって、大東文化学院との関係も深かったと思われるが、教員ではなかったこともあって木下と学院生たちとの交流を示す資料はほとんど残されていない。のちに大東文化学園機関誌『大東文化』（一九七三年九月一日、「母校の半世紀」）において、金子昇（当時学園理事長）が在学中の思い出として、わずかながら木下との交流を回顧している

ので、紹介しておこう。剣道部に所属していた金子が道場で練習していると薩摩雄次と連れだつて木下が顔を出し、そのまま役員室に移動して剣道部の学院生らと宴会となつたというエピソードである。そのとき、木下がもともと唱えていた「西郷隆盛と月照の入水事件」の真相についての見解について金子は木下に反論し、本人に詰め寄つた。このとき木下は不快そうではあつたが金子に言い返すことはせず、静かにその場を去つたという。それから間もなくして、東北地方の冷害が深刻化し学院生たちは募金活動を行うことになつたが、やり過ぎて手元に食事代もなくなつてしまい、気まずいながらも金子が一人で代表して木下へ個人的な助成金をお願いにいくと、木下は何も言わずに一〇円紙幣を渡してくれた。それ以来、金子は「熱心な木下黨員」となつたという。一〇円は現在の価値に換算すると五〇〇〇円くらいであろうか。空腹の学院生たちにとって、木下の粋な計らいは心に残る出来事であつた。

学院紛擾と木下

大東文化学院の創設時、私学派教員が時の井上哲次郎総長との学問観の相違に異を唱え、学院紛擾を引き起こしていた。このとき、木下は会頭や総長といったポジションではなかつたものの、井上哲次郎の改革案を支持し、むしろ積極的に進めるよう進言したともいわれる。そのこともあつてか、私学派教員からはやや煙たがられる存在でもあつたようである。

紛擾は教員の人事問題へと発展し、教員たちの一部からは、木下はその騒動の「黒幕」「黒頭巾」

であるときさやかれていた。大東文化学院に起きた紛擾事件は、そもそも第二代総長井上哲次郎が提案し強行しようとした教員人事をはじめとした学院改革に端を発するものであった。しかし、実はその学院改革案は大東文化協会理事であった木下と井上との相談のうえで行われたものであるともされる。「私学派」とされた教授陣たちが発行した記録『大東文化学院紛擾の顛末』中の「大東文化学院紛擾の真相」によれば、そもそも井上哲次郎の「改革案」は、木下成太郎が大東文化学院教授であり教務部長を務めていた「私学派」牧野謙次郎が学院の会計財務一切を取り仕切っていることを不満に思っていたことから始まったものであるとする。つまり、井上哲次郎の「改革案」は、木下が理事をつとめる大東文化協会が、「私学派」教授陣たちの存在によって学院の実質的な財務管理ができないという事情を不服と考え、「官学派」の勢力を増すことを目的に起こしたものであったと述べているのである。

実際に木下が騒動の「黒幕」であったのかどうか、その真相は明らかではない。しかし木下が「黒幕」「黒頭巾」であると一部より見なされていたことは事実であり、注意しておく必要があるだろう。もつと言えば、実権を握ろうとする政治家たちに対し、漢学者たちが真っ向から対立していたという構図が学院内にはあり、そうした反目する存在が木下を協会会頭の位置に押し上げることを阻止する力となっていたかもしれない。ともかく、学院紛擾から筆禍事件にまで発展したことを受けて一九二六年一月一日に井上哲次郎は学院総長を辞することとなった。しかし、学院紛擾は井上の辞職だけでは収まらず、その後も教員人事が安定しない状態が続くこととなった。その長期にわたる不安定な

学内状況から学生による同盟休校がおきたのは、二二六年および二八年のことであった。木下自身も「私学派」側から学生を扇動し同盟休校を引き起こした「黒幕」は木下成太郎であるといった文書を発せられており、多少なりとも影響を受けているが、二八年一月に天津淳一郎が新総長に就任したことを機として紛擾は収まることとなった。木下はその翌年より帝国美術学校創設に関わるようになり、さらに三二年に行われた大東文化協会および学院創設十周年記念事業においては、その功労者として顕彰された。

4 木下と高等教育機関

木下宛て書簡

木下のもとに届けられた協会および学院からの書簡類が、いくつか現存している。一九三八年から四二年に死去するまでのものなので、初期のことはわからないが、副会頭となる直前から死去するまでのことをうかがうことができる。

残されている書簡のうちもつとも初期のものは一九三八年の大東文化学院からのもので、卒業予定者および進路の一覧を送付したものであった。三九年には大東文化学院教授であった加藤梅四郎から送られた、池袋校地への移転がほぼ決定したということ伝える内容の書簡が残されている。同書簡には、文部省からの補助金が待たれるがなかなか決まらない、とも書かれている。四〇年には弁護士柴原

義彦からの書簡があり、教授たちの古い考えが学院の欠点となつてゐるため辭職を願ひたいと書かれてゐる。私学派教授たちが学院へ戻つて一〇年ほど経つてゐた時期であるが、いまだ学問觀を巡る相違が内在してゐたことがうかがわれる。そして、私学派教授たちの進退についてのうかがいがなされてゐるのが木下であつたことにも注目しておかねばならないだろう。

木下が副会頭に就任して以降に届けられた書簡には、一九四一年一二月の土屋久泰からのものがある。校地を九段から池袋へと移転した年である。土屋は、教職員や学生たちの墮落を指摘し、情氣を一掃して緊張感をもつた学院教育を行いたいと述べてゐる。そのため、中山博道師範による剣道を重視した指導時間を設けるとともに、学生監による指導を強化していく旨が伝えられた。

帝国美術学校における木下の役割

一九二九年一〇月に設立認可を受けた帝国美術学校は、日本の美術教育に一石を投じるべく構想設立された教育機関である。「教養を有する美術家養成」という理念や創設関係者たちの思いからすれば、大学あるいは専門学校として創設されることが望まれたが、設立母体の資金問題が解決されず財団法人の設置がかなわなかつたことにより、私立各種学校としてのスタートとなつた。その初代校主に就任したのが、木下成太郎であつた。

帝国美術学校の設立構想をとなえた中心人物は、小池新二、今井兼次、大宮健太郎、金原省吾、名取堯の五人であつた。彼らは美術学校設立のための資金繰りに関わり、北畠吉など何人かの知識人ら

に話を持ちかけ相談する。北吟吉は金原省吾の早稲田大学時代の恩師に当たる。相談を受けた北は自身も設立に積極的に携わることになると同時に、さらに北がもと大東文化学院の教授を務めていた縁から、大東文化協会の理事であった木下成太郎を紹介した。北は直接大東文化協会役員室へ出向き説明を行うと木下はその場でその話を快諾したといわれており、北とともに帝國美術学校創設に深く関わるようになっていく。校地校舎やその他資金を工面し、実質的な学校設立功労者となった北は「校長」となり、木下は「校主」となったが、次第に北と学校側との間には溝が生じるようになった。

一九三四年頃には学生たちからも北を排除して専門学校昇格を望む声があがるようになった。設立後五年がたっても財団法人設立の目処が立たず専門学校昇格問題が進展しない中、三五年五月には学生たちによる同盟休校が起こり北校長の退陣が要求された。同時に学生や卒業生らは木下に宛てて協力を要請する。設立時に準備した資金についてはすでに学校側から返還されていた木下であったが、要請に対してすぐさま北の更迭を支持し、自身が校長に就任する。その後帝國美術学校と北との間の諍いは土地問題を中心としながら長く続くこととなるが、対して木下は校長としての責務を全うしていく。すなわち、美術学校設立を提案した五人を中心として学校内の教育内容を立て直し、学校経営の安定を図ったのである。このように見ていけば帝國美術学校にとって、その創設や発展に多分に寄与したと言える木下の存在が大きいものであったことは、異論のないところであろう。結果的に帝國美術学校の「敵」としての位置に置かれることとなっていく北との対比といった意味においても、木下の存在意義は明らかにすべき点が多い。

この帝国美術学校の例を見ても、また大東文化学院の草創期を振り返ってみても、木下の存在がその創設と発展とに深く関与していたという点は共通事実である。一九四二年に亡くなるまで、帝国美術学校と大東文化協会という二つの高等教育機関での活動が木下の公的活動の中心となっていることから見ても、高等教育機関の運営に情熱を傾けた人人生であったといつてよいだろう。

なお、その後の帝国美術学校では、北校長退任を求める反北派から請われた木下はそれを承諾し同年校長に就任、校長を解任された北は多摩帝国美術学校を設立し名誉校長となった。さらに北は帝国美術学校の敷地校舎を自身の財産として主張、学校側は返還を求めて裁判となり、この争いは戦時中も続いた。一方、校長となった木下が在籍した時期の帝国美術学校は優れた教員陣を招き、新たに自由な校風のもとで教育が行われ、さらなる発展を遂げていく。帝国美術学校時代において専門学校への昇格申請が認可されることは最後までなかったが、その申請段階において木下は財団法人の理事長兼評議員となり、専門学校設立を積極的に目指したのであった。

木下の高等教育構想

木下は既存の大学をどのように見て、何を問題と考えていたのだろうか。

大東文化学院創設二〇周年記念事業を実施した一九四二年九月、『月刊大東文化 創立二十周年記念号』が発行された。その内容は主として大東文化学院の軌跡を回顧し沿革を縷々述べたものであったが、巻末には「木下斗南翁頌徳碑並壽像除幕式祝辞」が掲載されている。これは朝倉文夫が手掛け

た木下成太郎像の除幕式が実施されたことを記したもので、一九四一年八月一〇日に北海道札幌市にある現在の中島公園において行われた。

そこには木下による「所感五題」として、一九四二年一月に札幌グランドホテルで行われた木下の年頭挨拶の速記録が収録されている。

そのなかで第一に「現代教育の弊」として、自由主義の弊害が語られている。そして「生産の拡充」「思想問題」「教学の刷新」「官民協力」と続けられる。とくに「教学の刷新」では、「天皇機関説の排撃」に

関連して「日本学の講座を帝国大学に設けなければならぬといふ事を主張致しました」としている。「それが容れられて東京帝国大学には、

日本学の講座を設けることになっているにも拘らず、実際には今日に

至るまでそれが開かれて居りませぬ」と述べ、「日本学」とは科学的に組み立てたものではない「複雑難解」な「総合的」なもののため、教える教授がいらないからであるとした。木下が「日本学」が「漸く蘇る道程にいる」と考えていた同時期、とくに民間の議論を盛んにして国論として国政を動かしていくべきだと主張したのであった。

そのような思想による活動を行っていたなか、一九四二年一月一三日に急性肺炎により木下は死去し、位記追賜により木下は従五位に叙された。叙位裁可書の調書中には「教学の根本的刷新を強調して皇道に醇化せる教学の復興を完成して人材の養成に努め終始一貫国体観念の明徴に盡瘁し其の提



中島公園木下成太郎像

唱に係れる大東文化学院の如きは皇道精神の昂揚に叙すところ頗る大なるものあるは世の周知する所たり」と記されている。また、名取堯は橋編（一九六七）の「序」中において、帝国美術学校創設に携わった木下について、「先生がこの学園の創立に多くの力を注がれたのは事業欲というようなこととは全く異なる。先生がその頃のわが国思想の低下の方向に対する対策は教育にありとすお考えからすでに大東文化学院（今日の大東文化学院^{（イマ）}）の創設、その教育に力を注いでいられたと同じ精神で、芸術教育による国民精神の振興ということに深い関心をよせられ、若い私たちの企画に賛成され、当時芸術界の最高スタッフの力を集めて多くの物質的犠牲の上に開始されたもので、本学今日の繁栄はその根幹の培養の深さにあるといわなくてはならぬ」と述べている。木下は二つの高等教育機関の創設に主体的に携わり、ともに代えがたい役割を果たしたのであり、その人生を通じてあくまで教育問題、思想問題、教学刷新に尽力した人であった。

前述したように、帝国美術学校の創設準備段階において資金繰りにより財団法人設立もままならず、専門学校としての発足を諦め各種学校としての創設を余儀なくされたにもかかわらず、木下はひるまずに「大学」としての構想を語っていた。実は大東文化学院創設にあたって木下はその経緯のなかで、当初は大学創設の提案を行っていた。大東文化協会の創設段階において、付設教育機関の設立について検討を重ねていた際、「漢学者養成ノ道ヲ講シ追ツテ東洋文化ヲ中心トセル大学ヲ設立スルコト」と謳い、大学の設立を目指していたのである。種々の事情が重なって結果的に大東文化学院は専門学校としての設立となるが、「大学」に並びうる高等教育機関を創設した経験が、内々にせよ帝国美術

学校創設構想の段階で「大学組織たらしめん」と語る背景へと繋がっていったのかもしれない。大東文化学院創設間もないころ、木下は「現代の高等学校、大学より年々輩出する『部分人』を『全人』とせねばならぬ。漢学は実にこの全人を作る教育である」（『大東文化』第三卷三号、大正二五年三月）と語っている。木下にとって「全人」を育成するための「漢学」を教える大東文化学院の創設は、すなわち「大学」創設に限りなく同義のように考えていたことがわかる一節である。

参考文献

- 橋文七編（一九六七）『木下成太郎先生伝』木下成太郎先生伝刊行会、みやま書房
 山下龍門（一九三五）『北海の太閤 木下斗南』木下成太郎氏伝記刊行会
 浅沼薫奈（二〇一四）『木下成太郎と高等教育機関設立構想』（高橋陽一共同研究者代表『武蔵野美術大学を造った人びと』武蔵野美術大学出版局）
 古川隆久（二〇〇四）『政治家の生き方』文春新書
 大東文化大学（一九七三）『大東文化大学五十年史』
 大東文化協会・大東文化学院（一九三三）『創立十周年 大東文化協会 大東文化学院 創立沿革』
 大東文化協会・大東文化学院志道会編集部（一九三三）『創立十周年記念号』
 大東文化協会（一九四二）『月刊大東文化 創立二十周年記念号』

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、二〇一九年より、木下の故郷である北海道において主に発見された書簡などの木下成太郎関係資料約二〇〇点を所蔵している。



第4章

小川平吉

大東文化協会初代副会頭・第四代会頭

一八六九年、長野県に生まれる。小川平吉は、明治期から昭和前期にかけて活躍した政党政治家である。鉄道大臣や司法大臣などを歴任した。郷土である長野県諏訪郡を中心に、日本各地の鉄道敷設を行っており、とくに私鉄路線開発を一気に進めたことで知られる。一方、生涯を通じて日露関係や日中問題など対外関係への関心が高く、日中和平交渉問題に強い影響力を有した大物政治家であった。大正期に大東文化協会初代副会頭に就任したが、こちらは政治的な関与というよりは、個人的な学問的関心によるところが大きかったといえる。一九四二年没。

1 中国文化への関心と法律家・政治家としての生涯

漢学への関心と二三歳の立志

小川平吉は、一八六九年二月一日、長野県諏訪郡富士見村御射山神戸みさやまごうべに、呉服商の父小川金蔵、母あい子の八人兄弟の三男として生まれた。号の「射山」は、故郷の地名にちなんだものである。小川家はこの地方の名家であり、平吉の兄たちも学問への関心が高く、理解があつた。東京で漢学を修養し帰郷した長兄の忠作から、幼少期に経学を学んだという。

小川は、幼い頃より頭脳明晰で神童とよばれたが、その反面、直情的で衝動をおさえられない激情型の性格も持ち合わせていた。小学校卒業と同時に小学校助教となつたが、学問を志す気持ちに駆られ家人に黙つて家を出て、徒歩で東京を目指した。このときは、士官学校へ入り軍人となるといった、当時の定型の「立身出世」コースを夢に描いていたという。その途中、小淵沢までたどり着いたところを家人によつて発見され家に連れ戻されたものの、弟平吉の進学への熱意に負けた長兄によつて、一三歳での上京が許されることとなつた。

上京後は、あらためて自身の興味関心から、明治法律学校（現・明治大学）を経て東京大学文学部付属古典講習科に一旦入学するも、長兄たちから漢学者への道を反対され、やむなく中退した。この時期の小川の愛読書は、長兄からも手ほどきをうけた、四書や春秋等といった経書が主であつた。この頃ごく短期間であるが、小永井小舟の漢学塾「濠西精舎」にも学び、個人的に好んだ漢学の素養を

身に付けていった。また、漢学塾において友人として出会った荒井図南の影響を受けたこともあり、同時期より大陸問題への関心を高めていった。いずれにせよ、家人らの反対により諦めたものの、小川の生涯を通じて中国文化への興味関心、さらに漢学への情熱、高い儒学的教養が貫かれていることは明らかである。

司法省法学校から帝国大学へ進学

父兄から官吏となることを期待された小川は、当時まだ一四歳となる直前であったが、入学年齢一六歳以上と定められていた司法省法学校（予科は一八八五年に「大学予備門」へ合併され一八八九年に「第一高等中学校」となり、本科は東京大学法学部へ統合された。）の入学試験を、年齢を偽って受けた結果、一八八四年に入学を果たした。司法省法学校では、教養科目も含めほとんどの授業がフランス語で行われていたが、本人いわく学業成績としては何の問題もなかったといい、優秀な成績で一八八九年に帝国大学法科大学仏法科（現・東京大学法学部）へと進学した。ギユスターヴ・エミール・ポアソナードによるフランス法学が主流であった時期で、大学においても引き続き、授業のほとんどがフランス語であった。ただし、のちに述懐したところによれば、大学在学中は法学よりは、むしろ政治学への興味関心を高めていったという。

帝大卒の代言人

一八九二年に帝国大学を卒業すると、小川は代言人（翌年より弁護士法が施行され弁護士と称することとなる）となる道を選んだ。当時の日本社会では代言人の数そのものが少なく、また、帝国大学を卒業した「学士」のほとんどは官吏となるのが常であったなか、法学士が代言人となるのはさらに稀なことであり、小川が代言人となったことは世間を驚かせ、毎日新聞などの記者が取材にきて記事にしたという。弁護士となった小川は、一八九七年に日本弁護士協会を組織し、積極的に司法の革新を目指し、一九一八年には東京弁護士会会長に就任した。弁護士としての活動期間を通じ、決して高給取りではなかったうえに、小川は頼まれたものは断らない性格であったから、大学時代の友人たちの多額の借金の連帯保証人となっていたことで、その取り立てに追われる毎日、当時の生活は困窮を極めていた。

一方、結婚を経て、弁護士時代の小川の関心事は日中問題へと向かうこととなった。当時、東亞同文会の結成にも参与しており、以降は中国事情を知る第一人者となっていく。同時に、新聞『日本』の後継として、北吟吉と『日本新聞』再発行を一九二五年に行っており、日本主義、国粹主義的な思想を強めていくこととなった。なお、小川と北とは、同時期に大東文化協会および学院運営の活動とともにしている。

政治家への転身

弁護士としての活動の一方で、政界への進出への足掛かりとして、一九〇〇年の立憲政友会の成立とともに入党し、〇三年三月に行われた第八回衆議院議員総選挙において長野県から出馬し、初当選を果たした。以降一〇回の当選をほこるが、なかでも選挙演説の巧みさには定評があり、とくに天下国家をわかりやすく豪快に論じる姿勢に支持が集まり、票が伸びたとされる。立憲政友会については、政友会革新運動をおこなって脱党することとなったが、〇九年一〇月の伊藤博文の死去後に復党し、五年に政友会幹事長となった。なお、〇五年九月五日に日比谷焼討事件がおきているが、この暴動事件の決起集会の中心には河野広中とともに五人組の一人として小川の姿もあった。小川も河野とともに、民衆を扇動したとして投獄され兇徒聚衆罪に問われたが、無罪判決を受けている。

一九二〇年、原敬内閣のもとで国勢院総裁となるも、二二年六月の高橋是清内閣の総辞職にともない国勢院総裁を辞任した。その後、二五年の第一次加藤高明内閣（護憲三派内閣）で司法大臣、二七年の田中義一内閣において鉄道大臣に就任した。しかし、この鉄道大臣をつとめた田中内閣時におきた五私鉄疑獄事件に連座し、政治生命が断たれることとなった。

五私鉄疑獄事件から公職辞任へ

五私鉄疑獄事件とは、当時の鉄道大臣であった小川平吉より便宜を図られたとされる五つの私鉄事業者である、北海道鉄道、伊勢電気鉄道、東大阪電気鉄道、奈良電気鉄道、博多湾鉄道汽船が、それ

ぞれ横領や賄賂を行ったとする収賄事件である。これらの私鉄に対し、営業不振による国営移管や、路線延伸などの免許交付について鉄道大臣であった小川が便宜を図っているが、その見返りとして各社からの数十万円のやりとりの有無が疑惑の対象となった。とくに、国鉄や他社線との平行路線を次々に認めたことから、とかく地元でも収賄の噂がたつようになったとされる。ただし、田中内閣総辞職後の一九二九年八月頃より同疑惑が取りざたされるようになったことから、小川を失脚させるべく画策されたものであったとの見方も今に至るまでなされている。裁判は、三〇年から三三年にかけて行われた。東京地裁の公判ではいったん無罪判決となったが、世論が納得しなかったことから検事側が控訴に踏み切り、翌年一月の東京控訴院判決で一転して有罪判決となった。これにより、小川は懲役二年、追徴金一九万二千円の刑に処せられた。この事件によって小川の政治権力は失われ、位階も剥奪されたが、自身の影響力は強固な縁戚関係により、子や孫へと引き継がれていった。私生活では一〇人の子どもに恵まれており、一族には政財界の著名人が多く、元首相の宮澤喜一も平吉の孫の一人（次女ことの子）である。また、大東文化協会会頭の職も、この有罪判決により辞任することとなった。

小川は、国粹主義者として広く知られた人物であった。二〇世紀に入る頃から大陸問題や東亜問題に関心を示すようになったことは前述の通りであるが、国内における「思想問題」の解決にも関心を抱き、政界引退後も内外の政策についてさらに活発な活動を続けた。とくに満州問題や対ソ強硬論を主張しており、大陸積極政策を唱えた。しかし、日中戦争開始に際しては蒋介石との直接和平交渉の必要を主張し、軍部にも働きかけるなど和平工作に奔走した一面も見せている。それらは結局成功す

ることはなかったが、国粹主義者としての立場から、統制経済・三国同盟・日米開戦にも強い反対姿勢を貫いたことは特筆すべき点であろう。

一九四二年二月五日に七二歳で死去した際、葬儀委員長は民間右翼の大物であった頭山満がつとめている。

2 小川平吉と大東文化協会の創設

大陸問題への関心

小川平吉は、大東文化協会の創設および発展にもっとも深くかつ積極的にかかわったメンバーの一人である。国粹主義者であり、大陸問題に強い関心を持って大陸政策を進め、江湖倶楽部という団体を組織し、東亜同文会の幹事（のちに幹事長）をつとめた。とくに明治三〇年代に日本人の「思想問題」に関心をひろげていくなかで、大東文化学院創設に携わるようになった。一九三三年二月に大東文化協会を創設すると、自身は副会頭に就任し、初代会頭にはやはり国粹主義者として知られた大木達吉を迎えた。

東亜同文会が功勞者についてまとめた『統対支回顧録』は、小川について「皇道に醇化したる儒教振興の目的を以て同十二年の初め同志と謀り政府の補助を仰いで、大東文化協会並に大東文化学院を創立し、その副会頭となり後更に会頭となった」と記している。後述するように、大東文化学院創設

直後、学院の教育方針や運営をめぐって方向性を見出せずにいた時期、混乱のなかで首脳陣の人事変更が何度も繰り返され、協会副会頭の小川のもとには、広く教授陣や学生たちから陳情書が届けられ、学院の在り様について模索が続けられた。そういった問題打開に尽力した小川が大東文化協会第四代会頭に就任したのは、一九二八年二月のことであった。おりしも大東文化学院紛擾による混乱がおさまりを見せた直後のことであったが、前述の「五私鉄疑獄事件」に連座収監されたことにともない、三〇年三月、会頭を辞することとなったのである。

小川の儒学思想

小川の儒学への興味関心は幼少期より培われ、生涯を通じ一貫して保たれた。関連して、大東文化協会の発行する複数の雑誌や新聞に寄せた論稿のなかから、その内容を確認してみよう。雑誌『大東文化』創刊号（第一巻第一号、一九二四年三月）に寄せられた「物質主義の行詰りと儒教（一）」には、「人類社会に生ずる種々の現象はすべて人類思想の発露であることはいふ迄もない」とし、次のように論説が展開されている。

十九世紀は物質主義の旺盛を極はめたる時代である、かの燦爛として光輝を放ち世界の歴史に一新紀元を割したる——欧州の文明、かの驚くべき学芸の進歩、器械の発明、産業の革命、財富の蓄積、之れ等のものは人類の思想に如何なる影響を及ぼしたるか、大体に於て物質主義の傾向

をして益々甚しからしめた観もある。特にかの功利主義の哲学と現実主義の文芸とは、欧人本来の個人主義利己主義の観念と相融合して、ますます唯物的思想を増長せしめ、加ふるに進化論の勃興するありて適者生存の原則確立せらるるに及び、優勝劣敗を以て人生の常時なりと観念するに至り、力を貴ぶの思想と共に靈を軽んずるの傾向を生じた、特に物質研究の驚くべき進歩と共に、物質尊重の念は益々勃興し、利益争奪の観念は人類を風靡して、仁愛正義を軽視するに至り、貴賤貧富を挙げて唯だ物に維れ殉ずるの風を馴到するに至った。

このような考えを機関誌『大東文化』へと投げかけた小川は、一九世紀には政治、経済、文芸に至る各方面において「物質主義文明」が構成され、蔓延していったと説く。そしてまた、国家も利益思想にとらわれ、大国や強国が小国を兼併し、他国を奪うことを繰り返している。しかし、人類が希求する「真の平和」を実現する国家の王道は、仁愛と正義とにある。国家が利益主義、個人主義にとらわれ、法律をもつてその権利を強行すれば、その犠牲となつた者たちは法律や国家を怨むこととなる。弱肉強食、優勝劣敗の繰り返しによる「物質主義」による社会と文明の発展は、もはや行き詰まりである。このように持論を展開した小川は、経済や科学の進歩において物質主義の果たした貢献はあつたが、それに囚われ、政治、文芸、思想、人類そのものが物質主義に墮ちることは戦争、闘争を生むものであると続ける。

小川は血気盛んな政治家として知られた一方で、一貫して戦争に反対する姿勢を見せており、とく

に日中戦争の開始へは強い反対の意思を示し、慎重になるべきとの意見をもっていた。大正末期に寄せたこの論稿は、小川の反戦的思想と国家論を端的にあらわしたものである。小川は同稿のなかで、その思想を「理想主義」と表しているが、国家の道德観によってはじめて平和は保たれると考えた小川の根底に流れる倫理観はすなわち、儒教思想であった。

3 大東文化学院同盟休校と小川平吉

学院紛擾

大東文化学院紛擾が起きた際、基本的に協会側は官学派についており、井上哲次郎の改革案を支持する立場にあった。一方で、副会長であった小川平吉についてみれば、このとき積極的な発言を行っているわけでもなく、当時この紛擾事件をどのように考え、捉えていたのか明らかではない。ただし、のちに学院紛擾の余波ともいえる「同盟休校」が学院生によって引き起こされた際、学院生たちから小川へ宛てた書簡類が複数通残されており、それが官学派と私学派と立場を異にする双方からほぼ同時期に届けられていることから、官学派と私学派との和解へ導くための、中立的な采配を振るつてくれるであろうという大きな期待が寄せられていたことがわかる。また、後述するように、協会および学院関係者たちからの小川宛ての書簡類も多く確認されており、学院紛擾の詳細を知るうえでも貴重な資料となっている。

第5章で詳述されるように、大東文化学院第二代総長に就任した井上哲次郎は筆禍事件の広がりを防ぐという理由により、一九二六年一〇月一日、大東文化学院総長を含む公職をすべて辞任した。しかし、その後も大東文化学院内は総長を含む首脳陣の人事が定まらず、不安定な時期が長く続くととなった。

五総務制の導入

大東文化学院は、一九二六年一〇月二三日より大嶋健一を総長事務取扱とし、学生の混乱した事態を收拾しようとしたが、大嶋が改革案の首唱者の一人であったことからうまく収まらず、代わって中立的立場を通じた鵜澤總明が翌年六月二〇日に総長事務取扱に就任した。鵜澤は、同年九月一七日総長制を廃して自ら辞任することとし、「五総務制による事務取扱制度」を導入するという方針をとった。「五総務制」とは、小川平吉、平沼騏一郎、鈴木喜三郎、山本悌二郎、鵜澤總明の五人によって学院運営にあたるとしたものであった。

あらためて中立的立場を堅持した人選であり、小川はその筆頭にあつた。しかし、この方法もうまく学院に馴染むことはなく、具体的な解決策を提示することはできず、同年一月三〇日にはふたたび鵜澤が総長に就任することとなった。このとき鵜澤は、総長に再就任するにあたって条件を提示し、退職教授および退学学生の復職復学を認めること、それと同時に官私間の合同融和をはかることを改善策として講じた。それ以降、翌年末にかけて事態は収束へと向かうこととなった。(鵜澤の略歴等に

つについては、コラム2を参照)。

同盟休校の発生

一九二六年六月と二八年七月との二度にわたって、教員間の争いと不安定な学院人事及び運営の余波を受け、学院生たちによる同盟休校が起きた。教員間の学問観の相違による争いが波及する形で退学を命じられる、あるいは自主的に退学するといった学院生が続出する混乱状態となっており、学院内の経営体制も不安定な状況が長く続いていたことも、同盟休校が起きた直接的な起因であった。

最初の同盟休校は、井上哲次郎が総長に在任していた時期に起きたものであり、「改革案」に反対した学生が中心となって起こしたものであった。学生の挙動に関しては「九分九里までは総長の精神に共鳴同感してをつた」「学生中に僅か三名ばかり異論を唱へたものもあるが、其の他は悉く一致の態度を執り、宣言書を發表したのである、其の中に『今回本学院内に起りたる意外の事件に対しては慎重審議の結果、断じて軽挙妄動を慎み、本学院学生たるの体面を汚すが如きことなき様相戒め、専ら現総長の時局を收拾して速に平静に帰せしめらるることを切望する外余念無之候』とあつて、下に大東文化学院学生一同とある」(井上哲次郎『大東文化学院改革の真相』、六一―四頁)と、自分を支持した学生がほとんどであり、早急な解決を学生から望まれていたと井上は振り返るにとどまっている。たとえば、一九二八年一〇月一八日に井上宛てに出された学生(川浦玄智)からの書簡を見ると、二度目の同盟休校があった同年九月七日を以って退学を命じられたが、当初より井上を尊敬し今もその方針

を支持しているといった内容の書簡が残されている。

このとき、大東文化協会副会頭小川平吉へ宛てた、「大東文化学院学生一同」からの複数の書簡や「懇願書」なども残されている。その内容から、協会および「官学派」を支持していた者が多くいたことが確認できる。しかし、その一方では「私学派」を支持した学生らが出した書簡や「陳情書」も同様に小川へ届けられていた。

学院生たちからの書簡

前述したように、二度目の同盟休校が起きたのは一度目から約二年を経た頃であった。再度起きた同盟休校は、学生の一部は授業に出席せず、講堂を占拠して集会活動を行うなど授業不能の状況となった学院のなかで、一部の学院幹部と官学派の学生とが中心となって同盟休校が実行されたものであった。このときにも大東文化学院学生や同卒業生たちから小川平吉へ複数の書簡が届けられており、一九二八年六月から同年九月にかけてだけ見ても計六通を数える。

さて、一九二八年九月二日に小川に宛てられた「陳情書」と記された学生からの訴えには、「官私学ノ大同団結ノ実現」を切望する旨が切々と述べられ、①今後は学生監を設けて無謀なる画策を行うこと、②退学させられた学生らのうち上野及び相良を講師、教務主任心得、学生監督課主任心得といった要職に置くこと、③井上哲次郎総長就任時において退学を命じられた複数の学生を復学させること、④学院及び総長は学生を裏切り新聞社に自己の都合の良い点だけを伝え情報を提供したこと、⑤鷗澤

総長は八月中に新組織を編制するとしたにも関わらず現在まで全く着手しておらず、これも学生の期待を裏切っていること、⑥そもそも学院紛擾は教員間の問題であるにもかかわらず学生の割に及ぶ二〇名を退学・無期限停学処分にしたことはおかしいのではないかと、といった六点を挙げ、学生同盟休校は「愛校精神の発露」の結果として起きたものであり、小川理事より鶴澤総長に善処の進言をすることを求める、と書かれている。ちなみに、ここに記されている上野および相良とは、高等科一期生の上野賢知と相良政雄のことであり、「私学派」教員を支持して最初に起きた同盟休校の責任をとって退学を命じられた学生であった。(コラム3参照)。

一方、同年九月二五日には現在まで多くの学生を処分したのは「私学派」であり、それら教員の責任を追究することを要求する、とした「私学派」教員を非難する内容の大東文化学院卒業生一同からの書簡も小川へ宛てて届けられている。ここで指摘されていた「私学派」教員というのは、松平康國、佐藤仁之助、池田四郎二郎、今井彦三郎などであった。また、同年九月二六日付「懇願書」には「学院総長ヲ新ニ確定セラレタキ」とあり、上野と相良とを復学させた鶴澤総長の解任を要求する旨が記されている。

以上のように、小川平吉に届けられた書簡からは、協会側および「官学派」側ばかりではなく、実際には学生間が分裂していた様が見取れる。他方、どちらにも共通して見られるのは、「大同団結」「官私合同」といった言葉であった。すなわち、どちらを支持するにせよ、学生にとっては官私間が共同して学院の教育にあたることを求めているという事実が前提にあったことが窺われるのである。

いずれにせよ、学院生たちにとって、小川は常に中立的立場で公平に状況をとらえているという信頼を寄せていたことがわかる。

木下成太郎と三塩熊太

さて、二度目の同盟休校が起こる直前のこと、六月二二日に大東文化協会理事木下成太郎が大東文化協会を通し小川平吉宛てに送った書簡には、「学院学生今回ノ行為は当然ノコトト認ムコノ際学生ノ要求全部ヲ入シ学院乗取策ヲ陰謀セル一派ヲ一掃セラレンコトヲ望ム」とあり、学生の要求を呑んだ学院運営が望まれるとしている。それに対し、同日に「私学派」一二名が小川平吉宛てに送った書簡中には、「其の教師たると生徒たるとを問はず断然たる処置を為して憚る所あるべからず」「たとひ学生の退学するもの半数又は全部に至り候とも顧るべきにあらず」などと述べられており、「私学派」は「官私合同」が望まれるとしつつも、大東文化学院の目的遂行にあたって幾人かの学生処分も致し方ないとの考え方を持っていたことがわかる。

「私学派」の急先鋒の一人であった三塩熊太は、同盟休校の事態に際しても多くの意見を発信しているが、特に、「大東文化学院学生同盟休校に就いて敢て天下公明の諸公に訴ふ」と題した論稿では、「学院の学生間に不穩の行動あるを聞くは、誠に苦々しき事なり」とし、あくまで「私学派」の立場からではあるが、こうした官私教員間の争いが学生にも波及し同盟休校まで起きた経緯について詳細を記している。

そこには、直接の原因は、退学処分された「私学派」学生の上野および相良を鵜澤総長が起用したことに對して、「官学派」学生として井上哲次郎総長を支持したことにより助教採用に採用されていた、近藤と内藤という学生二人が、自己の立場を不安に思ったことから反対運動を起こしたことによるものである、と述べている。この近藤および内藤を支持した官学派の学生は、一九二八年六月十八日付「決議」を発表し、——(一) 川田瑞穂氏ノ即時自決ヲ期ス、(二) 上野相良両氏任命ノ取消ヲ期ス、(三) 近藤内藤両教授ノ留任ヲ期ス——とした三点を、「大東文化学院学生大会」の同意として発表した。三塩は、これらの学生を煽動した教員として北吟吉や田中逸平の名をあげ、さらに協会幹部や教員の「黒頭巾」として、木下成太郎、市村瓊次郎、塩谷温の名をあげた。なお、川田瑞穂は井上哲次郎総長時代に「私学派」教員として排斥辞任となっていたところ、鵜澤聰明が総長に就任するにあたり上野・相良と同様に呼び戻されており、教授兼学生監に就任した人物であった。このように三塩の記録からは、教員の復職や学生の復学の問題によって、さらに両者の主張が激しくぶつかり合うようになっていった様子が窺われる。

そのほか、北吟吉と田中逸平からは、大東文化協会総務の五人宛てとして、一九二八年六月二十六日付で書簡が送られている。このうち、小川へ宛てたものが残されており、それによれば、「退学を命ぜし学生相良、上野の二君に對し、先般鵜澤総長の名を以て其の処分を取り消し、更に学院の要職に就かしたるは、当時の全教授講師の面上に泥を塗れるもの」であると訴え、これら紛擾全体の責任をとって総務五人全員の辞職と謝罪とを求めるとする内容が記されている。

こういった官私間の争いが続くなか、同年七月七日、学院は「本院学生ニシテ本学院又ハ教職員若クハ学生ニ対シ自今学生大会又ハ類似ノ名ヲ以テ行動スルコトヲ禁止ス」とした告示を発表し、教授兼教頭であつた安井小太郎のほか、川田瑞穂、上野賢知、相良政雄の「私学派」四人および近藤李、内藤政太郎の「官学派」二人を解職処分することとし、直後の七月一〇日にその旨を文書掲示によつて学院内に周知した。この処分に対して不満を抱いた協会および「官学派」学生らは同盟休校を起すに至つたのであり、また、その様子は「六教授の解職から大東文化学院の大騒動」(『読売新聞』一九二八年七月二三日)などとして新聞各紙によつて報じられることとなつた。大東文化学院紛擾は、この同盟休校から約半年後に完全に沈静化したとされる。一九二八年一二月、大東文化協会の新会頭に小川平吉、大東文化学院の新総長に天津淳一郎が就任したことで、関係者一同が納得し、長く続いた学院紛擾はやつと終結することとなつたのである。

参考文献

- 小川平吉(一九四二)『射山詩史』日本新聞社
- 対支功労者伝記編纂会(一九四二)『統対支回顧録』(上、下)東亜同文会
- 小川平吉文書研究会編(一九七三)『小川平吉関係文書』(一、二)みすず書房(第一巻に、伊藤隆「小川平吉小伝並びに主要文書解題」所収)
- 小宮一夫(二〇〇五)『小川平吉』(伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典2』吉川弘文館に所収)

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、二〇〇九年に小川家より寄贈された小川平吉関係資料約一〇〇点を所蔵している。なお、小川平吉の生家や別荘「帰去来荘」に残されていた資料のほとんどは、整理された後に国立国会図書館憲政資料室へ移管され、現在は「小川平吉関係文書」として閲覧公開されている。その内容は多彩であり、大部分が書簡と書類で、とくに政友会関係資料が充実している。書簡には大東文化学院創設前後に取り交わされたものも多く含まれている。書類中には中国・ソ連といった大陸問題（大陸積極策）に関する対外政策についての草稿や原稿の類が多い。



第5章

第二代総長

井上哲次郎

一八五六年、現在の福岡県に生まれる。井上哲次郎といえは、教育勅語に哲学的意義を与え、帝国大学文科大学において日本人初の哲学科教授となった人物である。その功績は大きく、戦前期における哲学界の巨星であった。しかし、帝大を定年退官した後、晩年には社会を大きく揺るがす筆禍事件を引き起こし、一時的に公職を辞すまでに追い込まれることになった。当時、井上哲次郎は大東文化学院第二代総長であった。総長在任中に発案した「学院改革案」をきっかけとして学院内に紛擾が巻き起こることとなったが、この学院紛擾が実は筆禍事件の契機となったともいわれている。一九四四年没。

1 東西哲学界の巨星

儒学思想との出会い

井上哲次郎は、一八五六年二月に筑前国御笠郡大宰府（現・福岡県太宰府市）に生まれ、巽軒さげんと号した。父は医師の船越俊英で、教育にも熱心な家系であった。父俊英が富田家を継ぐこととなったため、青年期まで哲次郎も富田姓であった。

哲次郎が幼少期を過ごしたのは、大宰府と甘木であった。幕末の頃であり、基本的な教養は『論語』『大学』『詩経』『書経』など四書五経を中心とした漢学であったが、哲次郎は大宰府の儒学者中村徳山のもとですぐさま才覚を発揮し一通りの学問を修め、儒学思想に精通するようになった。また、明治維新後には長崎の英学塾であった広運館（後の官立長崎英語学校）などで英語を身につけた。

東京大学一期生

広運館から成績優秀者として推薦を受けた哲次郎は、一八七五年に東京開成学校へ進学、さらに、七七年に創設された東京大学へ一期生として入学した。東京大学では文学部哲学科へ進むことを選択し、以後は哲学の道を志すこととなった。東京大学においては、アメリカからのお雇い外国人であったアーネスト・フェノロサから哲学を、中村正直から漢学を教授された。幼少期の教育と東京大学での幾人もの師との出会いにより、哲次郎の学問観の基礎が構築された。また、大学在学中に福岡の医

学者であった井上鉄英の養子となり、井上姓となるとともに、鉄英の長女ヌイと結婚した。ちなみに、のちに大東文化学院において教育学を担当した東京帝国大学教授・吉田熊次（第Ⅲ部第11章参照）は、哲次郎とヌイの長女ユキの夫である。

東京大学卒業と同時に文部官僚となった一方、一八八二年より東京大学助教授に就任、「東洋哲学史」を担当することとなった。また、同年に外山正一・矢田部良吉らと刊行した『新体詩抄』は、近代詩の先駆けとなったとされ、社会的にも高い評価を受けることとなった。文学者としての才覚も類まれであったが、さらにはこのころ、哲学用語辞典『哲学字彙』を刊行し、語学的整備をもって東西哲学の融合を果たした。同書においてはじめて、「形而上学」「意識」「人格」「絶対」「美学」「倫理学」などといった訳語がなされたことは、周知の通りである。

哲学界の巨星へ

これらの学問的業績をもって、東京大学助教授在任中の一八八四年より、七年近くにわたる長期留学の機会を得ることとなった。官費によるドイツ留学にのぞんだ井上は、主としてベルリン大学においてとくに東西哲学を追究しつつ、ハイデルベルク大学やライプツィヒ大学などでも講義を聴講、留学後期にはベルリン大学付属東洋語学校において教壇に立って東洋哲学を講じた。なお、ドイツでは同じく留学中であった森鷗外とも知遇を得ることとなった。九〇年の帰国と同時に、日本人としてはじめて帝国大学文科大学哲学科教授となり、翌年に文学博士を授与された。九三年にパリで開催され

た万国東洋学会への参加を任じられ、九五年に東京学士院（のちの帝国学士院）会員に任命された。また、九八年には東京帝国大学文科大学学長に就任し、この間、一貫して東洋哲学研究の体制強化につとめたとされる。一九二三年三月に東京帝国大学を退官した後、東洋大学教授との兼務で、二四年一〇月より大東文化学院教授・同教授長となり、さらに二五年二月より二六年一〇月まで大東文化学院第二代総長をつとめた。

体制派イデオログ

井上の生涯における研究上の最大の功績は、教育勅語發布の翌年となる一八九一年九月に、教育勅語の注釈書『勅語衍義』を著したことであろう。これにより、教育勅語はその哲学的基礎を与えられたとされる。また「教育と宗教との衝突」を雑誌に連載し、キリスト教を反国体的宗教として排撃したことも大きな反響を呼んだ。その後、一貫して天皇制国家における国民道徳のあり方を論じ、大東文化協会の機関誌『大東文化』においても、創刊号（一九二四年三月）より数回にわたり関係の論説を寄稿している。

一方、大東文化学院総長在任中、「学院改革案」を発案したことにより、それが発端となつて「学院紛擾」を引き起こすこととなつた。帝大型の教授方針を反映した「改革案」を強く推進したことに對し、早稲田系学者を中心とした「私学派」教員たちが反発し、辞職者が続出することとなつたのである。同時期、井上の著作『我国体と国民道徳』における三種の神器の解釈を「不敬」とする非難が

起こったことから、問題拡大を避けるため大東文化学院総長を含む一切の公職を一時辞任することになったが、この不敬事件を起こしたのは実質的に大東文化学院の「私学派」教員たちであったともいわれている。

なお、井上は一八九二年より一九四四年二月に亡くなるまで、小石川区表町（現・文京区小石川三丁目）に住んだ。住居は四五年に戦火で消失したが、二つの書庫（土蔵）は今も残されており、井上哲次郎邸跡として五二年より東京都指定史跡とされ、「文京区立井上児童遊園」として現在も地域の人がとに親しまれている。

2 大東文化学院第二代総長への就任

大東文化学院教授長

井上哲次郎の名前は、大東文化学院創設にあたって事前に提出された設立申請書に添付された教員一覧中に確認される。また、大東文化協会設立時の名簿にもその名前が確認できる。ただし、実際の学院創設時には教壇に立つておらず、東京帝国大学を退官してから、一九二四年一〇月より大東文化学院教授および教授長となった。つまり、総長就任前に数か月ほど大東文化学院教授兼教授長となつて大東生たちに哲学を講じる機会を持ち、学院内の教員たちと交流を持っていたということになる。

総長就任

井上哲次郎の第二代総長への就任が決まったのは一九二五年二月一六日の理事会においてであった。

井上のもとには、大東文化協会初代会頭大木遠吉、大東文化学院教授兼理事牧野謙次郎らから、第二代総長を井上とする理事会決定の旨を知らせるとともに期待を寄せる内容を含んだ書簡が届けられている。まず、二五年二月一七日に出された牧野謙次郎からの書簡には、平沼総長の辞任と次代総長に井上が選ばれた旨が記されている。さらに、二五年四月三日に出された大木遠吉からの書簡には、井上の総長就任に際し「協会と学院との調和」を願う主旨の内容が記されている。ただし、井上はこの総長就任を受けたのは、初代総長平沼からの要請によるものであったからだと後に述べている（井上、一九二六a、六〇七頁）。

こうして、井上哲次郎の大東文化学院第二代総長就任が決まった。すでに七〇歳であり、それ以前の人生がとて長く、すでに研究上の功績も多く残していた。前述したように、明治初期の日本においてドイツ留学によって研鑽を重ね東西哲学研究の第一人者となったこと、帰国後は東京帝国大学において日本人として初の哲学科教授となったこと、さらにその後、天皇制イデオロギーの正統解説者、指導者としての揺るぎない位置を占めることとなったことなど、それまでのおよそ半世紀にわたる学者人生は順風満帆といつてよいものであった。東京帝国大学教授としての確固たる地位を築いた後、井上哲次郎は余生ともいえる年齢で大東文化学院第二代総長に就任したことになる。着任に至る経緯や背景についての詳細を示す資料は、上で示した書簡類のほかは実はほとんど残っていない。東京帝

国大学教授を退官するにあたっては多くの私立大学や専門学校から招聘があったことがわかっているが、井上は東洋大学と大東文化学院とを選び、さらには平沼騏一郎の後を引き継ぎ、第二代総長となったのである。

3 大東文化学院改革案

改革案の提出

一九二五年四月より総長職についた井上哲次郎は、「大東文化学院改革案」を協会副会頭大嶋健一および協会幹事長木下成太郎らとともに作成し、同年一月に行われた教授会においてその改革案を発表した。提出された「改革案」そのものは不詳であるが、同年一二月の教授会において審議を行った記録によれば、改革事項の骨子としては、次の三点であった（井上、一九二六b）。

「経費の節約を図り且つ事務の分担を正したること」

「教授法に改良を加へたること」

「教科用書の選択を厳正にしたること」

これらの骨子のうち、「教授法の改良」というのは、「帝大型」の教授方針を示したものであったが、

とくに同案の教授法の改良案に対して早稲田大学出身者を中心としたいわゆる「私学派」教授陣が猛烈に反発し、その結果、罷免者や辞職者が多発することとなった。さらには学生間にも波及することとなり、退学者が続出するという混乱状態に陥り、そのため学生たちが二度にわたる「同盟休校」を行うなど、一般新聞紙上をも賑わす社会問題へと発展した。一連の騒動がようやく鎮静化するののは、二六年一〇月の井上の総長辞任をはさみ、二八年末のことであったとされる。

一方、この紛擾事件によって罷免あるいは退職処分となった「私学派」教授陣の一部は、『東洋文化』『日本及日本人』等といった雑誌メディアを通して井上批判を繰り返すという行動に出た。たとえば、頭山満は井上哲次郎の著書『我が国体と国民道德』中の文言批判を行い、「不敬漢」として非難したが、それがきっかけとなり「井上哲次郎不敬事件（筆禍事件）」が引き起こされた。ただし、井上哲次郎は辞職からしばらく経て大東文化学院から講演依頼を受けていたり、私学派教員たちが含まれる共同の研究会に参加していたりしており、ともに映る写真も多く残されている。つまり、学院紛擾そのものは、あくまで学内の学問討究上の相違が明らかになった事件であったと整理するべきである。

「私学派」教員たちの意見

この「改革案」に関しては、様々な立場の違いや意見の相違があった。以下、整理してみよう。『大東文化学院紛擾の顛末』に所収された、「大東文化学院紛擾の真相」という文章がある。『大東文化学院紛擾の顛末』とは、「私学派」教員たちが編集発表した冊子であり、そこには「元大東文化

学院教授有志」とした「私学派」教員一同による「大東文化学院の紛擾に就いて」および「大東文化学院紛擾資料」という文書が掲載されており、私学派教員たちによる学院紛擾の記録である。同誌の後半半分には、大東文化学院幹事であった三塩熊太による「大東文化学院紛擾の真相」が掲載されている。

同誌によれば、そもそも「改革案」は、大東文化協会創立者の一人であり同常任理事を務めていた木下成太郎が、大東文化学院教授であり教務部長を務めていた牧野謙次郎が学院の会計財務一切を取り仕切っていることを不満に思っていたことから始まったものであったとしている。井上哲次郎の「改革案」の提出は、そういった協会側の事情を背景としたものでもあり、総長に就任した井上は、自身および大東文化協会の都合によって事務分担の改正を提言し、さらには自身の帝国大学時代の門下生らを配置するために学科学科目変更を求めたものであった、と断じているのである。すなわち、「改革案」は必ずしも純粋な学問学科学目編成上の問題意識から改正しようとしたものではないとし、また、教員会において井上が提案した学院改革案に反対した私学派の松平康國・内田周平両教授が退席し、佐藤仁之助教授が井上総長と激論するといった紛糾に至ったことについても、議長である総長の責任問題であると主張したのであった。

ただし、「私学派」教員がとくに反発したのは、井上総長が提案した学科課程の変更であった。具体的には、主として「皇学」として置かれていた学科学目の有無であった。「皇学」に置かれていた学科学目は、「古事記」や「太平記」などのほか、「万葉集」「神皇正統記」といったものであった。これ

らは「私学派」教員たちが重視した科目であったが、井上総長は不要と判断したのである。これら学科課程への「私学派」教員たちの意見や学問観については、本書第八章において詳述する。

なお、罷免され、あるいは辞職した「私学派」教授陣はその後しばらく、雑誌媒体等を利用して主義主張を繰り返した。たとえば、教務部主任であった松本洪は、「名誉毀損の浮説に就いて」という冊子を作り各方面へ配布し、教務上の手続き等について井上総長から非難を受けたことに対して反論し、経理上・金銭出納について井上から指摘されたような根拠はないとして学院会計の流れを具体的に示して訴えている。

井上総長の反論

井上哲次郎が自身で創刊した雑誌『東亜の光』に発表した「大東文化学院改革の真相」（井上、一九二六a）は、「改革案」の提案と直後の混乱までの経緯を記したものである。

それによれば、「初め五六ヶ月間は前総長の仕来りを其の儘踏襲してをつた」が、「九月末頃からソロ、立入って内部の組織、学科配当又は学生の情態等に注意を払ひ、精細に観察し初めたところが、改良刷新すべき点が少くないことを見出した」ために学院の改革刷新を企てた、としている。つまり、一九二五年九月以降になって学院内部の組織および学科改正の必要性を感じ、断行しようとしたということになる。

しかし、「学院内部には別に中心がある、即ち教務管理の牧野謙次郎氏、是れに教務主任の松本洪

氏などがあつて、是が中心となつて実権を握つてをるやうな次第で、総長の意見は容易に通らない。学科の改正にしても、教育施設の変更にしても、総長が遣り出さうとすれば牧野氏らが共同して反対するので、総長の意見は殆んど皆沮止されて了ふ」といつた現状のなか、「第一、『太平記』のやうな学院の教科書に使用すべからざるものを教科書に用ひたり、又、皇学として当然採用すべき『中朝事実』の如きものを採用しなかつたり、種々変更を要すべきこともあり、又教育上から見て余りに詰め込み主義で授業時間も多過ぎ其の為め学生の健康を害ふこと甚だしく」、それらの問題について一九二五年一月二八日の教授会において学科改正案を議に附したところ、「猛烈に反対説を唱へ稍々不穩に陥る者が多かつた」としている。

教務を取り仕切つていた牧野謙次郎および松本洪はともに「私学派」であり、早稲田系学者であつた。「教務」は、学生関係や学科目、給与、兵役事務そのほかに至るまで、一切の学院運営を掌握していた部署のことである。すなわち、井上総長にとつては「私学派」が学院の中核にいて教務業務を取り仕切つていることや、「教務主任は総長の秘書役であるべきなのに、松本氏は決して総長の秘書役を勉めず、寧ろ牧野氏の秘書役であつた。それで総長は少しも秘密を保つことは出来なかつた」ことをそもそも不満に感じていたのである。

また、「太平記」を廃し「中朝事実」を採用するということや授業時間が多すぎるから短縮すべきであるといつた意見や考え自体は、帝国大学が採用しているテキストを使い、帝国大学の一般的な形態であつた講義方式を用いて授業時間を短縮するということであり、帝国大学に長く在籍した井上に

とってはごく自然な考えであり、そこには学生たちの過剰とも思える負担を軽減するというねらいもあった。ただし、「私学派」教員たちにとっては、それは輪講輪読を用いた独自の授業方式を否定する提案であり、学生たちの学業負担は学院ならではの修学期のようなものであると考えていたため、むしろ学院の理念や個性を否定されたものと捉えたのであった。

井上総長は、一九二五年二月四日に開かれた教授会において再び改革案の審議を行い、「再度之れを議に附したところが、議中途にして松平康國氏が不穩なる態度を取つて、声高に此の案は吾々と全然意見を異にするからして議するに及ばずと言つて、奮然袂を払つて立ち去つたのである、次いで内田周平氏も亦不穩なる態度を取つて立ち去り、それから川田、那智、川合、佐藤、國分の六人が立ち去つたのである。それで其の形跡は一種のストライキといふべき有様であつた」と述べ、たとえ総長と意見を異にしていたとしても総長が閉会を告げるまではそこに止まるべきであるのに、秩序を破り、礼儀を乱り、議場を混乱に陥れ、甚だしく議長たる総長を侮辱した、と憤慨した。そして、「其の時の教授の出席者は総計二十一人で、此の中の八人が突然退席したのであるからして尚ほ会議は続けられないことはなかつたけれども、右のやうな騒擾の爲めに延会と致して、其の日の教授会は閉ぢたのである」と、教授会が紛糾した様を述べている。

学院改革の断行と私学派教員の解職指示

その後、一九二五年一二月、翌年三月にかけての入学試験および学年試験が終了してから、同年三

月二七日に協会および学院の予算が決定し、さらに三月三一日午前到处務規程の改正が行われ、「愈々改革を断行する時機となつて来た」と考えた井上は、同日午後、松平康國、内田周平、佐藤仁之助の三名に教授解職の辞令書を発送して罷免し、教務主任の松本洪には教務主任としては不適任であるから解職するが助教授として教壇に立つことは差し支えないとした。そして、四月一日および二日に大多数の教授を呼び出し、その一人ひとりに三教授解職の理由を説明したが、誰一人異論を唱える者はいなかったとしている。ところが、すぐに三教授罷免の処置について学院内から非難の声があがってきて、四月四日になって川合孝太郎、池田四郎次郎ら一二名の連署により内田、松平、佐藤の復職請願書を総長宛てに送ってきた。さらに四月九日になると、細田謙蔵、那智佐典の此の二人が又大体同じやうな復職請願書を携へて井上総長に会見を求めた。細田と那智は二松学舎出身の私学派教員であった。そこで三人の復職は断じて認めない旨を改めて伝えたところ、「十二名連署した者の外に細田謙蔵氏を加へて十三名の者が悉く辞表を呈出し」、はじめ一二名であつた復職請願書の連署は最終的には一六名となり、さらに彼らは自身の辞意を届け出てきたため、井上は彼らにも解職通知を發した。なお、その後四月一二日に始業式が行われ、一三日より授業が開始されたが、井上総長は自らが選定した東京帝国大学出身の教員を中心に補充を行ったために授業運営に關しては問題なかつたと述べている。

以上が井上哲次郎による記録であるが、これ以降、井上は一切の反論はしなかつたし、發言することとはなかつた。

大東文化協会の見解

一方、前述したように、大東文化協会は上記の事態に際して協会機関紙『大東文化』において、さまざま二つの声明文「読者諸賢に告ぐ」「大東文化学院改革顛末」をそれぞれ掲載した。これによれば、改革案を提議するにあたり「実行に方りては二三教授の淘汰は免る可からざるも、勉めて人事の移動を避くべき希望なりしも、教授の多数は総長の改正案に反対せるのみならず、其の二三者は宥恕し難き言動を敢てし、到底不問に附するを得ざりしを以て、本年三月三十一日其の教職を免じたり。……学院は止むを得ず四月三十日に至りて連結、辞職者十六名を解職せり」と述べており、そこに記されている経緯は井上総長の記述とほぼ同様であった。

なお、紛擾收拾のために学院内では総長の交代を何度か繰り返すこととなり、退学となった学生や私学派教員の学院への復帰を実現させるとともに、井上総長の意向に沿って変化していた学科課程も従来のものへと戻すことになった。しかし、今度は「官学派」の教授二一名がこうした方針を非難して辞職することとなり、さらに続く学院の混乱状況に不満を抱いた学生らが同盟休校を断行する騒動も起き、これら混乱した状態が一九二八年末まで続いたのであった。

4 メディアの風説

「大東文化学院改革の真相」

ところで、この一連の騒動について当時の新聞報道を見ると、井上の不敬事件が勃発したこともあってか、学院紛擾について批判的な意見が数多くなされていたことがわかる。これについて井上は、前述の「大東文化学院改革の真相」において次のように述べている。

「是に対して何等報ひらるゝ所は無い、全く献身的事業であつた、最も了解し兼ねることは都下の大新聞例へば時事、読売、東京日日等の諸新聞に於て悪辣なる宣伝の側だけに乘ぜられて、総長の側の真意の存する処を毫も了解せず、又了解することを努めずして、単に反対側の味方を為して偏に彼等の為めのみ機関たることを甘んじたといふことは風教上甚だ遺憾とすべきことである」

このように回想し、大手新聞の批判に多くさらされたのは、各社が「私学派」教員による煽動に乗せられたからだとしている。しかし、それらに掲載された記事を見てみると井上だけを批判した内容のものばかりではなかった。たとえば『大阪朝日新聞』には、「大東文化学院総長、井上哲次郎博士が『古事記は神話、小説、宗教、文学の混化したもので正史と認めぬ』と教科書から抹殺し、教授を

罷免して問題を起し、公開状さへツキつけられている／博士は論拠を当代の科学的研究におき、沈滞固陋に陥りやすいかかる学院の空気一新の道念と推せられるが／『太安萬侶は文才にかられて潤飾にすぐ』とまで極論するからには、反抗を予期して堂々の戦をなす準備をなせ／戦はあくまで学術的なを要す攻防ともに国体論をかつぎだすのは感心せぬ』（『天声人語』『大阪朝日新聞』一九二六年六月三日朝刊）とし、中立的立場によって初期の学内の争いを報じているし、同時にそれは学術的な学問上の争いであることを明確に指摘していた。

「漢学の死活」問題

また、『国民新聞』を見ても「国民論壇」欄において、「漢学の死活」と題した大東文化学院紛擾を論じ、「外面的には、その関係者たちの学院における勢力扶植といふ甚だ陋醜な、苦々しき人事関係の暴露である」としつつも、「しかし、さういう外面的な人事問題を離れて、それを内面的に観察するときには、そこには可なり複雑な、そして又、今日の吾々が考えて見なければならぬ学問討論上の問題を含んでゐる」と述べている。（『国民論壇』『国民新聞』一九二六年五月六日朝刊）。

つまり、儒教・漢学に対する見解には大きく二つの異なった考え方が存在しており、その内面には日本の思想文化的な問題を含んでおり、たまたま学院内人事と絡んだ争いとして表面化し、顕在化したものであるとして見ているのである。「異なった考え方」については、「一つは儒学漢学をそれ自らとして攻究し検討しようとするものであり、一方は他のさまざまな文化活動と比較して、又は他のさ

まざまな文化活動の背景を考察の中に入れて攻究研究しようとするものである」と述べ、維新以降の極端な欧化主義の傾向は日本社会に歪みをもたらしたが、一方で儒学者の中には極端な支那絶対主義も存在する。それはどちらも日本人としての誇り自覚を持っていないに等しいと評しつつ、いわゆる漢学者には往年の儒教主義の名残が多分に存しているために起きた学問上の争いであるとして、日本社会における今日的な学術問題であることを鋭く示唆していたことがわかるのである。

5 大東文化学院における学問観の揺れ

学問探究上の問題

大東文化学院において設立間もなく起きた紛擾は、経営人事に関する騒動であったと同時に、学院設立以前から胚胎していた問題がその根源にあった。すなわち、建学にあたり教育方針や学科課程の検討・決定を多方面の関係者によって協議したために浮き彫りとなった、いわゆる「私学派」と「官学派」とに分かれる学問観上の争いであり、その後起こった学生同盟休校も学院創設以降続いた教員間の争いの余波を被るものであった。

大東文化学院は、「漢学振興に関する建議」に基づき創設された大東文化協会を母体とし、「皇道及び国体に醇化した儒学」を研究し教授することや「特に皇学の一科を設ける」ことを建学目的として設立されており、極端に言えば、皇学や儒学に関したものを以外の知識はここでは必要としないとまで

していた。その教育方法や学科課程は私学のほかに東京帝国大学、京都帝国大学と三者の意見から成されるものとなっていたが、設立準備段階からそれぞれに相容れない意見を持っていた。かろうじて、初代総長となった平沼騏一郎の名のもとで学科課程は制定されたが、開院以後も争いの火種が残っていたであろうことは明らかであった。したがって、井上哲次郎の第二代総長就任および「改革案」の提案は紛擾勃発のきっかけとはなったが、もともと学院内に燻っていた問題が表面化したものであったともいえるのである。すなわち、大東文化学院の建学精神や目的に沿った教育とは何か、本当に「大同団結」「官私合同」は可能なのか、それらの実現実行における過程で問題が発露したのであった。

「皇学」とはなにか

その背景には「皇学」とは何か、という学問観上の問題があった。井上哲次郎が否定した「古事記」「太平記」といった科目は、「学科課程表」の中でもとくに大東文化学院における「究極の目的」とされた「皇学」の一科目として置かれていたものであった。「私学派」教員らにとって「学科課程表」は「学院の憲法」と呼ぶほどに重要性を持つものであり、その学科目が否定されることは学院の理念を否定されることであり、さらに言えば学院設立理念を否定されることにも等しいものであった。一方で、当時の大学や専門学校、高等師範学校において「古事記」「太平記」といった科目を置くところが他になかったということは、大東文化学院の教育理念がいかに特殊であったかということを意味する。儒学や漢学を専攻する他の高等教育機関と比較して、「皇学」としか言いようのない学科目を特別に

配置していたことは井上にとつては理解し難いものであったかもしれない。それと同時に、井上の提案した「改革案」はそもそも井上自身が想起したものではなく、大東文化協会理事木下成太郎らの意が多分に含まれていたという点に注目しておきたい。井上総長辞任後の紛擾後半の関係図において、学院と協会との意見の相違が見られることから、木下を中心とした協会側と学院方針、学科目方針には相容れないものがあつたことがわかるのである。

以上のような官私間における学問観の相違と争いは、井上哲次郎の不敬事件をも誘発する一つの背景となつた。それは、一面的には在野学者の不遇感を体現した結果であつたが、一方でマスコミの反応を見てもわかる通り、学問上の争いとして極めて対等にして今日的な学術問題であることが指摘されていたのである。

参考文献

- 浅沼薫奈（二〇〇九）「井上哲次郎と大東文化学院紛擾―漢学者養成機関における『皇学』論をめぐる―」
 『東京大学史紀要』第二七号）
 井上哲次郎著、島菌進・磯前順一編（二〇〇三）『井上哲次郎集』全九卷、クレス出版（シリーズ日本の宗教学）
 井上哲次郎（一九二六a）「大東文化学院改革の真相」（『東亜の光』第二二卷第六号）
 井上哲次郎（一九二六b）「大東文化学院改革顛末」（『大東文化』第三卷六月号）
 『大東文化学院紛擾の顛末』奥付（発行日等）記載なし

真辺将之(二〇〇五)「井上哲次郎」(伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典2』吉川弘文館に所収)

大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)では、二〇〇八年に井上の故郷である太宰府において発見された書簡や写真などを含む井上哲次郎関係資料約三五〇点を所蔵しているほか、井上哲次郎関係資料は、東京都立中央図書館、国際日本文化研究センター、東京大学文書館、文京ふるさと歴史館などに所蔵がある。

大東文化協会評議員として漢学振興に尽力

渋沢栄一



「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一（一八四〇〜一九三二）が経済界の発展に尽くした以外にも多くの社会事業、教育・文化事業に関与したことは、現在ではよく知られるようになってきた。なかでも渋沢栄一が力を入れたこととして教育事業への貢献が挙げられるが、二〇一五年九月から一六年四月までNHKで放送された連続テレビ小説『あさが来た』で、広岡浅子（劇中では白岡あさとして波瑠が演じた）と成瀬仁蔵（同じく劇中では成澤泉として瀬戸康史が演じた）の日本で最初の女子大学校創設に協力する役どころで渋沢（劇中では三宅裕司が演じた）が登場したことも大きな影響をもった

と言えるであろう。

渋沢がかかわった数多くの教育事業を見てみると、実業教育や女子教育への支援協力が数に於いてもその内容においても特徴的かつ重要であったことがわかる。実業教育への支援協力としては、明治初期段階での商法講習所（現・一橋大学）を筆頭として、大倉商業学校（現・東京経済大学）、高千穂高等商業学校（現・高千穂大学）、京華商業学校（現・京華商業高等学校）等に対するものが代表例として挙げられる。女子教育に於いては先に述べた日本女子大学校（現・日本女子大学）のほか東京女子学館（現・東京女子学館小学校・中学校・高等学校）

や私立女子商業学校（現・嘉悦大学）などへの支援協力が挙げられる。日本経済の発展を担う人びとの教育が重要であることは、現代の私たちにとっては当然のことのように思われるかもしれないが、当時、商人に対するいわれのない偏見は強く、渋沢らは商人の地位向上、教育の充実に奮闘しなくてはならなかった。また女子教育充実も国民全般の教育レベルを上げていくために絶対に必要なことであった。

しかし、渋沢自ら「論語と算盤」の言葉に代表される「道徳経済合一説」を主唱し、生涯それを唱え続けたという意味で、「漢学振興」もまた渋沢の重要な教育支援活動であり、漢学塾二松学舎（以下、二松学舎、現・二松学舎大学）や大東文化学院（現・大東文化大学）への支援協力はその具体例であったことも忘れてはならないであろう。もっとも実業教育や女子教

育の支援協力が日本の近代化という大目標に合致するものであると渋沢が考えたことは比較的理解しやすい。しかし、儒教道徳の重視とその教育振興の関係については、それほど簡単ではないように思われる。

渋沢はなぜ儒教道徳を体現する「論語」を重視したのか。渋沢の「道徳経済合一説」が漢学そのものではないことは明らかである一方、「道徳経済合一説」における「道徳」は「論語」に現れた儒教道徳であることもまた紛れもない事実であり、江戸時代の身分制秩序を正統派教義として思想の面から支え続けてきたものも「論語」を中心とした儒教、とくに朱子学であった。渋沢の原初体験としてよく引かれる岡部陣屋での体験、すなわち身分制秩序を背景とした代官（武士）の理不尽な振る舞いへの憤りは反儒教道徳的といえるものではなかったのか。

渋沢は、江戸時代の正統派教義であった「論語」の朱子学的な解釈とは異なる彼独自の論語解釈をおこなうことによって、逆に身分秩序を転倒させようとした。つまり、実業家が利益を追求していくことは、「論語」の価値観のなかで「仁」と並んで最上位におかれる「義」の実現と合致するものであるという思想を押し出したことである。「仁」と「義」の関係についてはここでは立ち入らないが、自分のことだけ考えるのではなく公共のために尽くす気持ちを見るに「義」と考えておけば良い。『論語』にある「義を見てせざるは勇無きなり」の「義」である。渋沢にとつて、「利」の追求が「公益」の実現をもって完成する限り「義」と一致しうる。ここでは「利」を追求する商人や実業家の振る舞いが、さげすまれるのではなく、逆にもっとも道徳的であると称揚されることになる。そこ

に渋沢の思想的戦略を見て取ることができる。

こうした独自の「論語」解釈は、しかし、完全に渋沢のオリジナルな思想というよりも明治以降の新しい儒教解釈の潮流に棹さすものであった。たとえば渋沢が一橋家に仕官し、まだ篤太夫と名乗っていた頃、優秀な人材を集めるため備中の一橋家所領へ赴いた際に出会った阪谷朗廬（ひらや 一八二二〜八二）などはその潮流を代表する儒学者であった。朗廬は、地元備中で高名を馳せていたが、その儒学解釈は、是は是非は非として考える合理的な思想であった。明治初期には唯一の漢学者として明六社に参加し、やがて明治政府の官僚としても活躍した。朗廬の三男の芳郎も大蔵官僚として出仕し、渋沢の次女琴子を娶り、渋沢家と阪谷家はながくその関係を保っていた。ちなみに阪谷芳郎の義理の兄（妻・琴子の姉である歌子の夫・穂積

陳重)の孫は大東文化大学の学長もつとめた穂積重行である。

この朗廬と出会った当時の渋沢はまだ尊皇攘夷の熱から完全には冷め切っていない青年であったが、朗廬の合理的な「開国論」に出会って目を開いていく。やがて徳川慶喜の命を受けて、慶喜の異母弟の徳川昭武に随行しパリに赴く際の篤太夫のなかではすでに尊皇攘夷思想は消えていた。朗廬自身は、津山藩の儒学者である昌谷精溪(一七九二—一八五八)に学んだが、昌谷自身も旧来の朱子学を信奉しつつもその非合理的な側面には批判的であったという。第9章では津山藩における洋学の隆盛が、算作家や宇田川家を通じて平沼騏一郎やその兄の淑郎に影響を与えたことを指摘したが、津山藩で漢学が軽視されていたわけではない。むしろ逆に漢学の素読などの訓練(「輪講」)が洋学の受容にあ

ずかって力があつた。

一八七七年、二松学舎を創設した三島中洲(一八三二—一九一九)も、明治期の新儒学をリードした代表的な漢学者、儒学者であった。中洲は備中国松山藩の出身で、漢学は藩の陽明学者として名高かつた山田方谷(一八〇五—七七)や津藩の斎藤拙堂(一七九七—一八六五)に学んだ。拙堂も一貫して朱子学者であったが、西洋の文物でも優れているものはそれを含めて、和漢洋の折衷によってより良い社会を実現していこうとする和洋折衷論を唱えた。弟子である中洲も同様に儒学を重視しつつも西洋の文物導入には積極的であった。

中洲の業績は、二松学舎創立とその思想である「義利合一論」によって跡づけられるが、後者の「義利合一論」はまさに渋沢の「道德経済合一説」と相似形をなしている。実際、二松学

舎創立前後からたびたび中洲は「義利合一論」を中心とした講演をおこない、書物も著しており、渋沢は自らの思想と合致している思想を唱える中洲と意気投合したと言われている。この点、二松学舎大学教授の町泉寿郎は、中洲の「義利合一論」と渋沢の「道徳経済合一論」とは、一九〇八年に発布された「戊申詔書」を契合点として交差したと指摘している（町泉寿郎「二松学舎と陽明学」町泉寿郎編『渋沢栄一は漢字とどう関わったか―「論語と算盤」が出会う東アジアの近代―』ミネルヴァ書房、二〇一七年所収、一八五頁）ので、中洲と渋沢の思想的な出会いの時期については、もう少し下るのかもしれない。いずれにせよ、渋沢が中洲を援助し、漢学振興に尽力したことは確かである。また渋沢は中洲が一九一九年に亡くなったあと、二松学舎第三代会長を務めるなど、教育実践面でも

大きなかわりをもった。渋沢が具体的に学校長などの学校トップに立った事例は多くなく、この舎長就任以外には一九二四年の東京女学館長就任と渋沢が亡くなる直前の一九三一年の日本女子大学第三代会長就任が挙げられるくらいである。それほど漢学振興には力を入れていたということであろう。そして渋沢が、大東文化協会の評議員に就任したのは、一九三一年一月一四日、中洲没後四年、八三歳のときのことであった。以後、三一年に九一歳で亡くなるまでの八年間同職にあった（『渋沢栄一伝記資料』第三八巻など）。このように渋沢は中洲との交流を契機に漢学振興に力を入れ、その流れのなかで大東文化協会にも関係をもったのである。

では、二松学舎と大東文化学院との共通点や相違点はどのようなものであったのであろうか。

共通点としては、両者とも第一次世界大戦後の漢学振興運動に関与したことであり、大東文化学院はまさにその運動のなかから産まれてきた。相違点としては、「大東文化学院が漢字と皇学の古典研究者の養成を目的とする学校として創設されたのに対して、二松学舎は国語漢文の中等教員養成を目的とする専門学校として歩み出すのであり、同じく高等教育機関であっても目的には明確な相違があった」（町前掲、一八七頁）。この相違点のうち「皇学」をめぐっては大東文化学院内部でもその位置付けについて見解の相違があり、井上哲次郎総長のときにそれが「紛擾」として表面化したことは第5章にある通りである。一方、教員養成機関としての位置付けにかんして言えば、実際の卒業生の進路から考えるに、それほど大きな違いがあったとは思われない。理想はともかく現実的には漢文

教員という進路は大きく重なっていた。

最後に漢学復興の潮流についての思想的な意義について一言しておこう。桐原健真『言語講義』再考―近代論語のなかの渋沢栄一―（前掲、町編書所収）は、「新世紀」「二〇世紀」の漢学は、『普通文』を読み書きするための『記誦通詞章の学』としてではなく、『教養』や『修養』の基礎へと転化していく」（五一頁）と指摘し、『漢学』に新たな生命を吹き込んだこうした語り（＝自らの行動規範や人格形成のための手段とするような近代的な語りへの転換）の中心には「漢学の周縁にいた人々―哲学者やジャーナリスト、あるいは実業家などが占めていた」（同上）という。まさに渋沢は漢学周縁の実業家のひとりとして漢学振興にかかわりを持ち、その潮流のなかで大東文化学院の教育理念とも共鳴していったのである。

第Ⅱ部

大東文化学院の学者・研究者



第6章

『大漢和辞典』編纂事業と大東生の漢学力

諸橋轍次と「大東漢学」

大修館書店『大漢和辞典』は、全一五巻からなる世界最大の漢和辞典である。そしてこの大辞典は、大東生の学力の粋を集めた結晶でもある。本章では、大東文化学院教授であった諸橋轍次監修の『大漢和辞典』編纂事業の展開を中心としつつ、大東文化学院において、どのように「大東漢学」という独自の学問観が構築されていったのかを見ていくことにしよう。

1 諸橋轍次と大東文化学院

諸橋轍次と『大漢和辞典』編纂事業

諸橋轍次は、大東文化学院紛擾が起きた際に招聘された教員の一人であった。したがって、「官学派」という位置づけになる。ただし、次章で取り上げる前川三郎と同様、設立申請時の教員一

覽を記した公文書類にその名前があることから、創立時に着任はしなかったものの、大東文化学院の教育に関わることを当初より想定されていた人物である。

諸橋は、文字学および漢字研究者として知られる。後述するように、東京高等師範学校（現・筑波大学）研究科を卒業後、同校教員となり、後年には名誉教授となった。また、戦後新制大学として設置された都留文科大初代学長も務め、同校発展にも尽力している。大修館書店社長鈴木一平との共同事業として行われた『大漢和辞典』の編纂は、大東文化学院教授在任中に開始されたものであり、完成までおよそ三五年の歳月を要した。この『大漢和辞典』の編纂を監修し、完成させたことを含んだ長年の研究業績により一九七六年一月三日には勲一等瑞宝章を授けられている。轍次の大東文化学院教授在任期間はそれほど長くはなかった。しかし、大東文化学院在職中に着手することとなった『大漢和辞典』の編纂事業は、諸橋にとって生涯最大の業績であっただけでなく、諸橋自身も後年振り返って、大東生たちを「大切な協力者」であり、事業完遂において最も重要な人びとであったと回顧している。一方、大東文化学院にとってもこの編纂事業は学院の学問的方向性を示し、知力を試す試金石となるなど、大きな転換点となったのである。

教育者一家に育つ

諸橋轍次は、止軒と号した。一八八三年六月四日、新潟県南蒲郡庭月村（現・三条市庭月）に生まれた。諸橋家は、もとは武家の家系であったが、江戸時代後期以降は大庄屋職となった。代々学問に秀

でた家系であつたとされ、幕末には自宅で私塾を開き、生徒たちを自宅に寄宿させて本格的な漢学、国学のほか、日本史の講義を行うなどして、地元で熱心な教育者として親しまれた。

明治維新を経て、一八七二年に学制が頒布され小学校令が発布されると、轍次の祖父にあたる又太郎（号は括囊）は、地元小学校の初代校長に就任した。しかし、開校から三年余り経った頃、三三歳の若さで急逝した。轍次の父である安平（号は嵐陰）は、実際には又太郎の年の離れた弟であり、養子の関係であつた。安平は幕末の生まれであつたこともあつてとくに漢学を好み、その素養から次男として生まれた轍次の名前も中国の北宋時代の文人である蘇轍から取つたものであつたという。安平は一八七二年に新潟第一師範学校二期生として進学し、同校を卒業と同時に、死去した又太郎の後を継いで小学校校長に就任した。

こうした教育者一家に生まれ育つた諸橋は、幼少期には父が校長を務めていた小学校へと通つた。補修科とあわせて小学校での修業を七年間で終え、隣村にあつた奥畑米峰が塾主をつとめる静修義塾へと入塾、寄宿生活を送りながら漢籍の素読と作詩文に打ち込む日々によつて漢学を大いに学んだ。三年間ほどを同塾で過ごした後、数えで一七歳の頃に小学校の代用教員となるが、一年足らずで新潟師範学校へと進学した。全寮制であつた師範学校は、入学年齢が当時一八歳であつたため、それを待つての進学であつた。同校を卒業後に上京し、東京高等師範学校の国語漢文科へと進んだ。

東京高等師範学校での出会い

当時の東京高等師範学校の校長は、嘉納治五郎であった。諸橋は在学中、「教育事業の尊さを知れ、またその楽しさを知れ」とする、嘉納の教育方針に大いに感銘を受けた。教育者を養成する高等師範では何よりもまず自らを信じ自らを重んずる気位をあらしめたいとして、同校における倫理学の授業を、校長であった嘉納治五郎がみずから行っていた。当時は吉田静致も同じく倫理学を担当しており、漢文の少壮教員としては宇野哲人などが教授していた。後年、吉田や宇野は大東文化学院教授のなかでも「官学派」の中心教員として活躍しており、同時期には諸橋も学院教授として着任し机を並べることとなるのであるが、この高等師範学校で教えを得た縁も何らか関係しているかもしれない。

そのほか、当時の高等師範には嘉納治五郎の方針により、「学歴」はなくとも、「学は深く識見は高い者たち」が教授として多く集まっており、個性溢れる授業が展開されていた。諸橋は同校入学後に、国文か漢文かの選択の際に迷いつつも、父からの教えやそれまでの学業の蓄積から漢文を選ぶこととした。卒業後は群馬師範学校で一年ほど教壇に立ったものの、東京高等師範学校附属中学での教員の誘いを受け、再度上京することとなった。附属中学で教壇に立つかたわら、東京高等師範学校研究科へと進学することが目的であった。ここでは、主として「詩経」の研究に没頭した。研究科を修了し、東京高等師範学校助教に就任した諸橋は、翌年に山本キン子と結婚した。

中国への留学

同時期は諸橋にとって、研究者としての大きな転換期であったといえるだろう。先に在学した研究科での研究成果をまとめた『詩経研究』を出版したこと、その業績をもって東京高等師範学校教授へ昇格したこと、さらには一九一九年より中国へ二年間留学することとなったことなどである。

中国の留学は、すでに三〇代後半となっていた諸橋の人生に大きな影響を与えることとなった。留学に先んじて、嘉納治五郎からの私費による資金援助を得て、二か月ほどの短期留学で中国事情を知る機会を得ており、その際に清朝以来の嗜宿（学識や経験が豊富な老人のこと）が絶える危機感を覚えた。そのため、急いで本格的な長期留学の目処を立てねばと考え、翌年に留学を決することとなった。留学のために自宅を売却することも考えたというが、中国への出発前には犬養毅らの激励を受け、渋沢栄一や岩崎小弥太ほか多くの援助を得て留学が実現することとなった。

諸橋の留学の主たる目的は、現地の古参学者らと交流し中国古典を修養することであった。事実、清朝時代を生き延びた老齢の学者たちとの交流も実現し、康有為や章炳麟に面会し、さらには陳独秀、胡適、周作人といった当時同世代であった若手学者らとの意見交換を行った。なかでも留学中にあった著名な逸話としては、中国滞在中に使用した漢和辞典には内容に不備が多く、解釈をするうえで不便があったということである。日本で使われる辞典や辞書も、熟字がなかったり、解釈や原典記載がなかったりして研究上の妨げになっている。この経験から、古今東西からなるべく多くの書物を網羅しつつ正確な原典を示した語彙を収めた漢和辞典の必要を感じたというのは、後年に大漢和編纂へ着手

することとなるもつとも大きな要因となったといわれる。

一九二一年に留学から帰国すると、岩崎小弥太からの委嘱を受け、諸橋は静嘉堂文庫長に就任した。膨大な和漢籍を擁する静嘉堂文庫では、東洋文化の宣揚を目的とした研究利用に供するためその整理を行った。

大東文化学院教授への就任

一方、同時期は大東文化学院が創設された頃である。創設に当たり、文部大臣宛てに提出された設立申請書に添付された初年度教員配当一覧の予定表には諸橋轍次の名前が見られるが、実際に教授に就任し授業を担当したのは、一九二六年度からであった。諸橋のなかでは、あくまで本業は東京高等師範学校教授であり、兼務として静嘉堂文庫長や大東文化学院での指導の依頼を引き受けたものであった。ただし、後述するように、大修館書店からの企画を引き受け、『大漢和辞典』の編纂事業に取り組む決意を固めたのは、大東文化学院在任中のことであった。諸橋が大東文化学院で教壇に立ったのは、一九二六年から二九年までである。諸橋の九九年という長い生涯から見れば、わずかな期間ではあったが、着任初年度に担当した教科は、「論語」「春秋左氏伝」であり、この「春秋左氏伝」の成果こそが『大漢和辞典』の根底となるものであった。

一九二九年、東京高等師範学校は東京文理科大学と名称を変え、同時に学内の漢文科設置編制に携わるため、諸橋は大東文化学院を退職した。その後は東京文理科大学教授として長年にわたり尽力し、

定年退官後は名誉教授となった。退職後も引き続き國學院大学や都留文科大学において教育に携わり、一九八二年二月八日に死去した。その長い生涯のなかでは多くの著書を刊行しているが、全一五巻からなる壮大な『大漢和辞典』の監修が最大の業績であることは間違いないだろう。

2 『大漢和辞典』編纂の開始と大東生の「漢学力」

大修館書店との出版契約締結

『大漢和辞典』（諸橋轍次監修、大修館書店）は、全一五巻からなる世界最大の漢和辞典である。しかし、およそ三五年の歳月を費やし編まれたこの大辞典の初期の大仕事が、大東文化の学生によって行われたものであることを知る人は少ないかもしれない。

『大漢和辞典』編纂は、諸橋轍次と大修館書店社長の鈴木一平とが計画したものであった。諸橋は一九二五年頃より断続的に、大修館書店の鈴木一平社長から辞典編纂の誘いを受けていたものの、生涯をかけた大きな仕事となることがわかるゆえに承諾できずにいたが、大東文化学院への着任を機に引き受けることにしたといわれる。大東文化学院の学生たちの優秀さを目の当たりにしたこと、そのなかでもとくに秀でた学生は今後の漢学研究を牽引することになるであろうことがわかったからである。それゆえに、経済的な理由で退学し、学業を途中で諦める学生が出ていることは惜しいと考えたのであった。この事業が、大東生たちの生活費の一助とするのに最適であると考えたことも、引き受けた

理由のひとつであった。こうして諸橋は大修館書店からの依頼を承諾した。

鈴木が諸橋へ依頼をした当初は、実は全二巻程度の漢和辞典編纂を想定していた。それに対し、完全な大漢和を完成させるとなると、予備調査の段階で予想をはるかに上回る膨大な時間を要する大規模編纂事業となることが判明したが、熟考のすえ諸橋と鈴木は刊行を決断する。ただし、この時の諸橋は五、六巻程度と考えており、鈴木もそのように承知していたようである。一九二八年に出版契約がなされると、諸橋監修のもと終わりの見えない大編纂事業が開始されたのであった。

編纂方針の決定

前述したように、諸橋の中国留学中にとくに不便であったのは、当時の写本には間違いが多く、それを転用した辞典も誤記誤釈が溢れていたことであつた。既存の辞典の引用文や熟語の誤りを指摘し、刊本（原典）を探し出す。さらに適する語彙を補入し、漢詩や史伝を加筆する。古今の膨大な書物に關する高度な知識を必要とするうえ、終わりの見えない過酷な作業でもあつた。少しあとになって、諸橋に師事していた東京帝大や高等師範の学生も手伝いに来るようになったが、その多くは難解な中国古典の前に手も足も出なかつたという。したがつて、これら初期の地道な作業のほとんどは大東生によつて進められた。「漢文」に特化して深く学んだ大東生だからこそ可能な仕事であつた。

後述するが、この初期に行われた語彙収集とそれを整理したカード作りは、出版契約が締結される約一年前の一九二七年より諸橋邸の応接間で開始されていた。前述した予備調査というのが、この期

間に相当する。このとき、既刊の辞書の語彙を収集するだけでなく、これまで記載されていない中国古典の原文から直接語彙を収集する方針が決定した。

その後、一九三四年に杉並区天沼に用意された借家「遠人村舎」へと移転し編纂作業が続いた。およそ一五年の歳月を経て、四三年九月に第一巻が上梓されたが、戦時下の資料不足のなかで刊行は一時中断したうえ、戦火で資料や原版の多くが焼失してしまった。戦後、事業が再開し第一巻があらためて刊行されたのは五五年一月のことであり、六〇年に第一三巻刊行をもって一旦完結し、二〇〇〇年に補巻が刊行され全一五巻となった。

『大漢和辞典』編纂と大東生の活躍

大漢和の編纂作業は、諸橋と諸橋の盟友と言われる近藤正治とともに、大東文化学院高等科に在籍した現役の学院生たちが編纂助手として携わり、開始された。

高等科生たちは戯曲や小説を含む中国古典の原典に当たるなど古今和漢の典籍を涉猟、それまでの辞書が踏襲していた誤記誤釈を正していくという作業を一手に担った。とくに原文中の熟語を拾って出典や引用文を探し出す作業や部首順・画数順に分類していく作業は、かなり高度な漢学知識を必要としたが、高等科に在籍する者の学力は相当なものであり、彼らの長期にわたる努力によってそれらの地道な作業は進められた。途中、目を酷使する過酷な作業によって視力を失う者も出たといわれる。この最初の地道で重要な作業は大東生たちによるものであったと、諸橋自身が『大漢和辞典』序文

に次のように記している。

(前略) 終始事業のため精励してくれた。然るにこの四君は終戦と相前後して約一年の間に共々世を去った。これは事業完遂の行程に於て私の受けた最も傷心の事柄であった。この四人は共に大東文化学院の出身である。外にも同学院の出身者で私に協力してくれた人々は少なくない。この事業の前半は、それらの人々が中心となって分担したものである。

このように、大東生の活躍があつてこそ刊行が実現したと讃えたのであつた。この「四人」とは、川又武、渡部実一、真下保爾、佐々木新二郎のことである。川又と渡部は大東文化学院高等科五期生で、佐々木はその後輩に当たる。真下は川又たちと本科で同期であつたが、経済的な理由から高等科へは進学しなかつた。しかし、同期のなかでもとくに成績優秀で、漢文の才能に秀でていたため編纂に携わるよう誘われた。川又は一九四五年六月に、渡部はその前年の七月に病死しており、真下と佐々木も同年夏に前後して死去した。終戦間近となつた時期に編纂の主力であつた四人が死去し、大東生が主として携わつた一つの時代が終わりを迎えた。しかし、『大漢和辞典』の編纂の基礎部分に関しては、大東文化学院高等科生と高等科卒業生たちによつて進められたものであつたことは間違いない。しかも、実際の文字収集や主要な校訂作業には、まだ力の足りない「本科生たち」はほとんど携わることはできなかつた。本科生や大東文化学院への進学を夢見る旧制の中学生たちにとつて、『大漢和

辞典』の編纂を行う先輩たちの姿は憧れそのものでもあった。その姿に憧れ、大東文化学院への進学を志したのも少なくなかったのである。

3 大東生たちの知と粹を結集

川又武と編纂作業の開始

このように、『大漢和辞典』は、膨大な書物や資料をもとに編纂されたものであった。しかし、大東生が『大漢和辞典』を誇りとして語り継いでいる理由は、その規模や質の高さからだけでは無い。何よりも、編纂に携わった人びとの高い志と苦難とがあつたからである。

大東文化学院生のなかでも、もつとも諸橋大漢和の編纂に寄与した人物と言えば、川又武である。

川又は全体を統括するリーダー的な存在で、語彙収集の段階では主として熟語を担当した。また、川又が校正した戦前の四校紙が、現在も大修館書店に大切に保管されている。見ると四校であるにもかかわらず、川又が入れた赤い文字が紙一面に確認できる。川又は諸橋がもつとも信頼を寄せた大東文化学院の教え子の一人であり、静嘉堂文庫長を引き継ぐほか、自分の研究全般の後継者と考えていた秀才であった。しかし、前述したように、敗戦直前の一九四五年六月八日に肺結核により急逝したため、川又が実際に目にする事ができたのは戦前に刊行された一巻のみで、諸橋の仕事を引き継ぐことも叶わなかった。

川又武は、大東文化学院本科二期生（二八年三月卒業）、高等科五期生（三一年三月卒業）であり、六年間を通じて大東文化学院で学んだ最初の学生の一人であった。川又が入学した翌年に着任した諸橋からの厚い信頼を得て、同級生たちからは一目おかれる秀でた才能を持ち、後輩たちからは尊敬を一身に集める、そんな存在であった。ちなみに、高等科を卒業する年には大東文化学院第二回支那旅行団にも参加しており、中国事情にも精通し、『燕呉遊蹤 第二回支那大陸旅行記』の編集著者も務めている。また、卒業後は大漢和編纂に従事するかたわら、國學院大學でも教壇に立った。後年になって、川又の國學院の教え子たちもまた、編纂事業に参画した。

第一回編集会議

一九二八年九月二日、川又武、真下保爾、山田修次、真田但馬、富永鎌次郎ら大東文化学院出身者による最初の編集会議が行われた。この会議で、「経史子集」などから語彙を選択してカード化し、語彙の原典を確認できるようにするために書物ごとの索引を作ることとなった。このとき、中国留学中の諸橋が『春秋左氏伝』のなかから人名・地名、重要語句を抜き出し、それぞれ数十冊の索引を作っていたものを参考にすることとした。諸橋は、大東文化協会出版部より諸橋轍次編『春秋左氏伝人名索引』を一九二八年に発表しており、さらに三五年には同書を改訂し、大東文化学院志道会研究部編『綜合春秋左氏伝索引』を刊行した。志道会というのは、大東文化学院内に設けられた学生団体のことで、学生たちが学問に専心し邁進できるよう大津淳一郎総長がその名称を考案し組織したもので

あった。前述したように、大東文化学院で諸橋は「春秋左氏伝」を担当しており、その成果を講義に活かしていた。受講していた学院生たちも結果、同書の編集刊行の手伝いに携わるなど「春秋左氏伝」には詳しくなっていたのである。『綜合春秋左氏伝人名索引』は、語句・人名・地名・官名・器物・動植物など一三の分類項目による索引となっており、大漢和編纂の初期作業の指針となった。

ただし、このとき決せられた編集方針には根本的に大きな問題があった。採録語句について、あまりにも悉皆的な調査収集を前提としたため、刊行までに一年以上の歳月が必要とされたことである。諸橋は日記「止軒日曆」に、何とか一九三二年三月までに第一巻刊行の目処をつけるよう学院生たちに指示を出した、と記している。この日記は二九年九月に書かれたものであったが、そうは言ったものの、採録範囲を狭めて辞典としての質を下げることもまた本意であり、諸橋は学院生たちの作業状況を確認しつつ熟慮を重ね、さらに長期の編纂作業を要するであろうことを鈴木一平へと伝えた。諸橋と鈴木にとって、ともに経費や状況から考えたと苦渋の決断であったが、結果としては学院生たちが想定した一五年の歳月を要することを承諾し、その通りの編纂期間を経て第一巻が刊行されることとなったのである。

「盟友」にして「影武者」 近藤正治

一方、初期からのメンバーで、大漢和の編纂現場に川又や渡部たち学院生たちとともにいたのが、近藤正治であった。近藤は、諸橋と同郷で同い年、東京高等師範学校でもずっと同期という仲であっ

た。本務としては奈良女子高等師範学校や東京女子大学の教授であったが、実は諸橋と同時期に大東文化学院教授となり、さらに教務課主任として学院教育を牽引していたことはあまり知られていない。学院生たちの教育には非常に熱心で、編纂室に頻繁に顔を出し指導を行った人物である。浄書（清書）段階における校閲なども一手に引き受けた、陰の立て役者であり、諸橋の「影武者」のような存在であったといわれる。のちに、第一巻刊行を目前にした頃には、毎日のように学院生たちからの相談を受けつつ、漢籍を練って再度の確認を行い、原稿に訂正事項を書き入れる日々を送った。なお、近藤はその後ももつとも長く大漢和編纂に従事しており、戦後の改訂版の編纂においても中心となって携わったが、一三巻完結を目前に控えた一九五九年に死去した。

浄書から製版へ

さて、一九三一年になると、実際に原稿用紙に語句を貼り込んだうえで、浄書を行う作業が始まった。貼り込みの作業は学院生たちが主として行い、近藤の校閲を受けつつの浄書作業であった。それを受けて整理し親字の解説をまとめる仕事は主として渡部実一が行い、訂正作業は主として川又ら高等科卒業生が行ったが、大修館書店もこの段階から社内到校正主任をおき対応することとした。しかし、一人が目を通して確認するたびに加筆することが増えていくため、語彙カードの訂正紙が重ねて貼られていくこととなり、それが延々に続くようなこともあったという。ともかく、こうしてひとまず、三二年末ごろには、浄書した原稿がいったん完成することになった。

一九三三年には大修館書店に隣接した土地を製版工場とし、原版組み置きで進められることとなった。使い回しの活字ではなく、組み版をしてからも訂正や修正が自由にできる環境が整えられたのは、当時の出版事情としては異例のことであった。三四年七月からは「棒組み」が始まったが、それでもまだ加筆が絶えなかった。

一方、それまで諸橋の雑司ヶ谷にあった自宅の一室を編纂室として使用していたが、諸橋家の引越しに伴い、借家へと移転することとなった。一九三四年に杉並区天沼に諸橋によって用意された敷地二〇〇坪、八部屋ほどある大きな借家は、陶淵明の詩句からとって諸橋が「遠人村舎」と名付けた。この「遠人村舎」は、三六年一二月には閉じられ、編纂室は再び諸橋邸の一室へと移ることとなったが、以降も編纂室を「遠人村舎」と呼び習わすようになった。

原田種成

原田種成は、大東文化学院本科六期生（一九三三年三月卒業）、高等科九期生（三五年三月卒業）である。後年、大東文化大学教授を長くつとめ、名誉教授となった。大漢和編纂には川又武から直接誘いを受けて、高等科へ進学直後の三二年七月より従事するようになった。川又たち高等科生中心で行われていた「老子研究会」の筆記を、従前に引き受けたことが縁で声がかかったという。また、このとき、原田とともに編纂作業の手伝いに誘われたのが、大島宇一であった。原田と同期生で六年間をともに学んだ仲間でもあった。大島が川又と同郷で顔見知りであったことが編纂の手伝いに誘われるきっかけ

けで、のちに渡部実一の死後には津田塾の講師を引き継ぐこととなった。なお、大島は戦後に小平市の市長を四期にわたって務めた。

さて、原田は大漢和編纂に従事した頃のことを次のように回顧している（原田、一九九二）。

「原本」と称した素原稿が作られており、「原本」を原稿用紙に清書することが外部のアルバイトによって進められていた。

「原本」は菊四倍版（縦六三三ミリ横九三九ミリ）の特製原稿用紙約七万枚。それは白紙に周囲の枠と中に三本ほどの横線が印刷してあり、それに既刊の辞書の各々の語彙が切って貼り込まれていた。

原田が編纂室へ行ってみると、すでに最初の校正刷が部屋の片隅に積まれていて、このような様子であった。一九三二年というとすでに大部となる校正刷ができあがるうとしていた時期だったが、原田たちは原稿の浄書を手伝いつつ、その内容をさらに完全にするために、後から気付いた語句を原書白文から拾ってきて、語彙カードを追加することもあった。

「大東漢学」「大東読み」への意見提示

一九三四年になると、東京高等師範学校出身で、中国留学から帰国したばかりの原富男が諸橋に誘

われ編纂に携わるようになった。この頃より、大東生たちだけでなく、高等師範のほか、東京帝大などの学生たちも手伝いに来るようになった。後述する小林信明もその一人であった。

一九三八年、これまでの成果が詰まった校正紙が諸橋のもとへ届けられた。この校正紙を諸橋は、鎌田正と米山寅太郎の二人に見せることとした。二人は東京高等師範学校の卒業で、諸橋の教え子の中でも川又と並んでとくに期待をかけられていた人物であった。ともにのちに東京文理科大学教授となった。諸橋が二人に率直な意見を求めたところ、主に資料の読み方についての疑問点がいくつか出され、その意見を受けて諸橋は出版を遅らせることを決意した。大東生たちとは異なる視点による手入れも必要と判断し、近藤正治を筆頭に、鎌田と米山のほか、小林信明と渡辺末吾という東京高等師範学校出身者五名による修正作業が行われた。その意見を受けて、編集会議でさらに出典、引用文などの再確認がとられ、疑問の残るところは徹底的に検討が加えられた。このうち、近藤は大東生たちにとって諸橋と並ぶ学院の尊敬すべき師であり、小林は在学中から原富男を通じて「遠人村舎」で手伝いをし、大東生たち主催の研究会にも顔を出していた仲間であったこともあり、双方の橋渡し役となった。

一九四一年の秋頃になって、棒組みのままだったゲラを各巻に分け、第一巻と第二巻の掲載字句がほぼ決定し、四三年九月の発行期日が決定することとなった。ただし、当時は用紙統制が激しくなった時期で、日本出版文化協会へ「企画届」「発行届」を出さねばならなかった。それに承認をうけて「用紙割当通知」をもらうのであるが、通常以上の用紙量が必要な辞典には特別な割り当てをもらわねば

ならず、統制を行っていた軍部への「お願い」が必須であった。諸橋と鈴木一平はたびたび軍部へ足を運び、「お願い」を繰り返したという。その甲斐あって、四二年、第一巻の一万部発行が承認された。王子製紙十条工場において用紙の調達が叶い、翌年九月一〇日に第一巻を刊行することが決定したのであった。

本科生たちの助力

この頃、本科卒業後に縁あって『大漢和辞典』の編纂に携わった者が何人かいた。たとえば、卒業を目前に控えたころから大修館書店で一年ほど編集部の手伝いをする事となった伊東和信である。大東文化学院本科一五期生であり、第二部国語漢文科一期生として、四一年三月に卒業した。のちに一〇〇歳となった伊東が語ったところによると、若いころに編纂を間近に見た一年間は濃密であり、昨日のこのように思い出すことがあるという。

奇しくも諸橋と同郷であった伊東は、一九四一年に卒業を間近に控え、大修館書店の手伝いに誘われた。編集助手や植字工の手伝いという形のアルバイトであったが、故郷の新潟に戻るよりは東京に残りたかったこともあり熱心に勤め、卒業後は社員となってしばらく続けることにしたという。翌四二年に徴兵されたことにより、仕事を離れることになったのは残念だったが、戦地でなんとか生き延びることができ、敗戦後は大陸からロシアへさまよいながらも帰国することができた。その後は郷里へ戻り、教職の道につくことを選んだ。大修館書店からの誘いもあったため古巣の職場に戻りたい気

持ちもあつたが、敗戦後の大修館書店は先行きが見通せない壊滅的な状態であつたため、家族のためにも安定した職を選ぶことにした。あのとき東京に残り、大修館書店に戻っていたらどうなっていたらうかと、一〇〇歳を迎えてもまだその選択に少し心残りがあると伊東が語るほど、大東生たちにとって『大漢和辞典』編纂に携わるとは荣誉で憧れだったのである。

伊東が大修館書店でアルバイトに就いていた時に出会つたのが、木村直吉と片岡梅治という二人の彫師であつた。ちょうど一九四三年九月の第一巻の刊行を前に、字母を実際に木版彫刻に彫る段階に至つた頃であつた。「遠人村舎」の先輩たちの指示を受け、彫師に依頼をする。正確に伝える必要があるので、ある程度の専門的な知識が必要な仕事で、そのために大東文化学院の本科生は有用な存在であつた。

そのほか、伊東よりも少し年長の河西一雄や飯沼喜八郎なども大東文化学院本科を卒業後に数年ほど編纂を手伝ひに通つた。このころ、卒業から数年間を「遠人村舎」で過ごす卒業生は少なくなかつたのである。河西と飯沼は同期で、一九三六年三月に卒業した本科一〇期生である。高等科へ進み、後に大東文化大学教授となつた猪口篤志と同期であつた。ちなみに、猪口も在学中に「遠人村舎」へ何度か手伝ひに通つていた。東京の就職難はなお厳しいところで、郷里に帰つて漢文科教師となるか、仕事の目処は立たないが東京に残るかを選択のなか、東京に残つて漢学に携わることができると希有な環境を、大漢和編纂と諸橋の「遠人村舎」は大東生たちに与えてくれたのであつた。

第一卷の刊行

一九四三年九月一〇日、大修館書店『大漢和辞典』第一巻が刊行された。限定一万部、一一二五頁、親文字一四四四字、装丁は玉蘭原料の背革の代替品とはいえ、かなり豪華な仕様で刊行されたのは、用紙統制の厳しい戦時下においてまさに奇跡的なことであった。しかし、戦禍が激しさを増し、予定されていた第二巻以降が続くことはできなかった。大修館書店も爆撃を受け、二巻用に用意された資料、原版もすべて焼失してしまったのである。その後、資料や校正紙の一部が地方や静嘉堂文庫に分散して残っていることが判明、それをもって再び刊行へと繰り返し出すこととなった。一九五五年に改訂版一巻が刊行され、六〇年にかけて一三巻が刊行され、いったん完結となった。その後、二〇〇〇年に補遺が出され、『大漢和辞典』は現在、全一五巻として大修館書店より刊行されている。二〇一八年には、それまで情報が多すぎたため不可能とされていたデジタル版も、大修館書店創業百周年事業として制作が実現した。

参考文献

- 諸橋轍次編（一九二八）『春秋左氏伝人名索引』白橋康秀校正
 大東文化学院志道会研究部編（一九三五）『綜合春秋左氏伝索引』大東文化協会出版会
 『大漢和辞典』第一巻（一九四三）大修館書店
 『大漢和辞典』全一三巻（一九五五—六〇）、語彙索引付修訂版全一四巻（一九八九—九〇）、補巻修訂版全

- 一五卷（二〇〇〇）、デジタル版（二〇一八）大修館書店
- 大東文化学院支那大陸旅行団編（一九三〇）『大東文化学院第一回支那大陸旅行記』大東文化学院
- 川又武編（一九三一）『燕吳遊蹤 第二回支那大陸旅行記』大東文化学院
- 岩澤巖編（一九三一）『支那旅行案内』大東文化学院
- 諸橋轍次（二〇〇二）『誠は天の道 東洋道德講話』麗澤大学出版会
- 原田種成（一九九二）『漢文のすゝめ』新潮選書
- 鎌田正監修、諸橋轍次記念館編（一九九二）『諸橋轍次博士の生涯』大修館書店

第7章

碩学たちによる最高峰の漢学教育

「官学派」教員と前川三郎

本章における「官学派」教員とは、大東文化学院紛擾で「私学派」教員たちが一斉辞任した際に招聘され、学院の教育を担った教員たちを指す。ただし、「私学派」には明確な結束があったが、「官学派」教員にはそのような結束は基本的には見られない。したがって、ここでは「私学派」ではない教員たちを便宜的に分類したものととして、「官学派」ということばを使用するものとする。本章ではとくに中立的立場を貫き、常に客観的で俯瞰的に学院を見ていた前川三郎を中心に見ていくこととしよう。

1 「官学派」教員の招聘

一九二六年度の教員一覧

大東文化学院紛擾によって多くの「私学派」教員が一時的に学院を離れた際、学院の教育を担うために招聘された教員たちの多くは「官学派」と類され、その多くは一九二六年度に着任した。鶴澤總

明、北吟吉、平沼淑郎など創立年から在籍していた教員も一部含まれるが、同年度の教員一覧は次のようになる。

市村瓊次郎、飯島忠夫、深作安文、岩橋遵成、服部宇之吉、加藤繁、金子元臣、神田喜一郎、吉田静致、瀧川亀太郎、田中逸平、中山博道、宇野哲人、鶴澤總明、内野台嶺、植木直一郎、大島健一、大峽秀栄、大槻豊、桑田福太郎、久保得二、熊坂圭三、近藤奎、山岡萬之助、安井小太郎、矢木参三郎、松本愛重、前川三郎、小柳司氣太、古城貞吉、近藤正治、高於兎三、有馬祐政、佐久節、北吟吉、木村巖、三瀧信三、見尾勝馬、峯間信吉、宮原民平、清水澄、塩谷温、島田鈞一、平沼淑郎、内藤政太郎、平野彦次郎、樋口勇夫、諸橋轍次、森茂、包翰華、山口伝一、有田平蔵、井場正人、齋藤徳明、江山整、古徳勘十郎、中村豊次郎、富永鎌次郎、遠藤房治、布留川英治といった顔ぶれであった。とはいえ、「官学派」とされる教員たちに明確な結束があったわけではなく、帝国大学出身者にこだわっていたわけでもなかった。のちに学院総長や学長、教授会長などをつとめたこととなった小柳司氣太や宇野哲人、市村瓊次郎など帝国大学出身者が多かったものの、たとえば、前章の諸橋轍次や近藤正治のほか、内野台嶺などは官立の東京高等師範学校の出身であったし、当時の中国語の授業を担当した宮原民平や田中逸平は私立拓殖大学出身であった。前川三郎や金子元臣などのように、私塾で学んだ世代も含まれている。そのように集められた教員たちであったので、後述するように、「私学派」とされる教員たちとの学問上の関係もおおむね良好で、敵対するようなことはなかった。

小柳司氣太

なかでもとくに、官学派の教員のなかで指導的役割を果たしていくこととなった小柳司氣太は、着任以降、一貫して大東文化学院の発展に携わることとなった人物であった。小柳は一八七〇年一月三日に新潟県上保内村（現・三条市上保内）に生まれ、西蒲原郡吉田町の私塾「長善館」に学んだのち、九一年九月より帝国大学文科大学に進み、漢学科を専攻した。九三年に卒業した後、哲学館（現・東洋大学）や学習院、東京帝国大学、國學院、慶應義塾等多くの高等教育機関において漢学を教授した。大東文化学院には前川や諸橋などと同じく一九二六年度より教授として就任しており、以後は大東文化学院の発展と教育に情熱を注いだ。三八年には大東文化学院教頭および高等科部長を務め、四〇年四月からの一時期には「教頭」職を「学長」と呼称したため、学院時代において唯一の「学長」となった。学長在職中の四〇年七月一八日に死去したため、便宜的に鶴澤總明が「学長」名を数日間だけ引き継いだ。実質的には戦前期の「学長」は小柳だけで、学院教育の責任を負う役割を果たした。小柳は文学博士として、道教研究の第一人者でもあった。『新修漢和大事典』の監修者として知られるが、そのほかにも精力的な研究により『老荘の思想と道教』『東洋思想の研究』等、多数の著書を残した。

2 高等教育機関における前川三郎

漢文科教員として漢学教育に従事

前川三郎は、一八八〇年一月に三重県に生まれた、支那詩学を専門とした漢学者である。研堂と号した。一九〇二年より、国語漢文科中等教員および漢文科高等教員試験に合格し、三重県立二中、浜松中学、川越中学、東京府立一中などで教壇に立った。一三年から慶應義塾専門部教員（後に慶應義塾高等部教授、慶應義塾名誉教授）を勤めるかたわら、二六年度より大東文化学院教授となった。しかし、大東文化学院での在任期間はわずか二年弱であり、その就任期間の短さもあって本学沿革史のなかでその名前を見ることは従来ほとんどなかったと言つてよいだろう。前川はそのほか、聖心女子学院高等専門学校（現・聖心女子大学）や智山専門学校（のちに大正大学と合併）などでも教鞭をとつている。

慶應義塾高等部教授

前川三郎の教育者としての経歴の中心は、その在職期間の長さからも慶應義塾高等部教授としてのものであったと言える。前川が所属した慶應義塾「高等部」は、旧制専門学校に相当する機関であり、もとは慶應義塾「専門部」の名称で一九二二年四月に開設されたものであったが、二五年二月より「高等部」へと改称した。前川三郎が慶應義塾専門部教員に着任するのは、二三年度からのことであった。

その後、慶應義塾高等部が廃止となる四四年三月まで在職した。退職にあたり、慶應義塾より「教育実践上の功績について」表彰を受け、同年四月には慶應義塾名誉教授となった。なお、四四年度より慶應義塾高等部は募集停止となったが、在籍者のあるなしかかわらず即廃止されることとなった。

戦時下の事情もあつたと思われるが、いずれにせよ、前川三郎は慶應義塾高等部の存続した期間、ほぼすべての時期をそこで過ごした教員であつた。ちなみに、前川の慶應義塾への着任時の職位は「教員」とのみ記されており、「教授」への職位変更は四一年度からのことである。慶應義塾に在職中、前川は担当科目を「国語・漢文」としていた。当初は本科および予科において国語と漢文を担当していたが、その後高等部の予科課程が三一年度より修業年限短縮の観点から廃止となつたため、高等部の国語・漢文担当教員となつた。ただし、三二年度および三三年度、さらには三八年度以降から退職までは国語は担当せず、漢文のみを教えた。

3 大東文化学院教授就任の経緯

前川への教授委嘱

前川三郎が大東文化学院教授に就任するのは、「教員一覧」など当時の学内資料を確認すると、慶應義塾で教員となつてから三年目の、一九二六年度のことであつた。ただし、大東文化学院で講義を行うようになったのは四月ではなく、五月からのことであつたようである。これより前、二三年八月

に提出された「大東文化学院設立申請書」中に添付された「教員配当表案」に、「助教 前川三郎」の名を確認することができる。学校設立にあたり教員一覧を提出する必要があり、その名簿に前川は名前を連ねていたのである。開校してから実際に着任しないままの教員は前川のほかにも多数おり、当時の高等教育機関において教員が複数の学校を兼務することはよくある慣習であった。

前川の日記上において、大東文化学院の文字が最初に見られるのは二六年四月二八日のことであった。この日の日記には、「大東文化の見尾氏来訪」とのみ記されている。「見尾氏」とは見尾勝馬のことと思われ、「教育学」「西洋思想史」等を担当した大東文化学院助教で、同年は教務課主任だった人物である。ちなみに、翌年四月より教務課主任は近藤正治へ交替となった。

さらに翌日の四月二九日の前川日記によれば、前川は「青崖翁」「松本洪君」を訪ねて夕方まで「雑談」したと記しており、その折に「大東文化へ出勤のこと」について「諒承を求」めたと書いている。次章の「私学派の人びと」で見えていくように、青崖（國分高胤）や松本洪は「私学派」教員の代表格であった。さらにその翌三〇日には、再び「見尾君」が訪ねて来て、何らかの「約束を交わし」たのみ記している。

前川はその後、五月二日早朝に「青崖翁」を、午後に「宇野博士」を訪ねたあと、夕食を「市村博士」とともにし、その場で「出勤を約す且助教の助の字を去られんことを求む」と記している。「宇野博士」とは宇野哲人、「市村博士」とは市村瓊次郎であろう。そして、翌日の五月三日の日記には「大東文化学院の授業を始む」と書かれているので、驚くべき展開の早さであった。同日の夕方に再

び「青崖翁」を訪ねているので、初日の授業を行った報告もこのとき行つたのではないかと思われる。さらにその翌日、五月四日は大東文化学院教授会が行われたはずであるが、同会議に前川が出席したのかどうかは定かではない。同日の前川日記には「曇」と一文字で天気のみが記されていて、あとは空白となっている。ただし、後述するように、後日に教授会での決議事項に関する通知が郵送で届けられた記録があるので、そのことから推測するに、おそらくこの日の会議に前川は出席していないのではないだろうか。

同時期、前川は足繁く「青崖翁」のもとへと通っている。それは大東文化学院着任のこととは別に、五月五日に行われた「青崖翁古稀祝」の準備と打ち合わせがあつたためで、この祝宴には辞任した「私学派」教員も多く参加した。「官学派」とされる教員も幾人が参加しており、盛大に行われた様子がかがわれる。その後も晩年まで定期的に「青崖翁」のもとを訪れ漢学研究を行っていること、「松本洪君」ともかなり親密に交流していることが日記上から確認される。彼らとは生涯にわたり漢詩研究の共著書出版などの繋がりがあつたためである。

「学科委員」の選定

ところで、前川の大東文化学院着任直後の、五月一〇日の消印が押された、大東文化学院より青山の前川自宅宛てに郵送された封筒が確認できる。これは大東文化学院からの書簡中、確認できる範囲ではもつとも古いものである。そこには大東文化学院教授のうちより新たに「学科委員」に五名が着

任することが決議された旨が、次のように記されてあった。なお、同書簡には前川への委嘱理由や学院内の特段の事情などは記されていない。

「去ル本月四日教授会ノ決議ニ基キ学科委員ヲ設置シ総長之ヲ嘱託シテ教務ヲ補助スルコト相成
今般左記五名ニ本委員ヲ嘱託セラレ候間御了知相成度此段得貴意候

大正十五年五月十日

大東文化学院 印 前川三郎 殿

(裏面)記

教授会長 市村瓚次郎 殿

同 松本愛重 殿

同 宇野哲人 殿

同 岡田正之 殿

同 塩谷温 殿

追テ市村博士ハ前記教授会当日(本月四日)教授会長ヲ嘱託セラレ候間是又為念申添候」

上記のように書かれた書簡は、つまりは教授会長となった市村瓚次郎ほか四名が新たに学科委員に

就任することが決定されたことを知らせたものである。同時期の学科委員の職務内容は不詳だが、教務に関する業務を補助するものと記されているので、学務関係を取り仕切る立場にあったと考えられる。この五名は「官学派」に属する教員であり、後に一九二七年一月に総長の鵜澤總明が「私学派」教員を復職させることを決定した際には辞職願を提出し抗議した教員たちに含まれる。そのとき「官学派」教員は、「私学派」教員の復職を不服として辞職届を提出したのである。ともかく、前述したように、前川は大東文化学院就任にあたっては市村と会食して大東文化学院への着任を承諾しており、「私学派」教員に代わって中心となっていたのがこの五名であった。

こうして前川三郎は大東文化学院教授に着任した。以降の前川日記には、週のうち二日から三日程度の頻度で「大東文化」あるいは「大東文化学院」「学院」の文字が登場するようになり、「大東文化」に寄り提出「大東文化学院教授会議ありて」等と記されるようになったのである。

4 「官学派」教員たちの「初年度」

初年度の担当校務

前川の担当した科目は、教員担当表によれば、初年度は本科一年の「唐詩選」と本科一年から三年の「作詩」であった。また、一九二七年度からは、本科一年および二年に「唐詩選」を、本科二年に「古文作詩」を講じている。ただし、実際には「唐詩選」のほかに「十八史略」も講義していたようで、

前川の残した紙片資料のなかには、月曜日および木曜日の朝一〇時から午後三時までの四コマ、計八コマ分を本科一年生への「十八史略」の授業として受け持っていた時間割表や記録がある。一方、同時間割表によれば、主担当であった「唐詩選」については金曜日に一コマを講じたようだが、「作詩」は同表には記載がなかった。曜日および時間の変更を依頼する葉書も残されており、それらを見ると同年度の教員配置に関して多少の混乱があったようである。

講義のほかにも前川の業務は多くあり、年間を通じて多忙であった。教授会等の会議への出席、「伊勢大廟参拝旅行」や野外演習、射撃演習の引率を依頼する大東文化学院からの書簡や葉書が複数残されている。また、年度途中の一二月より「学年主事」を設けることとなり、前川は本科一年の学年主事を委嘱されている。同年の学年主事には、本科二年に近藤正治教授、本科三年に平野彦次郎教授、高等科一年および二年に岡田正之教授、高等科三年に小柳司氣太教授が着任した。

入学者選考試験

一九二七年一月八日、大東文化学院において入学者選考試験が実施された。この日の前川日記には、「大東文化学院入学試験監督の為出勤」と記されており、続けて「受験者三百人余」とある。後述するように、同年の入試予定日は一月八日であったから、大正天皇崩御からおよそ二週間後、昭和へと年号が変わったこと以外、大東文化学院の入試は予定通りに実施されたということになる。また、同年の大東文化学院本科一学年の定員は約六〇名とされたので、受験倍率は約五倍ということになり、

これは当時としてかなりの受験者数であったと言つて良いだろう。

同日の日記には続いて、「予の実務は作文なり午後一時より三時まで二時間爾來採点に従事」とある。翌日には、「終日採点夜十一時に至りて全部終了」と記されていた。その後、一月一七日には「大東文化学院新入学生決定会議にて六一名を合格と決した」と、かなり詳細な記録を書き残している。続いて、一月二七日には「大東文化入学試験謝礼三十円受領」と記してあった。

この入試業務終了から間もなく、前川日記によれば、一月二〇日には「大東文化学院有志教授会総長候補」についての議論があつたと記されている。さらに、一月二九日の日記には「大東文化助手相良訓戒を受け」たと書かれており、これは学院紛擾に伴う処分であつた。このとき大東文化学院で助手をつとめていた相良政雄は、学院紛擾発生時には高等科二年に在籍する学生であつたが、当時より「私学派」教員に賛同する立場を貫いて退学処分を受けており、優秀であつたために助手として呼び戻されてからも執行部体制へ意見する態度が度々問題視されていた。のちに「官私合同融和」方針のもと、鵜澤總明が総長となつた折に大東文化学院講師として再び採用されたものの、「官学派」からの猛烈な反発を受けて半年ほどで解職となつている。相良はその後の短い生涯のなかで、早稲田大学や国士館、二松学舎等で教壇に立ちつつ、主に財団法人無窮会において研究活動を続けた（コラム3を参照）。

大東文化学院第一回卒業式

一九二七年三月八日、大東文化学院第一回卒業証書授与式が行われた。大東文化学院の始業から三年三か月、高等科卒業生二六名、本科卒業生五〇名に卒業証書が授与された。講堂での式典の後、学内別室に移動して職員謝恩会が開かれており、謝恩会では学生からの謝辞や先生からの演説などのあとに「前川教授の祝詞」も披露された。前川日記にも「午後一時より大東文化学院第一回卒業式参列夕方帰宅」とあった。また、三月一四日の前川日記には「大東文化一年の試験をなす」、三月一六日には「大東文化学院教務主事会議」と書かれてある。

こうして前川三郎の大東文化学院着任から約一年が経った。翌年度も同科目を担当するかたわら、一九二七年四月一日の始業式に参列し、人事発令によって、前川は本科三年の「主任」に着任することとなった。前年度途中の「学年主事」と同義の職務と思われる、



名称が「主事」から「主任」へと変更されたようである。同年に主任に嘱託されたのは、本科一年主任に近藤空助教授、同二年主任に内藤政太郎助教授、高等科一年主任に平野彦次郎教授、同二年主任に岡田正之教授、同三年主任に小柳司氣太教授であった。近藤空および内藤政太郎は大東文化学院高等科一期生として三月に卒業したばかりの新卒採用で、在学中はともに「官学派」教員へ賛同した学生であった。

5 教員構成の変更

一九二五年の教員一覧

学科目を担当していた教員構成には、どのような変化が見られたのだろうか。大東文化学院高等科一期生たちが創刊した『同学』という冊子から、当時の教員の変遷を辿ってみよう。

『同学』は、年度末発行の、主として高等科学生による研究論文数編と年度ごとの学校記録を収めた冊子であり、第一号（一九二五年）から第四号（一九二八年）まで発行されたものである。とくに巻末には「特別会員」として教員一覧が掲載されており、当時の教員構成を探る有用な参考資料となる。

『同学』第二号の発行は一九二五年一〇月八日であり、同号に「特別会員」として記載された教員は四九名、総長・井上哲次郎、前総長・平沼騏一郎、相談役・江木千之、同・鈴木喜三郎、同・山本悌二郎、総務・山岡萬之助のほか、次の教員名が見られた。

池田四郎次郎、今井彦三郎、岩橋遵成、鶴澤總明、内田周平、加藤虎之亮、狩野直記、川合孝太郎、川田瑞穂、北吟吉、木野村政徳、國分高胤、小山薫雄、佐藤仁之助、島田鈞一、清水澄、鈴木虎雄、高塚錠二、館森万平、内藤虎次郎、中村進午、中山博道、那智佐典、服部宇之吉、平沼淑郎、牧野謙次郎、松平康國、松本愛重、松本洪、安井小太郎、渡俊治、井場正人、岡崎壮太郎

そのほかに職員および校医一一名を加えた計五〇人の「特別会員」の名前が記載されている。「正会員」は、高等科および本科に在籍する現役学生であった。

『同学』第二号は一九二六年三月二〇日に発行された。同号には会員一覧資料は付されなかったが、「大正十四年度に於ける学科課程及担任」表が巻末にあり、本科一年および二年、高等科一年および二年の学科目と、担当教員名が記載された。それらを確認すると、第一号にあった教員名と一致したものであった。なお、「正会員」である学生名簿も第二号には掲載されなかったが、一方で「教職員住所一覧」は掲載されており、教員（特別会員）の「大正一五年三月現在」の住所が記されている。

一九二七年度および一九二八年度の教員一覧

『同学』第三号は、一九二七年三月一六日に発行されており、巻末には再び会員名簿一覧が確認できる。「特別会員」である教職員六〇名と、「正会員」である在校生二四六名の氏名を確認することができる。これによれば、同年における教員構成は次のようになっており、前年度から大きく変更してい

たことがわかる。

市村瓊次郎、飯島忠夫、深作安文、岩橋遵成、石崎政仇、服部宇之吉、加藤繁、金子元臣、神田喜一郎、吉田静致、瀧川龜太郎、田中逸平、竹下幾太郎、中山博道、宇野哲人、鶴澤總明、内野台嶺、植木直一郎、大島健一、大峽秀栄、大槻豊、桑田福太郎、久保得二、熊坂圭三、近藤李、山岡萬之助、安井小太郎、矢木参三郎、松本愛重、前川三郎、小柳司氣太、古城貞吉、近藤正治、高於兎三、有馬祐政、佐久節、北吟吉、木村巖、三濑信三、見尾勝馬、峯間信吉、宮原民平、清水澄、塩谷温、島田鈞一、平沼淑郎、内藤政太郎、平野彦次郎、樋口勇夫、諸橋轍次、森茂、包翰華、山口伝一、有田平蔵、井場正人、齋藤徳明、江山整、古徳勘十郎、中村豊次郎、富永鎌次郎、遠藤房治、布留川英治

続く『同学』第四号は一九二八年三月一六日発行であった。同号の巻末には「特別会員名簿追加」の記述があり、二年前に辞職した「私学派」の「教員の復職がこのたび実現し、教員が入れ替えとなる予定」である旨が、同号あとがきに相当する「編輯を終へて」に記されている。三月の発行間際に決定された急なことであり、編集が間に合わず、「失礼ながら末尾に掲載」させてもらうこととした、との事情が併せて述べられている。ここで復職することとなったという教員は、次の一三名であった。

山田準、松平康國、田邊為三郎、内田周平、細田謙藏、國分高胤、今井彦三郎、池田四郎次郎、川合孝太郎、佐藤仁之助、加藤虎之亮、那智佐典、川田瑞穂

同号にはこれら「私学派」教員の名前が追加され、一九二八年度以降の「新しい先生の分」と紹介している。それから約半年以上経った二八年二月、大津淳一郎が新たに第六代総長に就任し、それによってようやく長く続いた学院紛擾は収束に向かい、「同学会」および『同学』は廃止されることとなった。大津淳一郎は総長就任にあたって学生たちに対し「官私合同」「学問専心」を提唱しており、以降は官私相互の融和と団結を志すことを目指して「同学会」は発展的解消となり解散、新たに学生団体「志道会」が発足することとなった。

『志道』の刊行

『同学』第四号発行から二年後、一九三〇年三月一日に「志道会」より『志道』第一号が発刊された。誌面構成は『同学』に似ており、同誌巻末には「名誉会員」としてやはり教員一覧が掲載され、そこには六三名の名前が確認できる。一覧に前川三郎の名前はすでになく、『同学』第四号において復帰したとされる一三名の教員も幾人か確認できない。山田準、田邊為三郎、内田周平、細田謙藏、國分高胤、今井彦三郎、川合孝太郎、佐藤仁之助、那智佐典の名前はあるものの、松平康國、池田四郎次郎、加藤虎之亮、川田瑞穂の四名の名前は誌上に記されていない。ただし、このうちたとえ

ば川田瑞穂は、二八年四月に教授として復帰し学生監を兼務していたのであるが、同年六月に辞職している。大東文化学院高等科一期生で新規教員となっていた内藤政太郎および近藤奎両助教について、彼らの言動が学院運営に障害を及ぼすと考えた川田は「弾劾書」を学院へ提出したのであるが、それと同時に自らも辞したのであった。このほか、『志道』第一号巻末の会員名簿より「名誉会員」一覧をあらためて確認しておこう。

大津淳一郎、今井彦三郎、石田羊一郎、岩橋遵成、伊藤吉之助、服部宇之吉、細田謙蔵、小柳司氣太、岡村利平、川合孝太郎、金子元臣、蒲生裕之助、加藤繁、田邊為三郎、芳野幹一、館森萬平、高成田忠右衛門、田中逸平、竹田復、那智佐典、高塚錠二、頼成一、内田周平、鶴澤總明、宇野哲人、内堀維文、内野台嶺、包翰華、安井小太郎、山田準、山岡萬之助、山内惇吉、松本愛重、増田惟茂、國分高胤、深作安文、小松武治、東季彦、佐藤仁之助、齋藤坦蔵、三瀧信三、峯間信吉、宮原民平、見尾勝馬、清水澄、平野彦次郎、諸橋轍次、柏崎延二郎、市川林太郎、中山博道、大槻豊、松本清、矢木參三郎、桑田福太郎、佐々木英夫、山口伝一、有田平蔵、古徳勘十郎、中村豊次郎、江山整、富永鎌次郎、野村喜八郎、鈴木為三郎

以上の名簿から、市村瓊次郎、飯島忠夫、石崎政仇、神田喜一郎、吉田静致、瀧川亀太郎、竹下幾太郎、植木直一郎、大島健一、大峽秀栄、久保得二、熊坂圭三、近藤奎、前川三郎、古城貞吉、近藤

正治、高於兎三、有馬祐政、佐久節、北吟吉、木村巖、塩谷温、島田鈞一、平沼淑郎、内藤政太郎、樋口勇夫、森茂、井場正人、齋藤徳明、遠藤房治、布留川英治の名前がないことがわかる。すべて「官学派」とされた教員たちである。もつとも、このうちたとえば、飯島忠夫はその後大東文化学院の教授として復帰、戦後になってからは大東文化大学第二学長に就任しており、大東文化学院へと戻ってきた教員も幾人か確認することができる。

「官学派」教員たちの会合と退職

前川日記によれば、一九二八年二月八日に「元大東文化学院教授」たちによる会合が開催され、「幹事は市村、宇野、飯島、近藤正治の四君なり」「次回は塩谷、古城、諸橋、前川の四名」、そして同日には「元大東文化学院教員」の「市村、松本（愛重）、小柳、塩谷、宇野、飯島、高、石崎、吉田（静致）、平野、前川、諸橋、内野、桂木、大峽、近藤（正）、熊坂、佐久、古城、加藤（繁）」の二〇名が集まったと記されていた。このときすでに「元」と認識していたことがわかる。ただし、このうち小柳、宇野、諸橋、内野などは翌年度も引き続き大東文化学院に留まって講義を行っているため、その後に翻意があったのか、前述の飯島忠夫も含めて残留や復職を決めた者もいたことが推察される。なお、前川の担当していた科目から見ると、もともと「唐詩選」の講義を担当していたのは松平康國、「作詩」の講義は國分高胤（青崖）であったが、不在の二年間を前川が担当し、前任者へと担当が戻されたということになる。

なお、のちに旧制専門学校時代に大東文化学院最後の総長を務め、さらには新制大東文化大学初代学長となった土屋久泰（竹雨）が大東文化学院講師となったのは一九三〇年度からのことであった。國分高胤の後任として「作詩」を担当し、その後すぐに大東文化学院教授となり、戦時下から新制大学へ移行するまで長期に渡り大東文化学院を支えることとなった（コラム2を参照）。

『漢詩大講座』

ところで、大東文化学院創設以来の「生え抜き」の教員たち、つまりいったん辞任した「私学派」教員たちと前川との関係はどうであったのか。それを知る手がかりの一つとして、國分高胤が監修した大著『漢詩大講座』を見てみたい。

國分高胤監修の『漢詩大講座』は、一九三六年から三八年にかけてアトリエ社から和装本として刊行された、全一卷からなる大著であるが、このうち、第二卷『絶句律詩今體詩法』が土屋竹雨、第三卷『今體詩作法』が前川三郎研堂、第四卷『作詩資料及語彙 上下』が佐賀保香城・土屋竹雨編となっており、以降も、第五卷『名詩評釈 詩経』吉田増蔵校、同卷『名詩評釈 漢魏六朝』加藤虎之亮校などと、共著校者の顔ぶれには大東文化学院教授たちの名前が多々見られる。発行された時期は、前川の大東文化学院辞職後から数年経ていることから、その後も良好な関係を築いていたであろうと推察される。なお、それからさらに四五年ほど経って、名著普及会によって一九八一年にこの一部が復刻出版されており、土屋竹雨・前川研堂著『漢詩作詩法・資料集成 作詩資料及語彙 絶句律詩今

體詩法・今體詩作法」が刊行された。

6 前川三郎の大東文化学院退職

辞表の提出

「官学派」教員たちの退職の経緯は前述した通りであるが、あらためて前川の退職の詳細を確認しておこう。

一九二八年一月八日、大東文化学院の二八年度入学試験が行われた。前川日記によれば、前川は昨年同様に本科の作文を担当し、同年の受験生約三〇〇人分の採点を行い、一月一日に採点結果を大東文化学院へ提出しに向いた。その折、市村教授より辞表を提出したと伺った旨を日記に記している。

翌一二日、前川は「大東文化学院教授の辞表を学院総長」へ宛てて提出した。その足で「市村博士を訪ねて報告」しようと自宅を訪ねたが不在であったこと、さらに安井教授ほか数人に対して辞職の挨拶を行ったことが日記に記されている。前川の大東文化学院辞職は、前述の「官学派」教員陣の一斉辞職にもなうものであったと考えられる。同月一六日、市村、宇野、小柳、松本愛重のほか一六名の教員たちの一斉辞任が発表された。さらに同月二一日、前川日記には大東文化学院三年生二人が自宅を来訪してきて、「新旧教授の妥協」を希望して「復職せられたし」との願いを受けたことが綴られているが、それに対しどう答えたかは記されていない。ただ、前川に関しては、その後大東文

化学院へ戻ることはなかったことは確かである。

「官学派」教員たちの招宴

同年二月七日の前川日記には、宇野博士による「招宴」があったこと、同席には自身のほか「市村、塩谷、飯島、山口、岡田、宇野、佐久、近藤（正）、小柳、内野の十名」が集まり、「服部、諸橋、中村の三君欠席」と記録されている。さらにその翌日となる二月八日に、「元大東文化学院教授」たちによる会合があったことは、前述した通りである。前川日記には、「幹事は市村、宇野、飯島、近藤正治の四君なり」「次回は塩谷、古城、諸橋、前川の四名と決定」「年二二回開会の事となす」とある。同日は「元大東文化学院教授」であった「市村、松本（愛重）、小柳、塩谷、宇野、飯島、高、石崎、吉田（静致）、平野、前川、諸橋、内野、桂木、大峡、近藤（正）、熊坂、佐久、古城、加藤（繁）、の二十名出席」と記しており、辞職を表明した「官学派」教員二〇名が集ったようである。同年の大東文化学院教員一覧にある名前は六〇名であったので、ここに実に三分の一が集合していたこととなる。もっとも、前述したように小柳や飯島、諸橋などはその後もそれぞれ大東文化学院に留まっている。

第二回卒業式および謝恩会と退職通知

同年三月二日、前川三郎は「大東文化学院卒業生の謝恩会に臨む（池之端東仙閣にて）午後九時閉会」と日記に記した後、以降は大東文化学院の文字が日記に見られることはなかった。前川の残した

資料中には、同年二月二九日の消印の一通の書簡が残されていた。大東文化学院から送られたその封書の中には、退職処理に関連して四枚の書類が納められていた。前川教授の退職を認める通知、退職金に関する文書、二月分の給与支払遅延に関する説明文書、給与支払調書の四点である。そのうち一点目の通知文書には、次のように書かれていた。

前川三郎殿

願ニ依リ本学院教授ノ囑託ヲ解ク昭和三年二月二十九日

大東文化学院総長事務取扱 鶴澤總明（印）

こうして前川三郎は、同年二月末をもって、在任期間わずか二年足らずで大東文化学院を辞すこととなった。一九二八年度の授業担当者としてすでに発表されていた一覧には前川三郎の名前も記載されていたことから、当初は翌年度も授業を行う予定であったと思われるが、辞職した「私学派」教員の復帰に抗議する形で「官学派」教授陣たちが辞職を願い出た際、前川もそれにならう形で辞すこととなった。ただし、後任人事やその後の漢学会等の動向などを見たとき、必ずしも「私学派」教員たちと関係が悪くなった様子はない。むしろ、後年に発行された著作物や共同研究などから推察するに、学問討究上の方針としては「私学派」教員たちとの折り合いは良かったようである。その後、学院内も「官学派」「私学派」ともにその後の大東文化学院発展に「大同団結」していくこととなる。

これまで大東文化学院紛擾は「私学派」「官学派」の争い、あるいは教員人事から端を発した学問上の見解の不一致であったと整理され、その後も両者の間に長く禍根を残したとされてきた。しかし前川の例を見ればわかるとおり、「官学派」からの依頼と信任を受けて着任した前川と、「私学派」であった國分高胤（青崖翁）や松本洪との研究交流は当時から熱心に継続されており、このことから両者間の関係は分断されたわけではなかったことがわかる。また、前川に関していえば、大東文化学院へ教員として着任するに当たっては「私学派」「官学派」双方への礼を尽くしている様子もうかがわれる。前川は大東漢学を維持し、前任者が戻るまで担当科目を守ったのだといえるかもしれない。

参考文献

- 大東文化学院同学会編（一九二五—二八）『同学』第一号—四号
 大東文化学院志道会編（一九三〇）『志道』第一号
 國分高胤監修（一九三六—三八）『漢詩大講座』第一—五卷、アトリエ社
 土屋竹雨・前川研堂（一九八一）『漢詩作詩法・資料集成 作詩資料及語彙 絶句律詩今體詩法・今體詩作法』名著普及会

大東文化大学では一九六三年および二〇一〇年の二度にわたって、前川家から膨大な量の前川三郎関係資料の寄贈を受けており、図書館貴重書庫内に保管されていたが、二〇二二年に大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）へ移管された。

第 8 章

「私塾型」近代高等教育機関を目指して

「私学派」教員たちの学問観

草創期の大東文化学院では、所属する教員たちが「私学派」「官学派」に分かれることがあったが、どちらかというところ「私学派」教員たちが意識的にどちらに属するのかを強く自覚している傾向にあった。そういった状況となった経緯や理由は、第1部5章で詳述した通りである。さて、「私学派」教員たちは、とくに大東文化学院の教育内容に対して強い思い入れがあった。なぜかというところ、自分たちが理想としていた近代以前の漢学教育を、あらためて近代的高等教育機関で行える学校が大東文化学院であったからである。本章では、草創期の大東文化学院における「私学派」教員たちを紹介し、その学問観がどのようなものであったかを見ていくこととしよう。

1 「私学派」の人びと

私学派とされる人びとは、二〇名ほどが挙げられる。彼らの団結力は強く、主張ははっきりしてい

たため、比較的整理しやすい。大東文化学院紛擾の際に最初に辞職した教員たちであり、その中心となったとされるのは主として、川田瑞穂、池田四郎次郎、川合孝太郎、国分高胤、松本洪、牧野謙次郎、松平康國、三塩熊太、内田周平、佐藤仁之助などである。これら「私学派」教員のうちから、幾人かの経歴を紹介しておこう。

川田瑞穂

川田瑞穂は、一八七九年五月に高知県に生まれた。号した「雪山」は、郷里である土佐の雪光山からとつたものとされる。青年期に大阪に出て、梅屋処塾にて山本梅崖に師事し、さらに東京専門学校（現・早稲田大学）政治経済学科で学んだ。一九〇三年五月より京都府参事会書記となり、さらに一一年五月に設立された文部省維新史料編纂会（後に東京大学史料編纂所に合併）の編纂官補に着任した。

文部省維新史料編纂会では、同郷である坂本龍馬の暗殺経緯について、佐々木只三郎率いる見廻組に関する調査研究に主として従事していた。また、時期を同じくして大東文化協会設立に積極的に携わり、一九二三年八月二二日に文部大臣宛てに提出された大東文化学院設立申請書に付された予定される教員一覧に、「文部省史料編纂会編纂官補 川田瑞穂」の名前を確認することができる。

大東文化学院設立時には助教として採用され、主に「日本政記」を担当、以降は学院発展に尽力したものの、創設直後から続いた学院紛擾の影響により辞職することとなるのは後述する通りである。なお、一九二九年四月より死去する前年度となる五〇年三月まで、早稲田大学高等師範部（現・早稲

田大学教育学部）教授を長年にわたりつとめた。一方、大正期より大学教員のかたわら内閣囑託を兼務し、敗戦時に「終戦の詔勅」起草に携わったこともよく知られる。太平洋戦争終戦時に鈴木貫太郎内閣官房囑託として起草したもので、この詔勅は迫水久常内閣書記官長と陽明学者の安岡正篤大東亜省顧問の修正過程を経て成立したものである。よく知られている「朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み非常の措置を以て時局を收拾せんと欲し茲に忠良なる爾臣民に告ぐ」は、川田によって起案された原文のままであると言われている。また、そのほかにも、漢学研究所（奥繁三郎経営）理事や無窮会会長事務代行・理事、東洋文化学会評議員・幹事、東洋文化研究所学監・所長代理などを歴任するなど生涯にわたり漢学の発展に寄与した。五一年一月に死去した。

川田瑞穂は、大東文化学院の創設において漢学者の立場から携わっている。開校時には助教教授として大東文化学院幹事および同図書部主任を兼務するなど、教育面での中心的な役割を果たしていたといえるだろう。大東文化学院紛擾が起こると、「私学派」の中心となつて辞職届を提出し、一時的に大東文化学院を離れることとなつた。一九二七年一二月より教授として復職し、同時に学生監を兼務、以後さらに積極的に学院運営を担う意欲を見せていた。しかし、学内にくすぶっていた「官学派」「私学派」問題が再度表面化した際、私学派若手教員を擁護した言動が問題視され一部教員より非難を受けたことにより、二八年七月に再び辞職、翌年四月より早稲田大学高等師範部教授となつた。二度目の辞職経緯については懲戒との記述が本学刊行物の一部に確認できるものの、通知文書には慣例通り「願二依り本学院教授兼学生監ノ囑託ヲ解ク」と記されている。なお、学生監の委囑状には「俸給ノ件」

と書かれた文書も付されており、そこに記された学生監俸給月額一五〇円は当時の帝国大学教授と同等であった。

さて、川田家に残されていた資料のうち、終戦の詔勅起草に関連したものは憲政資料館が悉的に収集し、川田瑞穂文書として整理公開しているが、その他の多量の資料のほとんどは敗戦以降に長く住んだ練馬区の自宅にそのまま残されていた。大東文化大学歴史資料館（大東アーカイブス）がそれらの資料を受領し、現在も保管している。

これらの資料のなかには、大東文化学院を含む各所からの委嘱状や俸給額を記載した雇用関係通知が多く残されており、これまで明らかにされてこなかった川田の経歴に関する貴重な情報が含まれている。とくに、勤務期間が長かった早稲田大学教務課から送られた文書は多くあり、たとえば、着任時から一九四九年度まで毎年の年俸増額通知書などに加え、五〇年三月三一日付の「定年により解任します」という文書までを確認することができる。一方、大正期より委嘱された内閣官房総務課事務嘱託では、内務、国務、総務、法務の各大臣附嘱託を兼務していた資料も含まれていた。四一年八月に「国務大臣附嘱託」の辞令が交付されており、このときの大臣は大東文化学院初代学長をつとめた平沼騏一郎で、平沼からの指名でその嘱託を受けていた。これら内閣嘱託に関する委嘱状は、俸給額も含め、四八年のものまで確認できる。

池田四郎次郎

池田四郎次郎（一八六四～一九三三）は、陽明学を専門とした漢学者であり、大東文化学院創設時より教授をつとめた。学問を志して大阪から上京した折に三島中洲（二松学舎創設者）に師事し、蘆洲と号した。一九二六年から二八年末頃にかけて起きた「大東文化学院紛擾」を期に本学を辞してからは、二松学舎や國學院の教授を歴任した。主要な著書には『日本詩話叢書』『史記補注』『経解要目』『故事熟語大辞典』等がある。

その息子である池田英雄は、一九〇八年に東京市内において、父四郎次郎と母しげのもとに第三子として生まれた。二六年三月に財団法人日本中学校を卒業し、同年四月に創設三年目であった大東文化学院本科へ入学、同科卒業後は高等科へ進み、計六年間を大東文化学院で過ごした。父の池田四郎次郎は英雄の入学時にはまだ大東文化学院教授であったが、直後に起こった大東文化学院紛擾によって、ほどなく離職して二松学舎へと移籍していった。その後、四郎次郎は自動車事故により一九三三年に死去した。一方、高等科を卒業した英雄は、吉田増蔵（学軒）の書原撰述所助手となり、また母校であった財団法人日本中学校で漢文科教員として勤務するかたわら、無窮会に設けられた東洋文化研究所研究科（高等科）の一期生となり漢学研究を続けた。主業績としては、父の遺稿であった『史記補注』の完成を目指し校訂を行ったことである。その研究成果は、『史記補注』上編「本紀・成家」（一九七二年）、『史記補注』下編「列伝」（一九七五年）、『史記研究書目解題』（稿本、一九七八年）となつて刊行された。

なお、『修学の道場回想録 七十年前の想い出の糸をたぐりて』（以下、『回想録』）は、英雄が二〇〇六年の当時九八歳の頃に著したもので、自身の学生時代を追憶した想い出の記である。『回想録』を書き終えたとき、数えでは一〇〇歳を迎えようかという時期であった。内容としては大東文化学院での学びの思い出から始まり、「財団法人無窮会東洋文化研究所」での研究生時代、くわえて恩師との想い出が綴られており、とくに大東文化学院創設期を学生の視点から振り返っていることが特徴である。本章の内容にも深く関わっており、参考としたことを付記しておく。

川合孝太郎

川合孝太郎は、槃山と号した。幕末の一八六五（慶応元）年、現在の鳥取県にあった田口家に生まれた。のちに神儒仏三道による国教確立と反欧化主義を唱え「日本国教大道社」を設立した活動家である川合清丸に養子縁組し、川合姓となった。大阪随一の名門私塾であった泊園書院（現在の関西大学の前身校の一つ）で十余年ほど学び、とくに漢学においてその頭角を現した。その後、養父の興した大道学院教授として活動に携わるかたわら、大東文化学院や早稲田大学、無窮会などで漢学を講じたほか、個人的な勉強会として「説文会」なども主宰した。一九四〇年三月に、持病により死去した。逝去後、その蔵書一万五千余冊は財団法人無窮会へ寄贈され、「槃山文庫」として整理公開されている。

國分高胤

國分高胤は、たかたね

一八五七（安政

四）年五月に陸

奥国仙台に生ま

れた。青崖の号

がよく知られて



いるが、これは比較的晩年になってから使用したもので、それ以前は太白山人や松州などと号していた。仙台藩の養賢堂で漢学を修めたのち、司法省法学校（東京大学法学部仏法科の前身）へ入学したが、同期であった原敬や陸羯南らと三年目の時にストライキをおこしたことで退学処分となった。その後、高知にわたり『高知新聞』の記者や、民権派の政論新聞『朝野新聞』の記者となった一方、陸羯南が一八七九年に創刊した新聞『日本』において、漢詩による時事評論を連載した。



大東文化学院の設立には最初期から積極的に関わり、創設時より教授に就任、主として漢詩教育に携わり後進の育成に力を注いだ。大東文化学院着任時にはすでに六六歳となっており、教授陣のなかでも最高齢の一人で、漢詩学界における重鎮であった。東洋文化学会や無窮会においても中心となって指導的役割を担っている。一九三〇年より『日本及日本人』主筆となり、三七年に帝国芸術院会員に推挙された。大東文化学院紛擾では「私学派」の立場を強く主張し辞職したが、復職後は引き続き漢詩教育を熱心に行った。漢詩評における厳しい姿勢もあって、土屋久泰（竹雨）とともに漢詩の第一人者として、官私を問わず多くの漢学者から尊敬を集め、古希祝や八秩頌寿は雅叙園において全国から漢学者らが集い盛大に行われた。一九四四年三月に八八歳で死去した。

牧野謙次郎

牧野謙次郎は、藻洲と号し、経学を専門とした漢学者であった。一八六三（文久二）年一月に讃岐国高松に生まれた。祖父の牧野黙庵と父の牧野松村は高松藩校の教授であった。前述の川合孝太郎よりもやや早い時期、一八七七年頃に一年ほど泊園書院において漢学を学んだ。一九〇一年より『日本新聞』の週報を担当し国分青崖と交流、〇四年に『支那』を松平康國と創刊した。同誌創刊号には牧野謙次郎として二本、藻洲子の筆名で一本の、主として清国に関する論稿を寄せている。

また、川田瑞穂とは一回りほど年上ながら同郷の仲の良い友人であり、川田とともに平沼騏一郎の顧問的な役割を果たした。同時に東洋文化学会理事をつとめ、無窮会でも指導的役割を果たした。「私

学派」のなかでも川田瑞穂や松平康國と並び「早稲田派」であり、東洋文化学会で知遇を得て以来大隈重信からの信頼も厚く、『早稲田漢学』を推進する一方、川田瑞穂とともに一九二九年より早稲田大学高等師範部へと移籍、同大学文学部教授と高等師範部長とを兼務した。一九三七年三月に病氣により死去した。

松平康國

松平康國は、一八六三（文久三）年四月、父の大久保忠恕ただとが長崎奉行のときに生まれた。大学予備門を経て、ミシガン大学へ留学し政治学を学ぶ機会を得た。帰国後は『読売新聞』の記者となるかわら、東京専門学校（現・早稲田大学）で漢学および史学を担当した。西洋史も講じたという。破天荒と号した。以降、一九四三年に退職するまで早稲田大学教授をつとめ名誉教授となった。前述のように牧野とはとくに盟友として活動をともにすることが多く、『支那』創刊号には、「支那時文に就て世の謬見を正す」とする巻頭論説を寄せており、破天荒の筆名でも「北清百話」の論稿も掲載した。

これらの活動の一方、大東文化学院の創設にも携わり尽力した。大東文化学院紛擾において「私学派」の中心となり、最初に辞任届を提出したのが松平であったといわれる。東洋文化学会理事、無窮会東洋文化研究所の教頭などもつとめた。牧野謙次郎のほかに三塩熊太とも漢学者として積極的な交流を持った。一九四五年一月に死去した。

2 「私学派」教員と漢学者養成構想

「学院の憲法」と漢学者養成構想

「私学派」の教員たちは、草創期に並々ならぬ情熱と漢学への思い入れをもって、大東文化学院の教壇に立った。彼らは、具体的にどのような教育を行おうとしていたのだろうか。

大東文化学院は、設立時からの目的として「漢学振興」を謳ったほか、その「究極の目的」を達成するのに重要な「科目群」として、「皇学」「儒学」をそれぞれに置いていた。「儒学」はともかく、「皇学」という学問群は一般的なものではなく、大東文化学院の固有の学問観のあらわれであったといえる。設立時の「大東文化学院学則」第七条に示された「学科課程」を見てみると、「皇学」として置かれた学科目は、「古事記」「万葉集」「神皇正統記」「太平記」「弘道館記述義」であった。これらの学科目は「漢学」や「儒学」とはいえず、当時の高等教育機関である大学、高等師範学校、専門学校などいずれを見ても、これらの学科目をおいているところはほかにほとんどなかったといってよいだろう。すなわち、この学科課程こそが大東文化学院の独自性をもっとも強くあらわしたものであり、同時に学院創設時よりの「私学派」教員がしばしば「学院の憲法」（『大東文化学院紛擾の顛末』）と呼び習わしたほどの重要性を持ったものとして考えられていたのである。なお、当時として極めて独自性が高かった学科課程は、東京帝国大学および京都帝国大学と私学との折衷案を採るといった複雑な過程を経て制定されたものであったことは、「第1章 平沼騏一郎」において詳述した通りである。

「固有の学科目」と学院改革案

井上哲次郎の提案した学院改革（第5章を参照）は、具体的には、本科一年「神皇正統記」「弘道館記述義」の時間数削減、本科二年「明倫和歌集」「古今集」「太平記」と本科三年および高等科一年「古事記」とを廃止することであった。この改革意見に対して、「私学派」は、廃止し縮小しようとして提案されているものそれぞれが、いかに議論のすえに設置された「皇学」「史学」であるか、また重要な科目・教科書であるかを訴え、「皇典」に対する見解が見当外れであると非難した。すなわち、皇学及漢籍の輪講を軽視し、「参考科目」を重視するものであると批判したのであった。

また、改革案は授業を基本的に講義形式にあらためることも提案していた。「講義」に対して、大東文化学院で行われていた授業形式は「輪講」であった。「輪講」とは、現在のゼミ形式に近いもので、漢籍などの課題を設けたうえで、課題を分担して担当部分をそれぞれが報告しあい、議論を重ねることを基本とする授業の進め方である。「私学派」教員たちは、講義形式では教員が一方的に授業を進めていくだけで、しかも、そこで生じる剰余時間は本来重視しているはずの科目に充てるのではなく、いわゆる「参考科目」を充当することになるだけなのは、学院の教員のあり方としては本末転倒であると指摘した。初代総長平沼騏一郎が開院式祝辞で、広く智識を得ることは大切であるとしつつも「常に本学院究極の目的に背馳せざること留意」するように述べているが、この考え方は学院設立の根本的な思想の一つであったと言える。

「参考科目」とは、いわゆる一般教養や資格取得のために定められた学科目を指す。大東文化学院

では、「法学」「経済学」「倫理学」「心理学」「教育学」のほか、「西洋哲学」「東西思想比較」等を置くものと創設時に定めていた。ただし、当時一般的な教養科目であった、現代思想や外国語といった科目は置かれなかった。学院の本来の目的であるところの「皇学」「漢学」の古典研究に精通する人材を育成するにあたり、外国語や現代思想にも精通しようとするれば結局は何もモノにならないとの「私学派」の考えから、それらの科目は置かないと定めたからであった。このような背景があることから、主要科目を削減してまで「参考科目」内の科目および時間数を増やすことはそもそもその学院設立理念に反することとなり、改革案は東京帝国大学が当初提案した案そのものであり、三者の中庸案をとった意味がないと「私学派」は断じたのである。また、「古事記」の排斥に関しては、「古来より『古事記』は記紀の二典として最も尊重」してきたものであり、これを俗書として排斥することは重大な誤りであると批判したのであった。

大東文化学院の学科課程論議

「私学派」の急先鋒となった三塩熊太、松平康國、内田周平、佐藤仁之助らは、この学科課程論議についてさらに具体的な指摘をなしている。中でも三塩は、井上哲治郎不敬事件でももつとも批判を行った人物の一人である。三塩は『大東文化学院紛擾の顛末』中に収められた「大東文化学院紛擾の真相」で、「井上総長の改革案は学問上教育上から割り出したものではない」として、(平沼騏一郎総長は)「学生の思想に何等の根底が無いのは面白くない。先ず朱註を熟読させて、それを地盤にして諸説

を参考折衷させたい」「読書力は輪講で叩かねば確かにならぬ。諸註を涉獵して取捨選択する方法も教へて置かねば」としていたなどと比較し、このたびの改革方針では漢学者養成が成せないと述べた。また、すでに東大の研究方式は旧式であり、現行研究者は旧来の方法を選択する風潮となつていとも指摘している。

一方、こうした学科目や教科用書に関する意見は、とくに無窮会が発行した『東洋文化』や、『日本及日本人』の誌面に多く見られた。『東洋文化』を見ていくと、「古事記」が正史でないために学科課程における教科用書として適していないとされたことへの批判が多く見られた。また、『日本及日本人』にも同様に「古事記」についての議論を投げかけた論稿が見られる。両誌には多数の「私学派」の論稿が掲載されたが、とくに佐藤仁之助の論説が多い傾向にあり、佐藤の論点は主として教科書選定問題に関わるものであり、改革方針は大東文化学院の独自性・特色に鑑みてそぐわないとするものであった。

3 大東文化学院の学科目変更

一九二五年の学科課程

改革案を前後して、具体的に学科目はどのように変化したのかを次に見ていこう。結論から言えば、「大正十五年度学科課程一覽表」を見ると、一九二五（大正一四）年度までの学科課程と比較すると明

らかな変化があった。まず、二五（大正二四）年度に行われた「本科」の学科目は次のとおりであった。

第一学年 詔勅衍義 神皇正統記 弘道館記述義 孝経及大学 日本外史 靖献遺言 十八史略
 文章軌範 唐詩選作文 作詩 復文 支那語 倫理学 法学概論 教練 擊劍
 第二学年 明倫和歌集 論語 小学 韓非子 太平記 日本政記 十八史略 唐宋八家文読本
 古今集 三体詩 作文 作詩 支那語 倫理及心理 経済学 維新史 習字 教練 擊劍

対して、「大正十五年度学科課程一覽」から本科学科目を確認してみると、次のように変更されている。

第一学年 詔勅衍義 中朝事実 神皇正統記 弘道館記述義 日本政記 孝経及大学 小学 十
 八史略 文章軌範唐詩選 作詩 復文 支那語 倫理学 法学概論 論理及心理 英語 教練
 劍道・弓道（科目ノ内一）
 第二学年 帝国憲法 中朝事実 論語 孟子 韓非子 十八史略 唐宋八家文 古今集 三体詩
 訳文及作文 作詩 支那語 哲学概論 倫理及心理 経済学 英語 教練 劍道・弓道（科目ノ
 内二）
 第三学年 万葉集 古事記 中庸 書経 詩経 孟子 春秋左氏伝 荀子 史記 古詩評註

清文標註読本 倫理学 支那語及時文 作詩 教育学 英語 教練 劍道・弓道（科目ノ内二）

「大正十四年度」と、「大正十五年度」とを比較してみたとき、もつとも顕著な変化は、本科一年目から高等科三年までを含む六学年すべてに「英語」の学科目が課されたことである。同年より全学年を通じて置かれたこの「英語」科目は、一九二八年度以降の学科課程表から再び削除されており、大東文化学院で行われる語学は再び「支那語」のみに戻されている。ただし、課外で英語を選択履修することは可能であったようで、また高等科の参考科目であった「教育学及教授法」という科目は「外国書」で行われており、同講義は「英語」を二年間担当した教育学を専門とする木村巖が担当した。また、「教練」については、大東文化学院では開設時より「本科」における「教練」は必修であった。そのほかに「武科」として「劍道」か「弓道」のどちらかを選択して履修することとされていたが、「高等科」での「武科」は、「教練」「劍道」「弓道」のうちからどれか一科目を選択して履修するものとされた。

学校教練（軍事教練）は、「陸軍現役将校学校配属令」（一九二五年四月一日、勅令第一三五号）が公布されたことにより、二五年四月より中等学校以上の各教育機関において開始されたものであった。陸軍現役将校が配属され、私学も任意とはいえ、ほぼ義務的に「教練」科目が置かれることとなったが、この選択科目からは、高等科においてはまだ選択の余地が残されていたことをうかがうことができる。ただし、三八年に国家総動員法が施行され国家総力戦の遂行がなされるようになると、高等科

であっても軍事教練は否応なく実施されることとなつていった。

一九二五年度はまだ第三学年がなく、一学年および二学年のみであった。本科一学年の科目を二六年度のものと比較すると、二五年度に行われていた「日本外史」「靖献遺言」が削除され、二六年度には新たに「中朝事實」「日本政記」「小学」「倫理及心理」「英語」の科目が加わっていることがわかる。また、本科二年の科目では、二五年にはあった「明倫和歌集」「小学」「太平記」「日本政記」「維新史」「習字」といった科目が削除されて、二六年には新たに「帝国憲法」「中朝事實」「孟子」「維新概論」「英語」が加わったことがわかる。

「高等科」に見られた学科目変更

高等科の方の学科目はどうだったかというのと、一九二五年度に実際に行われた高等科の学科目は以下のようになつていた。

第一学年	帝国憲法	詔勅衍義	日本書記	万葉集	詩経	書経	論語	孟子	春秋左氏伝	荀
子	史記	五朝詩別裁	作詩	東洋哲学	東西思想比較	支那語(随意)				
第二学年	日本書紀	書経	礼記	論語	近思録	伝習録	莊子	文選	淮南子	呂氏春秋
章法	東洋思想史	作詩	経済学概論	法律学原理	支那語(随意)					

対して、「大正二五年度」に行われた高等科の科目は、次のように変更された。

- 第一学年 帝国憲法 日本書記 論語 詩経 書経 孟子 春秋左氏伝 伝習録 莊子 文選
 古文辞類纂及作文 五朝詩別裁集及作詩 支那語 東洋哲学 日本儒教史概説 西洋思想史 英語
 語 教練・剣道・弓道(科目ノ内)
- 第二学年 令義解 続日本紀及延喜式 周礼 儀礼 礼記 伝習録 楚辞 孫子 管子 莊子
 文選 五朝詩別裁集及作詩作文 支那語 東洋哲学 法律学原理 教育学及教授法 英語
 教練・剣道・弓道(科目ノ内) 東洋美術史(課外)
- 第三学年 令義解 続日本紀及延喜式 周礼 儀礼 易経 説文 老子 墨子 楚辞
 五朝詩別裁集及作詩作文 支那語 東西思想比較 西洋思想史 教育学及教授法 英語
 教練・剣道・弓道(科目ノ内) 金石学(課外) 東洋美術史(課題)

これを見てわかるとおり、高等科一学年の科目からは「詔勅衍義」「万葉集」「荀子」「史記」「東西思想比較」が削除され、新たに「伝習録」「莊子」「文選」が加わった。同二学年はさらに変更科目が顕著で、科目のほとんどが入れ替えられたものであったと言つてよい。前年に行われた科目、「日本書紀」「書経」「礼記」「論語」「近思録」「伝習録」「莊子」「文選」「淮南子」「呂氏春秋」「文章法」「東洋思想史」「作詩」「経済学概論」「法律学原理」「支那語」のうち、翌年に実施されたのは、「礼

記」「伝集録」「莊子」「法律学原理」「支那語」のみであった。

前述したように、学院改革案で不要とされた科目は、本科二学年の「明倫和歌集」「古今集」「太平記」、本科三学年および高等科一学年の「古事記」であった。「私学派」教員が一斉辞任をした一九二六年度には、この改革案を反映した学科目変更が実施されており、つまり、本科二学年の「古今集」は残されたものの、他の三科目は削除されたのである。

井上哲次郎は改革を提案した際に、その理由を次のように述べている。「明倫和歌集」は内容が高等教育機関で行うには内容が平易であること、「古今集」は恋の歌が含まれ教育に相応しくないこと、「太平記」は小説であり学問的でないこと、「古事記」はあくまで「日本書紀」の資料でありかつ伝説や神話を集めた俗書であること、というものである。また、授業時数の縮小を求めたのは、本科一学年で行われる「神皇正統記」「弘道館記述義」で、内容が平易で冊数も少ないため授業回数が少なくても理解できるとし、その分をほかの科目に使用することを提案した。

他方、「私学派」教員は、大東文化学院にとってもっとも重要な科目、学院の特徴をなす教育は、「皇学」に分類されている科目であると考えていたことは前述した通りである。当初の大東文化学院の学課程は「皇学」「経学及子学」「史学」「文学」「作詩作文」「支那語」を「正科目」とし、「正科目」以外に「参考科目」として教育学や倫理学などの教養科目を置き、「武科」に弓道や剣道、そのほかを「科外」と位置づけていた。「私学派」教員たちは、「正科目」に置いた「皇学」科目がもっとも重要で、創設に当たって議論を重ねて独自性を追求したうえで設置した科目であると主張したのである。

4 大東文化学院の学則変更

一九二五年の学則変更

学科目や教員の変更にもなつて、大東文化学院では同時期の学則にどういった変更を加えたのだろうか。大東文化学院の「設立認可」以降、一九三〇年まで、「学則中変更」は五回ほど行われている。最初に行われた学則変更は、一九二五年六月のことであつた。大東文化学院創設に当たっては、修業年限通算六年は長すぎ倦怠を生じるとの懸念が生じたため、議論の結果、高等科の修業年限を二年とし、その上に研究科一年を設けるものとして学則を定めていたが、本科および高等科の修業年限は当初の予定に戻して通算で六年とすることへ変更したいとしたものであつた。その理由としては、創設から一年が経過し、「所要ノ学科ヲ講了スル能ハサルコト明」となつたため、としている。このとき同時に、授業時数を一週二四時間から二六時間へ延長することも申請された。また、この学則変更申請において「本学院創立日」を、創設許認可を受けた「九月二十日」とすることが、学則上に初めて追記されたという点も付記しておきたい。そのほか、学科目名「日本史」を「国史」と改めることなど、この時の「学則中変更」申請によって学則中全一三項目に改正が加えられた。この「学則中変更」は、同年七月に文部大臣によって認可を受けた。

授業料の徴収

次に行われた学則変更は、一九二六年三月のことである。この時、科目に大きな変更が加えられた。前述した、英語科目の導入ほか大幅な科目変更であった。このとき、「支那語以外ノ外国語学修得ノ必要上別紙ノ通り『西洋思想史』並『教育学及教授法』ニ外国書ヲ用フルコトニ改正致度」ということも記された。

一九二七年四月に行われた学則変更では、同年度の学生募集から実施する事項として、入学料および授業料は徴収しないが、受験料は必要に応じて徴収することに変更したいとして、五円を上限として受験料の徴収を行うことが申請され、同年五月にこれが認可された。

このことに関連して、大東文化学院の学費徴収の変遷について補足しておこう。前述したように、一九二五年八月に文部省宛てに最初の学則変更届を提出しているが、添付資料として提出された学則には、「第九章 入学料及授業料」に「第三十七条 入学料及授業料ハ之ヲ徴収セス」との記載がなされている。つまり、大東文化学院は入学金や授業料（学費）は不要であった。二六年一〇月に配布された受験用の「大正十六年度大東文化学院入学要覧」にも「徴収セス」とあり、引き続き授業料は不要であった。ただし、「学資金」として経常費年額概算を行っており、授業料以外に必要な経費が若干金徴収されるようになった。さらに、一九三〇年一二月に行われた「学則変更願」によって、三一年度より授業料の徴収を行う方針が示されるようになったのである。

さて、一九二八年四月、学科課程ごと一週当たりの時間数を定める学則変更が行われ、さらに二九

年七月および一二月には学則の条項全体に関する変更が行われている。この変更によって、草創期の頃の学科目内容にほぼ戻されることになった。三〇年一月に引き続き行われた学則変更の骨子は、補習科や研究科の設置と教員免許など取得資格に関する変更申請で、同年三月には「武科」中に「剣道」「弓道」「教練」に加えて「柔道」を加える旨が申請された。

5 大東文化学院と無窮会

無窮会

さて、一斉辞職した「私学派」教員は、無窮会という学術団体で結集し活動を行っていた。「無窮会」とは、一九一五年創設より現在まで続く、東洋文化や東洋古典に関する研究を主たる目的とした組織団体（現在は公益財団法人）である。そもそも、国学者井上頼圀の死去後に蔵書（神習文庫）の散逸を防ぐため一括購入し、平沼騏一郎が自宅の一部を提供して所蔵書庫としたことを始まりとしている。一方、「漢学振興運動」を掲げて大隈重信を初代会長とする学術団体「東洋文化学会」が一九二二年に発足すると、その一部が分離独立して「大東文化協会」を創設していくこととなり、東洋文化学会本体は四三年になって「無窮会」へと吸収合併されることとなったという経緯がある。「私学派」はこの東洋文化学会のほか、雑誌『日本及日本人』などでも発言を繰り返していた。

さて、学院改革の提案から二年余りを経て、学科目は草創期のものにほぼ戻ることとなり、辞職し

た「私学派」教員たちの大多数は大東文化学院へと復職した。また、その間の授業を行って大東文化学院を支えていた「官学派」教員の過半数は元の職場へと戻っていった。この間、大東文化学院の学問観というものについて真剣に議論し、どういう方針でどういう教育を行いたいと考えているのか、あらためて明確になったといえる。

官私抗争の雪どけ

その後の両者の交流については、興味深い見解がある。池田四郎次郎の子で父の研究を継いで『史記補』を完成させた、前述した池田英雄の『回想録』から紹介しておこう。

池田英雄は、『回想録』の第三部のタイトルを「官私抗争の雪どけ」としている。「雪どけ」とは、何を指すのか。『回想録』において、池田は「平沼先生と志を同じくした教職員一同は、こぞって総辞職された。この折り先考蘆洲もまたその行動を共にした。かくして平沼先生の大東文化学院創設に託した理想の夢は空しく挫折をみることに成った。これら教授を中心とする方々は一致団結し、当時西大久保に在った無窮会に拠って将来への展望をえがき、初志の貫徹を期したのであった」と述べている。つまり、大東文化学院の理念は創立二年目には「挫折」し、改めて財団法人無窮会東洋研究所のなかにこそ「貫徹」された、と池田はとらえていた。

ただし、前述したように、辞職した「私学派」教員は二年後にはそのほとんどが大東文化学院へ復職しており、その復職時には今度は「官学派」教員が一斉辞職しているという経緯もあり、また大東

文化学院の教育課程はその際にほぼ創設時のものに改定され戻されたため、池田がここで指摘する点は教員構成やカリキュラムなどの教育面ではなく、おそらくもっと根底にある何か精神的なものを目指していたのではないかと推測される。池田によれば、本当の意味で「官私の交流も始まった」と見られるのは一九四五～五五年ごろとしており、学院紛擾から実に三〇年近い年月が必要であった。

「嘗て大正の終りから昭和の初めにかけて、官・私の両学派には執拗に漂っていた暗雲も、時の流れとともに、いつしか消えうせて、昭和二・三十年代を迎える頃にはようやく明るい日ざしをみるに至った。そして官・私互の交流も始まったのであった。次には、嘗ては相対立をみた大東文化学院と、無窮会東洋文化研究所との双方にご関係なされ、日頃尽力を惜しまれなかつた方々の、それぞれの業績について、私の知るところを記しておきたく思う」このように述べた池田英雄は、とくに本科の先輩であった清田清を取り上げて、次のように紹介している。

「清田清先輩の度量 久しい間、官私の両者間を固く閉ざしていた扉を押し開けて、互の交流に尽した最初の人は、その昔、私学派恩師の総辞職に殉じ、決然として中途退学の挙に出た本科生清田清氏その人であった。昭和三十年代当時の清田氏は財団法人無窮会での要職に在ったが、嘗ての自己退学に追い込まれた大東文化大（当時の大東文化学院）の旧怨を自ら払いのけ、請われのままに同校への出講を受諾している。この間の経緯については、自著『ハイティン教育五十年』の中に、さらりと次のように記している。私は昭和三十一年から大東文化で日文（日本文化学科）

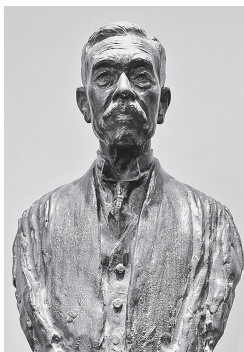
と、中文（中国文学科）との国語科教職課程を担当した（同書二三三頁）と述べている。これは氏が決然として退学した後の二十余年後に当る。嘗て自主退学した母校への回帰には定めし、その心中計り知れぬ想いがあつたにちがいない。然しながら過去のわだかまりを乗り越えて、自ら進んで両学派の融和発展の爲めに一身を挺し、両者間疎通への先駆者となつた」

清田清は、一九〇〇年六月に福岡県に生まれ、福岡師範学校を卒業後に上京し、大東文化学院本科一期生となつた。本科修了後に高等科へ進学するも退学し、東京府立第一中学校（現・都立日比谷高等学校）や駒場東邦高等学校等の教員となつた。また、大東文化大学においても東洋研究所研究員や非常勤講師をつとめた。著書に『新講漢文解釈』（金子書房）、『孔子家語』（明德出版社）があるほか、生涯にわたり無窮会において理事や主事をつとめ、研究活動を熱心に行つたことで知られる。

参考文献

- 池田英雄（二〇〇六）『修学の道場回想録 七十年前の思い出の糸をたぐりて』
池田四郎次郎（池田英雄校訂）『史記補注』上編「本紀・成家」（一九七二）・『史記補注』下編「列伝」（一九七五）・『史記研究書目解題』（稿本、一九七八）
川田瑞穂撰（一九三五）『詩語集成』立命館出版部
牧野謙次郎（一九二九）『儒教時言 講経新義』明治書院
松平康國（一九〇四）『英国史』早稲田大学出版部

松平康國・牧野藻洲講述（一九一九）『司馬遷著 史記国字解第六列伝二』早稲田大学出版部
五本直次郎編（一九〇四）『支那』第一号、溢友社
町泉寿郎（二〇一九）『木下彪 国分青桂と明治大正昭和の漢詩界』近代日本漢学資料叢書4 研文出版
『大東文化学院紛擾の顛末』発行年不詳、奥付なし



第9章

平沼淑郎

弟・騏一郎とともに大東文化学院に貢献

一八六四年、美作国津山（現・岡山県津山市）に生まれる。元首相の平沼騏一郎は実弟。七二年に上京し、箕作秋坪の塾などに学ぶ。八四年、東京大学文学部政治理財学科を卒業後、丸山作楽さくらの忠愛社に入り、『明治日報』記者となる。八六年、教育界に転じ、第二高等学校教授、市立大阪高等商業学校長などを経て、一九〇四年、早稲田大学へ移籍。一年商学部教授、一九年同大維持員理事、第三代学長、二三年商学部長などを歴任。大東文化学院開校時、初代の「経済学」担当者として名をつらねる。三〇年、社会経済史学会の創立に参画した。三八年、七四歳で脳溢血のため没。

1 『明治日報』記者から教育界へ

大東文化学院最初の「経済学」担当者

平沼淑郎は、美作国の親藩津山藩（松平家）に津山藩士平沼晋（一八三二～一九一四）の長男として生まれた。淑郎から七代遡る祖先は日置流弓術の腕前を見込まれて駿河から津山藩に召し抱えられたという。また祖父の織右衛門は書道に造詣が深く、藩庁の柘筆を務めた。父は小豆島の代官、藩校の助教、周旋方として藩政に寄与した。また参勤交代の在京中はのちに明治政府が発行した一銭銅貨・二銭銅貨・一円銀貨等の文字を手がけたことでも知られる石井潭香の塾に通い書を錬磨していた。母・貞、祖母・千鶴の兩人とも子どもたちの教育に熱心であった。淑郎の三歳年下の弟は、大東文化学院（以下、学院）初代総長であり、日本の司法制度の近代化に尽力し、検事総長、大審院長、首相を務めた平沼騏一郎（一八六七～一九五二）である（第一章参照）。妹の藝しなはのちに大審院判事・検事の掛下重次郎（一八五七～一九三二）に嫁いだ。ほかに弟・圭三郎（一八七八～一八九〇）がいたが夭逝した。政治家の平沼赳夫（一九三九～）は曾孫にあたる。

本章で取り上げる淑郎は、学院設立当初の「経済学」担当講師としてその名前が記されている人物である。淑郎が学院の講義を担当した直接の理由は、弟の騏一郎が初代総長を務めた関係からであると思われる。しかし、淑郎が学院でどのような「経済学」を講じていたのかについては、資料上の制約から現在のところは不明である。以下では淑郎の生涯と学問上の航跡を辿ることで、当時の学院

でどのような「経済学」が講じられていたのかについてその手掛かりを探ってみたい。

父にともない上京、三又学舎で学ぶ

淑郎は六歳のときから齋藤淡堂につき四書、孝経、詩経の素読を通じて漢学を学んだ。一方、津山藩は江戸時代から蘭学をはじめとする洋学が盛んにおこなわれていた地でもあり、箕作阮甫（二七九一―一八六三）、麟祥（一八四六―一八七〇）、秋坪（一八二六―一八八六）などを輩出した箕作家、宇田川玄隨（二七五六―一八九八）、榕庵（二七九八―一八四六）、興斎（一八二一―一八七七）を出した宇田川家、明六社の津田真道（一八二九―一九〇三）などが有名である。淑郎よりも若い世代で淑郎と同じ専門分野の人物としては、大塚久雄（一九〇七―一九六六）の指導教授であつた西洋経済史の本位田祥男（一八九二―一九七八）も津山出身である。津山では「大抵の人はエービーシーぐらいは口誦んでゐた」と淑郎後年の回顧談である「鶴峯漫談」（平沼淑郎著・入交好脩編、一九五七）にも記されている。淑郎自身も例外ではなく、漢学を学びつつ初歩の英語も学んだ。

一八七二年四月、淑郎が九歳のとき、父・晋は津山藩主・松平康倫やすとよの家職として淑郎をともない上京した（半年後に家族全員が上京）。上京後は、廣瀬惟熙いさに漢学を学び、樋口逸斎（一八二二―一七七七）につき書の修養に励んだ。またその後は西周（一八二九―一八九七）、宇田川興斎、箕作秋坪の塾などに学んだ。興斎は晋と同じく松平康倫に随つて上京し、康倫の屋敷の一角で塾を開いていた。興斎は、書や和歌、謡曲や囲碁にも通じていたというから、多彩な趣味で知られる淑郎もこの興斎からの影響を大

大きく受けたのかもしれない。ちなみに書家としての淑郎は、字を君一、号を鶴峰「峯」と称した。大東文化大学名誉教授の中林史朗によれば、淑郎の書も騏一郎の書も「共に筆勢が有り、単に言葉を書き出すのではなく、己が心に感知して咀嚼したものを己が言葉として筆に載せており、何處と無く幼時に漢學に接した明治人の、意氣志概を感じさせる筆遣いである様に思えてならない」（中林、二〇〇九）ということである。

箕作秋坪が開いていた三又学舎は、福沢諭吉の慶應義塾と並び称せられるほどの有名な塾であり、東郷平八郎（一八四八～一九三四）や原敬（一八五六～一九二二）、阪谷芳郎（一八六三～一九四二）などもその出身者に名前をつらねている。淑郎は、秋坪の長男である箕作元八（一八六二～一九一九）や阪谷芳郎とともに「三少年」と称されたほどの秀才であった。また三又学舎ではフランス・ウエイランドの経済書も「輪講」した。「輪講」という学びの方法は、儒学テキストを学習する際の方法であり、この学習方法と近代的学知受容との密接な関係が指摘されている（竹村、二〇一二）。

歴史学派経済学との出会い

淑郎は、一八七五年一〇月に東京英学校に入学（七七年四月、東京大学予備門に編入）、八〇年九月に東京大学文学部第一科（哲学、政治学、理財学科）に進学、八四年七月に文学部政治理財学科を最優秀の成績で卒業した（当時の東京大学には経済学部はまだなく、文学部のもとに政治理財学科が置かれていたので、卒業後の肩書は「文学士」であった）。八四年、淑郎卒業と同時に父は隠居したため淑郎が家督

を継ぎ、九月に漆山雅嘉の次女、しげと結婚した。

淑郎が経済学を本格的に学び始めたのは、この東京英学校（大学予備門）、大学時代のことであった。予備門講師であった金子堅太郎（一八五三～一九四二）はヘンリー・フォーセットの『経済原論』を教科書として採用し、淑郎もこれを学んだ。東大入学後は田尻稻次郎（二八五〇～一九二三）からジョン・スチュアート・ミルの『経済原論』、歴史学派のヴェイルヘルム・ロツシヤールの『経済原論』の講義を受けたが、淑郎はロツシヤールの実証的な経済史研究に興味を惹かれた。のちに淑郎自身、「従来理論経済学に代ふるに、実証研究を以てし、経済史実の研究に目を注いだものであつて、本邦経済学界に於いてこれを考究したことは一画期をなすものとして記憶すべきであらう。……歴史学派の学風は、我々学徒の間にも、熾烈な研究熱を喚起して、史実の考査に心を寄するもの漸く多きを加ふるに至つた」（平沼、一九三六）と述懐している。

また当時、経済事情を講じに洪沢栄一（一八四〇～一九三二）などの外部講師も東大で講義をおこなつたが、それについても「實際家が来講して實際の知識を与へられた事は小生どもに取つて非常に有益であつて、従来理論理屈にのみ偏して来たものの思想が、これより以後漸次實際化し來つたのである」（同上）と述べている。

そのほかに東大ではジョン・エリオット・ケアンズの *Some Reading Principles of Political Economy* や *Logical Method of Political Economy*、ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズの *Monetary and Exchange & the Elementary Lessons on Logic*、フレデリック・バステイアの貿易論、ヘンリー・

ダニング・マクラウドの経済哲学および銀行論等々を学び、カール・ラートゲン（一八五〇〜一九二二）の演習に参加して論文「日本に於ける賃金」を書いた。ラートゲンは東大にドイツ流のゼミナールを導入したのであるが、おそらく漢学の「輪講」に慣れた淑郎たちにとってはさほど目新しいものではなかったのではないだろうか。しかし、ラートゲンが東大にドイツ法学を導入し、以後、大きな影響を与えたことは確かである。弟の騏一郎も、一九〇七年、司法官僚時代にドイツに派遣され、ドイツの新しい法学理論を学んだ。淑郎は上記のなかではジェヴォンズの論理学にも関心を示したようで、後述するように最初の経済学の著作としての『通信教授 経済学』とともに『通信教授 論理学』も著している。

現実の社会への関心、貨幣制度、憲法問題

しかし、淑郎はこのような学問をただ学問として学ぶだけではなく、現実の社会や経済にも大きな関心を寄せていた。とくに混乱していた当時の金融制度、貨幣制度については実地にこれを研究し、添田寿一（一八六四〜一九二九）や阪谷芳郎などその後大蔵官僚となつてまさに日本の金本位制度確立に貢献する学友たちとも盛んに討論し、その結果を田尻に報告して教えを受けていた。添田、阪谷は松方正義の意に沿つた形で貨幣制度調査会（一八九三〜九五）の議論をリードし、一八九七年の金本位制導入を実現したのだが、東大在学時代には「添田寿一氏が金銀複本位制に就いて論じて居ることの如きは頗る興味深い。思ふに当時の経済状態の實際が然らしめたのであろう」とも述べている。後年、

金解禁論争が生じた際には、淑郎も『金解禁の話』（中和書院、一九三〇）という一般向けではあるが、かなり詳細な解説書を上梓している。まさに昔取った杵柄と言えるであろう。

このように経済学研究に力を入れていた淑郎であったが、卒業後に『明治日報』記者の道を選んだ。当時、成績優秀の東大卒業生であれば官界への道が一般的であったし、実際、淑郎には外務省からの誘いもあったようである。しかし淑郎はそれを断り、ジャーナリズムの道に進んだ。当時としては「破天荒なこと」（本位田、一九三三）であった。

この点について、淑郎が在学中から福地源一郎（一八四一〜一九〇六）や丸山作楽（一八四〇〜九九）と親交があったことや、さらにその前から弟の騏一郎と私雑誌『倫暇雜誌』を月々発行し、『曙新聞』や『明治日報』にも投書していたことなどから考えて、かなり早くから文筆の道で生きていくことを考えていたのだと思われるが、さらに筆者は東大予備門で教えを受けた金子堅太郎の影響が大きかったのではないかと推測している。周知のように金子は、アメリカ留学から帰朝したばかりの新進気鋭の官僚であり、大日本帝国憲法制定に尽力し、またエドモンド・パークの保守主義思想を日本に紹介したことも知られている。淑郎が当時の憲法をめぐる議論にかなり積極的に関心をもっていたであろうことは、早稲田大学商学部で淑郎の助手であった入交好脩の「故平沼淑郎博士傳」（平沼淑郎著・入交好脩編、一九五七）が伝えるように、学生時代にラートゲンの国法学の筆記ノートを当局者に提供したり、憲法草案を試作したりしたことさえあったことからわかる。また後年のことではあるが、ウォルター・バジヨットの『英国憲政論』の翻訳（平凡社『世界興亡史論』第八巻所収、一九一八）が出

た際に、淑郎はそれに序文を寄せ、当時の憲法論議を回顧し、自分も憲法試案を作ったほどであると述べている。入交は、その序文の内容から淑郎が作った憲法試案を「恐らくは穩健なる立憲君主主義的な色彩をもつたものではなかつただらうか」（平沼著・入交編、前掲）と推察している。過激な自由民権運動に反対する立場に立つ忠愛社に入社し、保守主義の立場から論壇で活躍することが、東大卒業時点で淑郎がもっともやりたかつたことだったのであろう。

忠愛社での活動

忠愛社は、丸山が一八八二年に『東京日日新聞』の福地源一郎とともに立憲帝政党を結成したあと、党の機関紙としての『明治日報』を発行した。『明治日報』は自由民権運動批判の立場に立っていたため、発行に際して一時は政府からの資金援助もあったようである。しかし帝政党自体が八三年に解党を余儀なくされると『明治日報』も八五年に廃刊となった。淑郎が入社した翌年のことであり、淑郎の記者としての活動はわずか一年ほどだったことになる。その後は、翻訳や著述に活動の主軸を置き、八五年にシエルドヌ・アモス『英国憲法新論』（上・下）の翻訳や内藤泰五との共著『独仏英三国官制』を忠愛社から出版している。

また一八八六年一月には東京の通信講学会で「経済学及び論理学」の講師を担当した（ほかには「心理学」、「教育学」、「生物学」、「教理学」などがあった）。教育界への本格的な転身は、忠愛社を辞してのちのことであったが、すでに通信教育担当の講師として活動をはじめていたことがわかる。通信教育

自体は、明治中期頃から盛んにおこなわれた教育方法のひとつであり、通信講学会でもたとえば「心理学」を井上円了が講じるなど一流の講師が講義録を作成・頒布し、それを読んだ読者が手紙などを使って講師に質問などもできるといふシステムを取っていた。

淑郎が担当した講義内容は、『通信教授 経済学』『通信教授 論理学』として、それぞれ一八八六年七月、一〇月に出版されている。前者は淑郎最初の経済学の著作であり、全編が二〇講に分かれ、そのほかに第一九講附録（「自由貿易及保護貿易の概略」）や質疑に対する応答が附加されている。この二〇講の内容は、総論（第一、二講）、生産論（第三～六講）、消費論（第七～九講）、分配論（第一〇～一三講）、交易論（第一四～一九講）および租税論（第二〇講）となっていた。後年、関西学院大学で経済学史を担当し、日本の経済学史研究に多大な貢献をした堀経夫（一八九六～一九八二）は、本書について「平沼淑郎の経済学原論は極めて論理的に整然と組み立てられているし、……多数の経済学者の学説を縦横に利用して内容を豊富にし、且つ表解、図解等を随所に挿入して読者の興味をそそるよう工夫されている。通信講義録といった性格からこのように懇切丁寧なものになったのであろうが、広く地方の篤学者の経済学知識を啓発するのに大いに役立ったのであろう」（堀、一九九二）と述べている。さらに入交はこの著述に歴史派経済学の影響が強く出ている点を指摘しているが（平沼著・入交編、前掲）、経済学史上から見たときにより重要なのはトーマス・ロバート・マルサスの『人口論』を紹介した業績であろう。マルサスの研究者であり『人口論』の翻訳者として知られる吉田秀夫は淑郎の業績をその賃金論について見るべきものと評価している（吉田、一九四四）。

マルサスもバークの保守主義の影響を強く受けた学者・思想家である。歴史派経済学とバーク、マルサスらの保守主義思想が、淑郎の経済学の基礎としてあったものと思われる。

2 大阪高商から早稲田へ

教育界への転身

淑郎が忠愛社時代にしげ夫人と結婚したことは先に述べたが、当時のことを夫人は次のように回想している。

弟「騏一郎」はまだ東大の法学生で寄宿舎に入つて一生懸命に勉強してをりました。夫は其時にはもう大学を終へて明治日報の主筆をしてゐましたが口癖に「弟だけは安心して勉強させたい」と申して居りました。貧の中で学問することの辛さが骨に沁みてゐたのでございませう。「騏一郎だけは何としても立派にして見せるぞ」、之があの頃の夫の生甲斐とも申せませうか、夫は乏しい月給の中からいつも金を家に送り弟の学資を助けてをりました。間もなく明治日報が潰れ十何年間をあちこちと田舎を廻りましたがその間も仕送りは断たず弟の無事ばかりを祈つてをりました。(以下略。括弧内は引用者注、句読点は適宜補つた) (『東京朝日新聞』一九三九年一月六日朝刊、以下『東京朝日新聞』からの引用は日付のみ記する。)

また騏一郎が回想しているところによると「兄は教育界に身を投じて三十有余年、その考へるところは子弟を教育し国家のお役に立たせるといふことだけでありました。私共の親は天保年間に生れ明治維新に際会して政治にも実業にも思を断ち不自由を忍んで子の教育に全力を盡くしましたが兄も早くから政治や実業に従事する念を全く断つたのであります」（一九三九年六月二六日）と述べている。

いずれにせよ、記者を断念して身を教育界に転じた淑郎は、一八八六年四月、郷里の岡山県尋常師範学校教諭兼岡山県尋常中学校教諭を皮切りに、八八年六月からは第二高等中学校教諭として仙台に赴任し、九〇年に教授となった。第二高等中学校（九四年に第二高等学校と改称。通称、二高）には八年間在職した。その間、二高に学んだ著名人としては高山樗牛、井上準之助、大隈信常、河津暹等がいたが、淑郎とどの程度の関係があったのかは不明である。またこの時期に淑郎はいくつかの教育学に關する本を執筆している。九〇年には伊勢書舗という書店から『教育原理心理学講義』第一巻を著し、翌九一年には内田芳兵衛（のち内田松鶴圃に改称）という出版社から『国家教育新論』（国家主義 新編教育学）卷之一、『国家主義 新編教育学』卷之二として再版）を出版した。前者の内容は欧米の教育学の基本的な書物を参考にして書かれたものであるが、後者は国家主義の立場から書かれている。また九一年には『謹読勅語』という本が静雲堂という書店から出されているが、淑郎は其中で九〇年一〇月に下された「教育ニ関スル勅語」についての解説文（『謹読勅語』）を寄せている。また伊沢修二（一八一〇年一〇月）が九〇年に設立した国家教育社の第二回集会在九二年九月に仙台で開かれて、淑郎もそこで講演をおこなっている。残念ながらその講演内容は不明だが、伊沢は国家主義教育の唱道者と

して有名であり、その後、台湾での統治教育・国語（日本語）教育の先頭に立った。淑郎自身も後年にいたっても、各種の教育関係の役職に就いて教育行政に携わり、朝鮮での教育改革に積極的に参画し、何度か朝鮮出張も経験している。伊沢との関連は指摘しておきたい。

大阪商業校長として高商昇格をサポート、『大阪市史』の編纂事業

八年間勤めた仙台を去って、大阪市立大阪商業学校長に栄転したのが一八九五年のことであった。この学校は、八九年の市制特例による大阪市制発足にともない、大阪商業講習所が発展改組したものである。淑郎は校長としての仕事以外に市政にも積極的にかかわっていた。九八年一〇月には大阪市助役（一八九八年一〇月二六日～一九〇一年六月二日）に当選、下水道、築港等の施設、第二高等女学校建設、図書館の整備等をおこなった。また大阪市長にも意欲を見せたが選ばれず、一九〇一年に高等商業学校に昇格した大阪市立高等商業学校校長となった。淑郎が大阪高商への昇格にどれほど貢献したかはわからないが、当事者でもあり、淑郎自身、当時の日本の商業従事者の地位の低さを問題に感じていたことは、一八九七年、東京で開かれた帝国教育大会に出席し、「商業教育に関し文明の進歩に連れ商業も世界的ならざる可らざるとのことより我国にてハ商を最下級の民とするの弊を打破せざる可らず」との内容で講演をおこなったことからわかる（一八九七年一〇月六日）。

また日本で最初の市史である『大阪市史』編纂が初代市長の田村太兵衛（一八五〇～一九二二）と淑郎の主唱によって始められ、その委員として幸田成友（一八七三～一九五四）が迎えられた。これを最

初に指摘したのは、大阪大学教授の宮本又次（一九〇七〜九二）であった。宮本は「この二人の文化人の構想によって市史の編集が計画されたに相違ない」（宮本、一九六四）と述べている。幸田はのちに渋沢栄一の伝記資料編纂にも初代編纂主任（一九三二〜三五）として携わった。

しかし淑郎は、この時期に体を壊して一九〇二年、休職を余儀なくされた。〇一年、第二代大阪市長になった鶴原定吉（一八五七〜一九一四）のもとでの各種の業務は繁多を極めており、今でいうストレスからの過度の飲酒がたたったものと思われる。休職後は和歌山に転地療養のため一か月ほど滞在した。

早稲田大学へ奉職

淑郎が早稲田に招かれたのは早稲田実業学校創設（一九〇一年）に尽力した天野為之（一八六一〜一九三八）によるものであった。天野は淑郎に酒をやめることを条件に早稲田に誘い、淑郎は天野の意気を感じて禁酒を誓い招きに応じたという（一九一五年九月二日、九月七日）。

淑郎は、最初、早稲田実業学校の講師として、そして一九〇二年に東京専門学校が早稲田大学（〇三年、政治経済学科・法学科・文学科、高等師範部を設置）と改称し、その翌々年、商科が新設されるとその講師として迎えられた。当時、横井時冬（一八六〇〜一九〇六）が「日本商業史」を担当していたので、淑郎の担当科目は「西洋商業史」であったが、横井が没すると両科目を併せて「商業史」としてそれを担当した。また政治経済学部で「経済史」が設けられるとその講座も担当した。一九一一年

には商学部教授、一五年には第四代早稲田中学校校長に就任した。四七歳での教授昇格であるから決して早くはなかったが、早稲田に来てからの最初の十数年間は比較的安定して研究や教育に打ち込めたものと思われる。

さて、一九一六年には河上肇の「貧乏物語」の連載が『大阪朝日新聞』紙上で開始され、翌一七年、弘文堂より刊行された。大正デモクラシーとマルクス主義の大きなうねりは早稲田の森にも及びつつあったが、まさにその時期に起こったのが、いわゆる「早稲田騒動」（一九一七年）であった。

第三代早稲田大学学長就任

ここでは「早稲田騒動」の詳細については触れない。淑郎は天野に招かれて早稲田の教員になったのだが、高田早苗派と天野為之派の対立からは中立的な立場にいたからこそ「早稲田騒動」が洪沢栄一や中野武蔵らの尽力によって収拾されたあとに学長に推挙されたからである。一点、学長に推挙される際に箔を付けるためであろうか、淑郎が添田寿一を推薦人として法学博士に推薦され、法学博士となったことは指摘しておきたい。当時は各大学で博士を決定する方法ではなく、すでに博士号のある法学博士によって構成される法学博士会の推薦によったためである。この推薦によって晴れて法学博士となった淑郎は、一九一九年、早稲田大学第三代学長（維持員理事学長）に就任し、二一年までの三年間、その職をまっとうすることとなった。就任式における大隈重信総長の推挙の辞を一部引用しておこう。

私は平沼博士の学識の深遠なるに大に推服してゐる者である。しかし学校の経営は学問のみでは出来ない。然るに平沼博士は学識に加へて経営の大なる才がある、且つ調和の大なる力がある。此一年間渋沢男爵其他学校の為めに御尽力下さつた方々も十分に之を認められたこと、思ふ。今や学校は経営の上にも、又行政の上にも大に発展しなければならぬ。時勢の必要が更に之を促してゐるのである。此時に當つて平沼博士が調和の力、経営の才に加へて種々の困難に克ち來つた経験を以て之に臨まれたならば、将来大学の為めにも最も効があると私は固く信ずるのである（『早稲田学報』二八五号）。

3 淑郎の社会および学会活動と大東文化学院での講義

社会および学会での活動①

大隈の言葉にあるように淑郎が高田派とも天野派とも距離を置きつつ、大学の行政に尽力していたことは確かであるが、本位田祥男が述べるように自らの学問を深く究める暇がなかつたかと言え、必ずしもそうは言えないであろう（本位田、前掲）。早稲田大学に着任してからの淑郎の業績について見ておこう。

まず早稲田での講義録で早大出版部から刊行されたものに、一九〇六―九年にかけて出された『近世商業史』『商業史』『近世内外商業史』『応用経済』『経済史概説』がある。さらに一九〇九年、アキ

レ・ロリア『社会の経済的基礎（大日本文明協会刊行叢書 第五編）』を翻訳し、大日本文明協会から刊行していることには注目しておきたい。ロリアはイタリアの経済学者であり、マルクス主義批判の立場に立つ独特の議論を展開した。

また騒動が沈静化したあと、時代は第一次世界大戦後の世界に入っていく。周知のように大戦が知識人に与えた思想的な影響は大きかった。淑郎も第一次世界大戦後の社会情勢の変化から生じる種々の問題について積極的に著作を刊行している点が注目される。一九一九年八月には東盛堂書店から淑郎の口述を菊地暁汀が編集した『社会及社会問題研究』が出版され、同月に日新聞から『社会思想及社会组织の研究』が出されている。さらに十一月には早稲田大学出版部から世界改造叢書第三編として『戦後の経済問題』、二〇年四月には如山堂書店から『社会問題講話』と矢継ぎ早である。

また時期は少し前になるが、淑郎は社会政策学会での活動を精力的におこなっている。一九一三年第七回社会政策学会では田島錦治（一八六七～一九三四）、気賀勘重（一八七三～一九四四）とともに労働争議について報告をおこない、新聞紙上でもその内容要約が簡単ではあるが掲載されている（一九一三年二月二日）。淑郎の死後の評価中に「社会政策学者」としてのそれが挙げられる場合があるが、当時の淑郎は、社会政策学会においても精力的に活動していたことがわかる。

社会および学会での活動②

以上、書籍として刊行されたもののいくつかについて紹介したが、以下では各種雑誌に寄稿された

代表的なものを挙げておこう。淑郎はその生涯にわたって専門の経済史論文、その他時論など多くの著作を世に問うているが、経済史以外の諸著作については論文目録から漏れているものも多い。

まず東洋経済新報社が一九一〇年五月に創刊、一二年一〇月（通巻三卷三〇号）で終刊となった社会文明批評を目的に掲げた月刊誌『東洋時論』への三篇の寄稿がある。「第二十世紀は世界的道德危機を発生する時機に当る」（第二卷第一号、一九二一年一月）、「道德の危機は経済組織の変動と相関渉」（第二卷第二号、一九二一年二月）、「革命の径路」（第三卷第一号、一九二二年一月）がその三篇である。淑郎が早稲田大学商学部教授になった頃の論説であり、かつて東洋経済新報社の主筆をしていた天野為之からの依頼があつたのかもしれない。

次に雑誌『東洋文化』への寄稿がある。この雑誌は、大隈重信を初代会長（第二代会長が騏一郎）とする東洋文化学会が発行していた月刊誌で一九二一年に発刊、四五年七月の第二三四号まで発行された。東洋文化学会は大東文化学院設立に繋がる漢学振興運動を推進した団体である。この『東洋文化』への寄稿が「法治利治兵治と徳治」（第一号、一九二四年一月）、「践履の学」（第二号、一九二五年一月）、「学説と時勢」（第二八号、一九二六年六月）、「紀元の佳節に就いて」（第三四号、一九二七年二月）、「物質徳治両主義の流弊に就いて」（第四一号、一九二七年一〇月）、「御即位の戊辰」（第五四号、一九二八年一月）、「再び物質徳治の両主義に就いて」（第五六号、一九二九年一月）と七篇ある。『東洋文化』への寄稿は、騏一郎からの依頼によるところもあったと推測される。なお、東洋文化学会は四三年に無窮会（一五年に騏一郎らによって設立された東洋古典籍の収集、研究をおこなった団体）に合併された。

そのほかにも西村茂樹（一八二八～一九〇二）が一八七六年に創設した日本弘道会（創設時は東京修身学社）の機関誌『弘道』への寄稿が数多くある。日本弘道会は「教育勅語」を中心とした国民道德の普及に努めることを目的とした民間団体である。また島田三郎（一八五二～一九二三）が創立した廓清会の機関誌『廓清』への寄稿も多くはないが認められる。

また一九二二年には地政学者として有名であり、『海上権力史論』で世界の海軍戦略にも大きな影響を与えたと言われるアルフレッド・セイヤー・マハン（一八四〇～一九一四）のネルソン伝、『ホレーシオ・ネルソン』（英傑伝叢書 第一編）を実業之日本社から翻訳出版している。第一次世界大戦勃発後、日本海員救済会（一八八〇年、前島密が中心となって創設）が発行する雑誌『海之世界』に二回寄稿しており、その内容からマハンの影響が看取される。またそれと関連して戦前期に於ける外交論壇誌としてあった『外交時報』へも一八篇の寄稿がある。外交史関連の業績についてはこれまであまり着目されていなかったが、重要な業績のひとつであろう。

以上のように淑郎の文筆活動は、教育分野から政治外交分野まで幅広く盛んにおこなわれており、東大在学時から学問の実際上の応用や社会問題へのコミットメントに積極的であった淑郎のスタンスが見て取れよう。早稲田騒動に巻き込まれた多忙な時期にも学者・知識人としての活動は顕著であり、商学部教授としての実績を積み重ね、一九二三年には商学部長に就任した。

大東文化学院で「経済学」の授業を担当

一九二三年、帝国議會によって「漢学振興の建議」が決議され、それに基づき大東文化協会および大東文化学院が設立された。淑郎が学院にかかわりをもったのは、騏一郎が初代院長に就任したことがきっかけであったことは間違いないところである。学院はもちろん漢学教育を中心とした学校であったが、同時に教員養成の目的ももっていたために幅広く教養としての経済学を教授する必要もあつた。したがつて当初より「経済学」の授業はカリキュラムにあり、今で言うところの非常勤講師として淑郎がそれを担当することは自然でもあつた。学院での授業は翌二四年に開始された。淑郎の関心が社会問題へ向いていた時期でもあり、学院での講義はそうした時事的な問題も踏まえつつの経済学の理論と応用に関する概説であつたと思われる。あるいは早稲田大学で担当していた経済史、商業史の内容を踏まえたものであつたかもしれない。またあるいは学院の主要な科目の授業方法には漢学を学ぶ際の「輪講」が用いられていたことから、それと同様に経済学のテキストを「輪講」する形式だったかもしれない。今後の資料発掘が待たれるところである。

しかし、「学院紛擾」による一九二八年度末の「官学派」教員の一斉退職で淑郎も学院の教授陣から去ることになった。わずか五年間の学院での授業担当であつた。

4 経済史研究者としての淑郎とその晩年

経済史研究者として

早稲田大学への着任以来、商業史や経済史の講義を担当していたことや一九三〇年の社会経済史学会創立メンバーであったこともあり、一般的には淑郎は経済史の専門研究者として認識されているが、以上見てきたように早稲田に来る前は本格的な研究業績はさほどないことがわかる。史談的なものや二次文献に依拠した経済史の論文はいくつか書いているが、本格的な資料収集に基づいた研究は意外にもそのスタートが遅い。本格的な実証研究は、入交も述べているように「晩年の十数年の歳月を捧げた『寺院門前町』に関する一連の実証的研究」である。淑郎は歴史学派経済学のシュモラーやビュッヒャーが唱えた「都市経済」という発展段階説に刺激を受け、寺院とその地域における市場の発達との因果関係を歴史的に考察しようと考え、「日本に於ける寺院門前町の存在に関心を抱かしむる結果となった。時に明治時代の末期であったと記憶する」（平沼著・入交編、前掲）と述べている。着想は明治末期、すなわち一九一〇年代初頭であったが、実際に史料の収集に手をつけはじめ、本格的な調査が開始されたのは、「日光東照宮三百年祭奉斎会」（一九一三年四月設立、九月洪沢栄一が会長をつとめ、一六年三月に解散）の補助金をえてからのことであったので、二三〜一六年頃のことと推察できる。以後、十余年にわたって収集作業が続けられ、論文として発表されたものの最初が、二六年一二月発行の『早稲田商学』に掲載された「寺院門前町の研究（一）」であった。以後、同誌に「寺院門前町の

研究(二)、「寺院門前町としての成田の発達に就いて(一・二)」、「寺院門前町完成前期の長野(一・二)」、「寺院門前町としての長野の発達(一・二)」、「身延山門前町調査」、「備前国西大寺門前市場に就いて」、「山門領門前町近江坂本に就いて」、「再び身延山久遠寺門前町に就いて」をおよそ一年に一〜二本のペースで発表している。寺院門前町の研究にかんしては、ほかに『社会経済史学』第一巻第二号(一九三一年七月)に「寺院と隣接領主との係争関係の一例」を、『土佐史談』第四四号(一九三三年九月)に「寺院門前町の研究」を載せている。

社会経済史学会創立と淑郎

一九三〇年一二月、全国の大学における経済史、法制史、社会史、思想史関係の諸教授並びに広く在野の地方史家まで網羅して社会経済史学会がその産声を上げた。その初代の理事代表に選ばれ、三年八月に脳溢血で亡くなるまでの間その重責を担ったのが淑郎であった。機関誌『社会経済史学』の記念すべき第一号において淑郎は、「社会経済史学の創刊に際して」という論説を書いている。淑郎の経済史学に寄せる期待が端的に述べられており重要であるので、やや長くなるがその一部を引用しておく。

小生は嘗て聞くローマは一日にして成らずと。洵に千古の金言キョウゴンと申すべきである。これと同じく
いづれの国家社会もその成るの日に成つたものではない。古代から推移テツシ進歩の道程を辿つて来た

ものである。世に新しいといふことを好んで口にする人がある。新しいことは小生もこれを歓迎するに於いて決して人後に落ちない。しかし新しいもの決して突如として起り来るものではない。必ずや基礎があつて、その上に建設されるべきものであらねばならぬ。印度は英国のために征服されたといふ。それに相違ない。それにしても英国が今日に至るまでその権力を維持してゐる所以のものは、Cunninghamの言を待たずして、大いに印度の古習旧慣を尊重したことが原因をなしてゐることを知り得る。それでも今や印度国民が民族觀念に目醒めて自治を叫ぶに至つてゐる。征服は一時権力を樹立するには相違ないけれども、結局は自然の狀態に復帰する。全然新しい物を齎し來つても到底永続し得ない。印度の亡びたるはおのづからその理由がある。その今日の狀態を呈したるものまたその理由がある。人事を説くものは須らくこの点に留意すべきであつて政策もまたこれによつて動かなければならぬのである。しかしてこの理由を発見し得るに至るのは偏に史家の力に俟たなければならぬ(平沼、一九三〇)。

社会経済史学会創立の翌年九月に滿洲事變が勃発、その翌年には五・一五事件、「滿洲国」建国と次第に戦争の足音が近づいてきていた。淑郎は健康状態があまりすぐれないなか、『社会経済史学』や『早稲田商学』『経済史学』などに論文などを書き続けた。そのなかで注目すべきなのは、『早稲田商学』第一四卷第一号(一九三八年四月)に発表された書評論文「大塚久雄著『株式会社発生史論』」であろう。管見の限りではあるが、淑郎の書評という形での論稿はほとんど見当たらないが、大塚の

最初の本である『株式会社発生史論』（一九三八年、有斐閣）への書評は二〇頁におよぶ大作である。一般に難解だと言われている『株式会社発生史論』を淑郎はよく読み込んでその内容を非常に高く評価し、「小生はかねて同君の研究が非凡なる分析力に富むことに注目し、その諸論文は悉く蒐集せしめてこれを繙読することゝとしている」とも述べている。もちろん評価するだけでなく、今後の課題としてイギリスにおける毛織物工業の展開とヨウマンリーの問題というまさに大塚史学の核心部分を的確に指摘している。残念ながらその後の大塚史学の展開発展を見ることなく、淑郎は七四歳でその生涯を終えた。

その大塚久雄は淑郎生誕百年の記念誌上で「すべてが忘却のよばりのあいだから見え隠れするようになってしまった現在でも、なお鮮明な印象としてのこつているのは、あの当時の客観状勢のもとにあつて、先生の思想的雰囲気が毅然としてリベラルなものを含んでいたということである」（大塚久雄、一九六四）と追想文を寄せている。

参考文献

- 平沼淑郎著、入交好脩編（一九五七）『近世寺院門前町の研究』（附録・第一 鶴峰漫談―思ひ出の記―、第二 故平沼淑郎博士傳、第三 故平沼淑郎博士年譜、第四 故平沼淑郎博士著書論文目録）、早稲田大学出版部

中林史朗（二〇〇九）「展示品から 鶴峰と機外」（『大東文化歴史資料館だより』六号）

- 竹村英二(二〇一二)「江戸後期における儒学テキスト読解の作法」(『日本研究』四六)
- 平沼淑郎(一九三六)「経済学学習時代の思ひ出」(早稲田大学経済史学会『経済史学』第三輯)
- 本位田祥男(一九三三)「平沼淑郎博士伝記」(社会経済史学会編『平沼淑郎博士古稀祝賀記念 社会経済史論集』日本評論社)
- 堀経夫(一九九一)『増訂版 明治経済思想史』日本経済評論社
- 吉田秀夫(一九四四)『日本人口論の史的研究』河出書房
- 宮本又次(一九六四)「平沼博士と幸田博士の『大阪市史』編纂」(早稲田大学経済史学会編『平沼淑郎博士生誕百年記念誌』早稲田大学第一商学部・第二商学部)
- 入交好脩(一九六五)「恩師平沼淑郎博士の経歴とその学績」(聖心女子大学『聖心女子大学論叢』二四)
- 平沼淑郎(一九三〇)「社会経済史学の創刊に際して」(社会経済史学会『社会経済史』第一卷第一号)
- 大塚久雄(一九六四)「温かいまなお彷彿として」(早稲田大学経済史学会編『平沼淑郎博士生誕百年記念誌』早稲田大学第一商学部・第二商学部)

第10章

開学期に哲学・論理学・心理学を講じた北一輝の実弟

北 吟 吉



一八八五年七月二二日、新潟県加茂郡湊町（現・佐渡市）に三兄弟の次男として生まれる。二歳上の兄が北一輝（一八八三—一九三七）である。一九〇四年三月に佐渡中学校を卒業後、早稲田大学高等予科（政治経済学科）入学、修了後は大学部文学科へ進み、〇八年に卒業。中学校の英語教師を経て一三年、早稲田大学文学科講師に転じた。一八年に欧米へ四年間留学し、帰国後は早大に戻らず、二三年に大東文化協会比較研究部主任と大東文化学院講師に招かれ、二四年に教授就任。二六年から大正大学教授を兼任。二八年に大東文化学院辞職後は二九年帝国美術学校校長、教授。三二年から三五年まで帝国音楽学校校長を兼任した。帝国美術学校は内紛で分裂し、三五年に多摩帝国美術学校名譽校長。翌三六年に新潟一区から衆議院議員総選挙に保守系無所属で立候補して当選、五八年に落選して引退するまで八回当選した。日本自由党政調会長な

どを歴任し、六一年没。

1 佐渡の知的風土と北兄弟

佐渡中学校卒業後上京、早稲田大学へ進学

開学当初から五年間、草創期の大東文化学院で哲学・論理学・心理学などの人文科学を講じていたという北吟吉の存在を知ったのは、二〇一三年のことだった。当時、ダイヤモンド社が『週刊ダイヤモンド』一〇〇年分の記事のデジタル化を完成させ、一九一三年の創刊号から検索可能になった。このデジタル・アーカイブで大正期から昭和戦前のエコノミストや評論家の情報を検索、整理していたところ、国際情勢と政局の転換期に北吟吉が長い論稿を書き、あるいは長編の座談会に出席していたことがわかった。データベース上では三三年から四一年までの八年間で、二三件の署名記事が出力される。また、ダイヤモンド社内の勉強会にたびたび登壇し、社員向けにレクチャーしていたこともわかった。

ダイヤモンド社の創業者、石山賢吉（一八八二―一九六四）も新潟県西蒲原郡曾根村（現・新潟市）の出身で、吟吉とは新潟で同郷、そして同世代である。編集者と寄稿家以上の関係だったこともわかった。戦後は佐渡出身のダイヤモンド社の編集者、稲邊小二郎（一九二六―二〇〇四）を吟吉の議員秘書として送り出した。稲邊は二〇〇二年に吟吉の唯一の評伝を出版している。

吟吉は二・二六事件で有名な思想家・北一輝の実弟である。一輝の評伝や研究書には吟吉も必ず、少しだけが登場している。だいたい哲学者、編集者、ライター、政治家として出てくるが、教育者、学校経営者としての姿はほとんど描かれていない。

吟吉は一九三六年に衆議院議員へ初当選する前、一九〇〇年代から三〇年代前半までの三〇年間、すなわち社会人人生の前半に、旧制中学や大学など八校で順次教鞭をとり、学校経営にも踏み込んだことは八校の歴史に詳しい関係者以外、ほとんど知られていない。

多彩な吟吉の教員歴を順にたどりながら、主に教育者、学校経営者としての軌跡を描いてみたいが、その前に、中学校卒業まで暮らした佐渡の生家とその周辺の様子を、吟吉の自著をもとに概観しておく（北吟吉、一九三七、一九五五、二〇一七）。

吟吉は北慶太郎（一八五三～一九〇三）、りく（旧姓本間、一八五六～一九三九）の両親のもと、三兄弟の次男として佐渡島に生まれる。生家は貧しい漁師町だった両津湊で酒造業、肥料問屋、海産物問屋を経営していた。祖父は湊町長、父慶太郎は統合後の両津町長だった。母の実家、本間家の叔父、本間一松らも県会議員で、慶太郎の没後、一輝や吟吉の学費を出している。政治家志向は血脈であろう。

吟吉は一八九五年に加茂高等小学校に入学すると、父の指示で一輝とともに漢学塾へ通い、漢文を学んだ。九九年、佐渡中学校へ進学する。佐渡島は西側の真野湾と東側の両津湾を結ぶ中央の国仲平野に人口が集中しているが、北前船による上方文化が流入した西部に教育機関が集まっていた。佐渡中学校は西部の佐和田にあり、東部の両津湊からは直線で一八キロメートルも離れていて、通学できず、

一輝も吟吉も寄宿舎に入っている。

一輝は眼病によって長期療養したため、合計在学期間二年ほどで佐渡中を中退しているが、吟吉は頑健で柔剣道が得意だったそうだ。学科の成績も優れていた。

一八九九年から一九〇一年、東京帝大哲学科出身の八田三喜（一八七三～一九六二）が佐渡中学校校長として赴任していた。八田は、国民が国家であり、国民も国家とともに進歩すべきと説く一種の社会契約論を主張し、一輝や吟吉に大きな影響を与えたとされている。吟吉に対しては後年、教職の幹旋までしている。

一九〇四年三月、吟吉は佐渡中を卒業すると四月に早稲田大学高等予科政治経済学科に入学し、修了後は大学部へ進学するが、政治経済学科ではなく文学科へ上がって哲学や心理学を学んだ。八田が早大在学中の吟吉の保証人だった。

一輝も早稲田の聴講生として同時期に入学した。一輝は旧制中学を卒業していないので、旧制高校や大学予科に入学することができなかったのである。北兄弟ははじめ早稲田喜久井町の下宿に同居した。半年後、一輝は谷中へ引っ越して帝国図書館へ通い、大量の本を読んで『国体論及び純正社会主義』一〇〇〇頁を書き上げた。

一輝はウルトラ右翼の国家社会主義者と評されることが多いが、吟吉によれば、「兄の思想は藩閥打破の民権思想と詩人的情操から来る『王皇心』との不思議な結合であった。後年の徳富蘇峰の口吻を借りれば『皇室中心民本主義』とでも名づくべきものであった」（北吟吉、一九五五）。

佐渡には歴史的に民権思想と尊王思想の潮流が並んで流れていた。佐渡の知的環境のなかで、一輝の思想には尊王思想と国権思想と民権思想が入り組んでいたというのが吟吉の見立てだ。

吟吉自身にも似たような重層的な知的傾向がある。吟吉は一輝を「急進的日本主義者」といい、自身を「進歩的日本主義者」だと言っていた（北吟吉、一九五五）。その違いは、一輝は国家社会主義と皇室中心民本主義を目指したが、吟吉は反国家社会主義、東西文明の融合を標榜する日本主義者だったところにある。

一九〇八年一〇月、吟吉は早稲田大学文学科を卒業、いよいよ八校に及ぶ教員歴が始まる。

2 中学英語教師を経て早大文学科講師に

土浦中学校の教え子二人は三菱の経営者に

一九〇八年一月、吟吉は茨城県立土浦中学校の英語教師として赴任した。現在の県立土浦第一高校である。この就職も八田三喜の推薦だった。勤務していたのは三年間で、顧問だった柔道部の生徒、岡野保次郎（一八九一～一九七六）と高杉晋一（一八九二～一九七八）の二人に目をかけ、自宅に呼んで英語を教え、第二高等学校受験に導いた。岡野と高杉は二高、東京帝国大学法学部を経て三菱合資に入社し、岡野は戦後、三菱重工業社長、高杉は三菱電機社長に就任している。二人とも生涯にわたって吟吉に私淑していた。高杉は吟吉の没後、『週刊ダイヤモンド』に次の一文を寄せている。

元三菱重工業社長の岡野保次郎君は私の無二の親友の一人である。小学校、中学校、高等学校、大学、そしてさらに三菱でもいっしょだった。……私の三菱暮らしもかれこれ四八年になるが、小学校からずつといっしょ、しかもお互いに社長になるなどという例は、珍しかろう。

岡野君と私との関係で、忘れられないのが、いまはなき北聆吉先生である。先生は後に衆議院議員として、政治家となられたのであるが、私どもがはじめて先生を知ったのは土浦中学の時だ。先生は、早稲田大学の哲学科を出られ、土浦中学校へ英語の先生として赴任してきたのである。私どもは、三年間、先生について英語を教わった。二高受験の時は、先生の家に彼と二人で泊まりこんで、寝起きをもとにして勉強した。しかも、先生は、柔道部の部長をやられ、英語ばかりか、いろいろとモノの見方、考え方を教えてくれた。

二高にはいって、はじめての夏休みで帰郷したおりのことだ。先生のすすめで私ども二人は参禅した。それから禅をやるようになり、私は石田居士、彼は忍峰居士という居士号をもらった。

その後の私の生き方、人生に対するモノの考え方、見方は、多分に先生の影響を受けたように思う。先生と私どもとの交際は、その後、社会に出てからも続き、先年、先生がなくなるまでこそ懇意を願ったのである……（高杉、一九六四）。

聆吉は土浦中に赴任して三年後の一九一一年三月、東京府立第三中学校（現・都立両国高校）の英語教諭へ転じる。当時、府立三中の校長は八田で、彼が聆吉を招いたのである。

早大哲学科講師五年目「早稲田騒動(学園紛争)」で辞任

早稲田大学講師への転職は、またまた八田の斡旋である。八田の東大同期の哲学者、藤井健治郎(一八七二—一九三二)が早大文学部教授から京都帝国大学教授へ移ることを知った八田が、吟吉を後任へ推挙したのだという(北、一九五五)。

吟吉は専任講師として採用され、多くの講義を受け持った。文学部や高等師範(現・教育学部)で倫理学、哲学、心理学、英語など八科目以上、そして法学部などでも関連する人文科学の講義を持っていた。

講義だけでも多忙だろうが、早大在職の五年間で著書・訳書を一三冊出版し、学術誌や評論誌に三本の論文を発表している(西谷、二〇〇三)。恐るべき知的生産量である。

もちろん、短い批評や小冊子を含めてだが、訳書のアーサー・ロジャース『西洋哲学史』(共訳、富山房、一九一四)や、著書『ベルグソン哲学の解説及批判』(第一編、第二編、南北社、一九一四)、訳書ハラルド・ヘフディング『近世哲学史』(上下巻、新潮社、一九二七、一八)など、この三点だけで翻訳と執筆に何年もかかりそうな大作もある。大学当局も大いに評価していたのだろう。一八年からの海外留学も予定されていた。

ところが、一九一七年に大事件が起きる。有名な「早稲田騒動」である。多くの教員や学生を巻き込んだこの学園紛争の結果、一年後に早大を去ることになる。

吟吉は早稲田騒動の発端を生んだグループ「プロテスタント」の主要メンバーだった。騒動の始ま

りは、大学当局による故大隈重信夫人の銅像設置の決定にある。この銅像設置反対運動が、当時の学長天野為之（一八六一～一九三八）の留任を求めるグループと、前学長高田早苗（一八六〇～一九三八）の学長復帰を求めるグループの権力闘争に発展し、大混乱に陥る。

騒動の結果、高田の学長復帰後、井上忻治（法学、一八八四～一九七六）や永井柳太郎（植民学、一八八一～一九四四）などの教授陣が罷免され、吟吉や大山郁夫（政治学、一八八〇～一九五五）ら講師は辞職することになった（大山は二二年に復職）。

3 四年間の欧米留学から帰り大東文化学院教授に

三菱の岩崎小弥太の支援で長期留学へ

早稲田騒動で辞任後、吟吉は海外留学へ出発する。すでに所定の旅費は早大から出ていたようだが、少額のため資金不足だった。そこで助け舟を出したのが土浦中学校の教え子、岡野保次郎である。岡野はこの年二七歳、三菱合資に入社して二年目、三菱重工業神戸造船所に勤務していたころだ。岡野が吟吉の没後出版された追想集に留学資金の調達について書いている。

あれはたしか大正六、七年頃と思うが、北先生は早稲田大学から欧州へ留学することに決った。ところが、大学から出る学費は非常にすくない。そこで私は三土先生に会って、岩崎さんから北

先生のために少し学費を出して頂けないかと頼んでみた、三土先生は大学時代の保証人として、ずっと御指導を頂いていたわけです。三土先生は、北先生の著書とか、論文とかいろいろ調査しておられたが、稀な秀才であることがわかったのか、岩崎さんに紹介して下さることになった(岡野、一九六三)。

「三土先生」とは、政友会の衆議院議員、三土忠造(一八七一―一九四八)で、岡野は三土の書生だったと思われる。「岩崎さん」とは三菱合資社長(三菱財閥四代目総帥)、岩崎小弥太(一八七九―一九四五)のことだ。三土に依頼して一週間後、三土から岡野へこう伝わった。

岩崎さんが「僕は北という人は全く知らない。しかし日本には優れた文明批評家というようなものが少ないのは遺憾である。欧州には、例えばロンドンタイムスにしても、ニューヨークタイムスにしても、一般国民に先んじ、国家の向うところを洞察し、輿論を指導する先覚者といわれる様な有名な論説委員が沢山いる。日本は文芸批評家はいるけれども、哲学的の高い教養を持った文明批評家という類の人が少ない。そういう人が生れることを待望していた矢先でもあり、その方面の勉学をして貰うこととして、北君に月々若干の御援助をしよう」と言っただけだったというのであった。

一方、北先生が岩崎さんから後に聞いたというのは、「北君、私はあなたに条件は全然つけない。

もともと、私は主義というようなことが大嫌いの男だ。それで条件でも何でもないが、もし希望を述べるなら、君は私と全く反対の立場に立ってくれても少しも差支えない。ただ日本が、将来世界の日本として立派に仲間入り出来るよう、日本の思想界を指導するいわゆる社会の木鐸者となって欲しいね」ということであつたそうだ（岡野、一九六三）。

岩崎小弥太が提供した留学資金は月額三五〇円、ほかに汽車などの旅費は自由に使えた（竹内、二〇一）。三菱UFJ信託銀行によると、大正時代の一元は現在の四〇〇〇円程度の価値だったという。三五〇円は現在価値で月額一四〇万円になるので、潤沢な資金を提供されたといえよう。

ケンブリッジ大学を卒業し、イギリスでも日本でもチェロも学んでいた岩崎は、哈吉留学の数年前、作曲家山田耕筰（一八八六～一九六五）のベルリン王立芸術アカデミーへの留学費用も援助している。

第一次大戦終結直後の一九一八年一月、哈吉はまずアメリカのハーバード大学大学院哲学科に入る。翌一九一九年一月、岡野保次郎が三菱商事ロンドン支店へ赴任する途中、ハーバードの哈吉を訪ね、三日間哈吉の宿舎に宿泊したという（岡野、一九六三）。

一九一九年九月、イギリスへ渡り、アダム・スミスの母校、オックスフォード大学ペリオール・カレッジに三か月滞在した。二月にはフランスへ移動し、二〇年二月にコレージュ・ド・フランスの哲学教授アンリ・ベルグソン（一八五九～一九四二）に会った。哈吉は一四年にベルグソン哲学の解説書を著している。帰国後二五年にはベルグソンの『時間と自由意志』を訳出して新潮社から出版した。

一九二〇年三月、イタリアのナポリで当時は反ファシズムの哲学者ベネデット・クローチェと面談した（後年ファシズム支持に転向）。四月にはベルリン大学に入学したが、一年後の二一年四月にハイデルベルク大学へ転学し、哲学教授ハインリヒ・ヨーン・リッケルト（一八六三～一九三六）に学んだ（峰島、一九九七）。リッケルトのゼミナールで留学生の三木清（一八九七～一九四五）に出会い、のちに吟吉は三木を大東文化協会、帝国美術学校、そして多摩帝国美術学校へ招くことになる。

一九二二年一〇月、留学を終え航路で帰国の途につく。一二月末に神戸港に到着。この時期、ベルサイユ条約で巨額の賠償金を課せられたドイツはハイパーインフレーションに襲われている。日本人のドイツ留学生は円を英ポンドに交換しておけば、ほぼ無制限に書物を買えただろう。ドイツは戦時賠償金を日本にも支払っているが、現金ではなく、自動車や書物などの現物を送ったこともある。日本人留学生たちは大量のドイツ語原書を買い込んでいた。

吟吉は留学の学問的な記録、交友録、旅行記として、一九二六年に『哲学行脚』（新潮社）を出版している。

大東文化協会・大東文化学院教授と同時に新聞・雑誌を主宰

帰国した吟吉は留学資金を一部出していた早大には戻らなかつた。帰国の翌一九二三年二月、日本主義（国粹主義）と東洋文化振興を掲げる大東文化協会（以下、協会）が設立され、吟吉は協会初代会頭の大木遠吉（一八七一～一九二六、第2章参照）に声をかけられて協会比較研究部主任、および協会

が運営する大東文化学院（以下、学院）の講師に就任する。

協会理事（のちに副会頭）木下成太郎（二八六五〜一九四二、第3章参照）とはここで親しくなる。木下は北海道議会議員を経て、一九二〇年以降は政友会の衆議院議員を続けた政治家である。

吟吉は一九二四年に学院教授に昇任し、論理学と心理学などを講ずる。ハイデルベルク大学のリツケルト・ゼミで出会った三木清を教員として招聘しようとするが、三木は恩師の西田幾多郎などの反対にあう。しかし、三木は思想的に相容れるとは思えない吟吉が嫌いではなく、協会比較研究部の囑託は引き受けた。もちろん非常勤である。それにしても、三木清と吟吉は馬が合う仲だったとは意外な事実だ（朴、二〇一九）。

協会は研究紀要の月刊誌『大東文化』を一九二四年二月に創刊する。創刊三号（二四年五月号）に吟吉は「日本神秘主義に就て（主に臨済宗を顧慮して）」と題した論文を掲載している。これはハイデルベルク大学のリツケルト・ゼミにおいてドイツ語で講演した内容を日本語で書き直したものだ。ちなみにリツケルトは仏教思想にも詳しくあったという。

また、協会の二代目副会頭の小川平吉（一八七〇〜一九四二、第4章参照）が主導して二五年四月に創刊された『日本新聞』に吟吉も参加し、二九年までの四年間、日本新聞社編集監督兼論説委員として記事を大量に書いている。小川は政友会の重鎮で閣僚経験も豊富な政治家だった。小川の二女の長男が宮澤喜一（元首相、一九一九〜二〇〇七）である。

『日本新聞』創刊の経緯について、『日本新聞十年史』にはこう記述されている。

大正十四年二月、加藤高明を首相とする護憲三派内閣の下に司法大臣として……、大臣自ら筆を執りて治安維持法を起草したる小川平吉を中心として、最も思想問題を憂慮せる上杉慎吉、北吟吉、山岡萬之助、蛭川新、渡千冬、下位春吉等は小川に勤むるに国家本位日本精神鼓吹の一新聞を發行せんことを以てし、五百木良三、荒木貞夫、近衛文麿、大木遠吉、赤池濃、木下成太郎、小室翠雲、福田和五郎等は熱心に賛成して助力を誓われた。……小川は大東文化協会を興して儒教の新興、王道の鼓吹に教育機関の基礎を置きたる……。大正十四年五月、京橋区日吉町八番地に日本新聞創刊事務所を置きて着々実現の歩武を進め、若宮卯之助、北吟吉、坂東宣雄、福田和五郎、尾間立顯、佐藤忍、綾川武治等を編集局に配し……、六月二十五日、地久節の日を期して創刊第一号を發行したのであった（日本新聞社、1935）。

しかし、やがて小川と吟吉は対立するようになり、吟吉は一九二九年に日本新聞社を辞めることになる。

ほぼ同時期の一九二六年には、吟吉らは一般向けの学術誌『学苑』を創刊する。同人誌の体裁で、発行元は聖山社だった。

吟吉が編集主幹で、顧問に鵜澤總明（一八七二～一九五五、コラム2参照）を据えている。鵜澤は政友会の衆議院議員、弁護士で、一九二七、二八、四三年の大東文化学院総長をつとめた。編集同人には早稲田騒動でいっしょに辞任した井上忻治、佐渡中学校の恩師八田三喜、早大時代の「プロテスタ

ンツ」仲間だった永井柳太郎らが名前を連ねている。

この雑誌の基盤は吟吉が一九二三年から毎週開催していた哲学研究会で、この研究会には三木清を招いており、三木は『学苑』同人にもなって翻訳記事を寄せている。早大文学部の教え子の一人、金原省吾（一八八八〜一九五八）も研究会に参加し、『学苑』に論文を載せている。

一九二八年には学苑社を設立して吟吉が編集主幹兼社長に就任する。月刊『学苑』は通巻二六号（二八年一月号）で終刊し、月刊『祖国』を同年一〇月号から発行している。『祖国』は誌名のとおり、日本主義を主張する政治的な雑誌で、学術雑誌から政治思想誌に変身したわけだ。手元の『祖国』創刊第一号（二八年一〇月号）と第二号（同十一月号）の奥付には、編集兼発行人が多田憲一とクレジツトされている。多田も早大文学部で吟吉の教え子だった人物である。

執筆者の大半は吟吉の人脈だ。たとえば土田杏村（一八九一〜一九三四）は吟吉と同じ佐渡出身で京大の西田幾多郎門下、気鋭の評論家だった。第二号の巻頭に「福本イズムの史観及び経済学を分析批判す」を書いている。共産党の理論的指導者（福本和夫）を経済学的に批判した論文だ。

第二号では、吟吉の欧米留学を支援した三土忠造の論文「金融恐慌以来我国経済界の状況」が掲載されている。三土は昭和金融恐慌（一九二七）を四日間片づけて蔵相を辞任した高橋是清（一八五四〜一九三六）の後を襲い、後任の蔵相として経済界の混乱を収めていた。経済政策の責任者の立場から金融恐慌一年後の情勢を報告している。その高橋是清も「閑日叢談」と題した随筆を寄稿し、三木清は「詩人としての批評家に答う」と題して、自身のマルクス研究批判への反批判を書いている。

ほかに目立つのは創刊号と第二号に二本ずつ書いている若宮卯之助（一八七二～一九三八）と金原省吾だ。金原は「東洋美術史」に関する論稿を寄せ、イラストまで描いている。若宮は『日本新聞』でも吟吉とともに活動した慶應義塾大学の社会学教授で、国粹主義者として知られていた。

左右にウイングを広げた吟吉の多彩な人脈がわかる執筆陣である。吟吉は創刊号から一二頁に及ぶ「思想困難の対策」と題した思想教育についての連載と、「本誌主幹」と肩書を付けて時評を書いている。第二号の時評のテーマは一九二八年八月に調印された「パリ不戦条約」だ。吟吉は小川と不戦条約をめぐる対立し、『日本新聞』を辞めることになる。記事の内容は調印を批判したものが、どういうわけか冒頭で「国粹主義の頭目、小川氏」とからかっている。

吟吉は早稲田騒動でもそうだが、対立する二派があると、どちらかにはつきり与することもなく、両方批判して引き上げてしまうところがある。なお、『祖国』は一九四三年九月号まで続いた。

一方、大東文化学院内部では深刻な対立が発生していた。一九二五年一二月に井上哲次郎総長から発表された大学改革案によって、講義を減らされる私学出身者（私学派）と官学出身者（官学派）の対立が始まり、騒動は三年続いて二八年に官学派の十数人が辞職し、その後も何人かが辞職したり復職したりという混乱が続いた。吟吉もこの騒動の渦中で一九二八年後半に辞職したようだ（朴、二〇一九、浅沼、二〇二二）。しかし、協会や学院と決定的に衝突したわけではない。その後も協会や学院関係の講演を引き受けている。

たとえば、学院辞職一年後の一九二九年五月二四日には大東文化協会と日本新聞社の主催で、「不

戰条約問題に関し帝大五教授を評す」と題して講演している。日本新聞社に在籍していた時期で、この直後に辞任した。また、学院辞職四年後の三二年六月二日には大東文化学院弁論部の主催で、「日本主義とは何ぞや」と題して講演している。学院教授だった五年間、毎週数コマの講義を続け、『日本新聞』と月刊誌『学苑』、『祖国』の編集を主導し、毎号記事を執筆し、著書・訳書を二三冊も刊行している。他社からの執筆依頼にも応じ、これもまた毎月数本は寄稿している。講義と編集業務が激増しても、原稿執筆の生産量はまったく衰えていない（西谷、二〇〇三）。

聆吉は大東文化協会、学院に勤務していたさなかに、大正大学文学部哲学科教授にも就任する。ハイデルベルク大学のリツケルトのゼミに在籍していたときに知り合った増田慈良（一八八七～未詳）が強く推したとされている。増田はインド仏教史を専攻する大正大学教授だった。

聆吉の各方面の履歴には「大正大学教授のちに講師」とあるので、おそらく在任期間の途中で非常に勤へ転じたと思われる。

4 大東文化協会・学院教授辞任後は新しい美術学校の経営に乗り出す

帝国美術学校校長に就任したが六年後に学校は分裂

日本を代表する私立の美術大学といえは、だれでも武蔵野美術大学と多摩美術大学を挙げるに違いない。この二つの大学のルーツは、じつは同じ学校だった。それが帝国美術学校（帝美）で、創立時

の校長が北吟吉なのである。

哲学研究会や月刊誌『学苑』で吟吉に助力し、『学苑』と『祖国』に執筆もしていたのが早大文学部の教え子、金原省吾であることはすでに述べた。金原は早大からの友人、名取堯（一八九〇～一九七五）と美術学校創立の構想を相談していた。名取は早大卒業後、公立の実業補修学校と各種学校の日本美術学校で「文芸史」などを教えていた。金原も学苑社に入るまで、実業補修学校や日本美術学校の講師だった。

金原と名取が学苑社を訪ね、吟吉に美術学校設立を相談しに行ったのは一九二八年一月一九日だった。ちょうど吟吉が紛争下の大東文化学院を離れようとしていた時期である。吟吉は協会創設者の一人で理事の木下成太郎（衆議院議員）に美術学校設立のための出資を持ち掛けて賛意を得る。二九年三月、名称を帝国美術学校とし、理事長・木下成太郎、校長・北吟吉、学監・金原省吾、主事・名取堯など、ボードメンバーを固めて一〇月二七日に東京府より認可を得、三〇日に開校した。校舎は武蔵野町吉祥寺に建てた。

木下は大東文化協会・学院、そして帝美にとって創設者だが、東京でよく知られた人物ではない。しかし、北海道の政治家として著名で、札幌の中島公園には朝倉文夫製作による大きな銅像がある。

資金の出し手は木下だったが、翌年には木下から帝美設立時の債権・債務を吟吉が引きとっている。つまり、吟吉は帝美の実質的な所有者兼経営者となっていた。開校後二年で学生数は二〇〇人を超えた。なお、一九三一年以降の学監は『学苑』同人だった井上忻治を招き、金原は教務主任に就いてい

る。ボードメンバーも講義を持っていた。哈吉は「修身・哲学」、井上「ドイツ語・フランス語・心理学」、金原「東洋美術」、名取は「思想史」の教授だった。

また、事務職には佐渡出身の村田晴彦（一九〇三〜七五）を入れた。村田は佐渡中学校、中央大学法學部の出身で、ある弁護士の本生だったところに同郷の哈吉が目をつけたと思われる。一九三四年前後から、哈吉は実務を村田に任せていたという（高橋、ウェブсайт）。おそらく政治活動へ傾いていた時期である。

哈吉は「哲人政治」を目指していた。プラトンにならったものだろう。哈吉にとって学校とはプラトンのアカデメイアだったのだ。十分な教養は政治指導者にふさわしいと考え、国会を目指すことを決意したのがこの時期である。

一九二八年二月、普通選挙法による初めての衆議院議員総選挙が実施されたが、哈吉はこの選挙に佐渡（新潟一区）から立候補しようとした。若手の秘書のような立場になっていた村田は、井上、八田、それに一輝らの反対論を集めて阻止したという一幕があった。しかし、三〇年二月、金解禁や張作霖爆殺事件の後処理問題など大問題を抱えた民政党内閣が臨んだ第一七回総選挙で、哈吉は東京府第五区（荏原郡、豊多摩郡、伊豆七島）から無所属で立候補してしまった。村田は伊豆大島まで回ったが、惨敗している（村田、一九六三）。

政界進出への野望に燃えていた時期に新聞雑誌への寄稿を増やしている。著書は帝美の六年間で二冊、『祖国』への記事は六九本、他社の雑誌への寄稿は三三本を数える（西谷、二〇〇三）。『ダイヤ

モンド』への寄稿も一九二八年から始まっている。

一九三三年ころより帝美の財務が怪しくなってくる。開学時に、各種学校から専門学校へ昇格させることを父兄や学生にも約束していたが、財源の調達がいつまでたつてもできない。各種学校生徒では徴兵猶予はなく、また教員資格を単位だけでは取得できないのだから深刻な問題だった。

学生は当時の風潮として反体制的で、反学校当局の姿勢が強かった。帝美でも反校長の空気が充満していた。一九三一年に吟吉は、学生が労働組合のように要求してくるならば、ただちに廃校すると発言している（佐久間、二〇一〇）。

校長と学生の対立機運が増していくなか、吟吉は帝美校長の肩書で外遊してしまう。一九三一年一月から二月は満州、三二年五月から三三年三月まで欧米と、延べ一二か月に及ぶ長期出張だった。満州以外に訪れたのはアメリカ、カナダ、メキシコ、フランス、スイス、イタリア、ドイツの七か国で、ハーバード大学プロフェッサークラブの臨時会員に招かれたり、ベルグソンを一〇年ぶりに訪ね歓談したりし、イタリアではムツソリーニ首相、著名な哲学者ジョヴァンニ・ジェンティールに会っている。帰国後、『ダイヤモンド』に二本記事を書いている。「ヒットラー治下のドイツ政局」（一九三三年八月二一日号）と「実践イタリアにおけるゼンチレの地位」（一九三四年一月一日号）だ。「ゼンチレ」とは、ジェンティールのことで、会見の記録となっている。ダイヤモンド社の石山賢吉と親しくなったのもこの時期だろう。吟吉は帝美の専門学校昇格への出資者候補として石山の名前も挙げていた。

吟吉は帝美の所有者となっていたので強気の姿勢は崩さないが、専門学校化へ必要なファンドは集

まらない。その責任も経営者にある。校長排斥を目指すようになった学生たちは、ファンドを集められない現状に苦悩していた金原や名取と同調することになる。

聆吉は一九三五年になると、帝美を日本大学芸術学部へ統合（売却）する案と、東横電鉄（東急の前身）から持ち掛けられた上野毛に校舎を移転して沿線開発に資する案の二つの打開策を握った。結局独断で四月に「上野毛移転」を発表する。五月、学生は校長不信任と移転反対を決議して同盟休校（ストライキ）を決行する。

聆吉は一〇〇人以上の学生を退学と停学処分とし、金原と名取の役職を解いてしまう。六月、逆に金原、名取らが集まり、理事会で校長解任を決議し、新校長名を東京府に届けて受理される。校長として元オーナーの木下成太郎を引っ張り出した。

聆吉は吉祥寺の校舎をロックアウトして対抗する。校舎の所有者は聆吉なので封鎖することはできた。ここで民事の訴訟合戦となり、喧嘩両成敗の調停が成立したのは一九四四年のことだった。

ただし、封鎖解除の仮処分は一九三六年に出されている。結局、オーナー校長の聆吉が追い出された形になった。聆吉と行動をともしして上野毛で美術学校を開校することにしたのは、各科の主任教授らをはじめ、大半の専任教員たちである。吉祥寺に残った教員は少ない。しかし、学生は二〇〇人以上が残り、聆吉側へ移ったのは六〇人ほどだったそうだ（佐久間、二〇一〇）。完全な分裂である。

残った帝美は第二次大戦後、一九四七年に造型美術学園、四八年に武蔵野美術学校へ校名を変更し、五七年に学校法人として認可されて短期大学を設置し、六二年に武蔵野美術大学を開校した。

吟吉と袂を分かった金原と名取のその後だが、金原は帝美理事を経て一九四一年から校長代理、戦後の四七年、六〇歳で顧問に退いたが講義はもっていたそうだ。四九年に新潟大学教授に就任し、五年に没している。名取は戦後、武蔵野美術学校校長を経て名誉校長、武蔵野美術大学が設立されるから晩年まで常任顧問を務めている。

知られざる帝国音楽学校の顛末

吟吉は帝美校長と同時期にもう一つ、帝国音楽学校の校長も引き受けていた。この学校の歴史も複雑だ。一九二八年に帝国音楽学校が設立され、福井直秋（一八七七～一九六三）が校長に招かれるが、半年後に福井は辞任して武蔵野音楽学校を設立し、帝国音楽学校の在校生二八八人、教職員一六人も武蔵野音楽学校へ移った。この学校が現在の武蔵野音楽大学の前身で、現在も福井家が経営している。残った帝国音楽学校に娘の一人が入学した縁で、吟吉は一九三〇年に父兄代表となり、後任の校長は政友会の衆議院議員、有馬頼寧（一八八四～一九五七）が就いた。

一九三二年六月、外遊中の吟吉が校長に就任し、ヴァイオリン教育で有名な鈴木慎一（一八九八～一九九八）が校長代理となった。

ここでも財務の悪化、経営難に陥り、一九三四年九月、吟吉は日本大学芸術学部との合併策に乗り出す。三五年一月、学生大会で合併反対を決議されるが、吟吉は認めない。帝美の紛争とほぼ似たような経過をたどるが、結局、オーナーの高井家が廃校にしてしまった（高橋、ウエブサイト）。

この帝国音楽学校の顛末を記録した紙の資料は発見できなかったが、高橋士郎（一九四三）によるウェブサイトに「多摩美術大学の歴史」には一次資料とともに記録が掲載されている。高橋は造形作家で、二〇〇三年から〇七年の多摩美術大学学長だった。

5 多摩帝国美術学校設立後は衆議院議員に当選

哈吉初当選の五日後に起きた二・二六事件

吉祥寺の帝美校舎を封鎖し、上野毛へ移転することになった哈吉らは、新しい学校として多摩帝国美術学校を設立した（一九三五年九月認可）。哈吉は名誉校長と教授のポジションで、資金調達や財団法人化に尽くしたが、すでに心情と熱意は哲人政治家に向かっている。

哈吉とともに早稲田騒動で早大を辞め、哈吉に推されて帝美の教授となった井上忻治は多摩帝美へ移り、戦後四七年に多摩造型芸術専門学校として認可されると校長、五三年に多摩美術大学が設置されるとそのまま学長に就任し、六八年まで務めた。

哈吉が大東文化協会の囑託、『学苑』同人としていた三木清は、一九二七年に法政大学文学部教授に就任するが、哈吉に推されて二九年より帝美教授を兼任する。その後、治安維持法違反で検挙され、法大と帝美を辞任するが、哈吉は三八年に多摩帝美教授に招いている。四五年に再び検挙され、終戦一か月後に獄死した。

帝美の事務方として吟吉が引き入れた佐渡出身の村田晴彦は、多摩帝美認可や戦後の多摩美術大学設置などの煩雑な事務仕事を担当した。その後は学監、理事として経営の一角を担い、一九六一年に多摩美術大学理事長へ就任し、六七年に学内の紛争で退任したが、その後も多摩美術大学会長として没するまでキャンパスを離れなかった。

村田は理事長に就任するまで、つまり一九五〇年代まで、吟吉の選挙のたびに新潟で選挙活動に力を入れていた。吟吉の追想集に多摩美術大学理事長名で寄稿しているが、大学の話はまったくなく、選挙の裏話に終始していて驚かされる（村田、一九六三）。

吟吉はいつまで名誉校長だったのか、『多摩美術大学50年史』（一九八六）には記載がない。「人事興信録」（二九四一年版、同刊行会）に掲載された吟吉の肩書は「衆議院議員、多摩帝国美術学校名誉校長、祖国主幹」である。戦後の吟吉の名刺の肩書は、「衆議院議員、多摩美術大学後援会長」と記されていた。

こうして一九三五年以降、教育者、学校経営者としての顔は大きく後退し、三六年二月二日の第一九回総選挙に地元の佐渡と新潟市を含む新潟一区から民政党で立候補し、二位で初当選した。

投票日から五日後の二月二六日。大事件が起きる。二・二六事件である。事件はクーデター未遂だが、陸軍の皇道派将校が北一輝の『日本改造法案大綱』の天皇親政による革命論（昭和維新）に刺激されて起こしたとされた。クーデター軍は蔵相高橋是清、内相斎藤実、陸軍教育総監佐渡辺錠太郎ら要人四人を殺害した。二九日、事件を主導した将校らと同時に一輝は憲兵隊に逮捕され、四月には警視

庁から陸軍の軍法会議へ送られる。軍部の面目を保つため、一輝らに教唆されたとする筋書きにした。非公開で公判が進み、一輝らは翌三七年八月一日に死刑判決、一九日に執行された。

聆吉が事件の一報を聞いたのは、大正大学の講義へ向かう途中だったという（北、一九五五）。大正大学講師は一九三八年まで続けていた。

もっとも親しかった政治家は社会党の浅沼稻次郎

戦後の第一回（通算第二二回）総選挙（一九四六年四月）には自由党から立候補して当選、自由党政調会長に就任したが、四七年に公職追放で辞任を余儀なくされた。追放が解除されたのが五一年八月で、五二年一〇月の第二五回総選挙で当選して返り咲く。その後も当選を重ねたが、五八年五月の第二八回総選挙で落選した。七四歳だった。

この選挙の直前に、東京新潟県人会主催で北夫妻の金婚祝賀会が上野精養軒で催されている。そのときの写真がダイヤモンド社にも保存されていた。舞台の金屏風の前に主賓の北聆吉夫妻、上手に浅沼稻次郎（一八九八〜一九六〇、社会党書記長）、下手には八田三喜（元佐渡中学校校長）、石山賢吉（ダイヤモンド社会長、東京新潟県人会会長）が並ぶ。舞台では高杉晋一（三菱電機会長）が祝辞を述べている場面だ。

聆吉と浅沼は意外なことに親しかった。衆院当選同期で、浅沼は社会大衆党の社会主義者だが、国家社会主義に傾倒していた。ともに一九三九年六月から一〇月まで、列国議会同盟会議に参加するた

め欧米を歴訪し、第二次大戦勃発の瞬間をドイツで迎えていたのである（松本、二〇二一年）。保守派の吟吉は大政翼賛会には参加せず、数少ない非翼賛議員だった。逆に、浅沼は積極的に大政翼賛会に参加している。

吟吉の著書は一九三六年以降一六冊、雑誌『祖国』に主幹として掲載した論文は四三年までに約一〇〇本、他社の雑誌へ寄稿した論文や記事は五六本を数えた（西谷、二〇〇三）。

一九六一年八月五日、政界引退の三年後、吟吉没す。

生家近くの八幡若宮社（佐渡市両津湊）には一輝と吟吉のレリーフが並ぶ大きな碑があり、港町両津の観光街歩きコースに入っている。

参考文献

- 浅沼薫奈（二〇二二）「前川三郎と大東文化学院」（大東文化大学史研究紀要）第五号）
- 稲邊小二郎（二〇〇二）『一輝と吟吉——北兄弟の相克』新潟日報事業社
- 岡野保次郎（一九六三）「北吟吉先生の思い出」（稲邊小二郎編『追想記』北吟吉三週忌法要会）
- 北一輝（一九五九、一九七二）『北一輝著作集』全三巻、みすず書房
- 北吟吉（一九三七）『思想と生活』日本書莊
- 北吟吉（一九五五、二〇一七）「実弟北吟吉、魔王北一輝を語る」（文藝春秋臨時増刊）一九五五年六月号、および『テロと陰謀の昭和史』文春文庫）
- 佐久間保明（二〇一〇）「帝国美術学校時代の金原省吾——同盟休校から分裂へ」（武蔵野美術大学研究紀

要「第四一号」

大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編（一九七三）『大東文化大学五十年史』

高杉晋一（一九六四）「北聆吉先生と岡野保次郎君」〔週刊ダイヤモンド〕一九六四年五月四日号）

高橋士郎（ウェブサイトに）「多摩美術大学の歴史」www.shiro1000.jp/tau-history/history-site.html（二〇一二年九月一日閲覧）

竹内洋（二〇一一）『革新幻想の戦後史』中央公論新社

多摩美術大学（一九八六）『多摩美術大学50年史』

西谷成憲（二〇〇三）「北聆吉基礎研究報告」〔多摩美術大学研究紀要〕第一八号）

『日本新聞十年史』（一九三五）日本新聞社

朴亭國（二〇一九）『帝国美術学校の誕生——金原省吾とその同志たち』武蔵野美術大学美術館・図書館

松本浩延（二〇二二）「浅沼稻次郎」列国議会同盟派遣団訪米・訪欧日記」〔同志社法学〕第七三卷）

峰島旭雄（一九九七）「哲学から政治へ」〔北聆吉〕（二八八五—一九六一）（峰島旭雄編『近代日本思想史の

群像』北樹出版）

武蔵野美術大学（一九九二）『武蔵野美術大学六〇年史』

村田晴彦（一九六三）「北先生と選挙戦を偲ぶ」〔稲邊小二郎編『追想記』北聆吉三週忌法要会）

渡辺和弘（ウェブサイトに）「佐渡人名録」www.sado2298.blog.fc2.com（二〇二二年八月二〇日閲覧）

大東文化学院を支えた二人の名譽総長・名譽学長

鵜澤總明と土屋久泰

鵜澤總明と土屋久泰は、どちらも大東文化学院創設時より教育や学院運営全般に携わり、総長などを断続的に複数回にわたって歴任した人物である。ともに東京帝国大学法科大学の出身であるが、鵜澤は弁護士となつて法学の道へ進み、土屋は漢詩の道を探究した。生き方も性格もまったく異なる二人であつたが、互いに尊敬しあふ友人であり、それぞれ苦難の時代の学院を導いたりリーダーであつた。

鵜澤總明



鵜澤總明

は、一八七二年八月二日に上総国木更津県長柄郡上太田村（現・千葉

葉県茂原市上太田）に生まれた。一九〇〇年に大学を卒業し弁護士となるが、同時に法律哲学の研究のため大学院へと進学することを志し、〇八年に法学博士となつた。なお、一説には、幼少期に父が冤罪によつて監獄に拘留された経

験から、弁護士を目指したとされる。人権派弁護士として知られるようになる一方、関わった日比谷焼討事件やシーメンス事件で小川平吉や平沼騏一郎などと接している。また、敗戦後は極東国際軍事裁判日本側弁護団長をつとめるなど、弁護士としての手腕と活躍はよく知られるところである。政治家としての顔も併せ持ち、〇八年五月に第一〇回衆議院議員総選挙において当選、以降六回の当選を誇った。他方、〇一年より明治法律学校の講師となり「法学通論」を担当して以降、同校が翌々年に明治大学へと改称してからも、一二年に明治中学校初代校長、二〇年に明治大学法学部長を歴任し、明治大学総長には三四年、四三年、四九年、五年の四度選出されている。そのほかにも初代校友会会長をつとめるなど、明治大学とは終生深い関わりを持った。

では、大東文化との関わりはどうであったか。まず、「漢学振興に関する建議案」について、二度目の一九二三年三月七日に提出された建議案内容について審議する委員会が立ち上げられ、その委員に選出された一〇名のうちの一人が鵜澤であった。同年の帝国議会で建議案は可決されなかったが、同年四月より推進団体設立のための協議会が有識者によって組織されることとなった。これを「東洋文化振興二関スル協議会」という。全五回行われた協議会のうち、第二回が同年七月五日に行われており、同日の出席者のなかに鵜澤の名前が見られた。さらに、二三年二月に推進団体として大東文化協会が発足すると、鵜澤は協会理事となり、「教化部」の責任者となった。教化部の仕事は主に講演会や公開講座などの運営で、鵜澤は自ら全国をまわり講演を行うことも多かった。鵜澤はさらに

学則や教育内容などを定めるために発足した「学院綱領並学則編制委員会」委員にも就任した。なお、後述する土屋久泰は協会のなかで「大東美術振興会」の幹事となったが、鵜澤は同美術振興会の顧問にも就任した。大東文化協会は多くの出版物を刊行した活動が著名であるが、これらに対しても鵜澤は積極的に寄稿している。機関誌として創刊された『東洋文化之神髓』（『大東文化之神髓』、『大東文化』へと改名）にも「東西法理の比較」と題する論稿を寄稿しているし、以降誌名を改めたあとの『大東文化』にも頻繁に寄稿していた。それ以外の刊行物にも鵜澤の名前はよく見られ、たとえば『エクスオリエンテ』（『Ex Oriente』）は、大東文化協会比較研究部が機関誌として一九二五年四月に創刊した。英仏独の三か国語のうち、いずれかで執筆された論文のみを掲載し、欧米諸国へ

向けて、東洋文化に関する最先端の研究成果を知らせたいとの目的で発行された）の創刊号にも「王道の考察について」と題する英文の論稿を寄せている。また、学院が発行する新聞紙上にも鵜澤の論稿が掲載されることはよくあった。一方、大東文化学院開校直前に関東大震災がおり神田校舎が焼失してしまったため、新たな校舎の手配が早急に進められた際、多額の資金提供を行った五人のうちの一人が鵜澤であった。開校後に鵜澤は教授に着任し、主として「法学」「法律学原理」を教えたほか、「老子」の講演を学内で行った記録が残されている。

このように多大な貢献をなした鵜澤が大東文化学院第四代総長に就任したのは、学院紛擾の混乱の最中のことであった。このときの在任期間は、わずかに一九二七年六月から同年九月までであった。しかも、第四代とはされているも

の、正式には「総長事務取扱」という名称であった。同時期には「総長」を「総長事務取扱」、「会頭」を「会頭会務処理」とすることがあった。これらは学院紛擾で混乱していた協会や学院において、いくつかの正規の手続きを経た「総長」「会頭」ではないものの、業務は遂行せねばならないので、その業務を代理として実質的に担うという役割があったのである。以下、鶴澤の総長就任時期を列挙していくと、二七年九月に総長事務取扱を辞任した鶴澤は、同日に「五総務制」によって五名で総長職を取り扱う方法に切り替えた。このとき、鶴澤のほか、小川平吉、平沼騏一郎、鈴木喜三郎、山本悌二郎という人選がなされた。しかし、私学派が含まれないこの五総務制に学内の賛同を得ることはできず解散、再び同年一月に鶴澤は第五代総長事務取扱に就任した。ただし、このときは

わずか四日間の就任で、同年二月三日に辞任している。同日に大津淳一郎が第六代総長に就任しているが、この引継ぎのための復帰であったと考えられる。鶴澤が松平頼寿の後を受けて第九代総長となったのは、四〇年二月のことであった。このとき初めて「総長」となった鶴澤は、四三年八月まで任期をまっとうした。なお、これよりさき、四〇年八月二日に大東文化学院「学長」に就任、同年二月一三日より高等科部長なども兼務していた。同年七月一八日に急逝した小柳司氣太学長の後を継いだもので、この学長職は鶴澤が総長に就任すると同時に廃止となった。すなわち、旧制期における「学長」は小柳と鶴澤だけだったことになる。

敗戦後、鶴澤はあらためて一九四六年九月に第一二代総長に就任したが、実は終戦間際に大東文化学院は大東文化学院専門学校と改称して

おり、このとき「総長」は「校長」とあらためられた。したがって、公文書上では「大東文化学院専門学校校長」が正式名称である。鶴澤の校長在任は四八年三月まで続いた。一方、大東文化協会では、四三年八月から四五年二月まで大東文化協会副会頭、四五年二月より第八代会頭に就任した。このとき、「会頭」を「理事長」へと改めることとなったため、初代理事長でもあった。四七年一月に理事長を退任し、第二代理事長には土屋久泰が就任することとなった。

土屋久泰（竹雨）



土屋久泰

は、一八八

七年四月一

〇日、現在

の山形県鶴

岡市に生ま

れた。字を

子健、号を竹雨ちくうとした。一説に、書窓の寒竹を見て自ら竹雨と号すようになったという。庄内中学校（現在の鶴岡南高等学校）、第二高等学校（仙台）を卒業後、東京帝国大学法科大学へ進学、一九一四年に卒業後は鉄道会社などに勤務しつつ、大須賀均軒おほがねらに師事し漢詩の研究に没入した。なお、大学在学中に肺炎を患い闘病のため休学しており、病は以降の生涯にも大きく影響している。

すでに漢詩界でこの人ありと知られるようになっていた土屋は、一九二三年九月に大東文化協会幹事となり、雑誌『大東文化』創刊に携わるようになった。雑誌『大東文化』は、前身誌を『大東文化之神髓』（一九二三年一月、第一集発行）として、二四年三月一日、大東文化協会機関誌として創刊された。土屋は創刊時より編集主幹（奥付には「発行人兼編集人」と記載）に就任しており、三二年九月まで毎月刊行が続けられた。同年一〇月より『日本新論』（一年で休刊）へと誌名を変更することになると土屋は編集主幹を辞任し、大東文化学院講師（三五年より教授）となった。なお、『大東文化』創刊号の巻頭には、土屋による「題字」と「詩苑」が掲載されており、また、「竹雨選」の漢詩が巻末に掲載されるのが常であった。大東文化学院では、「作詩文」のほか「古詩源」「五朝

詩」を講じた。敗戦前後、土屋は故郷の鶴岡へ疎開し同地の人びとに漢詩の指導を行っていたが、しばらくして大東文化学院が再開すると復帰、その後は二年ほど鶴岡と東京とを往復する生活を送った。大東文化学院専門学校の第一四代総長となると同時に、四八年一二月には新制大学・東京文政大学初代学長に就任、旧制専門学校から翌年五月開校となる新制大学への移行をすべて指揮した。以降、五八年一月五日に七一歳で死去するまで学長職にあった。なお、五〇年には鶴岡市の以文会（現在の到道博物館）顧問に就任しており、多忙を極めるなか、持病を抱え発熱に苦しみながら業務に当たった。新制大学として発足した「東京文政大学」は、二年後に「文政大学」へと名称を改めたものの、同窓生をはじめとした関係者の「大東文化」への思い入れは深く、幾度となく名称復活

の訴えがあつたこともあり、首脳陣は早々に「大東文化大学」への名称変更申請を決意することとなつた。五三年三月、学校法人大東文化大学への名称変更が認められ、大学一期生の卒業証書は「大東文化大学学長 土屋久泰」名で授与されたのであつた。

土屋は、昭和期における漢詩壇の第一人者として広く知られている人物である。「最後の漢詩人」「漢詩界の巨星」とも称せられた。東大在学中より著名な漢詩人である國分青崖（大東文化学院教授、「学院歌」作詞者）を慕つて師事し、その後も大東文化学院とともに教鞭をとる、日本人の漢詩教育に貢献した。一九二八年に『東華』（芸文社）を創刊、四九年に日本芸術院会員となつた。いわゆる研究論文を執筆することはあまり好まず、純粋に漢詩の世界を愛好した。漢詩選を積極的に行い、余香吟社など

多くの漢詩社の指導にも携わつた。主な作品に、『日本百人一詩』（砂子屋書房、一九四三）、自選詩集『猗廬詩稿 乾・坤』（芸文社、一九五七）等がある。なお、『日本百人一詩』の刊行は、全国的に注目された一大事業であつた。大東文化協会も大々的に祝し、『月刊大東文化』二月号（一九四三年二月発行）はその特集を組んでおり、巻頭には鶴澤總明が祝いの所感を送っている。

第Ⅲ部

大東文化学院の教育

第11章

大東文化学院で「教育学」を担当

吉田熊次・小松武治

吉田熊次



写真…大東文化歴史資料館所蔵

一八七四年、山形県生まれ。自作農吉田栄次郎の長男。九三年に山形中学校を自主退学し、上京。九七年、第一高等学校を卒業。一九〇〇年、東京帝国大学文科哲学科を卒業。成績優秀者として、恩賜の銀時計をうけた。〇四年、女子高等師範学校教授・東京高等師範学校教授。欧州への官費留学を経て、〇七年、東京帝国大学文科助教授（教育学講座）。一六〓三四年まで、東京帝国大学教授を務め、退官後に名誉教授。大東文化学院の講師嘱託（一九四〇）。なお吉田の妻の父は、井上哲次郎である。六四年没。

小松武治



写真・東北学院史資料センター所蔵

一八七六年、山形県生まれ。上山藩士松下左伝治の三男。九二年に、仙台にあった東北学院普通科で働きながら学ぶ。中学校で作文を島崎藤村、高等学校で英語を栗野健次郎、帝国大学で英文学を夏目漱石に指導をうけた。一九〇六年から、日本基督教青年会同盟（YMCA）の幹事・主事となり、青年子弟らに向けた文筆活動をおこなう。二〇年には慶應義塾の大学部教授となり、東京高等工芸学校教授（生徒監）を経て、二九～三七年大東文化学院教授（雑誌部部長）。四三年度までは、立教大学の予科教授。五九年に、富士短期大学の学長（第二代）に就任。六四年没。

1 教育者・吉田熊次の生涯について

吉田の生い立ち（幼少から青年期まで）

吉田熊次は、一八七四年に山形県東置賜郡中川村大字元中山字日影（現・山形県南陽市）に、自作農であった父栄次郎、母すえの第五子の長男として生まれた。中川村は山形市と米沢市との中間に位置し、米沢藩領であった川樋村、小岩沢村、元中山村、中山村の四村の明治期の町村合併によって、新たに

つくられた村であったという。吉田は川樋小学校に入学するが、通学するのに実際遠いこともあり、教師がひとりしかいない分教場で低学年を過ごした。分教場の教師は、旧米沢藩士であった鹿島才助で、吉田によると性格は「厳格な人」で、ときに厳しく児童らを指導したというが、児童を含めた父兄や地域住民らから尊敬慕される「人格者」でもあった。本校の川樋小学校に移っても、教師の多くは旧米沢や旧鶴岡などの藩士土族出身者が多かったとされる。

一八八六年の学制改正をうけ、吉田が通った川樋小学校（四年制）が尋常科となったことで、当時の川樋小学校長であった旧鶴岡藩士の中里重吉（一八六五～一九四六）が、吉田は学業成績が優秀であり、本人自身も進学意欲を有していたので「学業を長く続けることを勧め」、高等科を有する宮内小学校への転学編入を、進学に消極的であった吉田の実家の説得までしてくれたのだという。中里は一四年間の学校教員生活を経て、官界へ転じ、一九二三年には酒田町長となり隣村の合併を進め、三三年には初代の酒田市長に就任、三七年まで市長に在任した人物である。

そして宮内小学校に編入した吉田にとって、もっともつよく感化をあたえられた教師は、旧米沢藩士であった小泉清蔵と、代用教員であった深沢清八であったとされる。小泉が授業で教科書として用いた田口卯吉の『日本開化小史』（一八七七～八二）に興味をもった吉田は、小泉の下宿にまでなんども通い、休暇中に全部写筆したという。また吉田ら編入生は深沢宅に下宿し、「起居動作のことから飲食の作法まで」指導をうけたのであった。吉田は、自身の小学校時代について、多くの教師らが「士族の出身で士族魂を本として教育に当たられたように思う」とし、それは吉田にとって「無上の幸福」

であったと述べている（吉田、一九三四a）。

山形中学校の受験をめぐることは、小学校を卒業したのちは、家業に従事させたいという実家の意向を知りながらも、吉田はなんら相談せず山形市の山形中学校を受験した。深沢先生の袴を借りてまで受験に臨んだ結果首尾よく合格したが、家族に対しては、「山形中学校は県立の学校であるから一度出でた上は取消すことは出来ない。既に入學試験も終り入學者も決定して居るのであるから、今更如何とも仕方がない」と弁明して、吉田の「決心の堅きを見て諦めた」家族は、「中学校だけという条件」をつけて中學進學を容認したのであった（吉田、一九三四b）。

吉田の中学校時代も、引き続き旧藩士出身の教員らの影響をつよくうけているが、なかでも深く感銘をうけたとされるのが、旧米沢藩士であった「倫理」を教授した宮島昇であった。宮島は、小学校や師範学校の教員を経て、一八八六年に山形中学校の教員として赴任した人物で、論語や大学、中庸などの中国学の古典から数句を板書して説明をくわえるという講義スタイルであった（諏方、一八九一）。吉田は、率先してその板書された名句を手帳に書き込み、暗誦したほどであったという。吉田が上京して文科系への學問進學を決心したのは、宮島の講義に感化されたからだとされる。この時、吉田は孔子はいかに人の道は素晴らしいかと説くにとどまり、どのようにその道を探究実践すれば立派な人間になり得るかを示していないとして、教育学研究の課題を自身のライフワークとすると誓ったのである。

山形中学校を自主退学し、第一高等学校文科と東京帝国大学文科で学ぶ

一八九三年、吉田は山形中学校を卒業一年前に自主退学して上京した。中学校を卒業すれば、郷里の実家に戻り家業につく約束があったからである。東京では、中学校の英語力が心細かったので、神田錦町の国民英学会夜間部に通学しながら、日中は自習に専念して受験に臨んだのであった。同年、第一高等学校予科の第二級に入学を果たす。なお中学校（高等学校予科）を卒業するまでの学資分は実家から、それ以降は上杉家の醸金にもとづく米沢教育会からの貸費で、吉田は修学することができたといわれる。入学した年は学校の寄宿舎・北寮に入寮し、次の年からは同郷の仲間らとともに下宿し、在学の最終年次は学校の寄宿舎・東寮で過ごした。帝都の下宿は不完全なる設備が多く、寄宿舎設備の整備こそもっとも重要であると、吉田も在学中に体験談を交え主張したのであった（吉田、一八九八）。第一高等学校在学中に、南北寮の廃止が学校側で検討されたこともあったが、吉田も率先して舎監の松田為常や校長の久原躬弦らに、寮の廃止で予期される一高生らの窮状を嘆願して、文部省側にも南北寮の保持を再考してもらえたという逸話が残っている。

一八九四年の「高等学校令」の制定により、第一高等学校が第一高等学校と組織改編されて、吉田もこれまでの希望進路をふまえ、保証人の野尻精一（一八六〇～一九三二）はあまりすすめなかったが、一部・文科の組を進路選択したのであった。野尻は、教育学の文部省留学生としてドイツに学び、ベルリン大学やライプツヒヒ大学などで哲学、教育学を研究した教育学者であった人物である。吉田は文科を自身の進路選択としたが、第一高等学校時代には文科系の学課を含め、物理学の水野敏之丞

や生物学の五島清太郎らの先端的な学問内容を含む講義に興味関心をひかれた。なかでも、卒業間近で学年試験中であつたにもかかわらず、帝国大学理科大学の通俗講義として行われていた人類学教室の坪井正五郎の講義を、吉田は熱心にすべて欠かさず聴講したという。

一八九七年、第一高等学校を卒業して、東京帝国大学文科哲学科に入学する。ともに切磋琢磨した吉田の哲学科同期生には、のちに教育学者となる春山作樹（一八七六—一九三五）や哲学者となつた紀平正美（一八七四—一九四九）らがあつたのである。吉田は第一年で、教授ラファエル・フォン・ケーベル（一八四八—一九二三）から哲学概論と西洋哲学史を、第二年では、教授井上哲次郎から東洋哲学史、教授元良勇次郎から心理学、教授中島力造から倫理学を、第三年では、講師大瀬甚太郎から教育学、講師高木正義から社会学などをそれぞれ学んだとされる。帝大在学中に吉田が学んだ哲学や倫理学は、もっぱらカント哲学を主とするドイツ哲学系で、「しきりに理想とか人格とかいう点を力説するが、何を理想とすべく、如何なる内容を人格が持つべきかの点を論究しなかつた」として、吉田はおおいに不満を感じている（吉田、一九三四b）。内容上の価値規範を定める必要性をつよく感じて、吉田は卒業論文として「倫理法の必然的基礎」をまとめることになる。吉田の卒業論文は、井上哲次郎から卒業論文の大作として評価され、『哲学叢書』第一集（集文閣、一九〇〇）に収められた。

吉田の社会的教育学

一九〇〇年、吉田は東京帝国大学文科哲学科を卒業する。首席卒業により、恩賜の銀時計をう

けた。そして大学院に在籍し、「実践哲学科中教育学特二倫理教育ノ原理」を研究した。同時に、哲学館（現・東洋大学）や浄土宗高等学院（現・大正大学）などで、教育学・倫理学・西洋倫理史を教えはじめたのである。卒業論文「倫理法の必然的基礎」をとおして、個人と社会の問題（個人は社会的関係のなかに存在する）から、社会的規範の内容を問うこと、社会的教育学への着想にいたる。社会主義思想の広がりを受けて、文部省が「社会教育」という用語を敬遠する動きのなかで、この時期の吉田の思想を代表するものが『社会的教育学講義』（一九〇四）であつた。本書の全体は六編にわかれ、第一編の緒論では、教育や教育学の意義にくわえて、教育思想の変遷が述べられている。第二編の教育の目的では、明治以前から維新以後の教育史を概説し、社会的教育学の成立が取り上げられている。第三編から第五編までは、教授論、訓育論、養護論とされ、いわゆる知育・徳育・体育が記されている。最後の第六編は学校論とされ、学校の意義や任務などが強調されている。吉田いわく、社会的教育学の根本原理は、「社会的人物をつくること」にはかならない。社会的教育学が個人の人格を軽視するものではないかという指摘に対して、ただ個人の活動そのものが各自の勝手であるべきではなく、社会的な価値や効果をふまえた方向に働くべきものであろうとした。あくまで社会的活動と人格とは矛盾しない。さらに、社会的教育学が国家を無視するものではないかという指摘に対し、国家ほど「完全なる社会的関係」を備えている社会はないのだと強調した（吉田、一九〇四）。

留学から帰国して『実験教育学の進歩』の刊行

一九〇四年、女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）教授・東京高等師範学校（現・筑波大学）教授となった吉田は、三年半にわたる欧州（ドイツ・フランス）への官費留学を拜命する。吉田の回顧談によれば、一年半滞在したドイツのストラスブルグ大学では教育学概論や哲学、経済史などを、それからベルリン大学やライプツヒ大学では教育学講義や新聞学などを聴講したという。〇七年、官費留学を終えて帰国した吉田は、東京帝国大学文科助教授に任命され、東京帝国大学における教育学講座の初代専任教員となったのである。それまでは、高等師範学校教授の野尻精一、高等師範学校教授の大瀬甚太郎、学習院大学教授の林博太郎が、それぞれ講師嘱託を務めていた。吉田の専任教員の着任を機に、日本の大学における教育学の教育と研究の基礎がつけられたといえよう。教育学部六十年史編集委員会（二〇一）によれば、一九一九年まで吉田が東京帝国大学で担当した教育学講座は一講座で運営され、担当した授業は「教育学概論」と「教育史」であった。吉田は、一九一六―三四年まで東京帝国大学教授を務め、退官後に名誉教授となった。同年には、国民精神文化研究所の教育学研究を担当する研究部長に就任する。

留学から帰国後、最初の著書刊行は、『実験教育学の進歩』（一九〇八）であった。同書の「発刊の辞」で、教育上の問題は複雑であり、教育は「複雑なる人性及び社会の復合作用」であると述べている。「緒言」でも、実験教育学の研究はまさに緒にいたばかりであり、教育学の革新を期待されているが、教育に関する実験的研究であり、従来の教育学のあくまで補充となすべきものであると、吉

田は実験教育学が全般を規定するものでない点を十分にことわっている。明治維新以降、さまざまな欧米の教育学説の移入に力を注いできたが、吉田いわく、「直訳的模倣の時代は既に去れり」とし、これからは「事実に徴して真理を求むべき」であり、実験的研究によって「教育学の材料を確実ならしむ」ことが重要なのだと強調したのである（吉田、一九〇八）。東京帝国大学教育学講座の教員として着任する際、総長の浜尾新から実際の教育をしっかりとやらせてもらいたいと激励された吉田は、大学における教育学研究のありかたを模索していくことになる。そして、医学のために病院があり、農学のために農場があるのなら、教育学研究のために大学にも研究実験学校を附設し、日々教育学の実際を随時研究調査することが有効なのではないかと考える。旧制大学の時代には残念ながら研究学校の附設は実現されなかったが、教育学研究室を挙げて現地学校の教育調査などを実施した。吉田が帝国大学から退いてのち、ようやく新制大学の成立によって、吉田の主張は全国的に制度上実現されていたといえよう。

教育学の体系化をめざすなかで、学院で教育学を担当

吉田は、『実験教育学の進歩』に続き、一九〇九年には、現職の学校教員らを対象に講演した内容をもとにして、日々の教育活動の意味を反省的に認識する手がかりとなるような学問的知見というべき、『系統的教育学』（一九〇九）を刊行したのであった。同書の「緒言」で、教育学の構成は「教育と云う事実は如何にして為さるべき筈のものであるか、如何なる原理に依って支配せられなければならないか

性質のものであるか」という、ふたつの視点を有して成立し得るものであるという。ひとつは教育の事実を歴史的に考察する教育史と、ひとつは教育活動の事実を支える原理・哲学概念を統一的に明らかにする系統的教育学であった。教育の目的は、吉田によれば、個人の人生を完成させることであり、そのためには社会の規範にしたがって人生を導いていくことにはかならなかった。

「健全なる人間」をつくるためには、一時的ではなく、ひとつのまとまった学校生活をとおして教育が行われなければならないとした。たとえば、大東文化学院で学ぶ学生生徒らは、中等学校での普通教育を学び終えて、さらに専門学校で専門教育を修得しようというものである。卒業後に教職に従事しようとするものは、教育の実際が教育の原理によってなされるべきものであり、「名譽を自覚し、自分の行を省み、自分の動作を慎む」ことを心得ておかなければならないとした(吉田、一九〇九)。

吉田は、一九四〇年に一年間、大東文化学院で「教育学」の講義を担当した。三八年に大東文化学院は、在校生や大東文化協会関係者らの声や国策上の要請をうけいれるかたちで、本科を修身漢文科、国語漢文科、東亜政経科の三部制へ組織変更した。修身漢文科の卒業生には漢文科中等教員の資格を、国語漢文科の卒業生には国語科中等教員の資格を、東亜政経科の卒業生には中国語科教員および計理士の資格を、それぞれ得ることができるよう学科改正もはかられていたのである。吉田は、ちょうどその組織変更された学院生らが第三学年になった際に講義を行った。当時の東亜政経科に学んだ野田泉や吉田源七らの回顧談によれば、授業に対して疑問を示した学院生を吉田が熱くなって怒り出したなどという逸話も残されている。

吉田の教育史研究については、『西洋教育史概説』（二九一九）や『本邦教育史概説』（二九二二）などで端的に記されている。吉田によれば、教育史は、歴史の変遷から現在の問題を論究する「本邦現時の教育の思想及実際の由来を明にし、且つ其の将来に於ける進路の根柢を發見し得べき」ものだと強調している（吉田、一九二二）。実際の文部行政にあつても、臨時教育会議や文政審議会の幹事を務めるなどしたが、西欧や東洋でもいまだ教育学は未確立であるという自身の持論や研究姿勢はけつして揺るぎなかつたといえよう。一九六四年に九〇歳で亡くなるまで、生涯研究者であり続けたとされる。吉田は、教育研究における経験的・実証的研究の重要性を説き、さらに歴史的・比較的研究の必要性も説いた。教育学の主體的な確立を課題とした吉田において、なかでも教育史研究は教育学の基本的な方法とみなされたのであつた。敗戦以降の日本の教育学界において、講壇教育学と揶揄されるきらいもあり、吉田の業績は同時期の教育学研究者に比べてあまりかえりみられる機会がなかつたが、吉田の果たした役割は今日的な課題も秘めており、あらためて注目に値するものであろう。

2 教育者・小松武治の生涯について

小松の生い立ち（幼少から青年期まで）

小松武治は、一八七六年に山形県南村山郡上山町大字鶴脛町に、上山藩士松下左伝治、母トメの三男として生まれる。九二年、仙台にあつた苦学生のため労働会（キリスト教思想に基づく、学生らが働

きながら学べる寄宿制の組織、現・東北学院大学)に、会員として入会する。生活基盤をなんとか整え、仙台神学校から改称された東北学院の普通科一年級に仮入学し、翌九三年本入学を果たし、同校教師を務めた鳥崎藤村(本名・鳥崎春樹、一八七二―一九四三)に作文を、本科五年生の半年間習っている。九六年には、伴侶となる上山藩士の師岡伝弥の長女なかいと学生結婚をする。結婚を機として、翌九七年、叔父(母親の弟)小松英休の養子となり、小松に改姓している。小松は、このころの自身の青年時代をふりかえり、「中学を卒業せんとする頃で、卒業後はどうしよう、何学校の何科に入ろう」などと思案をいろいろ重ね、「一介の貧書生のちのちはどうなるのか」と、「人知れぬ大なる煩悶苦闘」の時代であったと回顧している(小松、一九一九)。

小松は上山藩士松下家の三男であったため、「貧乏士族の二三男坊などは青雲の志はあっても学資がなく、さりとて一生を田舎に埋もれるのも本意にあらず、立志郷関を出る機会にあこがれ」て、一七歳のときに笹谷峠を越えて、一路仙台に向うことになる(小松、一九六一)。小松は、九二年に、仙台神学校の校長・押川方義(一八五〇―一九二八)の個人運営によって発足された労働会の存在を知り、仙台に出て来た際、さっそく労働会の門を叩いたのである。国分町にあった労働会では、寄宿する学生が会員となつて、農業・酪農・運輸などの多方面の仕事を、一日数時間ほど労働として携わり、その事業収益を会員学生らの学資や食費に充てるという組織であった。小松が所属していたころの労働会には、のちにアメリカで生物学の研究を重ね、帰国後に東北帝国大学理学部教授となった畑井新喜司(一八七六―一九六三)も、東北学院の理科専修部生として勉学と労働に専念していたとされる。寸

暇を惜しんで動物研究に専念していた畑井の姿には、勤勉な性格の小松ですら「敬服を禁じ得ないもの」であったという（小松、一九六三）。山形の実家を離れて貧しい生活をしてきた小松も、この労働会に会員として入会することによって、働きながら学校で存分に学ぶことができる、苦学の道をしつかり決意できたといえるのであろう。

小松が入学した東北学院は、前身の仙台神学校を改称した学校であったが、小松自身は初めから宗教としてのキリスト教への入信を意識して考えていたわけではないが、苦学生のための労働会の組織に入会した縁で、自然とキリスト教と接近し、自身にとって身近な存在となったようである。もともと山形の松下家は、代々日蓮宗の檀徒であったし、小松自身も一八歳のときに洗礼を受けたのは、あくまで交友関係など身近な周りの感化をうけたかたちで、最初から「自発的に決心した」というつよい思いからではなかったという（小松、一九一九）。

東京で雑誌『文学界』に同人として活動していた島崎藤村は、一八九六年、知人の斡旋にしたがつて、作文や英語を担当する東北学院の教師として仙台に赴任している。自身が志す詩作活動のみでは、いまだ経済的に自立するにはむずかしいこともあり、二五歳の島崎は地方生活を一時してでも、収入を稼ぎ生計を支える道を選択したのだといえよう。仙台での生活は一年ほどであったが、島崎にとっては好きな読書活動を、東北学院の図書館などで存分におこなえて満足げであった。ギリシャ史やハインの散文集、ゲーテの『ウイルヘルム・マイスター』などは、東北学院図書館の書庫の片隅であまり利用されていなかったが、島崎にとっては書籍の埃をはたきながら、「旧知に邂逅する思い」とい

う至福の時間を過ごしたのであった(島崎、一九三六)。

当時の島崎に東北学院にて指導をうけた小松は、「島崎藤村の思い出」として、島崎が「教育者に相応しい几帳面な処があった」人であったと述懐している。島崎の授業では、出版されたばかりの坪内逍遙(一八五九―一九三五)の『文学その折々』(春陽堂、一八九六)所収から「人生四季」という長文の記述箇所を、模範例として板書し、受講学生らにすべて書きとらせるスタイルであったという。

小松は、この一見して地味な書きうつつ単純な作業を機にして、自然と坪内逍遙の文章が好きになったと述べている。島崎は、仙台での教師生活と並行して自身の詩作にも熱心に励み、第一詩集『若菜集』(春陽堂、一八九七)を執筆し、島崎の文筆活動の土台となったものとされる。島崎の姿勢に影響をうけた小松は、自身の立場などとも重ねながら、島崎について「信州人持前の粘り強さを働かせて共に最後まで頑張り、共に不朽の労作を世に遺す一方経済上の問題を見事に解決して一生を終ったのである」という評価を記している(小松、一九五一)。

第二高等学校英語教授・粟野健次郎の存在

一八九七年、小松は東北学院普通部を卒業して、仙台にあった旧制高等学校ナンバー・スクールの第二高等学校(二部文科)に同年九月入学している。小松と同学年には、当時の『第二高等学校一覧』などをみると、のちに大正デモクラシーの旗手として知られることになる吉野作造(一八七八―一九三三)が、一部法科に首席(無試験)合格している。当時の旧制高等学校は、実態として帝国大学進学

のための予科機関として存在し、哲学・歴史学・外国語などを中心とした人文主義的な教育を重視していたのである。小松にとつても、第二高等学校に入学し過ごしたこの三年間は、自己確認や人生考察を存分に行うことができたモラトリアムな貴重な青年時代であつて、学校の学科課程にとどまらない、教師や生徒同士の濃密な人間関係、寄宿舎生活、文芸・運動部活動などを謳歌することができたものといえるだろう。

小松の二高在学中に、英語の授業を担当した栗野健次郎（一八六四～一九三六）教授は、かつて第一高等学校で夏目漱石などにも英語を教授し、夏目作品のモデルともなったといわれる人物である。栗野は、一八九二～一九三二年の四一年間、ナンバー・スクールの二高に在職し、その後名誉教授ともなっている。自身も栗野の英語を二高で学び、のちに二高校長となつた阿刀田令造（一八七八～一九四七）によれば、栗野の存在は「専門ノ英語ヲ授ケ、且先生体験独得ノ人生觀及哲理ヲ諄々トシテ説カレタリ。……哲人タルノ風貌ニ私淑シタルモノ、教育術ノ巧ミニ範ヲ求メタルモノ、千差万別同ジカラザルベシト雖モ……温情慈愛ニ懷ミヲ覺エザリシ者ハナカリシナラント確信ス」とされ、阿刀田校長は一九三五年九月、栗野の存命中に二高交友らの畏敬の念を込めた、栗野観音像を校内に建立しているほどであつた（第二高等学校史編集委員会、一九七九）。

栗野は博学多才として知られ、「英語の他に、独、露、伊、ベルシャの各国語の他、ノルウェー語、中国語更に古語のギリシャ、ラテン語及び梵語にまで通じていたと言われる。専門外では、文学、哲学、歴史は言わずもがな、数学、物理学また化学、医学に涉つていた」と評された（第二高等学校史編集委

員会、一九七九)。二高生らが栗野に対して、「なぜ先生は、本や論文をお書きにならないのですか」と尋ねたところ、「わしのような凡庸がつまらぬことを書いて、紙を浪費し後進を惑わすことはないではないか。書を残すは恥を後世に残すことである。書くだけの暇があれば、それだけ本が読める」と、栗野は回答したという(第二高等学校史編集委員会、一九七九)。阿刀田も栗野先生を称して、「思うに先生の名著は紙を以てせず、門弟の頭脳中になせるなり……二高生に送れる偉大なる著書ならずや」(熊谷、一九三六)と、栗野の追悼式で讃えている。

栗野のような人文主義的な教養を有し、個性的な旧制高校教師の存在は、小松を含めた多感な時期の青年子弟らにとっても、おおいに刺激をうけたにちがいないであろう。人生や社会などに関する青年期の悩みや煩悶を抱く時代に、直接または私淑関係であれ、栗野のような旧制高校教師と運命的に出会い・交流することによって、教育者のモデルとして投影され、青年らが将来的にめざすべき教育者・研究者像の形成において、重要な契機になったものと思われる。

東京帝国大学英文文学科にて学ぶ

小松は一九〇〇年に第二高等学校を卒業し、当時の『東京帝国大学一覽』によれば、同年に東京帝国大学文科哲学科に入学している。なお翌年には、東京帝国大学英文文学科に転学している。英文学研究とのかかわりは、小松の生涯にわたって重要なものとなる。一八九三年の講座制導入にともなつて、文科大学内に教育学講座も設置されていた。小松が在籍した英文文学科の第三年では、

英語（毎週九時間）・ラテン語（毎週三時間）をはじめ、美学（毎週二時間）・美術史（毎週二時間）・国文学または漢文学（毎週三時間）・西洋文学史（近世）（毎週二時間）の専門学とともに、教育学（毎週二時間）を一年間学んだのであった。教育学を在学中に学んでいることで、帝国大学文科大学卒業生には中等教員の無試験検定の合格が制度的に認められたのである。

小松ら帝大生に教育学を教えた担当講師は、文学士の大瀬甚太郎（一八六六―一九四四）であった。大瀬の思想的な影響をうけた教え子らは数多く、吉田熊次や春山作樹らのちの教育学者らも含まれていたのである。大瀬は、『新編教育学教科書』（一九〇三）のなかで、大学とは「最高等ノ學術ヲ修メシムル処」であつて、社会の「開化ノ進歩」に直接関与する存在であるという。精神界を刷新するのは、学士である学者の啓蒙的な役割と示したのである。教育学を学び、自身が教師となつてなお自己修養に励み、善良なる教師とは「学問的補修」活動を継続し、他の教育者らとの交流・協議によつて、「誤謬ヲ正シ、正理ヲ発見スル」ものであると強調した（大瀬、一九〇三）。

ちょうど小松が英文学科三年生の際、一九〇三年、英語・英文学を担当していた講師の小泉八雲（一八五〇―一九〇四）にかわつて、文学士・夏目漱石（本名・夏目金之助 一八六七―一九二六）と文学士・上田敏（一八七四―一九一六）が、英語を担当する邦人講師として着任する。この夏目漱石や上田敏らと小松は、同じ英文学を志すものとして生涯交流を深めていくことになるのである。小松によれば、自身が「心から先生と呼んだ人」として、夏目漱石らの存在が挙げられるという。夏目の性格からして、帝国大学での「僅か計りの学生を相手に講義するよりも、広い社会を舞台として自己を表白する方が、

やり甲斐もあり又世を益する事ともなろう」と決意して、その後英文学の研究をする帝国大学講師を辞めて、小説家の道を歩んだのではないかと、夏目と親しくしていた小松は考えたのであった（小松、一九一七）。

小松は、一九〇四年に文学士として東京帝国大学を卒業するが、大学卒業直前に、作家のチャールズ・ラム（一七七五～一八三四）が記した『シェイクスピア物語』（二八〇七）を、日高有隣堂から『沙翁物語集』（二九〇四）として翻訳出版したのであった。帝大講師の上田らは小松の同書に「序文」をよせているが、とくに夏目は、取り上げられている原著文（悲劇五作・喜劇五作）と小松訳をいちいち突き合わせて、丁寧に校閲をおこなったものだという。さらに夏目は、序文として、取り上げられたシェイクスピア作品の原文から、作品ごとに注目される一節を引用して、それに相応しい自作の俳句を付すという「小羊物語に題す十句」をよせている。

一〇句のなかでも、悲劇「ロミオ・ジュリエット恋物語」の有名な一説である、「姫よ、あの神聖な月にかけて誓います。この果樹の梢を銀一色に染めているあの月に」のロミオの誓いに対して、夏目は「罪もうれし二人にかかる朧月」という俳句を、小松書の序文に挙げています。敵対する男女両家の関係性をふまえ、「朧月」という春の季語をあて、若くお互いに愛し合うふたりの恋の始まりをあらわしながら、なんともしかない悲劇的な運命も暗示している句であろう（小松、一九〇四）。

このような夏目の文筆姿勢に通じるのが、当時の東京大学などでも講師（漢文学）を務めていた中村正直（一八三二～一九二二）の教授論であった。小松も、青年期に中村の訓点が付された宣教師ウイリア

ム・アレクサンダー・パーソンス・マーティン（一八二七〜一九一六）『天道遡源』（倫敦聖教書類会社、一八八〇）を読んで、人間形成において多大な影響をうけたとされる。実際、東京大学の学生らに教授していた中村の授業では、学生らが普段読んでいる英書から一〜二の文章を掲げ漢文でもって翻訳し、こちらの添削をくわえるという教育スタイルで、「漢文ヲ作りナガラニ英文モ細読シ訳語ヲ考求シ得」という「一挙兩得ノ益」として、学生らもおおいに喜んで勉学に励み、通年授業のおわりにはかなりの技術的な進歩もみられる教育的な取り組みであったという（中村、一八八〇）。

小松の教育論も、たんに英語に傾注するというのではなく、英語をとおして諸外国の文献や雑誌などを讀んだりし、それによってより見聞を広め、知性や品性を磨いていこうとするものであった。帝
 国大学で、教育学者の大瀬甚太郎から「教育学」の教えを学んだ小松は、英文学や漢文学などにも通じていた中村正直や夏目漱石ら先人教育者らの姿勢にもおおいに触発されながら、次代を担っていく日本の青年子弟らの円滑な人間形成をはかることを主眼とし、實際教育の道に従事していこうと考えたのではないかと思われる。

帝国大学卒業後の文筆活動と教育活動

小松は、一九〇四年に東京帝国大学を卒業し、日本基督教青年会同盟（YMCA）の幹事・主事となつて、諸外国の文化や思想、学問などを積極的に紹介するなどして、青年子弟らの知的好奇心をおおいに啓発していった。〇六年から刊行されたYMCAの機関誌『開拓者』では、〇八ころから小

松は主筆となつて、信仰や英文学、教育論などといった多彩な論考を発表しはじめたのである。国立国会図書館のデータ・ベース検索によれば、同誌で小松は短文を含めて、一〇〇本以上も執筆していることがうかがえる。なかでも、同誌の第七卷第七号（一九二二）の社説において、小松は「学校と寄宿舎」という論考を掲げ、学校が縦糸ならば、寄宿舎は横糸であると主張している。学校で食物を撰取るならば、寄宿舎は空気を呼吸する場所と仮定したのである。つまり、知識や学問がいくら良質であっても、新鮮な空気を呼吸できなければ、人間としての品性は磨くことができないというのであった。「人は境遇に作られ又境遇を作るものである」とし、劣悪なる私利的な下宿屋での生活環境によつて、希望あふれていた学生の多くが失敗や墮落してしまうことになる事態を警告していたのである（小松、一九二二）。

小松は、一九一九年に、一五年以上務めていたYMCAの職務（会の主事）を辞めて、翌二〇年には新聞報道によれば、慶應義塾のもとに就いて大学部・教授となつてゐる。さらに二二年には、官立の新設・実業専門学校の東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）の教授となり、生徒監（現・生徒主事）を務めてゐる。同校の授業では、修身と英語を担当している。管見の限り、『東京高等工芸学校一覽』（一九二八）所収の「一九二七年度教職員」の欄に小松の氏名が表記され、同期間まで在職していたことがわかる。

東京高等工芸学校教授であつた小松は、受験雑誌『受験と学生』（研究社）のなかで、英語科目の入試傾向とその対策について、受験生らに向け多くの厳しい言及を重ねている。英語の実力養成を尋ね

られた小松は、希望する学校の受験に臨むにあたり、「泥縄式」や「投機的」な勉強ではなくて、普段「平常の勉強」が重要であるものと指摘し、「多読も必要であるが、より多く必要なのは熟読である。即ち主として学校で用いる教科書を十分にマスターすることが出来るように精読することとし、同一程度若しくはそれ以外の英語の書物で、苦なしに読めるもの一、二を傍ら読んで行くことなどが策の得たるものだ」と端的に述べている（小松、一九二七）。

大東文化学院でもとめられた役割

一九二九年、大津淳一郎（一八五七～一九三二）学院総長の指揮のもと、大東文化学院同学会を發展改称して、大東文化学院志道会が組織される。志道会は学院総長を会長とし、在学生を会員として構成し、「本学院建学ノ精神ヲ發揮シ、会員相互ノ親睦向上ヲ図ル」ことを目的とした。志道会の役員構成は、会長・大津淳一郎（学院総長）、副会長・小柳司氣太、庶務部部长・市川林太郎、研究部部长・諸橋轍次、雑誌部部长・小松武治、弁論部部长・芳野幹一、剣道部部长・柏崎延二郎、弓道部部长・金子元臣、旅行部部长・峯間信吉、柔道部部长・那智佐典であった。新設された雑誌部長（教授）の職務をとめることになった小松は、おそらく彼の英語・教育学などの教師としての教育歴にくわえ、雑誌編集者としての実績も考慮されての抜擢であったものと思われる。小松が部長として指導した雑誌部の幹事（一九二九年度）の江見章夫（高等科三年）は、江見編（一九三〇）の「編集後記」で、「元來雑誌編集ということとは容易なものではない。材料をただ羅列しただけでは雑誌としての価値はない

のであって、その材料を如何に調和的に芸術的に盛るかと言ふ点に多大の苦心が存するのである」と、会誌編集の苦心談を吐露している（江見、一九三〇）。

二九年度学院の「学科課程及担任一覧」をみると、小松武治…教育学（本科三年）、西洋思想史（欧文）（高等科一年）、教育学及教授法（欧文）（高等科二年）と記されている。学院で小松が学院生らに教えていた指導内容も、自身が帝大時代に学んだ教育学や教授法の範疇にとどまらず、自身の研究対象であるシェイクスピアの作品考察も駆使するなどして、小松の人生ですつと継続して培ってきた英文学研究や教育論をその一環として実践したものであったといえよう。

瀧川亀太郎編（一九三七）で、「部長の更迭」として、「小松先生は去る五月御都合により部長を辞任せられたるに就き、我が編集部は新たに瀧川亀太郎先生（本学教授・文学博士）を部長に御迎へした。……ここに前任小松先生多年の労を謝すると共に、新部長の下に同窓生在校生の唯一の学術発表機関として本誌をして愈々発展せしめんことを祈念するものである」と記され、小松が八年間、大東文化学院に雑誌・編集部長（教授）として在職し尽力したことがわかる（瀧川編、一九三七）。

管見の限りの資料では、小松はその後、聖橋高等工学校（現・埼玉工業大学）を経て、一九四三年度まで立教大学の予科教員（英語の担当教授）となっていたことが『立教大学一覧』などからうかがえる。そして五九年には、富士短期大学（現・東京富士大学短期大学部）の学長（第二代）に就任して、学長在職中の六四年、脳軟化症のため都内練馬区の自宅で逝去。二〇二〇年には、郷里の偉人足跡として、『山形新聞』（日刊）所収の「やまがた再発見」（上山市立図書館長・岩井哲）で、小松の人生が三回にわ

たり紹介されている(二〇二〇年九月二七日〜一〇月二一日)。同紙では、小松の生涯を「信仰、研究、教育 力を尽くす」として、「英文学研究者、そして教育者である自分と、クリスチャンとしての求道的な営為によって二重化された己を、静かに、されどひたすらに歩み続けた生涯ではなかったか」と結んでいる(岩井、二〇二〇)。

参考文献

- 岩井哲(二〇二〇)「やまがた再発見 小松武治 下」(『山形新聞』第四八五六七号、日刊、山形新聞社)
- 江見章夫(一九三〇)「編集後記」(江見章夫編『志道』第一号、大東文化学院志道会)
- 大瀬甚太郎(一九〇三)『新編教育学教科書』金港堂書籍
- 教育学部六十年史編集委員会(二〇一一)『東京大学教育学部六十年史』東京大学大学院教育学研究科・教育学部
- 熊谷栄之助編(一九三六)『故栗野健次郎先生追懷録』第二高等学校同窓会
- 久保忠夫(二〇〇二)「小松武治先生と『沙翁物語集』」(『東北学院資料室』第二号、東北学院)
- 小松武治訳(一九〇四)『沙翁物語集』日高有隣堂
- 小松武治(一九一二)「学校と寄宿舎」(『開拓者』第七卷第七号、日本基督教青年会同盟)
- 小松武治(一九一七)「夏目漱石先生の事」(『開拓者』第二二卷第一号、日本基督教青年会同盟)
- 小松武治(一九一九)「回顧と前進」(『靈的改造』北文館)
- 小松武治(一九二七)「多読よりは熟読」(『受験と学生』第一〇卷第一号、研究社)
- 小松武治(一九五二)「島崎藤村の思い出」(『東北学院時報』第一六八号、東北学院同窓会)

- 小松武治（一九六二）『川中勘之助君の面影』（『東北学院時報』第一八九号、東北学院同窓会）
- 小松武治（一九六三）『畑井新喜司博士の追憶』（『東北学院時報』第一九五号、東北学院同窓会）
- 島崎藤村（一九三六）『仙台の思い出』（『東北学院時報』第一二五号、東北学院同窓会）
- 諏方武骨（一九九二）『山形名譽鑑』上巻、鳴時社
- 瀧川亀太郎編（一九三七）『大東文化』第一六号、大東文化学院編集部
- 中村正直（一八八〇）『漢文学講師中村正直申報』（『東京大学第一年報』東京大学）
- 森田尚人（二〇一四）『若き日の吉田熊次』（小笠原道雄・田中每実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜』勁草書房）
- 吉田熊次（二八九八）『寄宿寮論』（『米沢有為会雑誌』第八一号、米沢有為会雑誌社）
- 吉田熊次（一九〇四）『社会的教育学の成立』（『社会的教育学講義』金港堂）
- 吉田熊次（一九〇八）『実験教育学の進歩』同文館
- 吉田熊次（一九〇九）『系統的教育学』弘道館
- 吉田熊次（一九一九）『西洋教育史概説』目黒書店
- 吉田熊次（一九二二）『本邦教育史概説』目黒書店
- 吉田熊次（一九三四a）『余及び余の教育学』（『教育』第二卷第一号、岩波書店）
- 吉田熊次（一九三四b）『余の六十年』（『教育思潮研究』第八卷第二号、目黒書店）
- 第二高等学校史編集委員会（一九七九）『第二高等学校校史』第二高等学校尚志同窓会

第12章

学院での中国事情の紹介者

内堀維文・法本義弘

内堀維文 これぶみ

一八七二年、熊本県生まれ。農民内堀覚平の長男。九二年に、熊本県尋常師範学校を卒業。九八年、二七歳で東京の高等師範学校文科を卒業し、同校訓導となる。一九〇一年、同校舎監。〇三年、清国政府の招聘に応じ、清国山東省師範学堂総教習。〇九年に帰国し、神奈川県師範学校校長。その後、静岡県師範学校校長、長野県師範学校校長を歴任。一七年、南満州中学堂長となり、一九年に、奉天中学校長を兼務。二三年、旅順工科大学予科・附属工学専門部の教授。大東文化学院教授・教務主任（一九二八～三三）。三三年没（享年六二歳）。

法本義弘



一九〇九年、福井県生まれ。三〇年、大東文化学院本科を卒業（本科四期）。同年、外務省文化事業部による給費研究員の一期生として、北京に三カ年の留学拜命。三三年、北京大学第一院国文系を修了。同年帰国し、大東文化学院講師として中国語担当（一九三三～四二）。中央大学教授として、中国語、国語漢文、日本語を担当（三三～四七）。戦後一時、公職追放をうけるが、五一年に解除。六九年、中央大学を定年退職。八二年、郷里にもうけられた福井県立若狭歴史民俗資料館の初代館長に就任。八七年没（享年七八歳）。

1 大東文化学院の「大陸」志向

大東文化学院史の關係記述

『大東文化大学七十年史』（一九九三）では、学院の志道会内に亜細亜部が一九三一年にもうけられるなどして、「大陸」への関心が高まり、勉強会や講演会、論文発表などを熱心におこなったことが、大陸志向の高まりの契機と指摘されている。さらに、本学院の大陸志向について、旅順工科大学から

教務主任となった内堀維文教授や、満州から帰国して中国語（支那語）担当の田中逸平講師らによる感化、そして満州での官吏養成の大同学院の教務主任となった本科四期卒の鳥飼健（志道会剣道部主将）や、大同学院の一期生にもなった本科五期卒の高辻長吉（志道会柔道部主将）ら卒業生の活躍や影響が大きかったものとしている。当時本学の卒業生が実際に大陸へわたるルートについても、官吏養成の大同学院へ入学するか、日本の外務省派遣留學生に選ばれるかが主とされ、日華学会の要職も務めていた内堀教授が学院生を推薦支援してくれた点が鍵となったと記されている。

『大東文化大学五十年史』（一九七三）では、『七十年史』の記載より、さらに詳細に記されている。やはり大陸志向の動きについては、一九三一年の亜細亜部の発足を実質的な契機とするが、その流れは時局に乗じた外在的な動きではなく、素地として学院の創立初期からすでに教員関係者らによって培われていた本質的なものとみている。なかでも、教授のうちでつよい影響力を有したのが、「天鐘道人田中逸平先生であるといえる。同先生は大正十五年本学院講師として教壇に立つてより（当時四十五歳）、昭和九年九月逝去に至るまでの十年間大亜細亜主義を強調され大陸雄飛の素地を植えた。また昭和四年には、日華学会会長代理であった内堀維文先生が教授として就任し、在任期間こそ短かったが（昭和八年一月逝去）高度の視点から中国事情紹介に尽した功績は見逃すことが出来ない」とする。

さらに関連するいくつかの学院生の動きとして、旧満州（現・中国東北部）での官吏養成機関であった大同学院に、「本科第五期卒業の高辻長吉氏が選ばれて第一期生として入学し、その翌八年には高

等科第七期生鳥飼健氏が、九年には本科第九期生齋藤保・南波光男・関口卓司の三氏、十年には本科十期生土岐龍雄氏、十一年には本科十期生小山正二、十一期生齋藤進・植松正三寅の三氏、少し遅れて安達為也氏が入学。卒業後はそれぞれ県参事官、あるいは訓練所教授等となって建国創業の第一線に立った」という。外務省の対支文化事業部による北京への派遣留学については、内堀教授の尽力もあって、一九三〇年度の第一回には、本科四期卒の法本義弘が三年間給費の研究員留学を拝命した。

翌三一年度の第二回以降は、留学費の全額支給から補助となり、二年間の補給生になったが、本学関係者らも文化事業部が廃止される四〇年まで毎年留学し、それぞれの研究題目と真摯に取り組んだとした。

一九三一年、学院志道会の機関誌であった『志道』は、より充実した内容をはかるため、『大東文化』に刷新された。亜細亜部の活動についても、単独部報から『大東文化』に編入され、その活動状況を逐次誌面で発表周知するとした。『大東文化』第一号（一九三二）には、三一年に実施された第三回中国見学旅行（团长・内堀維文教授、団員九名）の報告記「支那旅行どころどころ」も掲載された（小栗、一九三二）。三三年には、本学より岩村成正（高等科一期卒）らが満州産業建設学徒研究団に選ばれ、約一ヵ月中国満州圏の見学に派遣された。岩村によれば、この学徒研究団は「世界再建運動は満州の産業建設にあり。それには純真にして情熱的で且つ研究的である青年学徒」でなければならぬという使命感の集団であったという（岩村、一九三三）。なお岩村は、三七年に外務省の派遣留學生として北京に留学し、中国語を研究した。著書に、日常の中国会話を網羅した『簡易日支会話』（尚文堂、

一九三八）がある。華北交通株式会社資源課に勤務し、中国関係の執筆活動もおこなっている。

学院生の中国見学旅行も、三三年の第五回は満州支那旅行として実施された。同年には、将来的にもっと会員数が増えることを企図して、母校同窓会に満州支部の設置を交渉している旨が『大東文化』第五号（一九三三）に記されている。同号では、学院卒業生の勤務先等が明記された「大東文化学院卒業生在満居住者表」（二三名）が掲載されていたのであった。同年の「亜細亜部報」で、高辻長吉幹事を満州に送り、部長に田中逸平を迎えて「画期的大躍進」を期し、一意専心活動にあたるものと強調した。上海発行の新聞『申報』をはじめ、亜細亜問題に関する雑誌やパンフレットを「研究資料」として数多く収集しているのが、学院生らの閲覧の希望には応じると呼びかけている。同年六月には、学院生より会員を積極的に募集して、「亜細亜問題研究会」まで組織（会員数は約五〇名）したのだという。

内堀維文の教育歴（大東文化学院教授・教務主任）

内堀維文は、一八七二年、熊本県玉名郡南関町に代々の農家であった内堀覚平の長男として生まれた。少年時より学業成績もよかった内堀は、八八年に一七歳で熊本県尋常師範学校に入学し、九二年に二一歳で同校を卒業した。卒業後は、実際の教育者として、熊本県玉名郡の高等小学校訓導を務めるなどしたが、内堀にとって立派な教育者になるには、さらなる専門的な教養や継続した向学心が必要であると痛感し、県に依願退職の願いを出し、九四年、二三歳で東京にある高等師範学校文科に入

学を果たしたのであった。高等師範学校では、嘉納治五郎（一八六〇～一九三八）校長のもと、漢文・中国哲学史を服部宇之吉（一八六七～一九三九）から、教育学・教育史を谷本富（一八六七～一九四六）からよく学んだという。九八年、二七歳で同校を卒業し、同校訓導を務めたのである。教え子の内堀について、教育学者の谷本によれば、朴訥な性格で卒業の成績も優秀であって、卒業後の附属学校教師としても漢文や国文を担当し、授業が「大いに光って」いたと印象深く回顧している（谷本、一九三五）。

内堀は、一九〇一年に高等師範学校の舎監となった。同年、熊本時代の恩師による媒酌により、旧久留米藩士津田教修の長女・島子（京都府立第一高等女学校卒）と結婚した。このころ、内堀は『中学漢文入門教授法』（一九〇〇）、『中等教育漢文教授法』（一九〇三）を刊行する。内堀によれば、漢文を生徒らに教授する場合、たとえば提示教授（第一～三）の基本として、第一に優等生に通読せしめ、誤りを正して、漸次二～三人に通読させる、第二に教師が通読して模範を示す、そして第三に生徒五～六人に読ませて劣等生まで至らしめる、という流れを示している（内堀、一九〇〇）。

一九〇三年、清国政府の招聘に応じ、清国山東省師範学堂総教習となる。内堀は、師範学堂の倫理科で、漢民族の長所を講じたという。内堀によれば、中国民族の特徴は、交友において「世界的義兄弟」ができることである。国境や人種民族を超越して、友情をまっとうし得る民族でもある。また日本の文明は家族主義、国家主義である。西洋の文明は個人主義、世界主義である。その中間に、家族主義、個人主義の文明がある。それが中国文明であるとした。内堀から見れば、一半が日本に、一半

が西洋にあり、中国は東西にまたがっているものとした。

一九〇九年、清国から帰国した内堀は、神奈川県師範学校長となった。一三年には静岡県師範学校長、一五年には長野県師範学校長となった。このころ、内堀は『実用教育学』（一九〇九）を刊行する。同書のなかで、生徒管理について、学校における心得や規程は規律秩序の形成において有効であるが、必要であっても「細密過酷」であってはならないとした。児童生徒らの萎縮をつよくし、健全な発達や活動を抑制する懸念があるためである。あくまで学校での心得や規程は、「児童管理の方便」に過ぎず、児童生徒らの活動を「良き方向」へ導くためのものである。そのためにも、教師が児童生徒らを導く模範の師というならば、教師自らが愛情をもって児童生徒らに接し、教師の人となりや言行に畏敬敬慕されるべき存在であろうと力説した（内堀、一九〇九）。

内堀は、一九一七年に南満州鉄道株式会社の要請によって、南満州中学堂長となった。一九年には、奉天中学校長兼務となる。二三年、南満州鉄道株式会社の職務を解かれ、旅順工科大学予科・附属工学専門部の教授を拝命する。このころ、内堀は自身の大陸経験もふまえて、『日華学報』で「日華共同の世界的使命」（一九二八）や「中国民族の長」（一九三〇）を発表している。内堀によれば、歴史的にみて、西洋文明に刺激や影響をうけてきた日華共同の世界的使命は、まさに「東洋の文明を大成して、世界の人文に貢献する」ことにほかならないと強調した（内堀、一九二八）。そして、前途を見据えたこの自覚・哲学こそが「中華民族の積極性、偉大性」の根幹にもつながるものと確信したのであった（内堀、一九三〇）。

内堀は、一九二八年に旅順から帰国し、大東文化学院教授（教務主任）となった。三三年に、流行性感冒により六二歳で逝去するまで、本学院生らの指導に尽力したとされる。三一年には、学院の第三回中国見学旅行団長を務めている。なお学院時代の内堀については、法本義弘編（一九三五）に詳しい。学院卒業生（本科二期・高等科四期）の田中稲積は、「大東文化学院時代の内堀先生」のなかで、三三年に学院教授に着任した内堀について、「殊に漢文法はお得意のようであった。いつぞや淀橋百人町のお宅をお訪ねした時、壮年時代に御編纂になったと云う漢文法教科書一部を頂いた。それを拝見しても、今日の方が大して変化・進歩して居らぬことと思ひ合せても、先生の学識の非凡であったことが伺われる。高等科三年の時に始めて先生から教育学大意の講義に接した。該博な学識と巧みな比喩対照には、よく感心したものであった」とふりかえっている。さらに田中によれば、内堀の熱心なる指導ぶりについて、「昭和四年の夏、我々が外務省の援助を得て第一回の支那大陸旅行の壮図を断行し得たのも御尽力があつて大なるものがあつた。その時など、あたかも我が子が旅行に出発するが如く、同行者を家庭に集め何くれとなく細かい点まで御自分の経験談と共に御注意下され、且つ在満・支の知人に、それぞれ斡旋の勞を執られるよう御手筈を定めて下さつた。三ヶ月にまたがる大旅行が終始一貫、至る所まで歓迎され愉快なる裡に初期の目的を達し得られたのも先生の御配慮に負う所が多大である」と述べている（田中、一九三五）。

志道会亜細亜部員としても活躍した、学院卒業生（本科四期・高等科七期）の尾崎巨も、積極的であつた大陸への内堀の姿勢について、「目的に向つてまっしぐらに大東文化の支那満州進出を練られた。

大陸旅行団の創始に、北京留學生の派遣に、常に自ら其の荆棘を切り拓られた」とし、内堀「自らが首脳部に企画もし、進言もして、大東文化一団の満州大飛躍の重大使命を帯びての第一歩であった」と回顧している（尾崎、一九三五）。

また学院卒業生（本科四期）の法本義弘によれば、高等師範出身で教育経験も豊富であった内堀の教育風景について、「内堀先生の授業は、最初から私共に注意と尊敬とを払わせた。『こんどの教務主任の内堀さんの授業はええぞ』誰も、彼もがそういって、他の学年の者までが聴きに來たりした。どっしりした、落付きのある声は、高くはなかったけれども、よく講堂の隅々にまで徹底したし、箇条書に板書せられたる教授法など、この学院では珍らしく、而も學生にはよく分った」と記している。

内堀流の學生生徒指導についても、「誰も彼も、先生にならどんな事を相談しても、持ちかけてもいいという絶対の信頼を置く様になつて居つたし、先生が、大東文化学院に対して如何なる抱負を持つて居られるかをもほぼ推察して居つた。學生は誰も彼も、先生を慕つた。土曜・日曜には、先生の大久保邸はそうした學生の群で一杯になつた。其の中に、先生が大東文化学院を世界の大東文化に、少くとも印度以东の大東文化たらしめようとの抱負を持つておられることが、みんなに判つて來た。

……『青年には不平がある、その不平は誰かが一応は聞いてやらねばならぬ。然るに今の學校教育は、殊に専門以上の學校では、それを聞いてやる先生が居ないのだ』先生は、よくそんな風に仰言つた。密かに推察するに、先生は學生に対する限り、よき話し手たらんよりは、寧ろよき聞き手であらうとして居られたものの如くである」と、内堀は學院生らの訪問に対し、大久保の自宅を開放するなどし

た学生思いの教育者であったといえよう。教え子の法本からして、教育者・内堀の対応は、学院生への「よき話し手」よりも、多感な彼らの多様な主張に対する「よき聞き手」であろうとしていたとみる（法本、一九三五）。内堀が学院に果たした役割は、在職期間として短いながらも、学院史にとって意義あるものであった。

2 学院生らの大陸雄飛の動き

大同学院と大東文化学院卒業生

大同学院は、旧満州国（現・中国東北部）の首都とされた、新京特別市に設けられた官吏養成機関である。一九三八年の応募告知などをみると、学院の学制は第一部（大学・専門学校卒業生より選抜採用する一般文官・技術官）と、第二部（満人学生より採用する）であった。修業年限は半年（第一部技術官・第二部）と一カ年（第一部一般文官）、募集人員は計一〇〇名。応募年齢は、在学中の者に年齢の制限はないが、卒業者は満二六歳未満とした。受験資格は、一、高等専門学校以上の学校卒業生または入学までに卒業の見込ある者。二、日本の高等試験本試験または予備試験合格者。三、高等専門学校卒業程度以上の学力ある者と国家にて検定された者。四、満州国の指定する機関より推薦された者、などとした。入試科目は、第一次試験（筆記試験）―法制（二時間）、経済（二時間）、語学（二時間）、常識問題（二時間）、第二次試験（口試及体检）であった。大同学院では、在学中は学院寄宿舎にて共同

生活をおこなうとしている。規律節制の生活に努め、朝夕は必ず点呼を実施する。在学中の外出も、定められた日時のほかはとくに許可していない。共同訓練などでは、号音をもって正確および俊敏に行動するものとしている。この機関の方針からすると、一定期間、日・満学生ら混合の共同生活や訓練などをおこなうことで、理想とされた東亜民族協和の実践をめざすことの重要性が相応に意図されたものといえよう（欧文社編集部、一九三八）。

大東文化学院からも、まず本科五期卒業の高辻長吉が一九三二年に、大同学院の第一期生で入学している。高辻は大東文化学院に在学中、柔道部で運動に励みながらも、志道会重細重部での弁論・執筆活動にも熱心に従事したという。江見編（一九三〇）に執筆された（高辻、一九三〇）では、東西文明の総合的精神文化の建設が重要であるとし、現代の政治・思想を理解して批判するためにも、「予備知識」として「諸種の社会科学、特に教育・哲学・政治・経済等の諸科目」の研究が、これからの大東文化学院生らにとっても必要であろうと強調している。また三三年には、高等科七期生の鳥飼健が入学する。大同学院第二期生として、「我等が地方に在ると中央に在るとを問はず恒に地方の心をして心とせん」といった卒業宣言文も、鳥飼は披露している（鳥飼、一九三六）。鳥飼は卒業後、大同学院の教務主任まで務めている。その後、大東文化学院本科九期の齋藤保、難波光男、関口卓司、本科一〇期の土岐竜雄、小山正二、本科一二期の齋藤進、植松正三寅などが、次々と大同学院に入学・卒業して、旧満州国の県参事官などに就任して自らの任務を果たしたといわれる。

法本義弘の教育歴（大東文化学院で中国語担当）

法本義弘は、一九〇九年、福井県小浜市に生まれる。小浜中学校を卒業し、二七年に大東文化学院本科に入学した。本学院在学中、法本は弁論部に所属して熱心に活動したという。江見編（二九三〇）をみると、学院精神発揚と綱紀の維持にあたる第一線の前衛部隊として、弁論部が東洋精神の宣揚と思想善導を主眼とする目的から、当時の法本（本科三年）も加わって、夏季地方巡回講演（二九年七月一〇日、千葉市淑徳高等女学校にて聴衆七〇〇人、同月一日、茨城県北条町小学校にて聴衆四〇〇人、同月一二日、山形県新庄町公会堂にて聴衆五〇〇人、同月一四日、福井県若松第四小学校にて聴衆一〇〇人、同月一八日、千葉県旭町旭劇場にて聴衆四〇〇人）を盛大におこなっているのが記されている。この夏季巡回では、法本は「明治維新を回想して」といった講演を一般大衆に向けておこなっている。

一九三〇年、法本は学院本科を卒業し、同年には外務省文化事業部による給費研究員の一期生として、中国文学研究の目的で北京に三カ年留学を命じられる。三三年には、法本は北京大学第一院国文学系を修了して帰国した。同年、大東文化学院で中国語の講義などを担当する講師を務めた（四一年度まで）。法本は、母校である大東のほか、日本大学や慶應義塾大学などでも講師を務め、三三〜四七年まで、中央大学教授として、中国語、国語漢文、日本語の各講座を担当している。戦後一時、公職追放もうけたが、五一年には解除されて、六九年に中央大学を定年退職した。八二年には、出身郷里にもうけられた福井県立若狭歴史民俗資料館の初代館長に就任した。八七年に、小浜市にて逝去する（享年七八歳）。

一九三四年に、大東文化学院の建学の精神にもとづき、日本の儒教宣揚を喫緊の課題に掲げ、大東文化学院総長を務めた加藤政之助（一八五四～一九四一）らが陣頭にたつて、日本儒教宣揚会が組織される。この宣揚会の活動内容などをまとめた日本儒教宣揚会編（一九三六）をみると、三五年に、法本は「支那節義思想と日本精神」といったラジオ講演を一般に向けおこなっている。このなかで、法本によれば、日本は儒教や仏教といった外来思想から多くを手本として学んできた歴史があるとしながらも、明治維新以降の日本では、中国の学問・漢文であると、また欧米の学問・英文であるとかかわらず、広く東西世界の知識をもとめ、自身があたえられた守るべき節義をかえりみて、日本国家・社会の発展をこれから期さなければならぬと強調しているのであった。

法本は、学生生徒らを対象とした、中国語関係の教科書の編纂・執筆も精力的におこなっていた。法本（一九三八）では、冒頭の序で、大陸需要が高まり、中国語研究もたいへん注目されるようになってきていると呼びかけている。同書では、第一編で中国語学習の心得を注意喚起し、第二編で日常生活使用される主な単語を取り上げ、第三編では簡単な会話、第四編では会話の基本となるべき慣用語句を挙げ、第五編でややまとまった文章や演説を説話事例として収めている。たとえば、挿入されている説話の短文は、次のような事例であった。「私は市内に住んでいる、伯母は郊外に住んでいる。昨日の日曜に、私は弟と一緒に伯母の家へ行った。途中（二路上）山は高く、田は低く、水の流れているのを見るだけ（只看見）で、郊外の景色は、市内よりずっとよいのを覚えた」。ごく普段の日常生活で、使用するような事例を挙げている。

本学の大東文化協会でも、「高等及ビ普通教育ニ於ケル漢学ニ関スル教科ノ編制並ビニ教科書及ビ教授法ノ改善ヲ図ルコト」というミッションも設立当初から掲げていたが、久しくその実現をみるこゝとがなかった。一九三七年にようやく、『皇国漢文読本』を編纂刊行することができた。その「編纂趣意書」にも、大東文化協会は大東文化学院を開設して人材養成をはかりながら、「適切なる漢文教科書」の編纂事業の試みも有していたが、「久しく其の実現を見る」ことはなかったが、今日「漸く其の業」を実際に開始することができたと強調する。協会事業の編纂方針として、「教材を採択して、生徒をして東洋文化の概要を理解せしめん」（東洋思想の開明）とし、「生徒をして、我が国の東亜に於ける重要な現地位を知り、正真に現代東洋を認識せしめんが為に、歴史教材を多分に採択し、更に現代的知識をも取得せしめんが為に時文教材を交へ、且満州国に関する教材をも収載せり」（現代東洋の理解）としたのである。編纂趣意にもあるとおり、協会としては漢文だけでなく、中国語などの教科書の編纂もおこなっていくことになる（大東文化協会、一九三七）。

学院で中国語を担当した法本らも実際に協力して、協会が編纂した「支那時文」（現代中国語）の教科書についても、大東文化協会編（一九四〇）では、学習者らが有する「既習漢文の程度」を参酌しながら、平易で理解しやすい現代社会の時文関係記事を収録している方針を示した。写真や地図などの視覚的資料も挿入しながら、実際に学習する生徒らが容易に理解できるように、句読点、返り点、送り仮名もつけ、適宜語句の注釈も記す工夫や配慮をして、実用に供することを強調している。また「支那語」（中国語）の教科書についても、大東文化協会編（一九四一）では、学習者らの「現代に於ける

活きたる支那語」の修得をはかるため、終始一貫して「平明なる口語体」を用いるとした。「初学の便」をまず考慮して、適切な図版や注記をつけたというのが、学習者の「反復練習」に応じて、おのずと初級から中級・上級「程度に向上進歩」をしていく流れを意識して編纂された教科書であるとした。

一九二四年に開校された大東文化学院であったが、三〇年代後半以降の日本や中国などの関係性からみて、学院にもとめられた社会的な期待も、内堀や法本らの活躍などからもうかがえるっており、「日滿支の関係が愈々緊密重大になつて行く時、本校生の負うべき国家的使命も亦重大なもの」となつてきたといえよう（欧文社編集部、一九三八）。一九三八年、学院の本科を「三部制」へ組織変更をはかった。第一部 修身漢文科、第二部 国語漢文科、第三部 東亜政経科、からなる私立専門学校に転換したのであつた。三部制の初年度には、三〇五倍の応募者が殺到するほどの人気であつたという。なかでも東亜政経科では、「支那語及支那時文」の授業がとくに重視され、同科卒業生は中等学校中国語科の教員資格も有することができた。かつては、「漢学の大東」と称された大東文化学院の卒業生は、その語学力や大陸事情などの自校のつよみを存分に活かし、日本の内地外地を問わず、教育界を含めた官衙、銀行、商店、会社、新聞社などの多方面で活躍していくことになる。

参考文献

- 石川薫（二〇一九）「大東文化協会と時文テキスト」（大東文化大学大学院外国語学研究科中国語言語文化学専攻『中国言語文化学研究』第八号）

- 岩村成正（一九三三）『満州小観』（小松武治編『大東文化』第五号、大東文化学院編集部）
- 内堀維文（一九〇〇）『中学漢文入門教授法』金港堂
- 内堀維文（一九〇三）『中等教育漢文教授法』金港堂
- 内堀維文（一九〇九）『実用教育学』大野書店
- 内堀維文（一九二八）『日華共同の世界的使命』（『日華学報』第七号、日華学会学報部）
- 内堀維文（一九三〇）『中国民族の長』（『日華学報』第一号、日華学会学報部）
- 欧文社編集部（一九三八）『全国上級学校大観』欧文社
- 江見章夫編（一九三〇）『志道』第一号、大東文化学院志道会
- 尾崎亘（一九三五）『時艱に際して東村先生を憶う』（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会）
- 小栗英雄（一九三一）『支那旅行とどこころ』（小松武治編『大東文化』第一号、大東文化学院志道会）
- 高辻長吉（一九三〇）『我が学院の使命に就いて』（江見章夫編『志道』第一号、大東文化学院志道会）
- 鳥飼健（一九三六）『大同学院第二期生宣言文』（不知火荘同人編『鳥飼健追悼録』鳥飼健追悼録編集部）
- 田中稲積（一九三五）『大東文化学院時代の内堀先生』（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会）
- 谷本富（一九三五）『内堀君を憶う』（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会）
- 日本儒教宣揚会編（一九三六）『日本之儒教』第二集、日本儒教宣揚会
- 法本義弘（一九三五）『往時茫として夢の如し』（法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会）
- 法本義弘（一九三八）『支那語教典 独習用』向山堂書房
- 法本義弘を偲ぶ会編（一九九〇）『法本義弘 想ひ出の随想集』法本義弘を偲ぶ会

- 大東文化協会（一九三七）「編纂趣意書」（大東文化協会編『皇国漢文読本』東京開成館）
- 大東文化協会編（一九四〇）『新制時文読本 教授資料』東京開成館
- 大東文化協会編（一九四一）『標準支那語教科書』三学書房
- 大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編（一九七三）『大東文化大学五十年史』大東文化学園
- 大東文化大学創立七〇周年記念事業記念出版推進委員会編（一九九三）『大東文化大学七十年史』大東文化学園

第13章

学院生らの心身鍛練を指導・支援

中山博道・鈴木篤三郎

中山博道



一八七二年、石川県生まれ。旧加賀藩祐筆役の中山源之丞の八男。幼少から実家を離れ、富山で商家の見習奉公しながら、甚道の修業に励む。八九年、一七歳で単身上京する。剣道師範の根岸信五郎の囲碁相手を務めながら、九〇年、自身の体育向上のため、神田西小川町の剣道道場・有信館で、神道無念流・根岸信五郎の門人となった。一九〇五年、三三歳で有信館の名跡を継ぎ師匠の養父・根岸を迎え、新たに本郷真砂町に自身の道場・有信館を建てた。大東文化学院の剣道部初代師範（武科教師）。昭和の剣聖と認知され、一九一二年の大日本帝国剣道形の制定に参加。五八年没。

鈴木篤二郎 とくさぶろう



一八六四年、福島県生まれ。自由民権家の医師・鈴木俊安の三男。衆議院議員の鈴木万次郎は俊安の二男。万次郎は医師として、篤三郎とともに神保医院（神田区）を、九〇年に設立運営する。万次郎が政界進出するなどにもない、同院の院長職を、九四年に福島県立医学校を卒業した、篤三郎が引き継ぐ。医学博士の北里柴三郎に師事し、感染症の患者を専門とする血清療法を用い、神保医院で治療処置をおこなった。また、ボディビルの父と称されるユージン・サンドウの、鉄アレイを用いた健康体操を万人に提唱した。大東文化学院校医（一九二七～四〇）。四四年没。

1 学院生らの運動競技のはじまり

大東文化学院同学会・志道会の運動部について

本学は、「スポーツの大東」ともよく称されるが、その創設以来からの歴史的な起源や系譜などについては、残念ながらいままで十分にかえりみられていないといえよう。大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編（一九七三）をみると、学院が九段時代の学院生らの活動として、一九二四年に、

「會員ノ心身ヲ修練シ節義ヲ磨勵シ會員相互ノ親睦ヲ図ル」目的として、同学会が結成されたという（会則第二条）。同学会の會員は、学院の在校生を正會員とし、教職員を特別會員とした（会則第四条）。同学会は、学芸部（會員ノ学芸ニ関スル研究及発表）・弁論部（思想ヲ磨練シ弁論ニ習熟セシム）・運動部（會員心身ノ鍛練）・旅行部（旅行又ハ遠足ニ因リ心身ノ健全ヲ計リ見聞ヲ博クス）から構成された。とくに運動部については、当分の間は剣道のみとし、毎学期末に會員一同で剣道大会を催すものとした。二六年には、指導教師として大槻豊師範を招聘して、弓道を剣道とともに学院の正科としてくわえた。

大東文化学院同学会編（一九二六）に掲載されている、同学会の「運動部大会」（二五年一月開催）では、まず地稽古を演じてのち、會員ら紅軍一九名・白軍一九名とで互いに手練を争い、結果として紅軍が勝利している。ついで模範試合をおこない、「衆皆手に汗して之を観る」とした。そして最後に、中山博道師範からの訓話があつて、會員らの茶話会を催したと記されている。また翌二六年六月に、新入會員らの歓迎をかねて開催された「運動部春季大会」では、中山師範の訓辞、剣道助手の矢木参三郎・桑田福太郎による帝国剣道形ののち、新入會員らで編成された紅軍と、旧會員らの白軍による試合の結果、紅軍が白軍に勝利した。紅白試合ののち、助手の矢木・桑田らによる模範試合、中山師範による居合をおこない、會員らの茶話会を催している。この大会を記録した大東文化学院同学会編（一九二七）所収の「部報」には、「我が部の前途や多望、かくの如き数多の傑ヤマはを得たるを慶ぶ」と記されている。

さらに大東文化学院同学会編（一九二八）所収の「運動部」欄をみると、二七年七月に東京齒科医

学専門学校（現・東京歯科大学）の選手らを迎えて、本学院道場にて、中山師範による審判のもと剣道練習試合（個人三本勝負）をおこなっている。それまでは他校との試合を控えていたが、歯科医専側よりの申し込みによって練習試合が実現されることになった。試合結果は、「僅少の差」で本学院が敗退したという。試合模様については、「一進一退虚々実々各渾身の力を以て相戦えば、竹刀は電光と飛び、満場肅として声なし」とされ、試合をふりかえって、「静肅に且元気に勝敗に熱中する事なく、能く剣道の本領を守り礼節を失うこと無く、本学院剣道の精神を十分に發揮し得たるは、真に大成功と謂うべし。而も此の拳によりて従来の独善的境地を脱して更に一段の進歩と飛躍とへの第一歩を踏み出したるを思えば此の一拳によりて我が剣道の得たる所の多大なりしを知るべし」と述べている。これは、本学と他校との対外試合のはじまりという歴史的な画期であった。まさに、知られざる秘話であろう。

大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編（一九七三）では、同学会組織の再検討をもとめ、機運が学内で生じ、学生総会などで協議を続け、一九二九年、学院総長である大津淳一郎は、同学会長の小柳司氣太に委嘱して、新たに「志道会」の名称を選定するとして、志道会のもとに組織再編されたとしている。江見編（一九三〇）では、これからの学院の存続発展を期するには、「志道会を描きて他に存せざるなり」と宣言している。なお志道会運動部の活動を、同誌からみておこう。剣道部の新入会員歓迎試合（二九年六月）や明治神宮体育大会剣道大会（同年一月）、皇道義会秋季剣道大会（同年一月）や早稲田実業学校剣道大会（同年一月）、志道会秋季剣道大会紅白勝負（同年一二

月)の試合内容などが記されている。学院の正科中に課せられた弓道については、当初の「義務的」な状態から学院生らの「心身の鍛練を期して進んで練習を積む様になった」という。弓道部の春季大会(一九二九年七月)、暑稽古(同年七月)、秋季大会(同年十二月)、寒稽古(三〇年一月)の様子が記されている。そして一九二九年の春季総会での全会一致の可決により、学院生らの多年の宿願であった柔道部の新設が認められ、創設当初から部員数も八〇名に達し、講道館有段者二名・初段相当十余名を擁したとされる。柔道部では、講道館から「豪快なとりくち」が印象的であった石丸政次四段が助教として招聘され、稽古にも積極的に励み、「学生の気風に何物かを齎さずにはいないであろう」と記されている。三〇年からは、学院の武道正科中に柔道も課せられたのである(江見編、一九三〇)。

続いて小松編(一九三一〜三三)からも、各運動部の活動内容をみておこう。小松編(一九三二)では、「射撃部が呱呱の声を挙げて此処に三年」という「射撃部部報」として、三二年七月の帝大主催大会では「参加校三十五校の中第六位」の戦績であり、同年九月の明治神宮大会も「参加校三十九校の中第十一位」であって、「今や射撃部の前途光明あり」と激励しながらも、「一層の奮励を望みて已まない次第である」と鼓舞している。

また小松編(一九三二)では、「弓道部部報」として、「吾が弓道部は新学期に当り三十一名の新入部員を迎えたのは喜に堪えない」とはじまり、三二年六月の新入生歓迎会の春季大会では、師範である「大槻先生の御出席をも得午後一時開会した競技は紅白に分ち十四中对十中をもって紅組の勝に帰した」という。なかでも同大会では、本科二年の部員らの活躍がめざましかった。射会の最後に、部

員ら一同の茶話会を催し、「大槻先生の講評や山口先生の御感想を賜わり部員の懇談あつて」散会したと記されている。

小松編（一九三三）では、「剣道部部報」として、「学院剣道部に於てはさきに鳥飼、菊池、堀田の三先輩を送り、聊か寂寥の感無きにあらざれども新に強剛の新入部員を迎え再び陣容を建直し」はじめたとし、対外の団体練習試合でも、「熱と技と両々相俟つて」部員らの妙技もいよいよ冴えるものと期待している。三三年五月の学院と豊多摩刑務所、中野警察との三者リーグ戦では、学院三対豊多摩七、学院七対中野三という戦績であつた。六月、新入部員歓迎大会を開催した。同月の法政大学からの挑戦試合は、学院六対法政四で、同月の二松学舎からの挑戦試合も、学院六対二松四と応じた。七月の全国高等専門学校剣道大会では捲土重来を期していたが、学院七対商大専三、学院四対山形高六という結果で、「再び苦杯を嘗め、学院の「中堅諸士よ！！奮闘を望む」とエールをおくっている。

同じく小松編（一九三三）所収の「弓道部部報」では、三三年四月、「新入学中三十八名入部、相当に体験せられている人、熱心に修行しようとする人々を得た事を喜ぶ。都合今年度部員は総勢九十九名となつた。早速練習を始める」としている。五月、護国義勇団主催の浜松町恩賜公園内弓道場へ選手を派遣したが、団体・個人ともに惜敗した。これは、「今年こそは大いに外部発展をやって、他流の中に発揮もし鍛えもしたいという部員の熱願」であり、成績にとどまらずその経験をおして、「やがて偉大な花実を結ぶ素地を言う収穫である」とふれている。六月の春季校内大会では、学院諸先生

がたの臨場もあって、部員ら「射士の意気拳」ったとし、新入部員の歓迎懇談会で「部振興策の協議」も行い散会した。なお協会の木下理事より寄附があつて、「部員一同の修行精進がそそられる事と喜んでゐる」と強調している。

同じ小松編（一九三三）所収の「射撃部部報」では、「射撃部が呱呱の声を挙げて此処に五年」になるとし、陸軍歩兵少佐の武田米太郎による「熱心なる御指導」（三三年七月末まで）をうけ、いままでの二挺にくわえて学院より小銃五挺の支給もあつて、部に七挺の銃が所持され、「射撃に必要な物品も整い、部員の努力如何によつてのみ発展飛躍する時」を迎えたという。六月の第八回学生射撃連盟射撃大会では、総点二一六点を得て、参加二六校のうちで第八位の成績であつた。個人の部では、三名の成績優秀者が出て、部として練習不足もあるなかで「本学院のみで特筆するに足る」とされた。武田教官が明大の配属となつて、部としては「大打撃」であつたが、代わつて陸軍歩兵中佐の太田貞昌が学院に配属されて早々、数回の熱心な指導を得て、「日一日と進歩しつつあり尚前途に光明あるを覚ゆ」とし、一〇月の明治神宮射撃大会や一月の第一〇回関東学生射撃大会で、是が非でもよい結果を残すべく、「目下部員一同一層奮励努力中である」と決意が記されている。

2 学院生らの心身鍛練の継続と変化

中山博道の武道活動について

学院の創設時から昭和戦前期をとおして、大東文化学院剣道部の初代師範(武科教師)を務めた中山博道の存在は、学院の運動部活動全般においても、象徴的であったといえよう。一八七二年に、石川県金沢市の旧加賀藩柘筆役であった中山源之丞の八男として生まれた中山の本名は、資信という。幼いころからひとり家を離れ、富山で商家の見習奉公のかたわら碁道の修業にも励んだ。碁道をより深めて自立したいとも考え、八九年に、一七歳で単身上京した。碁道の研究を行う目的で、剣道師範の根岸信五郎(一八四四～一九二三)の囲碁相手を務めながら、九〇年、一八歳で自身の体育向上のために、神田西小川町の剣道道場・有信館で、神道無念流・根岸信五郎の門人となった。門弟は、三〇〇〇人もいたという。二七歳で剣の免許を允許され、一九〇〇年、二八歳で根岸家の養子となり、剣道家として世に立つことになる。二九歳で、東京府官吏の小林慎三の長女とき子と結婚し、三二歳で、根岸家を離れて生家の中山家を継いだ。〇五年、三三歳で有信館の名跡を継ぎ師匠の養父・根岸を迎えて、新たに本郷真砂町に自身の道場・有信館を建てたのである。中山は、「昭和の剣聖」としてひろく認知され、大日本武徳会から剣道、居合術、杖術の三範士号を授与された人物である。大東文化学院をはじめ、慶應義塾、中央、法政、明治、二松学舎、東京帝国大学などで剣道師範を歴任し、多くの青年子弟らに剣道の模範として教えている。また警視庁武道師範をはじめ、皇宮警察部、海軍な

どの剣道師範にも任せられ、一九二二年の大日本帝国剣道形（日本剣道形）の制定に参加している。たとえば、いまでも警視庁に伝わる警視流木立形は、代表的な一〇流派の形から一本ずつ抽出されているが、その八本めは神道無念流で、中山の技、左右開き足による足さばきで左右からの攻め、最後は相手面を片手横面で決めるという形である。

中山は、自身の体得した剣道の精神や技術、その意義についてわかりやすく記した中山（一九二三）のなかで、まず「無形の精神と、有形の身体とを、共に鍛錬するに、最も適当なる方法は、我が邦固有の剣道に若くものはない」と強調し、剣道の眼目が「無形の精神の鍛錬をなして、有形に其の実を現じ、有形無形不偏不党にして、其の真を体得せなければならぬのである」と明確にする。剣道を学ぶものの「心得」として、「其の門にまで至って未だ其の主人の存否をも問わずして、すぐすご帰つて了う人や、或は又主人に面会したに拘らず、要領を得ずして帰ると云う有様」であつてはならないとし、「天は自ら助くる者を助くるのであつて、自ら発奮努力せねば到底何事も成就すべきものではない」と明言する。「基本練習の心得」として、基本となる姿勢動作などが不十分なままに習慣化してしまふと、容易に矯正することはできないので、初心者には「反復練習」をして、「充分習熟したる後、連続の業を授け、確實正確に習得せしむることに勉むべし」と注意した。初心者は、とくに「先づ業を専ら練習して術を極め、漸を追うて理に渡る様の心掛けが肝要である」という。剣道とは、中山によれば、「人の人たる道を知らしむる」ものであり、それは「頭のみ発達せる浮薄なる人間を作るにあらずして、充分腹を作り頭も腹も両々相俟つて、健全なる最も着実にして最も真面目なる人格を養成

せんと欲する」ものであると示している（中山、一九三三）。

学院生を含めた多くの門人子弟らに対して、いかに中山は自身が究める剣道をとおして心身鍛練の指導をしていたのかについて、「基本練習の心得」や「試合に臨む態度」、「勝負のあとで」、「正しく修業すれば八十歳でも敗れない」といった中山の教え（剣道口述集）からみておこう。剣道家である中山によれば、あくまで体力や技術などの個人差・体格差が存在したとしても、それは絶対的なものではなく、「順当に正しく修業した者にとつては、八十歳迄は年齢から来るおとろえと完全に對抗できるものである」と強調している。まさに、「勝負とか稽古とか、体力との對抗に於いて年がないとする最大の原因は、修業の正しさが竹刀に与えた悟りがあるためで、剣道に年はないのだと言っている」とし、中山自身、晩年近くになっても稽古を続け、般若心経の写経などして、精神と肉体との修練も欠かさなかつたとされる。中山によれば、日常の稽古や試合の勝負にあたり、「勝つても奢ることなく、敗れてもよくよするな」と、いわゆる礼を尽くして、平常心を保つことがもつとも肝要であるという。成績の結果などに固執するあまり、「自分の敗戦を審判の拙劣にありとすることがとき言動で、これは洵に恥しい限り」であり、「負けた口惜しさを自己修業の不足に変換する位になつて」もらい、「打つて修業するよりも、打たれて修業する方が倍も心に価値を与えてくれるものだ」と考え、結果のよくない場合こそ、「己れに限って反省をより強くしたいものである」と戒めている。また日々の練習にかかわって、健康衛生上、飲食後直ちに練習をしない、練習後は直ちに入浴しないと警告し、飲食後の少なくとも一時間のあとで練習をおこなうことがよい、練習後の一五分間をおいて入浴をなすのがよ

いなどと注意喚起している（稲村監修、一九九〇）。

学院の志道会も一九四〇年代以降、戦時下の時局のなかで、報国団報国隊に改組されていくが、報国団剣道班の班員らも中山師範の教えによくしたが、日夜稽古や修業を欠かさず続けたようである。たとえば、四三年六月には、本郷「真砂町有信館道場にて選士二十五名、参じて、中山師範の御指導を仰ぐ。尚多数の教士、錬士の先生方より御稽古を賜わり大いに得る所あり」と、剣道班の報告が記されている（鬼頭編、一九四三）。

敗戦後一時、戦犯容疑で武道家として中山は収監されるが、その三ヵ月後に無罪放免となった。しかし、大日本武徳会も解散となり、中山も関係者として剣道界の表舞台から去っている。一九五八年二月、東京都内の病院にて脳軟化症のため逝去（享年八六歳）。中山が晩年記した書に、「玉磨かざれば光なし 人学ばざれば道を知らず」とあり、中山の生きざまを物語っているよう。中山の墓は、師である根岸と同じ、東京都港区南麻布の天真寺にある。

学校医・鈴木篤三郎の活動について

大東文化学院同学会編（一九二八）所収の「学院彙報」（一九二七年度）に、二七年二月付の学院校医嘱託についての指摘がある。それによれば、医師・西尾昌伯（小石川区）から医師・鈴木篤三郎（神田区）に学校医の職が交代されている。当時の学校医という存在は、学生生徒らにとって、身体清潔、身体運動などを習慣的な心得として周知徹底させながら、疾病予防・健康の維持、基礎体力の向上ま

を含めた要職であり、生徒らを取り巻く教育環境・生活環境の安定を、健康管理の一環として重要視していたのではないかと考える。いまだ十分とはいえない調査の途上ながら、一九二七～四〇年の間に本学院校医を務めた医師・鈴木篤三郎について、学院にとつてもどのような存在や役割であったのか、関係資料などからその人物像を追つてみたいと思う。

鈴木は、福島県岩瀬郡須賀川町（現・須賀川市）にて、一八六四年に自由民権家の医師・鈴木俊安の三男として生まれた。父・鈴木俊安は、地域の医師でありながらも、「政談演説を本職として医を余業とする」ほど、自由民権の活動に熱心であったという（谷沢編、一八八三）。鈴木俊安の二男として生まれたのが、鈴木万次郎（一八六〇～一九三〇）であり、兄・万次郎も医学を修めた医師として、弟・篤三郎とともに神保医院（神田区）を、九〇年に設立運営することになる。鈴木万次郎は、福島県選出の衆議院議員（立憲国民党）になり、かたわら愛国生命保険株式会社社長として経営もおこなうなどし、実業界でも活躍している。神保医院の初代院長は鈴木万次郎であり、万次郎が政界進出するななお鈴木篤三郎の妻は、千葉の士族で森村忠作の長女・美智子（一八七一～一九一三）という。

鈴木は大東文化学院のほか、共立女子職業学校などでも校医を務めている。師事する医学博士・北里柴三郎（一八五三～一九三二）から指導をうけ、感染症（肺病・脚気・腸チフスなど）の患者を専門とする血清療法を用いて、自身の神保医院にて重点的な治療処置をおこなうことでも知られた。また医学校の済生学舎で、当初吉岡弥生（一八七一～一九五九）らの女子の入学を容認していたが、その後女

子の入学を認めず、在学中の女子も拒絶した一九〇〇～〇一年、鈴木万次郎と篤三郎らは、その救済措置（女子学生らの教室確保など）をめぐって尽力したとされる（田口、一九三六）。

鈴木は労働運動にも相応の理解を示し、とくに労働組合員らが困窮していると聞けば、処方した薬や治療費などを割り引きし、兄・万次郎の姿勢とも共鳴するように、労働組合関係の会合でも、積極的に医療衛生の演説活動をおこなっている。たとえば、一八九九年四月、神田区美土代町の青年会館（労働組合会）にて、工場衛生や伝染性病毒の予防についての衛生講演「肺病について」を、同年七月にも、同会館にて講演「労働と赤痢」を、医師（神保医院長）としておこなっている（労働組合会の衛生講演『東京朝日新聞』第四六〇三号、朝刊、一八九九年四月二九日）。このような鈴木の社会的な活動に対して、「医者の同情」という労働者の感謝文（労働新聞社）が、片山潜・西川光二郎（二九〇一）所収の附録に、次のとおり記されている。労働者らを保護支援する医師のひとりとして、「労働者に対し薬価半減入院料三分の一減の恩典を与えられしは、常に余の眼中病人ありて華族も乞食も金持もなしと談りつつある神保院長鈴木篤三郎氏なり」とし、「医は仁術なりと云うものの、今日金あるを知りて病あるを知らざる医者のみき世の中に以上の如き医者諸君を見るは万緑叢中紅一点と云うべき乎、茲に謹んで労働者全体に代りて諸君の同情に感謝す」と、鈴木の貢献が称賛されている（片山・西川、一九〇一）。

そして鈴木は、虚弱体質でよく感冒にかかりやすく苦勞していた自身の経験もふまえて、書生時代には、弓や撃剣、冷水浴などを試みて強健となることをめざしていたとされる。医師である鈴木が、

老若男女の万人に提唱した健康体操法が、鉄アレイ一式を用いたサンダウ式体育法であった。ユージン・サントウ（一八六七～一九二五）は、ボディビルダーの先駆者で、近代ボディビルの父とも呼ばれ、ロンドンで体育学校を開いた人物であった。英国留学時の英文学講師・夏目漱石（一八六七～一九一六）や柔道家で教育者・嘉納治五郎（一八六〇～一九三八）なども、サンダウ式体育法に関心を有し、それを積極的に実践したものとされる。医師としての鈴木によれば、まず「最初に医師に就き、身体の検診を受け、十分其の意見を聞き、医戒を厳守せねばならぬ」のが前提とし、「運動は朝起きて直ぐ行方が最も好い、朝起きて直ぐ行えば、胃中何物の存するなき時で、且前日の疲れを全く忘れてある時なるを以て、疲労を感じるをなく、最も精神に愉快を覚ゆるのみならず、朝は時間の都合も頗る好い時である」と述べ、健康体操の運動の進めかたについても、「各運動の回数は多きに過ぎ、又は少きに失してはならぬ、必ず示す処の回数を守るべきもの」とし、くわえて「運動は成るべく緩つくり行方が好い、但し急いで行すべきものは運動法に特に説明をしてあれば注意するが好い」としている（鈴木、一九〇五）。鈴木自身、晩年の八〇歳近くになつてなお、社会的な医療奉仕活動を率先しておこなうなど、現役の医師として活躍している（『雪の戦士に医療奉仕 八十翁・寒さを衝いて巡回』『朝日新聞』第二〇四二七号、朝刊、一九四三年二月四日）。一九四四年一月、東京都内で逝去。鈴木篤三郎の墓は、東京都豊島区の雑司ヶ谷霊園にある。

このサンダウ式体育法も、学校医を務めていた鈴木が身をもって提唱した健康体操のひとつであったが、大正・昭和期にかけて、教授の松平康國（一八六三～一九四五）らが心酔し、自彊術（大正期に

国内で考案普及された三一の動作で構成される健康体操」の指導が、学院内でも熱心におこなわれていたという。その実施の動向は、関係資料が乏しく管見の限りの情報であるが、まず一九二五年九月に、学院関係者七六名を対象として、自彊術の指導が開始されたとされる。昭和期に入っても、二七年一月、学院生らの保健向上のため、毎日正午一五五分間、学院剣道場で実施されていたとしている。

松平自らが自彊術を毎日実践しており、それを万人に向けて、「自彊術を行うに就いての心得」として、松平（一九二〇）でわかりやすく丁寧に紹介している。それによれば、おこなう時刻や回数「時刻は何時でも構わない、回数は幾度でも差支ないが、習慣を作り規律的ならしむるには時刻を定め、回数を限るに若くはない」とし、「一日一回行っても確に効力がある」と強調する。おこなう場所は、「畳の上が一番宜しい」とし、三一の基本的な運動からなる自彊術は、「和歌が三十一文字で組立てられていると同様で、一字が欠けても和歌にならないように、一運動を略しても自彊術にならない」として、既定の全運動を連鎖しておこなう自彊術の効果を提唱している（松平、一九二〇）。学院の鈴木も松平も、学院生らの日々の健康をおもんばかつての健康体操運動のススメといえよう。

戦時下・大東文化学院報国団射撃班の報告にふれて

戦時下の時局のなかで、一九四一年三月、大東文化学院報国団が結成された。学院志道会の部活動も、報国団報国隊へと改組されていくことになる。たとえば、小松編（一九三六）所収の三五年の志道会「射撃部報」によれば、同年六月に実施された学生射撃連盟主催の第一〇回全国高専射撃大会で

は、「参加校三十）第五位（二七点）入賞」であったとし、「吾が部が創設せられてより此処に八年、本年度に於ては左の如き成績を挙げ遂に名実共に推しも推されもせざる斯界の雄となれり」と讀えるなど、「我が部は愈々發展向上しつつある」と、部活動のさらなる飛躍におおいに期待しているという様子がうかがえる。

ところが学院報国団へ改組されていくなかで、鬼頭編（一九四三）所収の四三年の射撃班報告である「射撃に関する所感」（射撃班…池田満輔）をみると、まず前提として、「我々は学生なるが故に安じて勉学にいそしむ事が出来得るのであるが現在危急存亡の関頭に立つ日本は加うるに、即刻剣を取って立上り喜んで身を君国に捧げる事を要求して居るのである。我々は何時有るやも知れぬ空襲に対して不断の訓練を重ねて居るのでは有るが、更に一步進んで、戦技訓練を益々練磨す可き時なのである」という時局の認識を強調し、「文を修め武を錬る事は吾々学生の責務である。……射と御とは士人必修の武芸である。古代の射は弓あるが現代の射は銃である。……殊に現代決戦の秋吾々学生は常に戦場に在るの心構えと訓練とを必要とする」と鼓舞しているのであった。班員の池田が心構えとしてふれていたように、実際の四三年一〇月には、学院本科一部の出陣学徒壮行会も開かれるのであった。

本学院が創設されてからの同学会や志道会では、学院生らの「心身修練」や「相互親睦」といった点を目的として精力的に活動していたが、四〇年代以降の戦時下における報国団報国隊では従前の校友会といった組織を改組し、時局の要請にもとづく「国家存亡」や「戦技訓練」といった意識をつよく打ち出して班活動をおこなうとしたのである。この点にそくしてみれば、さらに戦後の新制大学な

どへ昇格していくと、歴史的な系譜を有する本学校友会の部活動などどのように変化・変容していったといえるのであろうか、さらに多くの関係資料にもとづいて、より詳細で長期的な検討・分析が必要であろう。

参考文献

- 稲村栄一監修、堂本昭彦編（一九九〇）『中山博道剣道口述集』（中山善道問書）スキージャーナル
 江見章夫編（一九三〇）『志道』第一号、大東文化学院志道会
 片山潜・西川光二郎（一九〇二）『日本の労働運動』労働新聞社
 鬼頭有一編（一九四三）『東文』第五号、大東文化学院報国団雑誌班
 小松武治編（一九三二）『大東文化』第一号、大東文化学院志道会
 小松武治編（一九三三）『大東文化』第三号、大東文化学院志道会
 小松武治編（一九三三）『大東文化』第五号、大東文化学院編集部
 小松武治編（一九三六）『大東文化』第一二号、大東文化学院編集部
 鈴木篤三郎（一九〇五）『サンタウ式体育法詳解』快進社
 田口あき子（一九三六）『済生学舎が女子に門戸を閉鎖せし当時』（『日本女医会雑誌』第七三号、日本女医
 会雑誌発行所）
 谷沢豊信編（一八八三）『鈴木俊安君伝』（『東北自由党员列伝』第一、自由閣）
 中山博道（一九二三）『剣道手引草』有信館本部出版部
 日本出版放送企画（二〇〇三）『達人の秘術と剣聖の心 植芝盛平と中山博道』（DVD）クエスト

- 松平康國（一九二〇）『予の実験せる自強術』南北社
- 大東文化学院同学会編（一九二六）『同学』第二号、大東文化学院同学会
- 大東文化学院同学会編（一九二七）『同学』第三号、大東文化学院同学会
- 大東文化学院同学会編（一九二八）『同学』第四号、大東文化学院同学会
- 大東文化大学創立五十周年記念史編纂委員会編（一九七三）『大東文化大学五十年史』大東文化学園

大東文化学院高等科一期生の人びと

大東文化学院は、一九三三年九月一日に起きた関東大震災の影響で予定していた「神田校舎」が全焼してしまったため、開校は延期となった。設立申請時には開校日を一〇月一日としていたが、九月一日になって「校地位置変更届」を提出した際には開校日は未定であった。神田校舎は、元東京工科大学（現・日本工業大学）の複数あった校舎建物のうちの一棟を譲り受けたものだった。神田学生街の中心の小川町に位置していて、学問を志す青年たちの憧れの地でもあった。小川町といえば、もと武家屋敷が多数あった地域で、明治期を通じて多数の私学が同地に校舎を置き開校している。

一方、震災の前々日の八月三〇日、大東文化学院は二つ目の校舎を入手していた。同日、法政大学との間に「土地建物売買仮契約書」をやり取りし、校舎建物と校地とをあわせて「拾五萬圓」で売買しており、これが大東発祥の地となる「九段校舎」となるわけである。真っ白な校舎壁面をぐるりと囲む梧桐（青桐）が印象的であったことから校章モチーフに使われるなど、現在まで梧桐は大東のシンボルともなった。九段校舎の最寄りには市電の九段下や九段上があり、開校からしばらくすると飯田橋駅も開業されて、通学はより便利になっていく。

さて、一九三三年二月に行われた第一回入

学試験は、本科および高等科ともに数倍の受験倍率となったと言われる。本格的な漢学のための高等教育機関、しかも授業料は無料で教科書もすべて頒布され、さらに給費制度も完備という、当時としても希有な特典を持った学校の誕生は、経済的理由により進学を諦めていた青年たちや、漢学の道をさらに追求したいと願っていた中学校などで教壇に立っていた現役の漢文科教師たちに希望を与えるものであった。

難関試験を突破した学生たちとともに、大東文化学院は九段校舎一棟のみで翌年一月に開校日を迎えた。もともと前年八月の設立申請段階での学生定員は、本科三〇〇人および高等科一〇〇人程度と規定されていた。しかし、神田校舎を焼失したため学生収容が叶わず、本科一五〇人（一学年約五〇人）および高等科一五〇人（一学年約二〇人）程度へと定員数を半減する

こととなった。なお、本科入学は中学校（旧制）卒業程度の学力が必要、高等科入学は「中等学校漢文科教員資格」を持っているか、あるいは専門学校漢文科卒業程度の学力が必要であると定められていた。とくに高等科一期生は現役の漢文科教員や中学校校長経験者などをはじめとして、すでに相当の漢学の實力や知識を持つ者が集い、三〇代や四〇代の学生も多く含んだスタートとなった。

大東文化学院は、創設時に本科三年高等科二年（翌年に三年間へ延長）とする修業年限を設けていた。もともと開校予定日を一〇月一日としていたので、秋入学を予定していたのかと思うところであるが、当初から学則において「四月入学、三月卒業」と定めていた。つまり、当初より本科高等科ともに、一期生だけが一〇月に入學し、三年半学ぶことが想定されていたの

である。被災によつて予定よりもやや短縮されたものの、一期生は三年三か月という少し長い期間在学し勉強できる「特権」を有し、その後続く大東文化学院の学問の礎を築いたのであった。

高等科の一期生は二一名、そのほか聴講生として六名が入学した。初年次の在校生名簿には、秋谷竹三郎、秋山寛、上野賢知、柏木質、加藤梅四郎、熊沢猪之助、近藤李、斉伯守、齋藤善太郎、相良政雄、澤田総清、七里重恵、菅沼貴一、鈴木由次郎、高瀬七十七、茶谷忠治、内藤政太郎、長島万里、西脇玉峰、藤野岩友、与繩熊雄の名前が見られる。聴講生には、荒木蒼太郎、江上新五郎、楠野俊成、高島愿、永原鉦作、姫田興彦が名を連ねた。一方、卒業生名簿には、秋谷、加藤、熊沢、近藤、斉伯、澤田、七里、菅沼、鈴木、高瀬、茶谷、内藤、長

島、西脇、藤野、与繩の16名の名前が確認できる。ただし、聴講生も同じく卒業式に参列しており、同日撮影された卒業写真には同じ卒業生として並び写され、その後には作成される卒業者名簿にも旧制期を通じて名前が掲載されていることから、在学中から同等に学問に励み、在校生として過ごしていたのだろう。なお、聴講生のなかに永原鉦作の名前があるが、永原は明治時代にコナン・ドイルやエドガー・アラン・ポールの作品を翻訳し紹介した藤野野齋の改名であり、昭和初期に鹿児島県の硫黄島に残された「平家物語」に関連する文書調査を行った藤野鉦作とも同一人物である。

彼らの卒業後の進路については、次のように記録されている。（『同学』第四号）

秋谷竹三郎 株式会社東京開成館編集長

加藤梅四郎 鹿児島県立女子師範学校教諭兼

第二高等女学校教諭

熊沢猪之助 大阪府立高津中学校教諭

近藤奎 大東文化学院助教授 日本女子

大学講師

齐伯守 千代田女子専門学校教授兼千代

田高等女学校教諭

澤田総清 東京府立第一中学校教諭

七里重恵 日本大学講師 大倉高等商業学

校講師

菅沼貴一 青森県立青森師範学校教諭

鈴木由次郎 東京市立第二中学校教諭

高瀬七十七 神奈川県立横浜第三中学校教諭

茶谷忠治 大阪府立天王寺師範学校教諭

内藤政太郎 大東文化学院助教授 ルーテル

専門学校講師

長島万里 不詳

西脇玉峰 駒沢大学講師 京華中学校教諭

藤野岩友 麻布中学校教諭

与繩熊雄 熊本県立熊本第一師範学校教諭

高等科一期生の卒業後の進路は、上記のように記録されており、高等教育機関に就職するか、師範学校や旧制中学で漢文科教員となる者が多かった。とくに、近藤奎、内藤政太郎は官学派教員にくみし、高等科卒業後には学院助教授として採用され、のちに教授として本学発展に寄与していくこととなった。そのほか、加藤梅四郎、澤田総清、鈴木由次郎、西脇玉峰など他校の教員として経験を積んだ後、数年後に大東文化学院に呼び戻されている。彼らは戦時下から戦後復興期にかけての学校運営の中心的な役割を果たすこととなり、教授として真摯に

学生指導にも当たった。

一方、他校で活躍を続けた卒業生も多い。たとえば、七里重恵は卒業後に日本大学や大倉高等商業学校で講師をつとめた後、法政大学や立教大学で教授となっている。また、藤野岩友は麻布中学教諭を経て國學院大學へと移籍、四〇年近くを勤めた後に名誉教授となった。そのほか、故郷に戻り教員となった卒業生も多く、師範学校や旧制中学などで漢文科教員として勤務するかたわら、研究活動も継続し、複数の著書を残していることが確認できる。なお、卒業生のうち長島万里の卒業後の進路が不詳となっているが、学院入学時にはすでに『書誌神髓』（一九一五年）、『老子神髓』（一九二一年）などの著作活動を「天爵道人」の名で行っており、明治期には「血達磨」の筆名で『処世三十棒』（一九〇九年）という明治世相を描いた随筆集



高等科第一回卒業生

を発表するなどしていた。卒業後も文筆活動を続けたようで、『皇道』（一九三二年）などがあ
る。ちなみに、長島は入学時にかぞえて六一歳
の最高齢、次が西脇玉峰の五三歳であった。一
方、「若手」と目された上野賢知や近藤奎は入
学時に四〇歳であった。七里重恵は三七歳、澤
田総清は三二歳、相良政雄や藤野岩友は二六
歳、鈴木由次郎は最年少の二三歳で入学してい
るが、二〇代はむしろ珍しく少数であった。

他方、大東文化学院紛擾で退学となったため
に卒業生名簿に記載されなかった高等科一期生
もいた。私学派教員の一斉辞職に進言したこと
が原因となって退学処分となったのは、秋山
寛、上野賢知、相良政雄である。とくに上野と
相良は助手（後に講師）として一時的に学院に
呼び戻されたものの、官学派が優遇されている
との進言がきっかけとなり、学院内の調和を乱

したことを理由に辞職勧告を受け、一九二八年
には再び学院を去ることとなった。しかしとく
に優秀で、「大東漢学」への熱意があったから
こそ紛擾に巻き込まれていったとも思われ、そ
の後も漢学を追究し研究業績を残している。学
院退職後、上野は武蔵大学教授として約三〇年
間にわたって教育に携わり、名誉教授となった。

一方の相良は、もともと東洋大学を卒業後に新
卒で採用され勤務していた錦城中学校へ戻り漢
学教育に携わったほか、二松学舎、国士館、早
稲田大学等で漢学講義を担当したものの、四一
年に早世した。秋山寛は卒業生名簿には記載さ
れないが卒業相当とされ、故郷へ戻り岡山県立
岡山師範学校教諭となった。そのほか、柏木
質、齋藤善太郎は一身上の都合で退学したもの
と思われるが、以降の詳細は不明である。

宮澤喜一 238
 宮島昇 266
 宮原民平 154, 167, 169
 宮本又次 214
 ミル, ジョン・スチュアート 207
 ムッソリーニ, ベニト 245
 武藤山治 43
 村田晴彦 244, 249
 本位田祥男 205, 217
 本居宣長 41
 元良勇次郎 268
 森鷗外 103
 森茂 154, 167, 170
 諸橋轍次 6, 131, 137, 138, 141,
 143, 147, 154, 167, 169, 170, 173,
 283

や 行

矢木参三郎 154, 167, 169, 307
 安井小太郎 98, 154, 166, 167, 169
 安岡正篤 179
 山内惇吉 169
 山岡萬之助 25, 154, 165, 167, 169,
 239
 山口伝一 154, 167, 169, 173
 山崎闇斎 42
 山田永俊 70
 山田耕作 236
 山田修次 142
 山田準 168, 169
 山田方谷 125
 山本権兵衛 18, 65
 山本悌二郎 68, 70, 93, 165

山本梅崖 178
 横井時冬 215
 横山由清 49
 吉岡弥生 316
 吉田熊次 6, 103, 263-273, 279
 吉田源七 272
 吉田静致 134, 154, 167, 169, 170,
 173
 吉田秀夫 211
 吉田増蔵 171, 181
 芳野幹一 169, 283
 吉野作造 276
 与繩熊雄 326, 327
 米山寅太郎 147
 頼成一 169

ら 行

ラートゲン, カール 207-209
 ラム, チャールズ 280
 リッケルト, ハインリヒ・ヨーン
 237, 238, 242
 麟祥 205
 ロッシャー, ヴィルヘルム 207
 ロリア, アキレ 217, 218

わ 行

若宮卯之助 241
 渡辺錠太郎 249
 渡辺末吾 147
 渡部実一 140, 144, 146
 渡俊治 166

v 人名索引

原敬 39, 65, 206
 原田種成 145
 原富男 146, 147
 原嘉道 19
 春山作樹 268, 279
 東季彦 169
 樋口勇夫 154, 167, 170
 樋口逸齋 205
 姫田興彦 324
 ビュッヒャー, カール 222
 平田篤胤 41
 平沼駿一郎 6, 17, 61, 106, 107,
 165, 180, 184, 187, 197, 203, 204,
 206, 209, 219, 255
 平沼晋 204
 平沼超夫 204
 平沼淑郎 6, 18, 125, 154, 166, 167,
 170, 204
 平野彦次郎 154, 162, 165, 167, 169,
 170, 173
 広岡浅子 122
 廣瀬惟熙 205
 フォーセツト, ヘンリー 207
 深作安文 154, 167, 169
 深沢清八 265
 福井直秋 247
 福沢諭吉 45, 206
 福地源一郎 209, 210
 福本和夫 240
 藤井健治郎 233
 藤野岩友 326-329
 船越俊英 102
 布留川英治 154, 167, 170
 フェノロサ, アーネスト 102
 ベルグソン, アンリ 236
 包翰華 154, 167, 169
 細田謙藏 113, 168, 169
 穂積重行 125
 穂積陳重 125
 穂積八束 48-49
 堀経夫 211
 本間一松 229

ま 行

マーティン, ウィリアム・アレクサン
 ダー・パーソンズ 280-281
 前川三郎 6, 51, 131, 153, 154, 156,
 157, 159, 163, 164, 167-171, 173,
 174
 牧野謙二郎 25, 51, 106, 110, 111,
 166, 178, 184, 185
 マクラウド, ヘンリー・ダニレグ
 207
 真下保爾 140, 142
 増田惟茂 169
 増田慈良 242
 松方正義 38, 208
 松平康國 25, 96, 109, 112, 113,
 166, 168, 170, 178, 185, 188, 318,
 319
 松平康倫 205
 松平頼寿 71
 松田為常 267
 松室至 19
 松本愛重 154, 160, 166, 167, 169,
 170, 172, 173
 松本清 169
 松本洪 23, 110, 111, 156, 158, 166,
 178
 マハン, アルフレッド・セイヤー
 220
 マルサス, トマス・ロバート 211
 丸山作楽 203, 209, 210
 見尾勝馬 154, 158, 167, 169
 三木清 237, 238, 240, 248
 三塩熊太 97, 178, 185, 188
 三島中洲 125, 126
 水野敏之丞 267
 三瀆信三 154, 167, 169
 箕作阮甫 205
 箕作元八 206
 箕作秋坪 20, 203, 205, 206
 三土忠造 235, 240
 峯間信吉 154, 167, 169
 美濃部達吉 49

た 行

高たろ兔三 154, 167, 170, 173
 高木正義 268
 高島愿 326
 高杉晋一 231, 250
 高瀬七十七 327
 高田早苗 216, 234
 高塚錠二 166, 169
 高辻長吉 289, 291, 297
 高成田忠右衛門 169
 高橋是清 39, 240, 249
 高橋士郎 248
 高山樗牛 213
 瀧川亀太郎 154, 167, 169, 284
 竹下幾太郎 167, 169
 武田米太郎 311
 竹田復 169
 田島錦治 218
 田尻稲次郎 207, 208
 館森万平 166, 169
 田中逸平 98, 154, 167, 169, 289, 291
 田中稲積 294
 田中義一 87
 田邊為三郎 168, 169
 谷本富 292
 田村太兵衛 214
 茶谷忠治 327
 津田真道 204
 土田杏村 240
 土屋久泰(竹雨) 77, 171, 254, 258, 260
 坪井正五郎 268
 坪内逍遙 276
 鶴原定吉 215
 東郷平八郎 206
 頭山満 88
 徳川昭武 125
 徳川慶喜 125
 徳富蘇峰 230
 戸水寛人 70
 富永鎌次郎 142, 154, 167, 169
 鳥飼健 289, 290, 297, 310

な 行

内藤泰吾 210
 内藤政太郎 98-99, 154, 165, 167, 169, 170, 327
 永井柳太郎 234, 240
 中里重吉 265
 長島万里 327
 中島力造 268
 中野武営 216
 永原鈺作 326
 中村進午 166
 中村徳山 102
 中村豊次郎 154, 167, 169
 中村正直 102, 280, 281
 中山博道 7, 77, 154, 166, 305, 307, 308, 312-315
 那智佐典 112, 166, 168, 169
 夏目漱石 264, 277, 279-281, 318
 名取堯 77, 243, 246, 247
 成瀬仁蔵 122
 西周 45, 205
 西尾昌伯 315
 西田幾太郎 238, 240
 西村茂樹 219
 西脇玉峰 327
 根岸信五郎 305, 312, 315
 野尻精一 267, 270
 野田泉 272
 野村喜八郎 169
 法本義弘 7, 288, 290, 295, 296, 298-301

は 行

バーク, エドマンド 209, 211
 バジヨット, ウォルター 209
 バスティア, フレデリック 207
 畑井新喜司 274
 八田三喜 230-233, 239, 244, 250
 服部宇之吉 154, 166, 167, 169, 292
 浜尾新 271
 林博太郎 270

iii 人名索引

ケアンズ, ジョン・エリオット 207
ケーベル, ラファエル・フォン 268
小池新二 77
小泉清蔵 265
小泉八雲 279
孔子 57
幸田成友 214
河野広中 87
康有為 135
國分高胤 (青崖) 112, 158, 166, 168-171, 175, 178, 183
古城貞吉 154, 167, 169, 170, 173
五島清太郎 268
古徳勘十郎 154, 167, 169
小永井小舟 84
近衛文麿 18, 70
小橋藻三衛 70
小林信明 147
小松武治 6, 169, 264, 273-285
小山薫雄 166
近藤正治 139, 143, 144, 147, 154, 162, 167, 169, 170, 173
近藤杢 98, 154, 165, 167, 169, 327

さ 行

西園寺公望 20
斎藤拙堂 125
斎藤善太郎 326
斎藤担蔵 169
斎藤淡堂 205
斎藤徳明 154, 167, 170
斎藤実 249
齊伯守 326, 327
酒井忠正 71
阪谷芳郎 124, 206, 208
阪谷朗廬 124
佐賀保香城 171
昌谷精溪 125
相良政雄 95-98, 163, 327
佐久節 154, 167, 170, 173

佐久間啓莊 70
迫水久常 179
佐々木安五郎 68
佐々木英夫 169
薩摩雄次 74
佐藤仁之助 24, 96, 109, 112, 113, 166, 168, 169, 178, 188
真田但馬 142
澤田総清 327
サンドウ, ユージン 306, 318
ジェヴォンズ, ウィリアム・スタンレー 207, 208
ジェンティアーレ, ジョヴァンニ 245
塩谷温 98, 154, 160, 167, 170, 173
七里重恵 327
司馬光 41
洪沢栄一 6, 122, 135, 207, 215-217, 222
島崎藤村 264, 274-276
島田鈞一 154, 166, 167, 170
島田三郎 220
清水澄 154, 166, 167, 169
朱熹 41
シュベングレー, オスヴァルト 5
シュモラー, グスタフ・フォン 222
蒋介石 88
章炳麟 135
推古天皇 41
菅沼貴一 327
鈴木一平 132, 137, 143, 148
鈴木喜三郎 93, 165, 257
鈴木慎一 247
鈴木為三郎 168
鈴木篤三郎 7, 306, 315-319
鈴木虎雄 166
鈴木万次郎 306, 316, 317
鈴木由次郎 327
添田寿一 208, 216

- 大木喬任 37
 大久保忠恕 185
 大隈重信 37, 72, 197, 216, 219, 234
 大隈信常 213
 大島宇一 145
 大島健一 93, 154, 167, 169
 大瀬甚太郎 268, 270, 279, 281
 太田貞昌 311
 大塚久雄 205, 224, 225
 大槻豊 154, 167, 169, 307, 309, 310
 大津淳一郎 142, 168, 257, 283, 308
 大峽秀栄 154, 167, 169, 170, 173
 大宮健太郎 77
 大山郁夫 234
 岡崎壮太郎 166
 岡田正之 160, 162, 165, 173
 岡野保次郎 231, 232, 234, 236
 岡村利平 169
 小川平吉 6, 52, 66, 70, 83, 95, 96,
 98, 238, 239, 241, 255
 奥繁三郎 70
 尾崎亘 294
 押川方義 274
 小柳司氣太 154, 155, 162, 165,
 167, 169, 170, 172, 173, 257, 283,
 308
- か 行**
- 笥克彦 49
 掛下重次郎 204
 河西一雄 149
 鹿島才助 265
 柏木質 326
 柏崎延二郎 169, 283
 片岡梅治 149
 加藤梅四郎 327
 加藤繁 154, 167, 169, 170, 173
 加藤政之助 299
 加藤虎之亮 166, 168, 171
 加藤弘之 45
 加藤友三郎 39
 金子堅太郎 207, 209
- 金子昇 73
 金子元臣 157, 167, 169, 283
 嘉納治五郎 134, 135, 292, 318
 狩野直記 166
 鎌田正 147
 蒲生裕之介 169
 川合清丸 182
 川合孝太郎 24, 112, 113, 166, 168,
 169, 178, 182, 184
 河上肇 216
 川田瑞穂 51, 98, 112, 166, 168, 169,
 178-180, 184, 185
 河津暹 213
 川又武 140-145, 147
 神田喜一郎 154, 167, 169
 気賀勘重 218
 菊地暁汀 218
 北一輝 6, 227, 229-231, 244, 249-
 251
 北慶太郎 229
 北里柴三郎 306, 316
 北りく 229
 北吟吉 6, 66, 78, 86, 98, 154, 166,
 167, 170, 227-232, 234, 235, 237-
 244, 246-250
 木下成太郎 6, 51, 63, 71, 98, 107,
 238, 243, 246, 311
 木野村政徳 166
 紀平正美 268
 木村巖 154, 167, 170, 191
 木村直吉 149
 清田清 199, 200
 吉良元夫 70
 金原省吾 77, 78, 240, 241, 243, 244,
 246, 247
 楠野俊成 326
 久原躬弦 267
 久保得二 154, 167, 169
 熊坂圭三 154, 167, 169, 170, 173
 熊沢猪之助 327
 クローチェ・ベネデット 237
 桑田福太郎 154, 167, 169, 307

人名索引

あ 行

- 秋谷竹三郎 327
秋山寛 327
朝倉文夫 79
浅沼稻次郎 250, 251
浅見綱斎 42
阿刀田令造 277, 278
天野為之 215, 216, 234
アモス, シェルドヌ 210
荒川五郎 70
荒木蒼太郎 326
有田平蔵 154, 167, 169
有馬祐政 154, 167, 170
有馬頼寧 247
有森新吉 70
栗野健次郎 264, 276-278
飯島忠夫 154, 167, 169, 170, 173
飯沼喜八郎 149
池田四郎二郎 96, 113, 166, 168, 178, 181, 198
池田英雄 181, 198, 199
伊沢修二 213
石井潭香 204
石崎政仇 167, 169, 170, 173
石田羊一郎 169
石丸政次 309
石山賢吉 228, 245, 250
市川林太郎 169, 283
一木喜徳郎 49
市村瓊次郎 98, 154, 158, 160, 167, 169, 170, 172, 173
伊東和信 148, 149
伊藤吉之助 169
伊藤博文 87
稲邊小二郎 228
犬養毅 70
井上円了 210
井上忻治 234, 239, 243, 248
井上準之助 213
井上哲次郎 6, 19, 74, 97, 101, 106, 127, 165, 187, 194, 241, 263, 268
井上鉄英 102-103
井上頼罔 197
猪口篤志 149
井場正人 154, 166, 167, 170
今井兼次 77
今井彦三郎 96, 166, 168, 169
入交好脩 209, 211, 222
岩崎小弥太 135, 234-236
岩橋遵成 154, 166, 167
岩村成正 290
ウェイランド, フランシス 206
植木直一郎 154, 167, 169
上杉慎吉 49
上田敏 279, 280
上野賢知 95-98, 326, 329
鶴澤總明 6, 19, 25, 93, 96-98, 153-155, 161, 163, 166, 167, 169, 239, 254-258, 260
宇田川玄随 205
宇田川興斎 205
宇田川榕庵 205
内田周平 25, 51, 109, 113, 166, 168, 169, 178, 188
内野台嶺 154, 167, 169, 173
内堀維文 7, 169, 287, 289-296, 301
宇野哲人 134, 154, 158, 160, 167, 169, 170, 172, 173
漆山雅嘉 207
江上新五郎 326
江木千之 52, 70, 165
江藤新平 38
江見章夫 283
江本武憲 70
江山整 154, 167, 169
遠藤房治 154, 167, 170
大木遠吉 6, 37, 70, 89, 106, 237

執筆者紹介（担当章順）

中村宗悦（序、コラム1、第9章担当）大東文化大学経済学部教授。

主な著作…『週刊ダイヤモンド』で読む 日本経済100年』（ダイヤモンド社、2014年）ほか。

浅沼薫奈（第1、3、4、5、6、7、8章、コラム2、3担当）大東文化大学東洋研究所特任准教授。

主な著作…『日本近代私立大学史再考 明治・大正期における大学昇格準備過程に関する研究』（学文社、2019年）ほか。

石井寿美世（第2章担当）大東文化大学経済学部教授。

主な著作…『日本経済思想史 江戸から昭和』（共著、勁草書房、2015年）ほか。

坪井賢一（第10章担当）桐蔭横浜大学非常勤講師。

主な著作『これならわかるよ！経済思想史』（ダイヤモンド社、2015年）ほか。

谷本宗生（第11、12、13章担当）大東文化大学東洋研究所特任教授。

主な著作…『学都金沢形成の様相 近代日本官立高等教育機関の設置過程』（成文堂、2018年）ほか。

大東文化学院のひとびと

二〇二三年三月三十一日 第一版第一刷発行

◎検印省略

著者 大東文化大学百年史編纂委員会

発行所 株式会社 学文社
〒一五三〇〇六四 東京都目黒区下目黒三六一

電話 〇三(三七)一五一五〇(代)

発行者 田中 千津子
FAX 〇三(三七)一五二〇一一

<https://www.gakubunsha.com>

乱丁・落丁の場合は本社でお取替えします。
定価はカバーに表示。

印刷所 新灯印刷株式会社